

## 1. 平成 27 年度の取り組みの概要

### 1.1. 文部科学省の施策に関わる取り組み

#### 1.1.1. 平成 27 年度国立大学改革強化推進補助金「特定支援型優れた若手研究者の採用拡大支援」への申請

文部科学省は、昨年に引き続き、「国立大学改革プラン」（平成 25 年 11 月）に基づき、優秀な若手・外国人の力で大学力を強化するため、平成 27 年 6 月に標記補助金の募集を行った。本研究科では、「未来型高齢社会の創成に向けた国際的共同研究拠点の形成」を目的に神戸大学採用枠の一つとして申請したところ、11 月初めに採択の内示を受けた。その際、新規採用者を年度中に赴任させる必要があったため、すぐさま人事の手続に入り、2 月教授会において採用の承認を得た。

### 1.2. 神戸大学の施策に関わる取り組み

#### 1.2.1 神戸大学機能強化改革：新学部設置構想

平成 25 年 12 月頃から動き始めた神戸大学の機能教改革は、平成 27 年度に入るといよいよ本格的に動き出す。グローバル・ビジネスリーダーの育成を目指す社系三研究科による「グローバル・マスター・コース」は平成 27 年 4 月に設置・運用され、文理融合型の独立大学院である「科学技術イノベーション研究科」も平成 28 年 4 月の設置を目指し、平成 27 年度の設置認可を受けるため具体的な準備作業を進めた。そして、平成 29 年 4 月に国際文化学部と発達科学部を再編統合し新しい学部を作ることを目指す改革も、この一年をとおして相当な議論を積み重ね、概ねその構想を固めた。その動きを二つの時期に分けて整理しておく。

#### ○第 1 期（平成 27 年 4 月 14 日～7 月 30 日）

新しい年度が明け、学長をはじめ大学の執行部体制も大きく変わった。しかし、新学部設置に向けた体制は、前年度後半からの編成、すなわち本部においては新学部設置 WT（正司健一学長顧問（前理事）、伊藤賢副理事、岡田修一学長補佐、櫻井徹学長補佐）、学部においては学部 WT（岡田修一学長補佐、小高直樹教授、平山洋介教授、渡邊隆信教授）に岡田章宏学部長と青木茂樹副学部長が加わる形が維持された。

4 月 14 日、文科省（法人支援課）に対し、4 学科から構成される新学部構想の基本骨格を説明し、そのコンセプトや 4 学科構成について概ね了解を得られた。その際、二つの学部の強みを伸ばし課題を克服するため、新学部の専門性を踏まえた人材育成という観点からいかにコラボレーションするかがポイントになるとの指摘を得ている。

このときの意見交換を起点に、大学は、新学部の設置を正式な形で外部に発信していくことになった。6 月 23 日と 24 日には、兵庫県及び神戸市の教育委員会に改組の挨拶に出向き、特に教員養成に係る連携を要請した。なお、11 月 6 日には「国立大学法人神戸大学と神戸市教育委員会との連携に関する協定書」が締結されている。

7 月 24 日には、神戸大学学長定例記者会見の場で、武田学長及び正司学長顧問から新学部の設置についての説明が行われた。

また、7 月 31 日に教員懇談会を開催し、4 月以降の動きとこの時点で確認できる新学部の概要を説明し、意見交換を行った。

#### ○第 2 期（平成 27 年 7 月 30 日～平成 28 年 3 月 13 日）

新学部設置に向けた検討をさらに促進していくため、7 月 30 日付けで「新学部の検討体制等について」が示され、(1) 設置審査、(2) 課程認定、(3) 学生定員、という三つの課題につき、理事等に係る新たな体制が固められた。(1) については、正司学長顧問、水谷文俊理事（統括副学長）、櫻井学長補佐、岡田学長補佐、(2) については、正司学長顧問、藤田誠一理事（教育担当）、櫻井学長補佐、岡田学長補佐、渡邊教授、(3) については、水谷理事、大月一弘国際文化学学部長、岡田発達科学学部長があたることとなり、さらに、水谷理事とともに吉井一雄理事（総務・財務等担当）が全体的な観点からこの体制を積極的に動かして

いくこととなった。学部統合という類例のない試みには、他の二つの機能強化改革以上に困難さが伴うことが想定されるだけに、大学としてあらためて体制を整えたといえる。

他方、こうした本部の動きに伴って、学部側の体制も整備された。(1)については、上記の構成員に両学部執行部が加わる形で10日に一度のペースで打合せ会議が開かれたが、その結果を踏まえ、学部のWT(岡田学長補佐、小高教授、平山教授、渡邊教授)が様々な作業を行った。また(2)については、発達側の作業が中心になるため、課程認定検討WG(渡邊教授、岡部恭幸教授、鳥居深雪教授、長坂耕作准教授、北野幸子准教授)に加え、11月には中等免許の認定を受ける科目代表者から構成される課程認定準備委員会(田村文生准教授、平芳裕子准教授、前田正登教授、佐藤春実准教授、長坂准教授、井上真理教授、澤宗則教授、(野谷啓二教授・国際文化学部))を置き、本部学務部と連絡を取りながら具体的な作業を進めた。

以下、それぞれの項目に即して、検討内容をまとめておく。

(1)については、10月以降ほぼ月に一回のペースで行われる文科省(法人支援課)との意見交換(平成27年10月13日、11月12日、12月1日、平成28年2月9日)を踏まえつつ、急ピッチで新学部構想の具体的中身を詰めていった。

特に新学部の基本的なコンセプトとされた「実践型グローバル人材の養成」については、「深い人間理解」と「他者への共感」をもってグローバルイシューを解決する「協働型グローバル人材の養成」へと、両学部の「強み」と「特色」を組み込んだ固有の人材像に修正され、それに基づき、中心的な教育プログラム「グローバル・スタディーズ・プログラム(GSP)」も、双方がそれぞれ得意とする「海外研修」と「フィールド学修」を併せ持つ内容とされた。また、GSPの必修化については、学生の実情を鑑み多くの慎重論が出されたが、このプログラムの意義を再度確認の上、全員に課すこととし、個々の学生の諸事情や専門性に応じて柔軟に対応できるよう三つのコース(「留学型GSコース」「実践型GSコース」「研修型GSコース」)をおき多様性のあるプログラム設計を目指すこととした。その際、秋田大学国際鉱山資源学部にも調査に出向き(11月18日)、海外研修の必修化に伴う課題について聞き取りを行った。

なお、学部設置に係る手続については、「意見伺い」の可能性もあったが、最終的には「事前伺い」で了承され、平成28年5月初めに所定の申請書類を文科省に送付した。

(2)については、年々審査が厳しくなる状況を踏まえ、比較的早い段階から議論を開始し、秋には徳島大学総合科学部の調査(10月13日)も行った。申請書類の作成は10月下旬に着手し、その後、本部学務部の協力を得ながら、文科省(教職員課)への事前相談を行い(11月19日、2月1日)、3月末に申請を行った。その間、大量の書類の作成だけでなく、個々の教員に対するシラバスや教育研究業績書の書き方の指導からそうした書類のとりまとめに至るまで、課程認定検討WGをはじめ本当に多くの教員、職員のみなさまにご協力をいただいた。

(3)については、全学的な機能改革の動きやGSP必修化を念頭においた新学部の規模等を踏まえつつ、理事と両学部長の間で8月頃から断続的に協議が続けられた。10月13日には、武田廣学長、水谷理事、吉井理事、正司学長顧問が、国際文化学部と発達科学部の教授会を訪れ、神戸大学として行うこの改革の意義を示すと同時に、学生定員の考え方についても説明を行った。このとき、教員からは数多くの質問や意見が出されたが、これについては、武田学長名で『「国際人間科学部(仮称)」の設置について』と題する11月4日付け文書回答が行われ、そのなかで、学生定員に関し、「神戸大学の学士レベルにおけるグローバル人材育成の核を担う学部であるだけに、他大学では例を見ない学生定員370名の『大規模学部』として発足させたい」との意向を示した。なお、学科ごとの内訳は、同日、学長より両学部長に対し次のとおり指示があった。グローバル文化学科:140名、発達コミュニティ学科:100名、環境共生学科:80名、子ども教育学科:50名。また、全学の機能強化に向けた学生定員の再配分については、3月部局長会議で、新学部を含む方針の提案があった。

約8ヶ月に及んだ上記検討の結果、新学部の骨格を固め、それに基づいて設置審査及び課程認定の申請に向けた準備を整えることができた。また、大学本部からは、新年度の体制として「神戸大学国際人間科学部(仮称)設置準備委員会」の設置が提案され、2月教授会でその要項が審議され了解を得た。

3月9日に教員懇談会を開催し、8月以降の動きとこの時点で確認できる新学部の概要を説明し、意見交換を行った。

### 1.2.2. 神戸大学機能強化改革：年俸制の適用

文部科学省は、「国立大学改革プラン」において全国で1万人規模（研究大学で教員の20%）の年俸制・混合給与の導入を提起した。神戸大学でもそれを受ける形で、昨年度、職員就業規則の一部改正を行い、平成26年度から平成28年度の3カ年で250名（うち承継職員210名）に対する年俸制の適用を計画した（「年俸制の導入等に関する計画」）。今年度は、昨年度実績（19名）を踏まえ、第148回及び第149回部局長会議（平成27年6月11日及び7月9日）において、全学で切り替え者161名を目標とし、「役職者（理事、副学長、部局長等）」「60～63歳教員」等を中心に希望者を募ることとされた。本研究科でも、全学の説明会と別に、「60～63歳教員」を対象にした説明会を開き、年俸制の適用をお願いしたところ、13名の申出（対象者：15名）をいただいた。

なお、適用者が増えたため、年俸制教員の活動評価方法については、より適切かつ効率的に実施するという観点から、第156回部局長会議（平成28年3月10日）において、活動評価実施期間を「毎年度」から「原則として3年度ごと」に変えるなどの変更が行われた。

### 1.2.3. 附属中等教育学校を活用した高大接続研究

神戸大学は、「高大接続改革実行プラン」（平成27年1月16日文科大臣決定）に対応するため、全学の入学試験委員会のもとに入試改革推進本部を設置し、入試改革の中核的業務を担うアドミッションセンターを新設する方針を定めた（第2回入学試験委員会：平成27年5月21日）。また、第148回部局長会議（平成27年6月11日）では、入試改革の在り方を検討するため、附属中等教育学校を活用した高大接続研究を行うことも確認された。発達科学部においても、こうした一連の取り組みに参画し、新学部を想定した入試改革に向けた議論を開始すると同時に、「神戸大学附属中等教育学校を活用した高大接続研究委員会」を置き（3回開催：12月8日、1月7日、2月5日）、高大接続の具体的な在り方につき検討した。

### 1.2.4. 科研費の獲得促進

第148回部局長会議（平成27年6月11日）において、研究・産学連携担当理事より、本学のさらなる研究力向上及び「武田ビジョン」に掲げる先端研究・文理融合研究の実現のため、部局長に対し科研費採択に向けた「組織的な取組み」の強化の依頼があった。本研究科では、それに対応するため、研究推進委員会に「科研費獲得促進タスクフォース」を設置し、様々な活動を具体的に進めた（詳細は、「7.4.1. 研究推進委員会」参照）。

### 1.2.5. 平成27年度大学教育再生加速プログラム

神戸大学は、平成27年度大学教育再生加速プログラム（AP）に対し、「神戸グローバルチャレンジプログラム」を申請し採択された。本学部もこのプログラムに参加し、平成28年度より「アジア・フィールドワークコース」を実施する。

## 1.3. 部局としての取り組み

### 1.3.1 国際シンポジウムの開催

#### (1) アジアの包括的で持続可能な発展についてのワークショップ

平成27年12月16日と17日、神戸大学百年記念館六甲ホールにおいて、アジアの持続可能な発展を、資源や生物多様性などの環境問題から教育・貧困・制度などの社会問題まで包括的な観点から議論するワークショップを開催した。様々な議論を促進するため、ここでは、カンボジア（Prek Leap National College of Agriculture, Cambodia Development Resource Institute, Ministry of Education Youth and Sports）、タイ

(Chulalongkorn University), シンガポール (Nanyang Technological University, Adelaide University), 日本 (京都大学, 神戸大学) から多数の研究者や政策担当者を招聘した。全体のコーディネイトは佐藤真行准教授と Runsinarith Phim 特命助教が行い, 人間環境学専攻から, この二人のほか, 田畑智博准教授, 丑丸敦史教授がパネリストとして参加した。また, 閉会の辞は, カンボジア法研究者である四本健二国際協力研究科長にお願いした。

## (2) アクティブエイジング研究センター設立記念シンポジウム

平成 28 年 2 月 21 日, 神戸大学百年記念館六甲ホールにおいて, アクティブエイジング研究センターの設立を記念する国際シンポジウムを開催した (当該センターについては, 「1.3.3. (2) 発達支援インスティテュート」及び「10.1.6. アクティブエイジング研究センター」参照)。「設立記念シンポジウムに寄せて」と題する開会の辞を小川真人理事・副学長 (研究・産学連携担当) にお願いした。基調報告は, WHO 神戸センターの Alex Ross 氏に「アクティブエイジングの歴史と進化」と題する報告をいただき, 「アクティブエイジング社会のために大学は何ができるのか?」と題した特別講演 1 はソウル大学応用老年学・退職研究センター所長の Gyounghae Han 氏に, 「長寿社会に生きる」と題する特別講演 2 は東京大学高齢社会総合研究機構特任教授の秋山弘子氏にお願いした。さらに, パネルディスカッション「アクティブエイジング研究ハブ拠点に向けて」では, 小島洋一氏 (神戸市住宅都市局計画部公共交通課課長), 丹松由美子氏 (株式会社ワコール人間科学研究所研究員) にもご登壇いただき, また本研究科の増本康平准教授, 片桐恵子准教授, 長ヶ原誠教授も加わり, 多方面から積極的な議論が展開された。会場の外では, 他大学や関連企業からの参加者も多数参加して, 合計 36 件のポスターセッションも開かれた。

## 1.3.2. 外部との連携

### (1) 第 21 回国立大学新構想学部教育・研究フォーラム

9 月 14 日と 15 日, メトロポリタンホテル高崎にて, 群馬大学社会情報学部がホスト校を務める第 21 回国立大学新構想学部教育・研究フォーラムが開催され, 本学部も参加した。本年度のテーマは「ミッションの再定義を踏まえた新たな展開」とされ, 各大学の改革状況が紹介された。

### (2) 第 38 回国立大学法人大学院環境科学関係研究科長等会議

7 月 10 日, 東京・品川インターシティにて, 東京工業大学がホスト校を務める第 38 回国立大学法人大学院環境科学関係研究科長等会議が開催され, 本研究科として初めて参加した。本年度は, 環境省総合環境政策局環境経済課環境教育推進室から「環境省における環境教育施策の現状について」と題する報告がされ, また各大学から「国内外機関との協働を特徴とした環境教育研究の取組」や「環境リスク管理等を踏まえた環境分野での人材育成の実施状況」に関わる意欲的な取り組みが報告された。本研究科からは, 「神戸大学大学院人間発達環境学研究科の環境教育研究」と題して発達支援インスティテュートの活動を紹介した。

## 1.3.3. 組織の改革

### (1) 国際交流委員会

日本人留学生の「送り出し」部門と海外留学生の「受け入れ」部門の有機的な連携を図ることを目的に, 国際交流委員会を改編した。具体的には, 国際交流委員会に置かれた学術交流専門部会と留学生専門部会を廃止し, 構成を, 研究科長の指名する委員長 (全学の国際交流委員会委員を兼任), 副委員長, 委員長が委嘱する委員若干名, 神戸大学グローバル教育推進委員会委員, 留学生担当専門教育教員, 事務長とした。なお, 国際交流委員会規程の変更は 5 月教授会で審議され承認を得た。

### (2) 発達支援インスティテュート

平成 26 年度に実施された「学内共同利用施設等の施設に係る自己点検・評価」において, 発達支援イン

ステイテュートは「期待される水準を上回る」との評価結果を得たが、「『社会貢献レポート』が休刊している」「社会貢献室の具体的な活動実態もよくわからない」等の指摘を受けた。そのため、本年度当初より発達支援インスティテュート運営委員会において改善計画を検討し、次の改編を行った。

#### ① 社会貢献室の廃止と教育連携推進室の設置

社会貢献室の果たした「地域との連携事業の推進」という機能を、今日的な状況を踏まえてより可視化した形で発展させ、これまでの後方的な支援・推進のみならず自ら企画にも携わる室を新たに設置することが緊要との観点から、社会貢献室を廃止し、その趣旨を発展させる組織を設置する。近年、大学の社会貢献を期待する声はますます大きくなっており、特に教育の面では、大学教育を初等中等教育と連携させることで、「生きる力」、「確かな学力」を育み新しい時代にふさわしい優れた人材の養成の必要性が強く説かれている。本研究科は、そうした社会的ニーズに組織的に応える体制を整備するため、「高等学校をはじめ小・中学校、特別支援学校、教育委員会等と協力し、高大連携事業を推進するとともに、初等中等教育に対する支援及び学校教育・社会教育との連携事業への協力を行うこと」を目的とする教育連携推進室（室長：稲垣成哲教授）を置くこととした。

#### ② アクティブエイジング研究センターの設置

人口の高齢化は人類が成し遂げた成果であると共に、最大の社会的課題の一つでもある。日本においては、後期高齢者の増加に伴う要介護者・要支援者・軽度認知障害を持つ人の増加、都市化・核家族化に伴う高齢単身世帯の増加などに伴い、介護・医療費の高騰が大きな問題となっている。これらの課題解決のため、政府を含め多くの公共機関が健康寿命延伸に関わる施策を模索しているが、十分な方向性を示せていない。このような中、世界保健機関（WHO）が1999年に掲げた「アクティブエイジング（活力ある高齢化）」はこの課題解決に向けた指針として注目される。

本研究科では、これまで人間の発達とそれを取り巻く環境の発達に対する学術的成果と多くの社会貢献をもたらしてきた。それをリードした発達支援インスティテュートは、この伝統を継承・発展させ、さらに一層深化させていくため、「アクティブエイジングに関わる先端的研究を創発し、本研究分野の活性化とその成果の社会的還元をとおした高齢化に係る課題の解決に貢献すること」を目的とするアクティブエイジング研究センター（センター長：近藤徳彦教授）を設置する。

以上の改編計画は、10月教授会において関係規程の変更とともに提案され、審議・承認された。また、それを受けて、第151回教育研究評議会（平成27年11月19日）で審議・承認され、いずれも12月1日付けで発足することとなった。また、第155回教育研究評議会（平成28年2月18日）では、「学内共同利用施設等の組織の見直しについて」が審議され、そのなかで本研究科のこの対応につき「組織改組を伴う積極的な改善」と評価された。

（人間発達環境学研究科長・発達科学部長 岡田章宏）

## 2. 学部・大学院運営

### 2.1. 学部・大学院運営組織

神戸大学大学院人間発達環境学研究科及び神戸大学発達科学部は、以下の組織により運営されている。なお、今年度における組織体制の改善点も簡単に付記しておく。

#### <教授会>

神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授会，神戸大学発達科学部教授会

以下に委員会等の組織を列記する。その際、大学院に関係する組織については、その前に付される研究科名「神戸大学大学院人間発達環境学研究科」を省略し、学部に関係する組織については、「神戸大学」を省略し「発達科学部」を付した。

#### <管理運営>

学部・大学院運営委員会，人事委員会，教員活動評価委員会，予算委員会，学舎検討委員会，中期計画推進委員会，自己評価委員会，発達科学部将来計画委員会，発達科学部課程認定検討ワーキンググループ，交流ルーム運営委員会，安全衛生委員会，ハラスメント防止委員会，学科・専攻運営会議

#### [改善点]

・昨年度設置した発達科学部将来計画委員会及び発達科学部課程認定検討ワーキンググループは，審議すべき重要議題が継続していたため，構成をそのままにして維持した。

#### <研究>

研究推進委員会，研究紀要編集委員会，研究倫理審査委員会

#### <教務・学生>

教務委員会，学生委員会，博物館学芸員資格専門委員会，発達科学部教員養成機関審査委員会，「発達科学への招待」運営委員会

#### <入試>

入学試験委員会，発達科学部社会人入試専門委員会，発達科学部編入学試験専門委員会，発達科学部 AO 入試実施委員会，発達科学部人間表現学科実技検査入試検討委員会，学生委員会（入学者の募集及び選考に関わる事務）

#### <国際交流>

国際交流委員会，学術 WEEKS ワーキンググループ

#### [改善点]

・上述のとおり（「1.3.3. (1) 国際交流委員会」），学術交流専門部会と留学生専門部会は廃止した。

#### <広報>

情報メディア委員会，オープンキャンパスワーキンググループ，学部等案内作成ワーキンググループ

#### <附属施設等>

図書委員会，実習観察園運営委員会，キャリアサポートセンター運営委員会，発達支援インスティテュート運営委員会，心理教育相談室運営委員会，ヒューマン・コミュニティ創成研究センター運営委員会，のびや

かスペースあーち運営委員会, (社会貢献室), サイエンスショップ運営委員会, 教育連携推進室, アクティブエイジング研究センター運営委員会

[改善点]

・上記のとおり(「1.3.3. (2) 発達支援インスティテュート」), 12月1日付けで社会貢献室を廃止し, 教育連携推進室とアクティブエイジング研究センター運営委員会を設置した。

(人間発達環境学研究科長・発達科学部長 岡田章宏)

## 2.2. 将来計画

### 2.2.1. 将来計画委員会

将来計画委員会は, 大学の機能強化改革の登場に伴い部局としての対応を検討するため, 平成26年7月に発足させた。その後, 集中的に議論を進めたが, 「持続可能なグローバル共生社会」の実現に資する「実践型グローバル人材, 次世代を創る人」の育成プログラムに係る検討が継続課題として残された。そのため, 年度を明けた後も引き続き検討を進め, 夏までに「グローバルESDプログラム」と「グローバル次世代指導者育成プログラム」をまとめた。

その後, 「実践型グローバル人材」育成プログラムに係る議論は, 「協働型グローバル人材」育成プログラムという形で本部理事及び両学部執行部等による設置審に向けた検討に受け継がれ, 「グローバル・スタディーズ・プログラム」に結実している(「1.2.1 神戸大学機能強化改革: 新学部設置構想」参照)。そのため, 本委員会は8月以降休会とし, 今年3月に半年間の動きを説明してまとめとした。

なお, 本委員会の構成は, 学部長, 副学部長, 各学科から選出された者各2人計8人(国土将平教授, 相澤直樹准教授, 増本康平准教授, 高見和至教授, 田村文生准教授, 平芳裕子准教授, 大串健一准教授, 岩佐卓也准教授) 発達支援論コースから選出された者1人(津田英二教授), 事務長である。

第1回(4月22日)	・4月14日文科省との打合せについて ・将来計画委員会の活動について
第2回(5月13日)	・プレス発表/人事に関する基本方針について ・アクティブラーニングに係る教育プログラムについて
第3回(5月20日)	・今後のスケジュール ・アクティブラーニングに係る教育プログラムについて
第4回(5月27日)	・新学部設置検討WT/国際文化学部との打合せについて ・アクティブラーニングに係る教育プログラムについて
第5回(6月3日)	・新学部設置検討WT/国際文化学部との打合せについて ・アクティブラーニングに係る教育プログラムについて
第6回(6月10日) (拡大)	・入試について/学科のコンセプト/国際文化学部との打合せについて ・アクティブラーニングに係る教育プログラムについて
第7回(6月17日)	・国際文化学部との打合せについて ・アクティブラーニングに係る教育プログラムについて
第8回(6月24日)	・新学部設置検討WT/国際文化学部との打合せ/兵庫県教育委員会へのあいさつについて ・アクティブラーニングに係る教育プログラムについて
第9回(7月1日)	・神戸市教育委員会へのあいさつ/今後のスケジュールについて ・アクティブラーニングに係る教育プログラムについて
第10回(7月8日)	・アクティブラーニングに係る教育プログラムについて
第11回(7月22日) (拡大)	・平成28年度概算要求/学長によるプレス発表等について ・学科のコンセプトについて

第12回 (7月29日) (拡大)	・学長によるプレス発表／オープンキャンパスについて ・学科のコンセプトについて ・今後の課題について
第13回 (3月7日)	・まとめ：「グローバル・スタディーズ・プログラム」の概要

\* 「拡大」：通常の委員に加え、学科長も参加した場合

## 2.2.2. 課程認定検討ワーキンググループ

課程認定検討ワーキンググループは、将来計画委員会と同様、大学の機能強化改革の登場に伴い部局としての対応を検討するため、平成26年7月に発足させた。その後、教職課程認定審査を受審するにあたっての準備を進め、今年度に入り、審査に向けた本格的な作業に入った。そのため、体制を変更することなく継続的な対応をお願いし、11月には、本WGを中心にしながら、中等免許の認定を受ける科目代表者から構成される課程認定準備委員会も併設して対応を強化した（「1.2.1 神戸大学機能強化改革：新学部設置構想」参照）。

本WG構成は、学部長が指名した教員（渡邊隆信教授、鳥居深雪教授、岡部恭幸教授、北野幸子准教授、長坂耕作准教授）から構成され、主査に渡邊教授、副主査に岡部教授が就いた。WGの会議は、前期4回（4月23日、5月21日、6月26日、7月14日）、後期11回（9月24日、10月22日、○10月23日、○11月9日、○11月17日、11月24日、12月11日、○12月18日、○1月19日、2月18日、3月28日、○を振ったところは「拡大」会議）開催し、また課程認定準備委員会は3回（11月19日、2月1日、3月2日）開催した。

（人間発達環境学研究科長・発達科学部長 岡田章宏）

## 2.3. 管理運営

### 2.3.1. 人事委員会

人事委員会は毎月定例の会議を開催し（計11回）、教員の採用、昇任、サバティカル制度適用教員の選考等に関し、人間発達環境学研究科教授会に発議する原案を検討・作成した。

本年度の実績は以下のとおり。

- ・教員の採用：9件（准教授：6件、特命講師：1件、特命助教：2件）
- ・教員の昇任：5件（教授：5件）
- ・サバティカル制度適用教員：2名（平成28年度前期：1名、後期：1名）

今年度の人事にあたっては、学部改革に伴う教職課程認定申請等への対応を念頭に新規採用に係る人事方針を検討し（5月人事委員会）、それに基づき数多くの人事案件を慎重に処理した。教員採用人事9件のうち、2件が退職者ポストの後任人事、5件が上記申請を踏まえた前倒し人事、2件が国立大学改革強化推進補助金「特定支援型優れた若手研究者の採用拡大支援」事業に係る人事である。なお、前倒し人事を行うにあたり、「人間発達専攻学び系講座と人間環境学専攻環境基礎論講座との間における教員定員の貸借についての覚書」（平成27年7月16日）を確認した。

今年度採用した教員9名のうち3名が女性であった（ただし、未着任の者も含む）。また、昇任した教員5名のうち1名が女性であった。その結果、本研究科の在籍教員103名のうち25名が女性となり、女性在籍比率は24.3%となった（平成28年5月段階）。この数字は、神戸大学が平成28年度末までに達成すべき目標と掲げる女性在籍比率21.1%を上回るものである。

また、国立大学改革強化推進補助金「特定支援型優れた若手研究者の採用拡大支援」事業については、昨年度採択されたものの通知が遅かったため採用手続が今年度にずれ込んだ分（7月教授会）に加え、今年度新たに申請した分（テーマ「未来型高齢社会の創成に向けた国際的共同研究拠点の形成」：人間発達専攻）についても採択され、採用手続を完了した（2月教授会）。

（人事委員会委員長 岡田章宏）



### 2.3.2. 学部・大学院運営委員会

学部・大学院運営委員会は、研究科長、副研究科長、専攻長（2名、ただし1名は学科長を兼ねる）、学科長（3名）の8名体制で運営した。本委員会は、研究科等の管理を円滑に行うために組織及び運営に関し包括的な事項を扱ってきた。検討事項は以下のとおり。

	審議内容	
第1回（4月3日）	1.「神戸大学機能強化改革」について 2.「先端研究・文理融合研究で輝く卓越研究大学へ」－平成28年度概算要求への対応について 3.組織改編について	等
第2回（5月1日）	1.新学部設置について 2.「高度教養科目」について 3.組織改編について	等
第3回（6月5日）	1.平成27年度神戸大学若手教員長期海外派遣制度による派遣候補者について 2.新学部設置について 3.部局長会議（5月21日）及び教育研究評議会（5月28日）について	等
第4回（7月3日）	1.博士論文内見委員会について 2.新学部設置について 3.部局長会議（6月11日）及び教育研究評議会（6月18日）について 4.平成27年度国立大学改革強化推進補助金の運用について	等
第5回（8月7日）	1.新学部設置について 2.オープンキャンパスについて 3.「高度教養科目」について 4.平成27年度大学教育再生加速プログラム補助金採択について	等
第6回（9月4日）	1.学位論文審査委員会及び内見委員会の設置について 2.新学部設置について 3.神戸大学附属中等教育学校を活用した高大接続研究について 4.博士課程前期課程の入学志願者について	等
第7回（10月9日）	1.予備審査委員会候補者（案）について 2.博士論文審査委員会委員候補者について 3.新学部設置について 4.戦略企画本部会議の議論について 5.神戸大学附属中等教育学校を活用した高大接続研究について 6.発達支援インスティテュートの改革について 7.ホームカミングデーについて	等
第8回（11月6日）	1.内見委員会の設置について 2.新学部設置について 3.年次計画等に関するヒヤリングについて	等
第9回（12月4日）	1.新学部設置について 2.「教員組織と教育研究組織の分離について」（11月19日部局長等懇談会） 3.平成29年度概算要求について	等
第10回（1月8日）	1.新学部設置について 2.神戸大学附属中等教育学校を活用した高大接続研究及び平成28年度AO入試について	等

第11回（1月29日）	1. 新学部設置について 2. 部局長会議（1月14日）及び教育研究評議会（1月21日）について 3. 神戸大学附属中等教育学校を活用した高大接続研究について 4. 「特別研究員（仮称）」について	等
第12回（3月4日）	1. 新学部設置について 2. 師範学校に関わる看板及び写真の贈呈について 3. カンボジア CPU 学長，副学長，学部長等の訪問について	等

（学部・大学院運営委員会委員長 岡田 章宏）

### 2.3.3. 教員活動評価委員会

神戸大学教員活動評価が実施されて2年目となる。昨年度と同様，教員活動評価委員会内規第3条に基づき，研究科長，副研究科長，専攻長に加え，その他研究科長が必要と認めた者として学科長を加え，8名体制で臨んだ。

また，昨年度，相当の時間を使って合意した評価の方法や基準等を基本的に踏襲しつつ，その都度問題がないか慎重に判断しながら，手続を進めた。「教員活動評価結果通知書」配布後，「意見の申出」が3件あったが，いずれも研究科長が対応した。委員会は，全部で4回開催し（6月5日，7月3日，7月24日，11月6日），すべての手続が終了した後に総括を行った。

（教員活動評価委員会委員長 岡田 章宏）

### 2.3.4. 中期計画推進委員会

今年度は，研究科長（委員長・岡田章宏），副研究科長（岡田修一，青木茂樹），研究推進委員会委員長（岡田章宏），教務委員会委員長（近江戸伸子），学生委員会委員長（吉田圭吾），国際交流委員会委員長（加藤佳子），入学試験委員会委員長（青木茂樹），キャリアサポートセンター長（澤宗則），情報メディア委員会委員長（宮田任寿），自己評価委員会委員長（長ヶ原誠），事務長（川端清文）の構成員に加え，総務係長（西田望智子）が出席し，月1回の定例会議を開催した（計11回）。

「中期目標の遂行，見直しに関する事項」を所掌する本委員会では，毎回，研究科長から部局年次計画に関わる全体的な状況が説明された。その後，各委員会等からそれぞれの活動内容が報告され，年次計画の進捗状況を確認し合いながら，委員会相互の連携可能性について検討した。

また，「第二期中期目標・中期計画管理表」の本部に対する提出の求めはなくなったが，今年度もまた，本研究科では年次計画の着実な実施を促すため，部局独自の取組として，年2回各委員会等に同管理表の作成をお願いし，本委員会において相互チェックを行った。

（中期計画推進委員会委員長 岡田 章宏）

### 2.3.5. 自己評価委員会

本年度は，研究科長（岡田章宏），副研究科長（岡田修一，青木茂樹），委員長（長ヶ原誠），委員（大田美佐子，佐藤真行，坂本美紀，伊藤真之，山口悦司），事務長（川端清文）の10名の構成員に加えて，総務係長（西田望智子）が出席し，11回の委員会を開催し，下記の諸課題に取り組んだ。

#### (1) ピアレビュー

一昨年度に実施開始した各学科・専攻からピアレビューの対象科目を選定する方法を通年化し，各学科で前期1科目，後期1科目，各専攻から前期1科目の計3科目を選定し，各3科目の授業担当者とレビューワーを決定の上，レビューワー及び授業担当教員が当該の授業内容を点検・評価し，作成したレポートを基に改善点等の議論と対象授業の改善を図った。その中で，10科目の授業目を対象としてピアレビューを行った。また，ピアレビューレポートを記す際の，注目点を委員会で議論を行い，決定し，レポート用紙の改訂を行った。

## (2) 就職先機関インタビューの実施体制の検討

本学部・研究科の教育成果を確認するために、学部・研究科の卒業生・修了生、及びその就職先機関へのアンケートをどのように実施するのかについて委員会で議論し、実施マニュアルや質問項目の案を検討した。

## (3) 各種アンケート回収率向上

前・後期授業アンケート、及び卒業・修了時アンケートの回収率が全学的に低くなっていることを受けて、研究科長・自己評価委員会からの呼びかけと共に、特に前年度に回答者が無かった科目を中心に担当教員に直接、アンケートの重要性と協力依頼を打診し、回収率の向上を図った。

## (4) Voice Box

Voice Box に 4 件の投稿があり、これらに関して関連委員会や事務部と連携して対応を検討し、Web にて回答するとともに、学生の教育環境について点検し改善を図った。

## (5) ファカルティ・ディベロプメント

5 回のファカルティ・ディベロプメントを研究科教授会開催にあわせて実施し、教育の改善に役立てた (5 回の内容詳細は、『資料集』を参照)

## (6) 「教育の質向上のための評価指標」による自己点検・評価

「教育の質向上のための評価指標」に基づいて、本学部・研究科における教育について点検・評価を行った (3 月)。

## (7) 学修時間調査の実施方法と質問項目についての検討

平成 28 年度から実施予定の学部生に対する学修時間調査について、その実施についての課題や調査内容について協議し全学委員会に提案を行った。

## (8) 法人評価資料の作成

平成 22 年度から 27 年度における学部・研究科を対象とした教育と研究に関する自己評価資料に関して全委員と委員会出席メンバーでデータ収集と資料の作成を行った。

## (9) 平成 27 年度年次報告書の作成

平成 27 年度の本学部・研究科における教育・研究活動を集約し、年次報告書としてまとめた。

(自己評価委員会委員長 長ヶ原誠)

## 2.3.6. 安全衛生委員会

### 1) 平成 27 年度委員

委員長 (近藤徳彦)、委員 (中村晴信、關典子、丑丸敦史、井口克郎、白杉直子、川端清文 (事務長)、西田望智子 (総務係長)、笠原夕美 (人間科学情報サービス係長))

### 2) 委員会の開催

7 月、11 月、2 月に委員会を開催した。

### 3) 委員会の業務

- ・点検事項報告とその対策の検討
- ・その他改善を要する点の検討
- ・全学安全衛生委員会の報告
- ・その他

### 4) 定期点検

委員による学舎内共用部点検を月に一回実施し、各委員が担当場所の点検報告を行った。

## 5) 本年度の実施事項

- ・従来より検討事項であった喫煙場所の再検討を行い、G棟横の喫煙場所を10月1日より廃止した。
- ・飛び降り等の防止のため、A棟3階ベランダの出入り口の施錠、及びA棟5階西側の転落防止措置を実施した。
- ・学舎内の共有スペースに放置されている物品について、教授会及びメールや物品への貼り紙等で撤去依頼した。さらに、所有者がはっきりしている場合は直接撤去を依頼した。
- ・共通のゴミ捨て場の使用状況が悪いため、全体にその旨を通知するとともに、正しいゴミの捨て方をメールで周知した。
- ・安全管理マニュアルの配布を行った。
- ・消防訓練を実施した。

## 6) 課題

- ・学舎内の共有スペースに放置されている物品の撤去が不十分であるため、所有者に更なる依頼をお願いする必要がある。
- ・学舎内の喫煙場所を1つ廃止したが、残り3箇所の喫煙場所についても、その場所が適切なかどうか検討し、更に喫煙場所の変更・廃止を検討する。
- ・共通のゴミ捨て場の使用方法の周知を図る。
- ・安全管理マニュアルの周知を図る。

(安全衛生委員会委員長 近藤徳彦)

## 2.4. 予算

### 2.4.1. 予算に関する特記事項

#### (1) 予算追加配分

本年度は科研費等間接経費の増加等を財源として予算追加配分を下記のとおり行った。

- ①平成26年度に引き続き外部資金獲得者に対しインセンティブ配分を行った。
- ②電気料金の増加が見込まれるため電気料金の追加配分を行った。
- ③空調機修繕費用として予算を割り当てた。
- ④C・D棟改修工事に係る貸付金を前倒しして完済した。
- ⑤翌年度預かり金として繰り越せるよう予備費を確保した。

#### (2) 平成28年度当初予算配分

平成28年度当初予算配分案作成にあたり、部局予算が10%減額となるが、光熱費（電気料金）の契約変更により予算が減額可能であること、また間接経費を活用可能であることを考慮し、下記のとおりとなった。

- ①間接経費を電気代として補填する。
- ②教員研究費は前年度維持の32万円の配分とする。
- ③部局の特色であるシンポジウム経費、プロジェクト研究、学術Weeks経費は、平成27年度と同額を配分する。

なお、翌年度以降も予算の減額が予定されるため、予算の配分については今後根本的な見直しが必要である。

### 2.4.2. 予算関係の審議等の状況

#### (1) 平成26年度決算

平成27年5月12日の予算委員会で審議し、5月15日の教授会において承認された。

## (2) 平成 27 年度当初予算再配分

平成 27 年 3 月 19 日の教授会において承認された平成 26 年度当初予算について平成 27 年 5 月 1 日現在での各専攻、学科、コース等の学生実員数に基づいて学生当経費の再配分の修正を行い、5 月 12 日の予算委員会にて審議し、5 月 15 日の教授会において承認された。

## (3) 平成 27 年度予算追加配分

予算追加配分について、平成 27 年 12 月 15 日の予算委員会にて審議し、12 月 18 日の教授会において承認された。

## (4) 平成 28 年度当初予算配分

平成 28 年度当初予算配分案は平成 28 年 3 月 17 日の予算委員会にて審議し、3 月 19 日の教授会において承認された。なお、学生当経費は平成 28 年 5 月 1 日の学生実員数に基づいて修正を加え 5 月開催の教授会にて審議することとした。

(予算委員会委員長 国土将平)

### 2.4.3. 外部資金獲得状況（教員及び学生）

外部資金の獲得状況については、その詳細を資料編（特に「11-3-1～5」参照）に掲載しているため、ここでは特徴的な点を指摘するにとどめる。

平成 27 年度科学研究費補助金の獲得は、60 件（新規：20 件）、総額 1 億 145 万円であった。内訳は、基盤研究（A）：2 件、基盤研究（B）：10 件、基盤研究（C）：26 件、挑戦的萌芽研究：15 件、若手研究（B）：5 件、研究活動スタート支援：2 件、となっている。

概ねこの間の水準を維持したといえるが、それでも、昨年度の数字を下回っている（平成 26 年度：64 件（新規：23 件）、総額 1 億 1,129 万円）。今年度より開始した組織的対応（「7.4.1. 研究推進委員会」参照）の効果が現れることを期待したい。

その他の補助金については、13 件、総額 5,363 万円であり、こちらは昨年度に比して、大幅に増えている（平成 26 年度：6 件、総額 3,469 万円）。

日本学術振興会特別研究員については、DC7 名（新規：4 名）、PD2 名（新規：1 名）が本年度採用されている。学生委員会を中心に申請のための説明会を継続的に開催することで、申請への意欲は院生全体に著実に拡がっており、新規数としては、昨年度の DC2 名を大きく上回っている。今後も順調な伸びを期待したい。

受託研究については、10 件、総額 7,055 万円となっており、総額において昨年をやや下回ったものの、件数としては増えている（平成 26 年度 8 件、総額 7,767 万円）。今年もまた、若手の活躍が目を見張る。

(人間発達環境学研究科長・発達科学部長 岡田章宏)

## 2.5. 広報及び情報公開

### 2.5.1. パンフレット、ウェブサイト等

#### (1) 研究科案内（パンフレット）

2017 年 4 月入学者向け研究科案内（パンフレット）の編集を行った。案内は 32 ページで構成され、内容には、研究科の教育、研究、国際学術交流、社会貢献、各専攻に関する特色について掲載した。これまで案内は、学部と研究科合冊で作成していたが、2017 年 4 月に発達科学部が改組予定であるため、学部案内は作成していない。また、研究科案内（英語版）（8 ページ）も作成した。

#### (2) 研究科ウェブサイト

研究科ウェブサイト (<http://www.h.kobe-u.ac.jp>) は 2011 年度に導入された高機能 CMS（コンテンツ管理システム）によって運用されており、すべての情報を一元的に管理・公開し、アクセサビリティ、作業の

効率性, 安全性の向上を図っている。2013年度には, ウェブサイトのデザイン面で大きな改良を行っている。

研究科ウェブサイトは, 受験生や一般向けの広報媒体として, また, 在学生や教職員向けの広報媒体としての役割をもつ。2015年度においては, 受験生や一般向けの情報として, とくに, 入試情報や国際学术交流に関する情報を充実させた。入試情報に関しては, ウェブ掲載する手順をマニュアルとしてまとめ, 安全対策を行った。また, 国際シンポジウム「アジアの包括的で持続可能な発展についてのワークショップ～経済, 社会, 人間発達と環境～」を始め, 学術 Weeks として開催されたシンポジウムやセミナーなど, 研究科の組織が主催するほぼすべてのイベントの情報をウェブ上に掲載した。

在学生向けの情報として, 基本的な教務学生情報(学生便覧, 時間割表など)の他, キャリアサポートセンターが主催するセミナー情報, ESD 関係の授業情報, 留学に関する情報を掲載し, 学科や専攻を超えた学术交流を支援するため, 各コースが主催する卒業論文・修士論文発表会プログラムも公開した。

英語版ウェブサイトについては, 研究科案内(英語版)の情報をもとに, 全面改装を行った。

(情報メディア委員会委員長 宮田任寿)

## 2.5.2. 発達科学部 オープン・キャンパス

### (1) 概要

- ・実施日時: 2015年8月11日(火) 13時00分～16時30分  
8月12日(水) 13時00分～14時30分

・実施場所: 発達科学部学舎(B 202教室, ほか)

・参加者数: 参加者数は, 発達科学部の1日あたりの参加募集定員1200人に対し次のとおりであった。

1日目 生徒: 988人 付添: 328人 計: 1316人

2日目 生徒: 842人 付添: 319人 計: 1161人

2日間総計 : 2477人

・対象者: 主として兵庫県(主に神戸市内)・大阪府・京都府・奈良県, 広島県, 岡山県下高校生を中心に1都1道2府34県の高校生が参加した。

・実施内容: 学部長による学部説明会, 学部紹介ビデオ, 各コース説明, 模擬授業, 模擬セミナー, 作品展示, 学科展示, サイエンス・ショップ展示, キャリアサポートセンター展示, ほか

・施設見学: 人間科学図書館(入館ゲート内は不可), 発達ホール, キャリアサポートセンター, カフェ・アゴラ(飲食可能), 自然環境論コースG棟ツアー

### (2) 実施組織の構成

実施組織は教員組織として「オープンキャンパス・ワーキンググループ」「オープンキャンパス・コース実施委員」, 担当事務係として教務学生係, 学生組織として「オープンキャンパス学生委員会」からなる。これらとは別に, 当日の運営に際して, コースごとに補助学生を若干名雇い上げている。

a) 「オープンキャンパス・ワーキンググループ」は教務学生係と連携してオープンキャンパスの実施計画(「実施計画書」)及び緊急時マニュアルを作成し, 全体的運営に関する業務を所掌する。

主査: 丑丸敦史, 委員: 井口克郎, 関典子, 増本康平, 山口悦司

b) 「オープンキャンパス・コース実施委員」は, コース企画の運営に関する業務を所掌する。

伊藤俊樹(心理発達論), 五味克久(子ども発達論), 山口悦司(学校教育論), 吉永潤・勅使河原君江(教育科学論), 伊藤篤(発達支援論), 中村晴信(健康発達論), 近藤徳彦(行動発達論), 木村哲也(身体行動論), 田村文生・岡崎香奈(人間表現論), 大串健一(自然環境論), 白杉直子(生活環境論), 浅野慎一(社会環境論), 稲葉太一(数理情報環境論)

c) 「オープンキャンパス学生委員会」(各コース1名選出)は, 「オープンキャンパス・ワーキンググループ」の監督のもと, 当日までの準備作業及び当日のオープンキャンパス・ワーキンググループ業務を補佐する。

学部学生: 14名

d) 担当事務係：教務学生係（吉本えり）

e) 協力：情報メディア委員会（研究科HP広報ページの設置） 山口泰雄研究室（アンケート監修及び集計）

### (3) 準備日程

5月上旬：オープンキャンパス・ワーキンググループの委員選出（研究科長より委託）

5月下旬：第1回オープンキャンパス・ワーキンググループ会議

6月上旬：オープンキャンパス・コース実施委員，オープンキャンパス学生委員の選出  
各コース実施計画の照会

6月下旬：第1回拡大オープンキャンパス・ワーキンググループ委員会開催（学生企画の検討，ほか）

6月下旬：各コース実施計画のとりまとめ。企画内容の本部への通知

7月下旬：第2回拡大オープンキャンパス・ワーキンググループ委員会開催（補助学生雇い上げ手続き，  
学部長による学部紹介についての確認，危機管理・安全対策の周知）

8月10日：直前準備業務（配布資料等の準備 掲示物掲出，ほか）

### (4) 会場構成及び要員配置

会場の基本動線は，正門からB棟ピロティに誘導し，同所に設置した受付を経由してB棟1階ホールに入り，そこから各会場に分散するものとした。

・B棟ピロティ：受付（参加票シール貼付，資料配付，飲料〈500ml ペットボトル1本〉配布）教務学生係，  
オープンキャンパス・ワーキンググループ，オープンキャンパス学生委員会

・B棟1階ホール：ロビー空間（会場案内図の掲出 休憩用椅子・テーブル，アンケート回収）オープンキャンパス・ワーキンググループ委員（常駐），オープンキャンパス学生委員

・学部長による発達科学部の紹介（B202）

・コース等別会場

F256, B201（心理発達論） B212（子ども発達論） B210（教育科学論） B108（学校教育論）

大会議室（人間行動学科） 中会議室C（健康発達論），中会議室B（行動発達論），中会議室A（身体行動論）

F264（人間表現学科） F252（人間表現学科質問コーナー）

B104（自然環境論） B208（数理情報環境論） B103（生活環境論） B106（社会環境論）

A120（発達支援論） E251（サイエンス・ショップ） D ルーム北側（キャリアサポートセンター）

・控室：Dルーム 生協食堂 カフェ・アゴラ F251

・オープンキャンパス実施本部：非常勤講師控室及び教務学生係事務室

### (5) 配布資料

次の資料を特製手提げバッグに入れ，受付において飲料とともに配布した。

「神戸大学発達科学部オープンキャンパス 2015 プログラム概要」「同 会場案内図」（避難経路図）

「新学部の設置について」

「新学部の設置について」は学部で用意したパンフレットを配布した。

「2015 神戸大学発達科学部オープンキャンパス」（オープンキャンパス学生委員会作成の14ページ立てパンフレット）。

「2015 神戸大学発達科学部オープンキャンパス」はオープンキャンパス学生委員会の自主企画として作成されたもので，コース別に学生生活や授業内容を紹介したものである。掲載写真中に写っている人物については全員に「肖像権，著作権，個人情報に関する同意書[在学生用]」により同意を取った。印刷原稿が完成した段階で，オープンキャンパス・ワーキンググループ及び研究科長による校閲を経て印刷発注された。

### (6) 危機管理・安全対策

緊急（病人等の発生，不審者発見，事故・事件発生）時の対応について「緊急時マニュアル（非常電話配置マップを含む）」「キャンパス内AED配置マップ」「保健管理センターだより」に基づいて確認した。

開催中は、各コース企画の開始時刻を中心に、オープンキャンパス・ワーキンググループ及びオープンキャンパス学生委員が教室会場の定員超過に留意しながら、巡回コースを定めて巡回した。

看護が必要な事態が生じた場合は保健管理センターとの連携で行うとし、救護室は用意したが看護師の配置はしていない。

神戸市交通局に対してオープンキャンパス実施を伝え、増便等の対応を求めた。

#### (7) アンケートの実施と参加者調査結果

参加者の属性とオープンキャンパスに対する量的評価及び質的评价を明らかにするためにアンケートを実施した。配布数は1830票、回収数は両日で合計843件、回収率は46.1%であった。

回収データは集計を行い、満足群・不満群に分類・整理した。新学部設置を控えていたため、自由記述の欄は設けなかった。

集計結果は「オープンキャンパス参加者調査2015」として取りまとめた。

#### (8) 参加者の評価概要

両日を通し、事故等なく無事に終了した。参加者の反応の詳細は前述の「オープンキャンパス参加者調査2015」に譲るが、参加者の7割以上が満足、残りがまあ満足と、学部長による学部説明も含め好評を得たと判断できる。

(発達科学部オープンキャンパス WG 主査 丑丸敦史)

### 2.5.3. 人間発達環境学研究科 オープン・らぼ

#### (1) 概要

- ・実施日時：2015年7月4日（土）13時00分～17時頃
- ・実施場所：発達科学部学舎（B 202教室、ほか）
- ・目的：人間発達環境学研究科の教育や研究に関する情報提供
- ・対象者：人間発達環境学研究科への受験を希望している方（神戸大学発達科学部在籍学生以外）
- ・参加者総数：56名

#### (2) 実施体制

オープンキャンパス・ワーキンググループ

協力：情報メディア委員会（研究科HPに開催告知ページの設置）

#### (3) 実施方法及び内容

広報：5月初旬より研究科HPに告知を掲載した。

参加申し込み方法：

- ・申し込みはメールでのみ受け付けることとし、専用アドレスを設定した。
- ・申し込み時に、氏名、連絡用メールアドレスのほか、現在の所属、指導を希望する教員氏名（2名まで、今年度より本項目を必須とした）を記してもらうこととした。
- ・申し込みメールに記された個人情報は目的以外には使用せず、適切に管理する旨を明記した。
- ・参加申し込み期間：2015年5月29日（金）～6月15日（月）

内容：

##### 1) 全体説明

1. 人間発達環境学研究科の理念と特色（岡田章宏研究科長）
2. 国際学術交流協定と留学（青木茂樹国際交流委員会委員長）

##### 2) 専攻別説明

1. 専攻／コースの説明（各専攻長または代理）

##### 3) 研究室訪問

1. 指導希望教員との個別面談
2. 研究室在学生等との交流



### 3. 施設見学

#### (4) 配布資料

「オープンらぼ2015プログラム」

「学部・研究科パンフレット『神戸大学発達科学部 神戸大学人間発達環境学研究科2015』」

「リーフレット〈留学のススメ〉」「研究科リーフレット〈2015 神戸大学大学院人間発達環境学研究科〉」

#### (5) 参加状況詳細

参加申込総数：69名 参加者合計数：56名 当日欠席者：13名

参加者は主に近畿圏，その他に東海，中国，北陸，四国，九州圏から，学部1年生から社会人と多様な年齢層の方々の参加があった。

#### (6) 教員二人と面談を希望するものが多く，教員には時間調整のために多大な時間を使って頂き，非常に協力的に運営に関わって頂いた。全体を通して，所期の目的である「人間発達環境学研究科の教育や研究に関する情報提供」が相互的なコミュニケーションのなかで達成できたと考えられる。

(人間発達環境学研究科 オープン・らぼWG 主査 丑丸敦史)

### 2.5.4. ホームカミングデイ

神戸大学は平成18年度より卒業生に母校を訪ねていただき，新たにスタートを切った神戸大学を知って頂くという企画が始まった。今年は第10回を迎え，10月31日（土）に開催された。

今年度は昭和35年，40年，45年，50年，55年，平成2年，20年～24年の卒業生に案内状を送付し，延べ55名の出席があった。午前10時30分から六甲台講堂で全体企画が行われた後，午後1時より学部企画が発達科学部で行われた。

発達科学部では午後2時にキャンパスツアーを行い，図書館，体育館，Dルームなどをご覧頂き，変わりつつある発達科学部の状況を見ていただいたあと，以下の催しを行った。

#### 1) ようこそ発達科学部へ

発達科学部長，紫陽会会長挨拶 14:45-15:00（大会議室）

#### 2) 紫陽会賞授賞式 15:00-15:15（大会議室）

#### 3) シンポジウム 15:15-16:30（大会議室）

「若手教員と語る教育現場の今と未来」

コーディネーター：松原市立河合小学校 教諭 友近 智

シンポジスト： 神戸市立水木小学校 教諭 河内 亮介

加西市立泉中学校 教諭 末廣 佐和子

神戸市立いかわ幼稚園 教諭 中橋 葵

#### 4) 懇親会（参加費：3000円）16:30-19:00（発達科学部生協食堂）

#### 5) 併設企画 神戸大学よさこいチーム山美鼓演舞 17:15-17:30（発達科学部生協食堂）

今年度はシンポジウム「若手教員と語る教育現場の今と未来」と題して，本学の卒業生で，様々な教育現場で活躍する若手教員をシンポジストやコーディネーターとして招き，現場教員としての実状や課題，成長の様子を交流することで，神戸大学における教員養成の伝統と意義を確認するとともに，これからの役割とその発展についても議論頂いた。また，第6回から行われている紫陽会会員（卒業生）と準会員（在校生）に贈られる紫陽会賞の受賞式も行われ，北山學氏，神林恭子氏，西田文香氏の3氏・団体にクリスタルトロフィーと金一封が贈られた。

全体懇親会の中では，昨年に引き続き，神戸大学よさこいチーム山美鼓の演舞が行われた。演舞の後は学生諸君も懇親会に加わり，すばらしい交流の場が持てた。

(第10回発達科学部ホームカミングデイ実行委員長 岡部恭幸)

## 2.6. 環境設備

### 2.6.1. 教育・学習環境の整備

#### (1) 各種施設・設備

##### 1) D-Room の改修

昨年度、D-Room に可動式大型モニターと移動式ホワイトボードを設置して、ラーニングcommonsとしての機能を充実させたが、今年度は更に、床のAVフロア化、壁のホワイトボード化及び廊下側の可視化等への改修や可動式テーブル、パーテーション等の導入により、ラーニングcommonsとして一層の整備を行った。

##### 2) のびやかスペースあーちの改修

「のびやかスペースあーち」を設置している旧灘区役所庁舎跡地は老朽化により取り壊されることから、灘区民ホールへの移転が決まった。移転先の入居スペースはこれまでと比べて広くなることから、より機能的に利用できるように改修を行った。

##### 3) B棟教室のプロジェクター及びAV機器の更新

最大300人が収容できるB202教室に設置されている大型プロジェクターは、老朽化で故障する頻度が多く映像の解像度も悪く見づらくなっていたので、新しいプロジェクターに更新をし教育環境の改善を図った。また、B104教室及びB208教室のAV機器も老朽化で故障が多かったことから新しいAV機器に更新をした。

##### 4) ポスターセッション用のボードの更新

ポスターセッション用のボードは、学生等の研究成果の発表等で使用しているが、ボードが木製で土台が安定しなくなっているうえ、資料の展示も画鋏を使用しなければならない等、使い勝手が悪く不便であったことから、専用のホワイトボード25台を同窓会の紫陽会学部支援金から購入いただき更新をした。

##### 5) 網戸の設置

今年度も、夏季の研究室等の暑気対策として希望のあったところの全てに網戸を設置した。

(事務長 川端清文)

#### (2) キャンパス内ネットワーク環境整備

本研究科では、部局の広報用に独自のウェブサーバを管理運営している。2015年度は、老朽化した部局ウェブサーバのリプレースを行った。

本研究科で利用できる無線LANは、神戸大学情報基盤センターが管理する全学用無線LANと、本研究科が独自に管理する無線LANがある。2013年度までに、部局内建物のほぼ全域で、無線LANの利用が可能となっている。

本研究科では、研究科ウェブサイト上で公開しているイベントやお知らせ等の情報を学生・教職員向けに幅広く周知する目的で、電子掲示板を4台(A棟1階エレベータ前、A棟2階教務学生係前、D-Room、図書館内)に設置し、運用している。これら4台は老朽化しているため、リプレースが必要である。

情報教育設備室の準備室にはスタッフが常駐し、学生や教職員向けに、コンピュータやネットワーク利用に対する技術支援も行っている。2015年度は、教職員や学生のパソコンに関するトラブルの対応など、300件を超える問題への対応を行った。

本研究科では、在学生への広報手段の1つとして、学生向けメーリングリストの運用を行っている。メーリングリストは学生が所属する公式組織(コースなど)単位で構成され、教務、学生生活、キャリアサポートに関する情報などが提供された。

(情報メディア委員会委員長 宮田任寿)

### (3) 図書館整備

本学研究科・学部 に附設された人間科学図書館では、学生用資料の整備充実に努め、平成26年度において、学生推薦図書（専攻推薦図書）、学生希望図書など、1325冊、（総額6,345,223円）の図書を購入して開架した。平成25年度（1671冊、総額7,144,425円）と比較すると、346冊、799,202円の減となった。これらの図書の平成27年1月から12月までの利用実績は表に示すとおりである。全体の貸出率は51.85%、回転率は163.50%であり、いずれの図書ともよく利用されていた。学生の学習・研究に本図書館が大切な役割を果たしているといえる。

表 選定区分ごとの平成26年度購入実績ならびに平成27年1-12月の貸出率と回転率

区 分	予算額	購入実績		貸出可能冊数	貸出図書数	貸出延回数	貸出率 %	回転率 %
		冊数	金額					
教員推薦図書	4,910,000	826	4,654,963	802	436	1,272	54.36	158.60
学生希望図書	350,000	88	292,340	88	66	258	75.00	293.18
継続図書	400,000	112	398,075	62	27	67	43.55	108.06
シラバス掲載図書	250,000	56	326,758	56	32	103	57.14	183.93
教科書	200,000	170	133,467	170	47	99	27.65	58.24
学生用図書	0	12	116,982	12	2	6	16.67	50.00
参考図書	0	7	336,742	0	0	0		
グローバル図書	0	54	85,896	54	35	229	64.81	424.07
合 計	6,110,000	1,325	6,345,223	1,244	645	2,034	54.36	158.60

貸出率 = 貸出図書数 / 貸出可能冊数 （受入図書のうち貸し出された図書の割合）

回転率 = 貸出延回数 / 貸出可能冊数 （受入図書1冊あたり何回貸し出されたか）

平成27年度には、メール会議を含めて6回の委員会を開催した。専攻（学科）などに対する学生推薦図書の依頼、検定教科書などの発注など、例年通りの取り組みに関する協議の他、より効率的な予算の分配方法について協議を行った。人間科学図書館の禁帯出図書について、視聴覚資料が禁帯出となっていたが、神戸大学附属図書館利用細則の禁帯出書の規定（第10条）に従い、実際には視聴覚資料の貸し出しが行われていた。そのため、規定並びに実態に即して、視聴覚資料を禁帯出から除外するよう、改正を行った。また、限られた図書館の施設を効率よく使用するために図書館内に3冊以上重複本（版が違うものは重複と認めない）がある重複図書の1,159冊の廃棄を決定した。平成23年度に不明図書となりその後追跡調査して結果不明のままであった27冊の廃棄を決定した。

平成28年度の附属図書館の予算において、前年度に比して9%の予算削減のため、人間科学図書館の学生用資料配分・執行計画では、2,961千円となり、前年（3,578千円）より617千円の減額となった。今後の図書購入計画にも影響が予想される。

（図書館委員会委員長 国土将平）

### 2.6.2 交流ルーム・アゴラ

A棟6階の交流ルーム（カフェ・アゴラ）は学生の交流スペースとして開設8年目になった。カフェ・アゴラは学内厚生施設であるとともに、障がい者雇用や実習訓練の実践の場でもある。脳性麻痺のあるマスター、従業員として知的障がいのある者2名、身体障がいのある者1名、他スタッフ2名のサポート、そして知的障がいを持つ実習生2名を受け入れた。設立当初から勤めていたマスターが9月で退職し、1名欠員のまま営業を行っているが、支障なくアゴラの運営は行われた。

#### (1) 本年度の活動状況

##### 1) 行事との連携

学外に対してカフェ・アゴラの活動の趣旨と内容を紹介する目的で、次の機会にカフェを開店あるいは活用

した。いずれも好評で利用者の本施設における活動への理解が深まった。

#### ①保護者会 6/6 (土)

4年前から始めたコーヒーサービスを行い、11名の保護者にコーヒーや紅茶を提供した。

#### ②オープンキャンパス

8/11・12(木・金)の開催に合わせて、カフェ・アゴラを開店した。店舗以外に隣接する大学院生研究室を開放し客席数を増やした。マスター、スタッフ、実習生に加え学生アルバイト7名、更にボランティアの応援で営業した。例年どおりメニューはカレーライス、たこ焼き、コーヒー、リンゴ・オレンジジュース、レモンスカッシュに、新メニューとしてパウンドケーキを加え、2日間でカレー109食(昨91)、パウンドケーキ142食、たこ焼き115食、ドリンク類は323杯で、売上で昨年と比較すると13%増えた。来場者には6階からの展望を楽しむと共に暑さをしのぐ憩いの場となった。また、1F D-roomでキャリアサポートセンターのプレゼンテーションが行われ、コラボ企画として実習生が学生アルバイトのサポートで手作りクッキーの販売を行い、各所でアゴラの取り組みの一面が理解され好評を得た。運営面でも、業績面でも成功した。

#### (2) 喫茶のサービス提供と利用状況

4月から2月末までの11ヵ月間の飲料注文数は一般が861(昨866-昨725)、学610(昨348-昨836)、食べ物3063(昨4574-昨3378)で、学生の食べ物が減っているのは、7月以降たこ焼きが提供できなかったためである。

#### (3) 展示活動

##### ①交流ルーム委員会企画

「アゴラの仲間たち展3」9/28～4/28

##### ②博物館実習の企画として場所を提供

「パステル画展」1/26～8/31

#### (4) 音楽活動

従業員の1名が音楽活動をしており、カフェ・アゴラでも音楽活動を企画する事になった。ギターやキーボード、音響機材を常設。いつでも気軽に生演奏を楽しめる空間を演出。毎月第四水曜日にシンガーソングライターを招いて定期演奏を開催している。それ以外にも不定期だが音楽仲間を招いてライブを4回行った。また学内のサークル等とコラボして生演奏も行った。学生からのギターを教えてほしいという要望に応じた。

#### (5) 接客実習生の受け入れ

彩作業所から接客実習として数名を受け入れた。

#### (6) 予算と売上

人件費は障がい者雇用分を本部経費からその他を研究科経費から充当した。食材などの材料費については学部予算からの配分に加えその年度のアゴラでの収益の8割が大学より戻され加算している。今年度2月末までの11ヵ月分の収益は約121(昨132)万円で執行済み予算は92(昨120)万円で人件費分を除くと大幅な黒字であった。

#### (7) 今後の課題と活動予定

来年度スタッフが大きく入れ替わる。どのように事業を引き継ぎまた変化させていくのか大きな課題である。また実習生がここで何を学び、どのように社会とかがわっていくのか、また彼らと従業員スタッフがどうかかわるのかは明確にしていく必要がある。

(交流ルーム運営委員会委員長 佐々木倫子)

## 2.7. 教員研修

### 2.7.1. FD

教授会の開催にあわせてFDを実施し、無理なく多くの教員が参加し議論を行うことができた。以下も本年度に扱ったテーマを記しておく。

- ・9月：「科研費申請のポイントとメリット」(学術研究推進本部 寺本時靖特命准教授)
- ・10月：「初年次セミナー・アクティブラーニングについて」  
(大学教育推進機構 近田政博教授, 米谷淳教授)
- ・11月：「発達障害を抱える学生を支援する教職員のための発達障害セミナー－来年4月の障害者差別解消法の施行に向けて－」(人間発達専攻 吉田圭吾教授)
- ・2月：「『神戸大学基金』について」(理事(広報・社会連携担当) 内田一徳)
- ・2月：「障害者差別解消法と来年度からの神戸大学の体制」  
(キャンパスライフ支援センター 村中泰子特命准教授)  
(人間発達環境学研究科長・発達科学部長 岡田章宏)

### 2.7.2. 初任者研修

情報メディア委員会では、毎年、着任した教員に対して研修会を主催している。2015年度は10月に2名の教員が赴任され、2015年10月に開催した。学部と研究科の説明の後、神戸大学における情報セキュリティポリシーと個人情報保護に関する説明をはじめ、部局が独自に提供するICT関係のサービス(IPアドレス管理システム、無線LAN、学生へのメール配信システム、技術サポートなど)、神戸大学が提供するICT関係のサービス(KUID、教務情報システム、会計業務システム、WeblyGoなど)、その他、学外ASPサービス利用の注意点などについて説明を行った。

(情報メディア委員会委員長 宮田任寿)

### 3. 入試

#### 3.1. 一般選抜入試

##### 3.1.1. 入学試験委員会

本学部・研究科の入学試験全体を所管する入学試験委員会は、研究科長、副研究科長、専攻長、学生委員会委員長の計9名で構成し、平成27年度の委員長を副研究科長の青木茂樹が務めた。

今年度の審議概要（日程と議題）は以下のとおり。

- ・ 第1回（4月17日）
  1. 平成28年度大学院学生募集要項について
- ・ 第2回（5月15日）
  1. 平成28年度神戸大学入学者選抜要項（案）について
  2. 平成28年度国費外国人留学生（外国政府派遣留学生を含む。）及び私費外国人留学生学部入学者の選考方法等について
- ・ 第3回（9月9日）
  1. 平成28年度博士課程後期課程人間環境学専攻（第1期）入学試験・進学者選考試験合格者の判定について
  2. 博士課程前期課程入学試験における英語の点数の算出方法等について
- ・ 第4回（9月30日）
  1. 平成28年度博士課程前期課程入学試験合格者の判定について
- ・ 臨時（11月12日）
  1. 平成28年度博士課程前期課程第2次学生募集要項（人間発達専攻）（案）について
- ・ 第5回（11月30日）
  1. 平成29年度入学者における入学試験日程について
- ・ 持ち回り（12月4日）
  1. 平成28年度学部（第3年次編入学試験，社会人特別入試及び私費外国人留学生特別入試）の入試情報開示基準について
- ・ 第6回（1月14日）
  1. 平成28年度博士課程前期課程人間発達専攻1年履修コース入学試験合格者の判定について
  2. 平成28年度発達科学部入学者選抜に係る原則について
  3. 平成29年度入学者に係る入学試験日程について
- ・ 第7回（2月5日）
  1. 平成28年度博士課程前期課程（第2次学生募集）入学試験合格者の判定について
- ・ 第8回（3月4日）
  1. 平成28年度博士課程後期課程人間環境学専攻入学試験・進学者選考試験合格者の判定について

##### 3.1.2. 一般選抜入試に係る総括と課題

今年度の発達科学部及び人間発達環境学研究科の一般選抜入試に関する業務は、学生委員会をはじめ関係各位の尽力により大過なく遂行された。大学全体の機能強化改革に伴い、平成29年度から計画されている学部の改組に伴い、平成28年度は発達科学部としての1年次入学の最後の入試となった。

平成28年度発達科学部入学試験（社会人特別入試，AO入試を含む）の結果は、入学定員280名に対し、志願者数1157名（志願倍率4.13倍）、受験者数907名、合格者数297名、入学者数289名であり、定員充足率は1.032倍となった（いずれも学部全体の数字。学科別の詳細は『資料編』を参照）。適正な範囲といえるが、定員超過・定員割れについては厳格な取扱いが指摘されており、学部の改組後も注意する必要がある。

平成28年度入学者から博士課程前期課程の入試において、英語試験の外部試験を導入した試験を開始し

た。また機能強化改革に伴い、人間発達環境学研究科博士課程前期課程の学生定員に関しては、平成28年度より人間発達専攻は52名から51名に人間環境学専攻は40名から36名に削減され、研究科全体としては92名から5名減の87名という定員となった。

入学試験結果は、人間発達専攻で、入学定員51名に対し、志願者数89名(志願倍率1.75倍)、受験者数86名、合格者数54名、入学者数48名であり、定員充足率は0.94倍となった。また人間環境学専攻で、入学定員36名に対し、志願者数44名(志願倍率1.22倍)、受験者数40名、合格者数37名、入学者数33名で、定員充足率は0.92倍であった。外数(定員4名)としている人間発達専攻(一年履修コース)の入学者数4名を加え、研究科全体として捉えれば、定員91名に対し入学者数85名、定員充足率は0.90倍となった。合格後の入学辞退者が人間発達専攻で6名、人間環境学専攻で4名発生したために定員充足率が1.00を下回る事態となったが、全体としての入学状況は適性範囲の下限となっている。

また博士課程後期課程については、人間発達専攻が、入学定員11名に対し、志願者数17名(志願倍率1.54倍)、受験者数17名、合格者数11名、入学者数11名であり、定員充足率は1.00倍となった。また人間環境学専攻では、定員6名に対し、志願者数8名(志願倍率1.33倍)、受験者数8名、合格者数8名、入学者数6名であり、定員充足率は1.00倍となった(第Ⅰ期と第Ⅱ期の合計)。研究科全体としては、定員17名に対し入学者数17名、定員充足率1.00倍となっている。

いずれについても、詳細な数字は『資料編』に掲載する。

(入学試験委員会委員長 青木茂樹)

## 3.2. 特色ある入試

### 3.2.1. 社会人特別入試

平成28年度社会人特別入試は、例年どおり4学科で行った。英語と面接(口頭試問)による選抜を行った。募集人員は14名(人間形成学科5名、人間行動学科2名、人間表現学科2名、人間環境学科5名)であった。出願期間は平成27年8月21日から8月27日、試験実施は10月3日、合格発表は10月20日であった。結果は、志願者数14名(志願倍率1.0倍)、受験者数14名、合格者数6名だった。この欠員分8名は、神戸大学入学選抜試験前期日程において補充した。

### 3.2.2. 3年次編入学試験

平成28年度3年次編入学試験は、今年度から4学科9コースと発達支援論コースを加えた10コースで実施した。募集人員は10名で、選抜方法はこれまでと変更なく、いずれのコースも、英語、専門科目、口頭試問であった。出願期間は平成27年8月21日から8月27日、試験実施は10月3日、合格発表は10月20日であった。

結果は、志願者数57名(志願倍率57倍)、受験者数53名、合格者数は10名、入学者6名(人間形成学科1名、人間行動学科0名、人間表現学科3名、人間環境学科2名、発達支援論コース0名)であった。

(社会人入試専門委員長、編入学試験専門委員会委員長 吉田圭吾)

### 3.2.3. アドミッション・オフィス入学試験

平成28年度AO入試は、例年どおり、人間行動学科及び人間環境学科で実施した。

結果は次のとおり。人間行動学科について、募集人員は12名に対し、志願者数は60名(志願倍率5.0倍)、第1次選考合格者数24名、第2次選考合格者(最終合格者)数12名、入学者数12名、また人間環境学科については、募集人員は5名に対し、志願者数は5名(志願倍率1.0倍)、第1次選考合格者数5名、第2次選考合格者数4名、最終合格者数2名、入学者数2名であった。

(入学試験委員会委員長、AO入試実施委員会委員長 青木茂樹)

## 4. 国際交流活動

### 4.1. 学術交流協定

学術交流協定を締結した大学は、フランスのリール第三大学（本研究科コンタクトパーソンは森岡正芳教授）、ドイツのドレスデン工科大学（本研究科コンタクトパーソンは近江戸伸子教授）、オーストリアのFH ヨアネウム応用科学大学（本研究科コンタクトパーソンは加藤佳子教授）、さらにゲーラツ医科大学（本研究科コンタクトパーソンは加藤佳子教授）と協定の更新を行った。

また学術交流協定を基盤として、ヴェルニス・ゲティミナス工科大学（本研究科コンタクトパーソンは小高直樹教授）およびドレスデン工科大学（本研究科コンタクトパーソンは近江戸伸子教授）とのErasmus+ プログラムに関わる協定の締結にも取り組んだ。

（国際交流委員会委員長 加藤佳子）

### 4.2. 留学生

本年度、本学部・研究科で学んだ留学生は74名で、概要（性、国籍、学年、専攻、学科、国費/私費）は別表4.1の通りである。

#### (1) 交流協定校との留学生の交換

受入：北京師範大学1名、華東師範大学2名、上海交通大学1名、オーフス大学1名、ヤゲウォ大学1名  
派遣：ロンドン大学東洋アフリカ研究学院（SOAS）1名、モスクワ教育大学1名、クイーンズランド大学1名、ソフィア大学1名

#### (2) 留学説明会の実施と来年度派遣留学生の選考

協定校への留学をより活発化させるために、部局間協定校だけではなく全学協定校への留学の促進もあわせて中心課題とし留学説明会を開催した。

留学説明会の実施：7月にプレ留学説明会を行った後、7月17日（金）に1回目の説明会を、10月29日（木）に2回目の説明会を行った。例年は後期に定例の説明会を行っていたが、語学力向上および留学の心構えの形成を支援し、計画的に留学への実現へとつなげるために今年度は7月にも説明会を開催した。国際交流委員会ワーキンググループ委員（派遣担当）から留学の意義等について、教務学生係から交換留学生制度を有する協定校の紹介と応募手続き等の事務処理に関わる説明を行った。また協定校への留学経験者と選考に合格した留学予定者により選考のための準備や留学を実現させるための心構え等、留学に関する発表が行われた。その後、小グループに分かれ留学経験者および留学予定者を囲み、留学希望者それぞれの状況に対応する懇談会を行った。第1回目には9名、第2回目には18名の参加があった。

派遣留学生選考：2月22日（月）、国際交流委員会ワーキンググループ委員（派遣担当）の協力により部局間協定校への派遣交換学生の選考が行われた。応募者は2名であり、1名のサンバーダ大学への派遣が決定した。

#### (3) 来年度の受け入れ留学生（決定分）

オーフス大学1名

#### (4) 来年度の本研究科留学生（決定分）

全学協定：ヴェネツィア大学1名、国立台湾大学1名  
国際文化学部協定校：モスクワ教育大学1名、ハンブルク大学2名  
発達科学部協定校：サンバーダ大学1名

#### (5) 留学生懇親会



7月1日（水）本学部・研究科の留学生を対象とした懇親会を開催した。45名（留学生25名，チューター2名，事務職員9名，留学生担当専門教育教員，指導教員4名，教員1名，研究科長，副研究科長2名）の参加を得て親睦を深めた。教員による音楽演奏，留学生による歌や踊りなどが行われた。

#### (6) 留学生見学旅行

10月31日（土）信楽焼き体験，宇治平等院拝観，コカコーラ京都工場見学を含むバス見学旅行を実施した。35名（留学生32名，引率教職員3名）の参加があり，日本への理解を深めた。

#### (7) 留学生オリエンテーション及びチューター説明会

4月と10月，主に新入学留学生を対象に修学，生活上の諸注意を与えた。3月末と9月末，チューターに仕事内容に関する説明と諸注意を与えた。

#### (8) 派遣留学生報告書の閲覧及び留学報告会の開催

教務学生係において，過去の交換留学生の報告書をファイルにまとめ，学生を対象に閲覧を継続している。7月25日（金）に留学生帰国報告会及び離日留学生挨拶会を行った。学生及び教職員20名が参加し，派遣留学生5名が帰国報告を行った（報告者はオース大学2名，ロンドン大学東洋アフリカ学院1名，華東師範大学1名，ナザレ大学1名）。また，コメンテーターとしてオース大学からの留学生1名，華東師範大学からの留学生2名が加わった。

#### (9) 教員研修生の研修了式及び研修報告会とお別れ会の実施

2月17日（水）ウガンダからの教員研修生の研修了式を行った。その後，中会議室で他の離日留学生も加わり，研修報告会ならびにお別れ会を行った。

#### (10) 留学生茶話会

留学生担当専門教育教員によって第4月曜日17時から18時30分まで，留学生茶話会が開催されており，以下の内容が報告された。毎回の参加者は10名程度であり，日常の悩みや疑問などを率直に語り合える場所になっている。必要な場合はチューターとの連携を図るが，ピアカウンセリングとして留学生相互のアドバイスがよい影響をもたらしている。

#### (11) 学生のための国際交流実務者会議

学生のための国際交流実務に関わる担当者の連絡会議の場として，2014年度に引き続き実務者会議を開催した。構成員は留学生担当専門教育教員，グローバル人材育成関連職員，国際交流担当教務学生係職員，研究科長，国際交流担当副研究科長，国際交流委員長および教務学生係長であった。円滑な国際交流事業の推進に一定の役割を果たした。

#### (12) 来年度に向けて

協定校との交流について，派遣と受入の両方を促進する重要性が浮き彫りとなった。具体的は次の2点に取り組む必要がある。

第一に，協定校への留学生の派遣を促進すると同時に留学生の受入環境についても整備を行う必要があることが確認された。具体的には英語プログラムの開発，奨学金，宿舍，安全確認システムの整備などが挙げられる。次に，協定校の新規開拓と共に既存の協定校との関係を活性化する必要性が確認された。特に，中国の協定校からは受け入れが中心となっている。今後は，派遣の増加に向けて学生の関心を引き出す取り組みが望まれる。

別表 4.1

		前期	後期	計
性別	女性	34	40	43
	男性	22	24	31
		56	64	74

		前期	後期	計
国籍	中国	45	56	62
	韓国	4	4	4
	イギリス	2	0	2
	キリバス	1	1	1
	キューバ	1	1	1
	デンマーク	1	0	1
	ポーランド	1	0	1
	ウガンダ	1	1	1
	バングラディッシュ	0	0	1
		56	64	74

		前期	後期	計
学年	D3	6	4	6
	D2	2	2	2
	D1	1	1	1
	M2	14	14	14
	M1	13	13	13
	特別研究生	2	2	4
	学部生 1 回生	1	1	1
	研究科研究生	7	16	17
	特別聴講生	5	2	6
	教育研修生	1	1	1
	学部研究生	4	8	9
		56	64	74

		前期	後期	計
専攻・学科	人間発達	23	29	30
	人間環境学	22	24	26
	人間形成	2	1	3
	人間行動	3	1	3
	人間表現	2	3	4
	人間環境	4	8	8
		56	64	74

		前期	後期	計
国費 / 私費	国費	5	6	6
	私費	51	58	68
		56	64	74

(国際交流委員会委員長 加藤佳子)

#### 4.3. 「英語による授業の実践 – ESD 研究」

大学のグローバル化に対応して、今後、英語で行われる授業を増やしていくことが期待されている。実態としては、必ずしも英語の授業に対するニーズが顕在化していないものの、ESD（持続可能な開発のための教育）が地球規模での実践的な学際的交流を求めるものであることから、まず、大学院に開設されたESDサブコースの授業科目のうち、ESD研究（ESD study）をすべて英語で行うこととした。

教員6名が各専門に応じて英語でレクチャーを行い、一切日本語を使わないことがルールとされた。参加院生（7名：うち1名は留学生）は、英語で質問するだけでなく、授業後のコメントも英語で記入し、最終レポートも英語で行うというフル英語の授業を実施した。教員・院生共に試行錯誤の繰り返しであるが、参加院生からは、「英語でのコミュニケーションの面白さを体感できた」「国際舞台での発表を意識することができた」との感想を得た。

夜間ということもあり、履修院生数は少なかったが、次年度は、本学カリキュラムに実装するために、全学的に本授業の存在をアピールし、履修院生の拡大とともに、英語による授業の効果・意義を広めてゆく予定である。

(人間発達専攻 松岡広路)

#### 4.4. 学生・教員の海外派遣

##### ● 交換留学

2014年7月～2015年6月	人間発達専攻(2013)	オーストラリア	クイーンズランド大学*
2014年10月～2015年6月	人間発達専攻(2014)	オーストリア	グラーツ大学*
2014年10月～2015年9月	人間表現学科(2011)	ドイツ	ハンブルク大学
2014年10月～2015年9月	人間表現学科(2011)	ドイツ	ハンブルク大学
2015年9月～2016年6月	人間表現学科(2012)	イギリス	ロンドン大学東洋アフリカ学院(SOAS)*
2015年9月～2016年6月	人間環境学科(2012)	ロシア	モスクワ教育大学
2016年2月～2016年11月	人間形成学科(2013)	オーストラリア	クイーンズランド大学*
2016年2月～2016年7月	人間環境学専攻(2015)	ブルガリア	ソフィア大学*

注：( )内は、入学年度

\*は全学協定学生交流細則に基づく派遣先

##### ● 学生の海外実習

2015年7月 [神] 人間形成(2014), 人間形成(2014), 人間形成(2014), 人間形成(2014), 人間発達(2014), [人] 人間発達専攻(2012), 人間発達専攻(2014) アメリカ合衆国 シラキュース インクルーシブ教育と新喜劇の旅スタディツアー

2015年7, 8月 [紫] 人間環境学専攻(2014), 人間環境学専攻(2014), 人間表現(2013), フィリピン マニラ サンバダ大学主催 「経済発展をめざす社会起業」プログラム

2015年9月 [紫] 人間行動(2012), 人間行動(2012), 人間行動(2013), 人間行動(2013), 韓国 ソウル エイジング論演習・卒業研究

2015年11月 [紫] 人間環境(2012), 人間環境(2014), 人間環境(2014), 人間環境(2014), 人間環境(2014), 人間環境(2014), 人間環境(2014), 人間環境(2014), [J] 人間環境(2013), 人間環境(2013), 人間環境(2013), 人間環境(2013), 人間環境(2012) フィリピン セブ フィリピン大学セブ校 学生との交流およびコミュニティ活動の実態調査プログラム

2015年12月 [J] 人間行動学専攻(2014), 人間行動学専攻(2015), 人間行動学専攻(2015), 人間行動学専攻(2015), 人間環境学専攻(2014), 人間行動(2013), 人間行動(2013), 人間環境(2012), オーストリア グラーツ Well-being スタディツアー

2016年3月 [J] 人間行動(2012), 人間発達専攻(2014), 人間発達専攻(2014), 人間発達専攻(2015), 人間発達専攻(2015), 大韓民国 忠清南道 韓国スタディツアー

注:( )内は, 入学年度

[神]は「神戸大学基金」, [人]は「人間発達環境学研究科国際交流運営資金」, [紫]は「紫陽会グローバル人材育成資金」, [J]は「JASSO」

- 学生の国際学会での発表(「神戸大学基金」「人間発達環境学研究科国際交流運営資金」「紫陽会グローバル人材育成資金」による助成分)

2015年4-5月 [人] 人間環境学専攻(2014) タイ バンコク アジア染色体学会

2015年6月 [神・人] 人間発達専攻(2015) スウェーデン マルメ 20th Annual Congress of the European College of Sport Science

2015年7月 [人] 人間発達専攻(2012) オーストラリア シドニー Pacific Early Childhood Education Research Association 16th Annual Conference

2015年10月 [神・人] 人間発達専攻(2014) ハンガリー ブタペスト TAFISA World Congress 2015

2015年11月 [人] 人間発達専攻(2014) 中国 上海 International Meeting for Autism Research 2015

2015年12月 [人] 人間環境学専攻(2015), 人間環境学専攻(2015) アメリカ合衆国 ホノルル 環太平洋国際化学会議 PACIFICHEM 2015

2015年12月 [人] 人間環境学専攻(2014), 人間環境学専攻(2015), 人間環境学専攻(2015) アメリカ合衆国 ホノルル The 2015 International Chemical Congress of Pacific Basin Societies: Pacificchem 2015

注:( )内は, 入学年度

[神]は「神戸大学基金」, [人]は「人間発達環境学研究科国際交流運営資金」, [紫]は「紫陽会グローバル人材育成資金」

- 教員, 事務職員の海外派遣(教員個人の研究活動にとじたものは含まず)

2015年8月

伊藤 篤教授: ブラジル サンパウロ大学: 交流協定締結にかかる情報収集

2015年11月

片桐恵子准教授: アイルランド ダブリン・シティ大学: 協定大学拡充を目指す調査

太田和宏准教授・奥野友理子職員: フィリピン フィリピン大学セブ校等にて学生交流, コミュニティ活動実態調査

津田英二教授: 韓国 公州教育大学校, 公州教育大学院, ナザレ大学校にて協定更新実務, 交流に関する意見交換

2015年12月

野中哲士准教授: フランス Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales 等にて協定大学拡充を目指す調査

齊藤誠一准教授・加藤佳子教授：オーストリア グラーツ大学, グラーツ医科大学, FH ヨアネウム応用科学大学にてスタディーツアー引率

PHIM RUNSINARITH 特命助教：カンボジア Royal U niversity of Phnom Penh 等にて協定大学拡充を目指す調査, 実証研究打合せ

源 利文特命助教：中国 上海交通大学にて神戸グローバルチャレンジプログラムにかかる打合せ

2016年1月

古川文美子特命助教：インドネシア ハサヌディン大学等にて神戸グローバルチャレンジプログラムの打合せ

高見和至准教授：シンガポール シンガポール国立教育大学にて新学部設立にかかる海外協定校の調査

奥山和子講師：マレーシア スルタンイドリス教育大学にて新学部設立にかかる協定校交渉

高田義弘准教授：アメリカ合衆国 アラバマ大学にて新学部設立にかかる交流事業調査

大田美佐子准教授・加藤佳子教授：ハンガリー エトヴェシュ・ロラード大学にて新学部設立にかかる協定校開拓調査

2016年2月

津田英二教授：アメリカ合衆国 Syracuse University, St.Cloud State University にて協定締結校調査, シラキュース・スタディーツアー引率

源 利文特命助教：ラオス ラオス国保健省サワンナケート県マラリアステーションにて神戸グローバルチャレンジプログラムにかかる打合せおよび視察

2016年3月

津田英二教授：韓国 公州教育大学校, 公州教育大学院, ナザレ大学校にて協定更新実務, 交流に関する意見交換

のべ18名の教員が海外に出かけ、学生の派遣先の開拓に取り組んだ。また、国際交流担当事務職員の派遣も行い、組織としての国際化の体制づくりを推進した。今後も事務職員を積極的に海外に派遣し、国際化のための体制整備を進める必要があると考える。

(国際交流委員会委員長 加藤佳子)

#### 4.5. 海外研究者の招聘

期間	名前	国名	所属	受入者
6/5-7/12	Brynmor Breese	イギリス	Plymouth University (Lecturer)	近藤徳彦
6/15-6/19	染木 史穂	アメリカ 合衆国	College of Staten Island and the Graduate Center, CUNY (Assistant Professor)	鳥居深雪
6/16-8/17	Kristjana Lopston	カナダ	University of Alberta (Reserach Assistant)	平山洋介
7/26-7/27	Nicola Gerrett	イギリス	University of Worcester (lecturer)	近藤徳彦
7/27-9/18	James Noboru Imamura	アメリカ 合衆国	University of Oregon (Professor)	伊藤真之
8/3-8/19	Daryna Dechyeva	ドイツ	Dresden University of Technology (Lecturer)	近江戸伸子
9/30-10/8	Ruth Geiersberger	ドイツ	Uber-gesetztプロジェクト	田村文生
9/30-10/8	Martina Koppelstetter	ドイツ	Uber-gesetztプロジェクト	田村文生
9/30-10/8	Masako Ohta	ドイツ	Uber-gesetztプロジェクト	田村文生
11/1-11/3	Alan Turry	アメリカ 合衆国	Nordoff- Robbins Music Therapy Center, New York University (Director)	岡崎香奈
12/15-12/18	Vathana Thun	カン ボジア	Prek Leap National College of Agriculture (President)	佐藤真行
12/15-12/18	Keosothea Nou	カン ボジア	Cambodia Development Resource Institute (Senior Researcher)	佐藤真行
12/15-12/18	Sovannarith So	カン ボジア	Mekong Institute of Cambodia (Affiliated Senior Research Fellow)	佐藤真行
12/15-12/18	Michelle Merrill	カン ボジア	Nanyang Technological University (Research Fellow)	佐藤真行
12/15-12/18	Youngho Chang	シンガ ポール	Nanyang Technological University (Assistant Professor)	佐藤真行
12/16	Worawet Suwanrada	タイ	Chulalongkorn University (Dean of College of Population Studies)	佐藤真行
12/20-12/24	文 龍洙	韓国	ソウル市立知的障 碍人福祉館 (館長)	津田英二
12/20-12/24	金 鐘敏	韓国	韓国ナザレ大学 (助教)	津田英二
1/22-1/24	Kim Hoonho	韓国	韓国教育開発院 K E D I (研究員)	渡部昭男
1/22-1/24	Yi Suyeon	韓国	国大学教育研究所 K H E I (研究員)	渡部昭男
1/22-1/24	Park Keryong	韓国	大学教育研究所 K H E I (教授)	渡部昭男
2/8-2/11	Dong Min Kim	韓国	全州大学メディカルサイエンス学部 (准教授)	岡崎香奈
2/20-2/23	Gyounghae Han	韓国	ソウル国立大学 (教授)	片桐恵子
2/20-3/5	Pascal Galvani	カナダ	The Université du Québec à Montréal (Professor)	森岡正芳
2/20-3/5	Danielle Desmarais	カナダ	The Université du Québec à Montréal (Professor)	森岡正芳
2/21-2/25	Rocky Gunung Hasudungan	インド ネシア	Statistics Indonesia of DKI Jakarta Province (Head of Statistical Analysis Section)	岡田章宏 古川文美子
2/21-2/25	Novia Budi Parwanto	インド ネシア	Institute of Statistics (Lecturer)	岡田章宏 古川文美子
3/4-3/7	林明煌	台湾	国立嘉義大学教職センター (准教授)	渡部昭男
3/9-3/11	Katy Griggs,	イギリス	Loughborough University (Postgraduate Researcher/Research Assistant)	近藤徳彦

(国際交流委員会委員長 加藤佳子)

#### 4.6. スタディツアー

##### (1) 韓国ナザレ大学及びソウル市立知的障害人福祉館のスタディツアー

2008年頃から韓国ナザレ大学、ソウル市立知的障害人福祉館との間で行っている研究・教育交流は、三者間の交流協定に基づいて毎年実施している。2015年度に実施したスタディツアーでは、韓国側の大学院生（10名）との共同研究実施を目玉とした。3日間にわたる討議によって研究計画を練り、障害のある卒業生のライフストーリーの聞き取りを行った。その他にも、ソウル市立知的障害人福祉館職員との交流、韓国文化体験など、8日間凝縮したツアーとなった。日程は以下の通りであった。2016年3月14日韓国ナザレ大学キャンパス見学・学生交流、3月15日～17日調査研究に関する討議及びインタビュー調査、3月18日ソウル市立知的障害人福祉館見学及び職員との交流、3月19日ソウル市内での文化体験。参加した学生は、博士後期課程の学生2名（学び系2名）、博士前期課程の学生4名（こころ系2名、学び系2名）、学部生1名の7名であった。

（人間発達専攻 津田英二）

##### (2) フィリピン大学セブ校学生との交流およびコミュニティ活動の実態調査プログラム

2015年11月16日から25日にかけてフィリピン共和国セブ州において学生調査交流プログラムを実施し、学部学生14名、教員1名、職員1名が参加した。2日間のフィリピン大学セブ校との交流プログラムでは、フィリピン大学の政治学専攻、マスコミ論専攻の学生らと相互の研究発表・討論、スラム地区のフィールド観察を行った。Bebut Sanchez教授（社会学）およびWeena Gera教授（政治学）の協力を得て行われた。調査では「フェアトレード生産拠点分散化」をテーマとして設定し、スラム1か所、農村4か村を訪問し、聞き取りによる情報収集を行った。実態調査に関しては現地NGOであるSPFTCの協力を得て行われた。調査結果は報告レポートとしてまとめられる。

プログラムは参加学生の国際的な視点の涵養と帰国後のさらなる勉学意欲増進に大きく寄与したと思われる。今後組織がグローバル化していくことを見据えて学生の海外交流、現地調査プログラムに職員が参加した点も有意義であった。

本プログラムは日本学支援機構JASSOによる助成金、および同窓会紫陽会グローバル人材育成基金による助成金を得て行われた。

（人間環境学専攻 太田和宏）

##### (3) Well-being スタディツアー

－オーストリアグラーツ大学、グラーツ医科大学とFH応用科学大学－

2013年より継続的にオーストリアのグラーツ大学やグラーツ医科大学に学生を派遣し、学術交流を深めている。本年度は、実践的な健康科学を専門領域とするFHヨアネウム応用科学大学とも学術協定を締結し、Well-being スタディツアーのフィールドとして交流を行った。12月11日から12月19日に神戸大学の教員4名と学生8名がFH応用科学大学、グラーツ大学、グラーツ医科大学を訪問した。そして、異文化交流、Well-beingに関するワークショップと研究発表および調査を行った。6月22日より合計8回の事前学習を行い、ワークショップでのプレゼンテーションや調査の準備を行った。帰国後は、現地で行った調査データと国内のデータとを合わせて分析を行い、2016年度に開催される国際学会での発表の準備を行った。このプログラムは日本学生支援機構JASSOの支援を受けて実施された。

（人間発達専攻 加藤佳子）

##### (4) シラキュース大学・学校区スタディツアー

2016年2月3日から2月11日にかけて、アメリカ・シラキュース大学・学校区においてスタディツアーを行った。参加者は、教員2名、大学院生5名、学部生3名であった（ほかに、日本学術振興会特別研究員1名が自身の研究のために参加した）。目的は、アメリカにおけるインクルーシブ教育の実際について、理論・

実践両面から学ぶことであった。シラキュース学校区で、インクルーシブ教育を行っている公立幼稚園、私立幼稚園、私立小学校を見学した。その際、見学するだけではなく、私立小学校においては、子どもたちに対して、日本の遊びに関する授業を実施し、子ども理解を深める取り組みを行った。また、同時にシラキュース大学の障害センターを3つ訪問し、理論的な見地からインクルーシブ教育について学びを深めた。さらに、赤木の受け入れ教員でもある S. Dotger 准教授のゼミにおいて、日米の学校教育について発表を行い、院生たちと議論を行い、日米の学校教育の違いについて理解を深めた。

(人間発達専攻 赤木和重)

#### (5) サンバーダ大学主催 SEED 2015 への学生派遣

研究科提携校であるフィリピンのサンバーダ大学が主催した国際学生セミナープログラム「経済発展の為の社会事業」SEED 2015 年に修士院生 2 名、学部生 1 名の 3 名を派遣した。プログラムは 7 月 27 日から 8 月 9 日までの 2 週間、キャンパス内でのセミナーおよび山岳州コミュニティでのフィールドワークよりなる企画であった。東南アジア諸国および欧州からの学生約 60 名が参加した。少人数のグループに分かれてのフィールドワークおよび討論、プレゼンテーション作業を伴い、英語による密なコミュニケーションが要求される。各々の積極的な関与と貢献も求められるため参加学生にとっては大きな刺激を得る機会となった。なお、派遣学生 3 名は同窓会紫陽会グローバル人材育成基金より助成を受けた。

(人間環境学専攻 太田和宏)



## 5. 教育

### 5.1. 教育課程

#### 5.1.1. 今年度の特長

平成 27 年度に新たに開始した取組，特記すべき事項等は以下のとおりである。

##### (1) 平成 27 年度シラバス内容検討

全学教務委員会の要請により，学部・研究科でのシラバスの内容検討を行った。

##### (2) スチューデントアシスタント (SA)・ティーチングアシスタント (TA)・シニア・ティーチング・アシスタント (STA)

全学の TA 制度多様化への見直しに伴い，SA・TA・STA のあり方を検討した。

学内ワークスタディについて，オープンキャンパスに向けての SA の申請を行った。

##### (3) CP の見直しとカリキュラムマップの改正

全学共通授業科目（新設：基礎教養科目，総合教養科目，外国語，高度教養科目）の見直しに伴い，カリキュラム・ポリシーおよびカリキュラムマップを改正した。カリキュラムマップを点検し，授業科目名等を訂正した。

##### (4) 学生の海外活動に関する授業科目の単位認定

学部学生による海外での研修・実習などの諸活動を単位として認定するために，以下の四つの科目を開設し，そのために学部規則を一部改正した。

##### 1) 海外実習 内訳 海外実習 A（研修時間が 30 時間以上，1 単位）／海外実習 B（研修時間が 60 時間以上，2 単位）

神戸大学または神戸大学発達科学部と交流実績のある海外の大学において，本学部と当該大学が共同で実施する短期留学プログラムに参加した学生が申請することができる。

本年度は，海外実習 B（2 単位）について 11 名の学生から申請がなされ，教授会にて審議の上，その単位がみとめられた。

##### 2) 外国語実習（海外における実習時間が 30 時間以上，2 週間以上の集中講義，1 単位）

神戸大学または神戸大学発達科学部と交流実績のある海外の大学において実施されている短期語学実習に参加した学生が申請することができる。

本年度は，外国語実習について 2 名の学生から申請がなされ，教授会にて審議の上，その単位がみとめられた。

##### 3) 海外インターンシップ実習（海外における実習時間が 30 時間以上，1 単位）

海外の企業団体等が神戸大学または神戸大学発達科学部と協定等を締結しインターンシップを実施する場合，当該インターンシップに参加した学生が申請することができる。

本年度は，海外インターンシップ実習について学生から申請はなかった。

##### 4) 本年度は，外国の大学又は短期大学において履修した授業科目の単位認定は，4 名あった。

##### (5) ナンバリング

全学科のカリキュラムマップに沿って，ナンバリングを行い，学生の履修体系を整理する。ナンバリングのルール作りを行った。ルールは以下のとおりに決定した。

#### 発達科学部

1 桁目	発達科学部 D
2 桁目	学部番号 1

3,4 桁目	コース別区分 HD (学部共通) DE (形成学科共通), DP (心理発達論), DC (子ども発達論), DK (教育科学論), DL (学校教育論) DB (行動学科), DH (健康発達論), DD (行動発達論), DA (身体行動論) DX (表現学科) ES (環境学科共通), EN (自然), EM (数理), EL (生活), EC (社会) DS (支援論共通)
5 桁目	配当学年 1,2,3,4
6, 7 桁目	開講時期 前期開講 01, 後期開講 02, 通年 03, 卒業研究 99

人間発達環境学研究科

1 桁目	人間発達環境学研究科 D
2 桁目	大学院番号 修士 2, 博士 3
3,4 桁目	コース別区分 HD (研究科共通), DE (専攻共通), DL (学び系), DP (こころ系), DX (表現系), DB (からだ系) ES (専攻共通), EN (自然), EM (数理), EL (生活), EC (社会)
5 桁目	配当学年 修士 6,7 博士 8
6, 7 桁目	開講時期 01: 1Q 02: 2Q 03: 1Q+2Q 04: 3Q 05: 4Q 06: 3Q+4Q 07: 1Q+2Q+3Q+4Q 99: special (特別研究など)

(6) 博士論文等に関する各種規程の改正

学位論文の指導及び審査体制の厳格化を図り、2回のチェックソフトの利用の促進を図った。学位論文の公開に関する要項を「博士論文のインターネット公表大学院生・指導教員のためのガイド」として明文化し、公開について明確化した。

(7) 英語外部試験

平成 27 年度の 3 年生対象の英語外部試験 TOEIC-IP の受験状況は 288 人中 57 名が受験した。

(8) 初年次セミナー

28 年度から開講される初年次セミナー (1 年生必修科目) について決定した。前半 4 回は、教務、学生生活、キャリア形成、留学についての内容説明、後半 4 回は、発達科学部で学ぶための理念、基礎力をつけることを目的とした講義内容とした。

(9) 大学教育改革に伴う以下について検討した。

- ・神戸大学における成績評価方針及び GPA 運用方針を明らかにした。
- ・成績不振学生の定義と、指導方針を明らかにした。
- ・総合教養科目 卒業要件除外科目を設定した。
- ・クォーター制について学生説明会を 1 月 8 日 (金) に行った。
- ・全学的な教育改革の取り組みに合わせて、国際教養教育院開講科目 (新: 基礎教養科目, 総合教養科目など), 全学共通授業科目および専門科目の履修の時間割について検討した。
- ・高度教養科目の提供について検討した。
- ・平成 28 年度入学者について新たなカリキュラム編成による履修要件について調整した。
- ・平成 28 年度教員免許状更新講習の開設を申請した。28 年度 8 月に 6 科目が開講される予定である。

(10) 博物館学芸員専門委員会

当委員会への出席と意見交換を行った。

(教務委員会委員長 近江戸伸子)

## 5.1.2. 学部, 研究科共通科目

### (1) 発達科学への招待

#### 1. 授業計画と実際

新入生対象の学部共通必修科目「発達科学への招待」は平成27年度で11年目を迎えた。本講義は、学部導入教育と位置づけられ、新入生が本学部の特色を把握するとともに、高校までと大学との勉学の違いについて考え、研究に対する興味・関心を高めることを主な目的としている。同時に、アクティブラーニングとして学生主体の討論会を毎年実施し、学生生活における自らの学びの可能性について共に考える機会としている。講義はオムニバス形式で、ゲスト講師を含む様々な専門分野の教員による講義を行った。初回の講演では、澤教授が異文化理解について講演し、本学部の特色を活かした学びのあり方について提言した。2回目以降は、全体を発達科学研究の「実践性」・「手法」・「学際性」の3つのモジュールに分け、各教員は担当するモジュールの観点から自身の研究への取り組みを紹介した(表1.2)。このうち、モジュールAでは、専門分野が異なる4教員の「実践的研究」を「フィールドワーク」を共通項としてそれぞれ講義した後、まとめとなる合同討論会を開催した。今年度は新たな担当教員として高田准教授、谷准教授が加わり、従来より担当してきた松岡教授と吉田教授とともに各授業を振り返り、それぞれの「実践性」の統合と「フィールド研究」への理解の深化を試みた。

モジュールCの「発達科学研究と学際性」では、田畑教授、渡部教授とともに、今年度より、新たに生物学の立場から蘆田准教授が授業担当に加わった。

最終回に、アクティブラーニングとして、学生が運営するシンポジウム形式の総合討論会を開催した。今年度、学生たちが取り上げたテーマは、「発達科学部とは - その課題と可能性 -」であった。学生の立場から発達科学部と国際文化学部との統合問題について討論することを目的とした。4名のシンポジストの学生が「教育学部から発達科学部へ変わった意味 - 発達科学部とは何学部? -」(環境学科), 「発達科学部で学んだことが自分たち、または社会にどのような影響を与えるか」(表現学科), 「4学科の観点から見る『こどもの発達』 - 4学科融合の意義を考える -」(行動学科), 「発達科学部の良さをどう残していくか」(表現学科)の4題を話題提供した。国際文化学部の教員や学生数名も参観する中、司会者や板書係、マイク係らの協力により、大講義室で、総勢300余名の履修生が、新学部をよりよい学部とするために何が必要かについて学生の立場から活発に討論を行った。最後はレポート提出により各自が本講義での学びをそれぞれに総括した。

表1 2014年度「発達科学への招待」授業担当者の所属・専門分野と講義のテーマ

ミニ講演「発達科学部で学ぶとは? - 繋がる力・繋げる力 -」

澤宗則(人間環境学科 社会環境論コース 地域社会論)

モジュールA 発達科学研究の実践性

「ESDの課題と展望」松岡広路(発達支援論コース 社会教育・生涯学習論)

「スクールカウンセリングの理論と実際」吉田圭吾(人間形成学科 心理発達論コース 臨床心理学)

「ライフステージに応じた身体づくり 運動・健康・糖尿病・認知症」高田義弘(人間行動学科 身体行動論コース 運動生理学)

「民族音楽学におけるフィールドワーク」谷 正人(人間表現学科 表現文化論コース・人間表現論コース 民族音楽学)

[合同討論]モジュールAを振り返って(吉田, 松岡, 高田, 谷)

モジュールB 発達科学研究の手法

「ナラティブ・アプローチ」目黒 強(人間形成学科 子ども発達論コース・学校教育論コース 児童文学)

「実験・調査結果に客観性を」阪本雄二(人間環境学科 数理情報環境論コース 数理統計学)

「科学技術の進歩をどう考えるか ~植物科学を題材にして~」蘆田弘樹(人間環境学科 自然環境論コース 生物学・代謝制御学)

## モジュール C 発達科学研究の学際性

「人間発達環境学への志向」 渡部昭男（人間形成学科 教育科学論コース・学校教育論コース 教育行政学）  
 「学際性とメディア論 環境問題を素材にして」 田畑暁生（人間表現学科 表現文化論コース 社会情報学）  
 「茶園の窒素溶脱問題の食環境学的アプローチ」 白杉直子（人間環境学科 生活環境論コース 食環境学）  
 「学際性について スーパーコンピュータ『京』が仲介する生物学と物理学，化学，数学の融合を例に」 江口至洋（理化学研究所（神戸研究所） HPCI（High Performance Computing Infrastructure）計算生命科学推進プログラム副プログラムディレクター）

表 2 2014 年度「発達科学への招待」授業スケジュール

前期金曜日 1 限： 新入生と再履修生計 315 名の学籍番号末尾の数字により奇数クラスと偶数クラスに分けた。ガイダンスと 2 回の討論会は講義室にて合同で授業を行った。

回	月日	担当者（敬称略）【 】内は教室	
1.	4/10	ガイダンス・ミニ講演 澤【B202】	
		奇数クラス【F256】	偶数クラス【F264】
		モジュール A	モジュール A
2.	4/17	松岡	吉田
3.	4/24	吉田	高田
4.	5/1	谷	松岡
5.	5/8	高田	谷
6.	5/22	討論（松岡，吉田，高田，谷）【B202】	
		モジュール B	モジュール B
7.	5/29	目黒	阪本
8.	6/5	蘆田	目黒
9.	6/12	阪本	蘆田
		モジュール C	モジュール C
10.	6/19	田畑	江口
11.	6/26	江口	田畑
12.	7/3	白杉	渡部
13.	7/10	渡部	白杉
14.	7/17	総合討論準備【F256】	総合討論準備【F264】
15.	7/24	総合討論【B202】	

## 2. 今年度改善・更新した点

前年度同様、本学教務情報システム「うりぼーネットの掲示板」による授業に関する情報伝達を徹底した。主な伝達事項は以下の 5 件であった。① 一昨年度、発刊したテキスト「発達科学への招待 講義ノート」（本運営委員会編，かもがわ出版，2013 年）の活用方法，② 情報収集を身につける一つの機会として，本学の各附属図書館にて開催される文献検索技術の講習会「情報の探し方ガイダンス」のスケジュールの案内と，CiNii Articles 等の学外アクセスによる文献の無料ダウンロードの活用方法，③ 阪本准教授の「統計学」の講義内容を文章で再現した PDF ファイルの講義後の掲示，④ シンポジウム準備の連絡と呼びかけ，⑤ 課題のレポート要件。

新たに工夫を試みたのは，(1) と (2) であった。

(1) 「うりぼーネットの掲示板」については，各履修生が自らアクセスして初めて重要な情報が得られるようにすることで，最終回の学生主体のシンポジウムに向けて，授業への参加意識を高めてもらう目的もあった。しかしながら，昨年度は意図に反して，学科毎に学生が LINE で情報を回していた。一部学生の善意で

流される LINE の情報のみに頼る履修生は、すべての情報を読めていない可能性もあったため、今年度は情報源を各自で確認することの重要性を伝えた。

(2) 任期等で従来の担当者が数名交代した。所属学科のバランスに配慮して、新しい担当者に依頼した。

### 3. 今後の課題

平成 27 年度の本講義に対する「授業評価アンケート」の回答率は前年度よりやや回復し、26%であった(平成 27 年度：12%，26 年度：24%)。したがって、母数は 83 名と全履修生(315 名)の約 1/4 であったが、授業が「どちらかといえば有益であった」が 40%、「有益であった」が 29%であった。学生の意見は今後の改善点の提案が多くを占めた。「明確なルール(遅刻の徹底、出席日数および欠席に対する基準の明確化)作成の深い配慮があり、誰もがこの授業を受ける限り、大学への入り口に立てるという授業であった。」と厳しい出欠管理を評価する声があったのは初めてのことであった。討論会については、「モジュール A の討論会が勉強になった。モジュール B・C でも討論会があれば大学での学問に対する興味をもっと増すと考えられる。」や「(学生主体の)シンポジウム準備を講義室で約 20 名の大きなグループで話し合うのが難しかった。」の意見もあった。

平成 29 年度発足予定の新学部では、これまで本学部が蓄積・発展させてきた「フィールドワーク」に力を入れた授業科目が必修科目にも含まれ、増える予定である。本講義では、モジュール A の「発達科学研究の実践性」において、異なる専門分野の教員の講義によるなど「フィールドワーク」を通じた実践的研究の紹介や、担当教員らによるモジュール A のまとめの討論会を通じて、「フィールドワーク」から得られるデータの特性や、データを得るうえで配慮すべき点や研究者側の悩み・問題点などを学生は学び取ってきた。また、近年、アクティブラーニングが重視されるようになったが、本講義では履修生が 300 余名の大人数にも関わらず、毎年、学生主体の活発な討論会を開いてきた。新学部における教育体制づくりに、本講義が蓄積してきたノウハウや得られた成果をいかに活かし、発展させていくかが今後の課題と考える。

(「発達科学への招待」運営委員会委員長 白杉直子)

### (2) ヒューマン・コミュニティ創成研究

本年度は、「発達と環境の相互性」に焦点を当て、学生の主体的な学習、及び多領域の学生間の意見交流に焦点を置いて取り組んだ。「環境とは何か」「発達とは何か」といった教員からの発題に基づき、受講者各人の専門領域との重なり合いを意識しながら、討議を進めていった。討議した内容のエッセンスを学生企画プログラムとして結実させることを目指したが、時間切れのためにプログラム計画策定までで終了となった。コーディネイターは野中准教授、岩佐准教授、伊藤真之教授、津田が務めた。

(ヒューマン・コミュニティ創成研究世話人 津田英二)

## 5.1.3 教職教育

### (1) 教育実習

教育実習の履修者(単位認定者)数は幼稚園 14(14)、小学校 50(50)、中等教育学校 26(24)、中学校 14(14)、高等学校 34(34)、特別支援学校 12(12)であった。教科別にみると、国語 6、数学 11、英語 3、理科 25、社会 10、保健体育 8、音楽 9、家庭 1、美術 1 であった(※中高一貫高で実習をしている数名は中学校に含む)。平成 28 年 2 月 22 日に附属校園との教育実習反省会を開催した。以下のような事柄について意見交換を行った。

- 幼稚園、小学校、中学、高校、特別支援学校の 5 校について、28 年度の附属学校の教育実習関連のスケジュールの調整を行った。
- 成績評価法の確認を行った。
- 教育実習に利用する資料、消耗品、備品の取り扱いについて協議し、今後の課題とした。
- 教育実習に関連して細かな注意点を守れない学生について、今後の指導方針を確認した。
- 実習校生徒の個人情報の管理について意見交換した。

- 附属校と発達科学部の密な情報交換による連携を図る重要性について確認した。

平成 28 年 3 月 29 日に附属中等教育学校との教職実践演習（中・高）の反省会を鶴甲第 1 キャンパスで開催したものに参加した。以下のような事柄について意見交換をおこなった。

- 履修学生の人数に合わせて教室は設定してほしい。授業環境（寒さ）について改善の余地がある。
- レポートのできの悪いものは、フィードバックしてもらうようにした。

## (2) 教員免許取得状況

今年度の教員免許取得は表 1（学部）及び表 2（大学院）のようであった。

表 1 平成 27 年度卒業生の教員免許取得状況

区 分	幼稚園	特別支援 学校	小学校	中学校						
				理科	家庭	社会	数学	音楽	美術	保健体育
計	24	12	37	11	1	9	11	11	1	4
高等学校										
区 分	理科	家庭	地理歴史	公民	数学	音楽	美術	保健体育		
計	19	2	10	7	18	15	2	6		

表 2 平成 27 年度大学院修了生の教員免許取得状況

区 分	幼稚園	特別支援 学校	小学校	中学校						
				理科	家庭	社会	数学	音楽	美術	保健体育
計	0	0	8	9	1	0	4	2	1	1
高等学校										
区 分	理科	家庭	地理歴史	公民	数学	音楽	美術	保健体育		
計	10	1	0	0	5	2	1	1		

## (2) 教職実践演習

本年度の教職実践演習の授業スケジュールは表 3 のとおりであった。

表 3 平成 27 年度 幼小「教職実践演習」授業スケジュール

回・セッション	日 程	テーマ	担当教員と人数	授業構成案
1	10月2日 5限	オリエンテーションとグループ編成	学部教員	
2・3 I	10月23日 5・6限*** 2コマ続き	教職の使命感や責任感、教育的愛情等	附属小学校, 1名	1h:2h:講話, グループディスカッション等** ※感想・レポートの提出
4・5 II	11月6日 5・6限*** 2コマ続き	社会性や対人関係能力	附属小学校, 1名	1h:2h:講話, グループディスカッション等** ※感想・レポートの提出
6～9 III	11月27日 5限 6限 12月4日 5・6限*** 2コマ続き	幼児理解, 学級経営等 保育内容等の指導力 まとめ	附属幼稚園, 1名	1h:2h:3h:4h:講話, グループディスカッション等** ※感想・レポートの提出

10・11 Ⅲ	12月11日 5・6限*** 2コマ続き	特別支援教育について	附属特支学校, 2名	演習等** 「動きやすい服装で（スカートは不可）」 ※感想・レポートの提出
12～14 Ⅳ	1月22日 5・6限*** 2コマ続き 1月29日5限	児童理解, 学級経営等 教科内容等の指導力 まとめ	附属小学校, 1名	1h:2h:3h:講話, グループディスカッション等** ※感想・レポートの提出
15	2月5日 5限	「まとめレポート」に基づく 総括ディスカッション	学部教員	※感想・レポート等の集積による省察

10月30日, 11月13日, 11月20日 は休講

#### 5.1.4. 博物館学芸員資格

博物館学芸員資格専門委員会は, 発達科学部の学芸員養成課程における博物館実習の運営を行っている。平成27年度の主な活動は4回の委員会, 博物館実習の説明会・学内実習運営であった。

##### 1) 平成27年度博物館実習説明会と各実習の実施

- ①全体事前指導 (7月10日): 3年生を対象として, 博物館実習全体のカリキュラムについての説明を行った。
- ②見学実習 (夏期): 3年生を対象として, 博物館・美術館・科学館等での見学実習を実施した。
- ③学内施設「あーち」における本実習 (9月22日～25日, 29日～10月1日): 学内施設「あーち」において, 講師に脇谷紘先生 (版画家・舞台美術家) をお招きし, テーマ「ザリガニとヤドカリ」のもとに, 社会福祉法人たんぽぽとの連携で実施した。(履修者数11名)
- ④全体・館園事後指導 (11月13日): 4年生を対象として, 博物館実習全体の総括を行った。
- ⑤館園実習前事前指導 (1月22日): 3年生を対象として, 学外実習先の説明ならびに館園実習に向けての諸注意を行った。

##### 2) 平成26年度の博物館実習単位認定: 4年生12名に対して博物館実習の単位認定を行った。

##### 3) 今後の課題

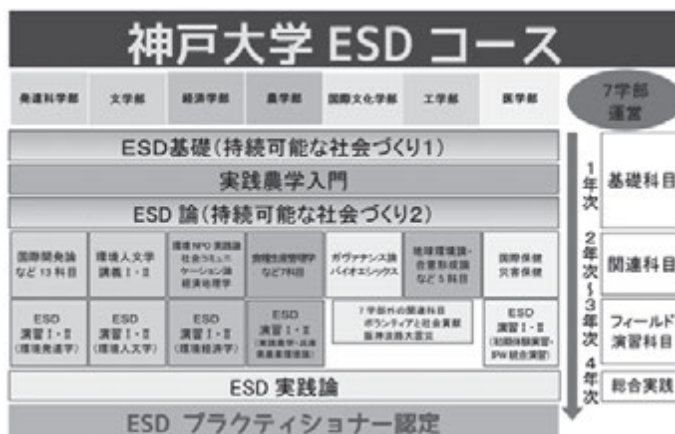
- ①国際文化学部との統合による新学部の設置に向けての, 学芸員養成課程の統合・改変が課題である。1月27日には本委員会の津田英二委員と国際文化学部の吉田典子先生との間で実務者レベルでの情報交換が行われ, 統合への作業段階の確認が行われた。また, 平成17年度より開始した人間発達環境学研究科附属施設「あーち」における学内実習は, 当初より学内外の教員や講師の協力を得ることによって, 自然科学系・芸術系・人文科学系の各分野にわたる多様な実習プログラムを展開しており, この実績を新学部設立においても活かし, より発展的な博物館実習プログラムにつなげる必要がある。
- ②昨今の就職活動時期の変更により, 館園実習と就職活動が重なることによる実習の欠席が散見されるようになった。就職活動は館園実習の欠席理由とならない旨事前に申し伝えているものの, 実際にはどちらも将来のキャリアを左右する事象であり, 簡単には判断できない選択を学生に迫る事態となっている。解決策として, 学芸員資格取得に関するカリキュラムを現状の3～4年生向けから, 2～3年生向けに1年前倒しする案がある。この案は, 国際文化学部との統合において両学部のカリキュラムの親和性を高めることにもつながるため, 今後前向きに検討すべき課題である。

(博物館学芸員資格専門委員会委員長 高見泰興)

#### 5.1.5. ESD サブコース

ESD (Education for Sustainable Development= 持続可能な開発のための教育) をテーマとするこのコー

スは、学部を超えた領域横断型のコースとして、2008年度より開講している。2015年度より授業運営を担うESD教育部会が国際教養教育院に設置された。また、基礎科目であるESD論が教養原論科目となった。



(1) 履修状況

2015年度の履修者は下表のとおりである。ESDプラクティショナー認証者は、発達科学部・経済学部から8名、累計45名となった。

(2) 授業の実施概要

前期ESD基礎は、例年通り履修希望者が多く、9学部319名からの履修希望あったが、抽選により定員通り9学部150名で実施した。後期のESD論では、貧困・アスベスト・ハンセン病問題等の多様な社会課題の講義と多様なフィールド・ワークへの参加体験を組み合わせると実施した。特に今年度からは、例年実施しているハンセン療養所でのボランティア・スタディ・ツアー等に加えて、ESD推進ネットひょうご神戸の協力を得て、登録された県内の様々な団体が企画実施するフィールド・ワークへの参加(ESDスタディ・ツアー)を加えることが出来、多様な学びに繋がるフィールドを確保することが出来た。ESD演習(環境発達学)では、南あわじ市の湊漁業協同組合の協力を得て、漁業者の後継問題に取り組んだ。

授業科目区分	授業科目名	受講学生数 (2015年)
教養科目	ESD 基礎 (持続可能な社会づくり 1)	150
	実践農学入門	50
	ESD 論 (持続可能な社会づくり 2)	57
フィールド演習科目	ESD 演習 I (環境発達学)	3
	ESD 演習 I (環境人文学)	2
	ESD 演習 I (環境経済学)	12
	ESD 演習 I (兵庫県農業環境論)	30
	ESD 演習 I (初期体験実習)	162
	ESD 演習 II (環境発達学)	3
	ESD 演習 II (環境人文学)	2
	ESD 演習 II (環境経済学)	10
	ESD 演習 II (実践農学)	23
	ESD 演習 II (IPW 統合演習)	152

(ESD コース専門委員会委員 高尾千秋)

5.1.6 ゲストスピーカーおよびティーチング・アシスタント

(1) ゲストスピーカー

授業科目の内容をより充実できるよう、担当教員の企画主体で1 Semester 15回の授業中に1回ないし2回程程度の外部からのゲストスピーカーを登用している。平成27年度は、前期35件、後期39件の計74件が実施された。提出された実施報告書の点検を通じて、受講学生、招聘した講師(ゲスト)、担当教員のいずれからも良好な評価が得られており、高い教育効果を生んだ。

(2) ティーチング・アシスタント (TA)

優秀な大学院学生に対し、教育的配慮の元に教育補助業務を行わせ、学部教育におけるきめ細かい指導の



実現や大学院学生が将来教員・研究者になるためのトレーニングの機会を提供し、これに対する手当支給により、大学院学生の処遇の改善の一助とするためにティーチング・アシスタント（TA）制度を設けている。実施報告書（学生用・教員用）からは、担当教員、TA 学生のどちらからも高評価が得られている。

平成 27 年度配分額は、約 530 万円（5,309,800 円）で、前期 105 名（2287 時間）、後期 87 名（1971 時間）、計 192 名（総時間数 4258 時間）の TA を雇用した。

（教務委員会委員長 近江戸伸子）

### 5.1.7. グローバル人材育成推進事業

2012 年度後半に採択されたグローバル人材育成推進事業は、その事業をとおして、国際社会の持続可能な発展を可能にする「問題発見型リーダーシップ」を発揮できるグローバル人材の育成を目標としている。発達科学部では、国際的な視野で、開発・人権・貧困・平和・福祉・倫理・健康等に関わるグローバルな諸問題を発見したうえでグローバルな協働体制を先導する力量をもち、かつ日本社会に対するアイデンティティを有する人材、具体的には、グローバルな視点で課題をとらえ、種々の活動を介して協働的・主体的な学びを組織できる教育力を有し、異文化を尊重するマインドを持つ教育者・ファシリテーター等の育成をめざしている。

2015 年度は年度当初から取り組む 3 年目となり、国際交流サポートルーム（COTIE:Communication Office toward International Exchange）における英語力を含めた国際コミュニケーションのスキルアップ・留学への動機づけの取り組みをはじめとして、海外へのスタディツアー、学術 WEEKS での海外研究者の招聘、学部共通科目「異文化理解」（グローバル専門科目）の開講など 1 年間を通じた取り組みをより活発に展開することができた。

以下に 2015 年度の国際交流サポートルームの活動を列記する。

① 2015 年 4 月より 2016 年 3 月末まで（通年の活動）

「オンラインディスカッションセミナー定期開催」 週 1～4 回（月・水・金曜日中心）、1 回 45 分。昼休み時間に、発達の学部生・院生を中心に科目履修生、教職員を交えて自由参加で開催。他学部（経済学部・法学部・工学部・国際文化学部）の学生の参加事例あり。2015 年度に実施したセミナーは約 100 回。参加学生数は毎回平均 1～3 名程度以上、推定延べ約 200 以上。

② 2015 年 4 月より 2016 年 3 月末まで（通年の活動）

アメリカ国籍と中国国籍をもつ大学院生 2 人を TA として採用。週 6-8 時間をベースに発達の学生に対して、上記オンラインセミナー学習中の発音・文法の口頭表現に関わるアドバイスを提供。また、学生からリクエストがある都度、海外インターンシップに応募する際の、応募書類添削指導、英語面接の対策指導を行った。

③ 2015 年 4 月 10 日

神戸大学へのグラーツ大学からの交換留学生を迎え、日本書道文化の紹介を兼ねたウエルカムイベントを開催。日本人学生と留学生の交流会を行った。（参加者留学生 5 名、日本人学生 6 名）

④ 2015 年 5 月 18 日

「交換留学希望者 座談会」

全学募集の大学間協定に基づく交換留学を志望する学生を対象として、実際に 2014 年に応募した学生との座談会を行い、交換留学の選考プロセスに対する理解を深めた。

⑤ 2015 年 5 月 8 日～7 月

TOEIC730 点対策講座（毎週金曜日 10 週間集中オンラインセミナー）（1 回生を中心に 6 名が参加）

⑥ 2015 年 4 月

TOEIC オンライン模試テスト、希望者への配信開始（最終 20 名分配信）

⑦ 2015 年 4 月

対象学生 10 名の英語関連活動モニタリング開始（TA によるトークインタビュー活動）

3 回生学生のクイーンズランド大学への交換留学応募活動の支援開始

- ⑧ 2015 年（通年の活動）  
神戸大学アイセック委員会からの要請により海外インターンシップ事前研修として英語力向上プログラムを提供（オンライン英会話の無料体験レッスン）
- ⑨ 2015 年（通年の活動）  
アメリカ人 TA による，マスター，ドクター以上の学生への論文（口頭発表）アドバイス（毎週水曜・依頼ベース）
- ⑩ 2015 年 7 月 5 日  
「海外インターンシップ事前研修（日本文化理解＝言語領域・書道文化）講座」  
神戸大学アイセック委員会からの要請によりアイセックの海外インターンシップに実際に参加する神戸大学の学生が，現地で日本人としての文化や伝統を海外で紹介し，世界中の人々と互いの国の文化や歴史（言語領域）を双方向に理解し合うためのコミュニケーションツールを提供。  
書道に関する活動を行うと同時に，英語によるプレゼンテーション訓練を実施。
- ⑪ 2015 年 7 月 30, 31 日  
「英語プレゼンテーション講座（2 日間連続 12 時間集中講座）」  
アルク教育社のネイティブ講師による中級レベルプレゼンテーション実習 院生中心に 8 名参加。
- ⑫ 2015 年 8 月 7 日  
「英語スピーキング講座（6 時間集中講座）」  
アルク教育社のネイティブ講師による初級～中級レベルスピーキング実習  
TOEIC 600 以上保持者中心に 8 名参加
- ⑬ 2015 年 8 月 9 日  
「第 4 回全国学生英語プレゼンテーション大会」（文部科学省・外務省・読売新聞社後援 神田英語学院主催）への応募支援（2014 年 発達科学部学生 個人出場 2 名，入賞 1 名の実績）  
2015 年は，発達科学部形成学科 3 回生，経済学部経済学科 3 回生，発達科学部人間行動学科 2 回生で結成した 3 名グループで参加。COTIE では，予選応募作品の開発支援を行う。  
（結果 全 600 応募組数中上位 50 位に入賞）
- ⑭ 2015 年 10 月～2016 年 1 月  
QQ イングリッシュによる英語スピーキング技能向上のための講座「Let's make a speech」  
毎週金曜日 1 回 2 時間×10 週（前半 5 週 後半 5 週 メンバー一部入れ替え）  
中級以上の英語力（TOEIC600 以上対象）を持つ学生，院生，教員を中心に延べ人数 14 名に対して，オフライン（実講師）によるトレーニングを供給した。  
参加者の数名がトレーニング後の短期，長期留学を達成。
- ⑮ 2015 年 11 月  
「英語プレゼンテーション講座（2 日間連続 12 時間集中講座）」  
2015 年 7 月に実施し，学生に好評だった講座を，講師とターゲット学生を変えて再度実施。  
アルク教育社のネイティブ講師による中級レベルプレゼンテーション実習 学部生中心に 8 名参加
- ⑯ 2015 年 11 月～2016 年 3 月  
COTIE スタッフによる発達科学部の部局内留学コースの新規開発プロジェクトを立ち上げ。  
大学の機能強化改革に伴う学部改組後の国際人間科学部（仮称）での必修プログラムとなるグローバル・スタディーズ・プログラム（GSP）を構想するにあたり，そのパイロットケースの担当者として新たに非常勤職員を 1 名採用するとともに，外部業者を通じて，カナダ ウィニペグ大学およびブロック大学との語学研修プログラムを開拓し，学生への告知・募集活動を行った。新たに採用した非常勤職員は，2016 年 4 月より新学部設置準備室のもとに設けられた GSP office に異動し，プロジェクトの担当を継続している。

⑰ 2016年2月

「海外インターンシップ事前研修（日本文化理解＝言語領域・書道文化）講座」

⑩と同じく神戸大学アイセック委員会の要請により、アイセックの海外インターンシップに実際に参加する神戸大学生が、現地で日本人としての文化や伝統を海外で紹介し、世界中の人々と互いの国の文化や歴史（言語領域）を双方向に理解し合うためのコミュニケーションツールを提供。

日本の伝統行事ひな祭りを英語で外国人に紹介する方法を学び、日本の伝統芸術の雛飾りを折り紙で制作する訓練を受講。

⑱ 2016年3月2日および3日

「留学準備・英語試験対策講座」

アルク教育社により、留学希望者へのカウンセリングセッションの実施と、TOEFL試験の仕組みを理解するための講座を、学生、職員を対象に実施。

（神戸大学グローバル教育推進委員会委員 青木 茂樹）

## 5.2. 各学科等の教育

### 5.2.1 人間形成学科

#### ①運営

人間形成学科は、心理発達論コース、子ども発達論コース、教育科学論コース、学校教育論コースにより構成されている。日常的な運営は、主にコース単位で実施しているコース会議、ないしはコース運営会議で行っている。学科全体の予算、教育、入試等の議案やコース間の役割分担等については、学科長とコース主任による学科運営会議において適宜連絡・協議し、調整を図りながら運営してきた。

#### ②予算

予算は大学院の各専攻講座に配分されている。よって、学部独自の予算はない。大学院と学部のコースが対応しているところでは、一括して予算執行されている。ただし、大学院との対応がない学校教育論コースについては、子ども発達論コースと教育科学論コースを構成する教員組織への予算配分から共通経費を捻出し、共同の運営とした。その他、実験・実習経費を得ている。なお、学科共通経費は計上していない。

#### ③入試

一般入試、社会人入試、第3年次編入学試験とともに例年通り行われ、実施運営においてはとくに問題はなかった。例年同様に、次年度以降の第3年次編入学試験及び社会人入試の実施に関する課題が議論されたが、全学の改組の動向と歩調を合わせる必要があり、棚上げとなった。

#### ④教育

年度当初に新生ガイダンスを実施した。2年次におけるコース振り分けは、2016年2月12日に実施され、全員の所属が確定した。例年、希望コースの偏在が顕著であるために、1年生のときから、必要な情報を適宜アナウンスすると同時に、その時点でのコース希望調査を実施し、結果を公表することで、周知と準備を徹底したこともあり、今年は1つのコースに集中する状況は改善された。しかし、今年は新たに複数のコースで選抜を実施する必要が生じた。3年生のゼミ分けでは、教員・ゼミ紹介パンフレットの作成、各指導教員との面談、既ゼミ生との面談機会を設定し、ゼミへの所属決定過程において、個人の研究志向とゼミを最適化するように図った。

教員の授業改善の試みとしては、「子ども発達論」など2科目においてピアレビューを実施した。また、「心理検査法」「教育相談」「心理学入門」「子ども教育論」「幼児教育内容論」「教育学概論」「教職論」「教育政策」「自然教育論」「学習指導論」など多数の講義にTAを配置して授業の充実を図った。さらに、「障害児発達論」「発達障害臨床学1」「教育政策」「教育行政」「初等社会科教育論」「教育方法学」「道徳教育論」「理科教育方法論」

等の授業にゲストスピーカーを招き、講義内容を深化させた。

卒業研究については、コース単位で構想発表会ないしは中間発表会、最終試験としての最終発表会が実施された。それぞれの発表会等については、院生の参加もあり、質の高い議論が行われた。教育科学論コースでは、例年通り、卒業研究において副査制度を導入し、卒業研究の質の保証に取り組んできた。

正課外では、外部講師の招へいによる学術講演会を3件開催し（テーマは、いじめ問題、発達障害、理科教育）、学生が教育と発達についての関心と知見を深めることができた。

その他、合宿研修は、学校教育論コースが例年通り9月に西はりま天文台で実施している。また、各ゼミあるいはゼミ合同単位でも8月ないし3月に多数の合宿研修（淡路、香住、篠山等）がなされており、教育研究の推進と教員・学生の交流に成果が上がっている。

## ⑤広報

オープンキャンパスにおいて、学科及び各コースの紹介に努めた。4つのコースはそれぞれに工夫を凝らして、模擬授業、ワークショップ、展示、在学生による説明・進学相談など多彩な取り組みを実施した。

高大連携関連では、主に学校教育論コースが県立兵庫高校への講師派遣、加古川西高校の大学訪問受け入れ等を行っている。

(人間形成学科長 稲垣成哲)

## 5.2.2. 人間行動学科

### (1) 運営

人間行動学科は、健康発達論コース、行動発達論コース、身体行動論コースの三つのコースから構成されている。平成27年度学科入学者数は51名であった。人間行動学科の教員は18名（教授10名、准教授8名）である。1年次の学生に対しては、学科長および各コース主任が管理・運営にあたった。2年次以上の学生に対しては、健康発達論コース（5名）、行動発達論コース（5名）、身体行動論コース（4～9月7名、10月以降8名）の教員体制で各コースの運営にあたった。各コースに関わる日常的な運営は基本的にコース単位で行い、コース間の役割分担等については、学科長とコース主任によって適宜連絡・協議し、学科全体に関わる教務・学生、入試等に関わる重要議案については、学科会議において審議・決定した。平成27年度は、学科会議を6回開催した。

### (2) 予算

予算は大学院の専攻単位で配分されるため、学科としての予算配分はない。学科の予算に関しては、大学院人間発達専攻からだ系の予算の記載を参照されたい。

### (3) 入試

入学生は、一般選抜入試（前期日程：募集定員36名）、社会人特別選抜入試（2名）、3年次編入学入試（学部として若干名）、およびAO入試身体運動受験（12名）によって選抜される。平成28年度入試の合格者数は、一般入試（前期日程）40名（社会人特別選抜入試の定員を一般入試に振替）、社会人特別選抜入試0名、3年次編入学0名、AO入試12名であった。入学手続き完了者は39名となり、AO入試合格者12名と合わせて学科入学予定者は計51名となった。

平成28年度入試ではここ数年のうちで最も受験生が多く、個別試験（前期日程）の受験者数は154名で4.3倍の競争率であった（平成27年度2.7倍、平成26年度3.6倍、平成25年度3.4倍）。また、AO入試においても、募集人員12名に対して受験者数は60名で、5.0倍の競争率であった。

AO入試は例年通り問題なく実施できた。第1次選考（書類審査及び身体運動に関する能力の検査1（筆記）で募集人員の2倍の24名に絞り、さらに第二次選考（身体運動に関する能力の検査2（実演、個人及び集団面接））と大学入試センター試験の結果を合わせて総合判定し、12名を決定した。

#### (4) 教育

各学年における学生指導は、1年次生は学科長および各履修コースの1年次担当教員が、2年次生はコース主任が、3・4年次生はゼミ教員が中心となって指導にあたっている。学生の教育研究活動が円滑かつ効果的に進むよう、下記の行事を実施した。

- 4月6日 新2年生ガイダンスおよびコース別ガイダンス
- 4月7日 新1年生ガイダンス
- 9月30日 卒業研究中間発表会（2～4年生の参加、コース別）
- 10月7日 1年生コース分け説明会
- 12月21日 1年生コース分けガイダンスおよび第1回希望調査
- 1月18日 1年生コース分け第2回希望調査
- 2月8日 1年生コース分け第3回希望調査（最終）
- 2月10日 卒業研究発表会（2～4年生の参加、コース別）

##### 1) 履修コース分け

各コースの最大受け入れ人数は、教員数を考慮して健康発達論コースおよび行動発達論コースは15名、身体行動論コースは27名としている。振り分け方法は、学生の希望をできるだけ優先し、前述したように3回の希望調査を行った。1年次後期に3回のコース希望調査を行い、1年次授業修了時点（2月8日）に実施した最終の希望調査結果をもとに各コースへの振り分けを行った。本年度は3回目の希望調査においても身体行動論コースを第一希望とする学生が34名であったため、1年次の学科共通科目（8～11科目）の成績（100点満点）から個人の平均点を求め、点数の高位から上限人数まで振り分けた。本年度は第一希望コースに入れなかった学生はすべて第二希望のコースに入ることができた。最終的な履修コース分け結果は、健康発達論コース10名、行動発達論コース13名、身体行動論コース27名となった。

##### 2) 研究室配属

3年次の各研究室への配属の方法は、履修コースによって若干異なるが、基本的には各研究室の配属学生数の上限を4名程度とし、学生同士で話し合っ配属を決定している。学生間でうまく振り分けられない場合は、教員が介入して、指定された授業科目の成績等により振り分けた。

##### 3) 卒業研究指導

卒業研究指導の流れも履修コースにより若干異なるが、基本的には3年次前期から各研究室に所属し、研究室ごとに様々な研究活動に参加しつつ、後期から指導教員のもと、卒業研究テーマを決定していく。4年次5月に卒業研究届を提出し、9月下旬～10月上旬開催の卒業研究中間発表会にて卒業研究の進捗状況を口頭発表した。この段階で、教員、院生・学生からの多くの質問・アドバイスを受けて、さらに研究を深めた。

コースによってこの後のスケジュールは若干異なるが、最も多数の学生がいる身体行動論コースでは、4年次12月25日に卒業論文をコース内提出した。コースでは各卒論の主査（指導教員）と副査を決め、審査を行い、翌1月に、主査・副査のもと、口頭試問を実施した。口頭試問で指摘された箇所を加筆・修正した後、2月1日に教務学生係へ提出。その後発表用抄録とパワーポイント原稿を作成し、2月10日開催の卒業研究発表会で口頭発表し、教員が最終合否判定を行った。

##### 4) 学生の受賞

平成27年度の間人行動学科の学生による研究面での受賞は以下のとおり。

Masaki Aoyama, 2016 Best Student Paper Award, The 5th Asian Forum for the Next Generation of the Social Sciences of Sport.

松本和也, 卒論の部優秀賞, リサーチ・カンファレンス2016.

また、人間行動学科は体育・スポーツ科学が教育・研究の大きな分野であるため、スポーツ活動において優秀な成績を残す学生も多い。本年度は本学科の次の5名が平成27年度の学生表彰を受け、3月15日に表

彰式が行われた。

#### 神戸大学学生表彰

熊澤 陽香（女子タッチフットボール部）2年

第21回全日本王座決定戦「さくらボウル」で2年連続日本一に貢献し、最優秀選手に選出された。

山本 真穂（女子タッチフットボール部）2年

第24回東西大学王座決定戦「プリンセスボウル」で2年連続大学日本一に貢献し、最優秀選手に選出された。

西田 文香（陸上競技部）4年

2015日本学生陸上競技個人選手権大会女子400mハードルにおいて優勝し、さらに第99回日本陸上競技選手権大会においても同種目3位の成績を修めた。

多田羅 光樹（カヌー部）2年

第5回全日本学生カヌー長距離選手権大会男子カナディアンシングル部門第1位の成績を修めた。

岸田 操（ウインドサーフィン部）4年

2014年度関西選手権において準優勝を果たした。（表彰年月日2014年12月7日）

### (5) 広報

人間行動学科の広報活動としては、大学のホームページと学部パンフレットが常時見ることができる広報である。他にはオープンキャンパスとAO入試のパンフレットを作成している。また直接的な広報活動ではないが、学生の課外活動での活躍や教員の地域貢献・社会連携の活動も学科の広報に貢献しているものと考えている。

#### 1) オープンキャンパス

8月10日、11日の2日間にわたり、オープンキャンパスを実施した。オープンキャンパスの内容は、学科の概要・特色の説明、各履修コースの概要・特色の説明、入試の説明、質疑応答等であった。口頭での説明会場とは別に、コース別の活動内容の展示を行った（測定機器、卒論・修論・博士論文、コースや個人で発刊した研究雑誌「身体行動研究」、教員の著書等の展示、研究発表ポスター等の掲示）。また、在学生を展示室に配置して、高校生からの大学生活等に関する質問に対応させた。

#### 2) AO入試リーフレットの作成と配布

AO入試リーフレットと学生募集要項を全国の主な高校等に郵送し、広報に努めた。送付対象は首都圏以南から選出した高等学校1000校程度と予備校である。

（人間行動学科長 河辺章子）

### 5.2.3. 人間表現学科

#### (1) 運営

人間表現学科は平成26年度から1学科1コース（人間表現論コース）に移行し、平成27年度は新入生42名を迎え入れ、1学科（＝コース）学生が半数を占め、実質上の運営が動き出したところである。なお、3年次以上の学生に対しては、従来通り、表現創造論コース（5名）、表現文化論コース（5名）、臨床・感性表現論コース（4名）の教員体制で各コースの運営にあたった。このように、従来の3コース下の学生（3年生以上）と1コース下の学生（1, 2年生）が混在する学科となったために、平成27年度は1コース制への完全かつ円滑な移行を重点課題に掲げて、学科・コース運営を行った。なお、平成27年度の学科重点課題は、(a) 学部人間表現学科1コース制の円滑運営 (b) 人間発達専攻人間表現系における修士課程指導体制の整備の2つである。

従来の3コースに関わる日常的な運営は基本的に各コースで行われ、（人間表現論コースを含む）学科全体に関わる予算、人事、総務、教務・学生、入試等の議案、また学部全体に関わる議案については、原則月一回の定例学科会議もしくは必要に応じて適宜開かれる臨時学科会議において報告、あるいは審議・決定し

た。平成 27 年度は、定例学科会議は 8 回であったが、学部統合関連の重要議題が多数発生したため、それに伴う臨時学科会議を数回開催した。

## (2) 予算

予算は大学院人間発達専攻表現系講座に配分されたので、学科としての配分はない。大学院表現系講座に共通経費として配分された教育経費を大学院表現系講座および学部人間表現学科の共通経費とし、大学院と学科を一体的に運用した。なお学生当経費の扱いに関しては、博士前後期課程学生については指導学生数に応じて配分、学部学生については均等割で配分した。なお、共通経費（主にコピー機使用料）の一部を音楽系授業機器の整備に充てた。

## (3) 入試

平成 28 年度人間表現学科の入学試験の結果は、社会人特別入試合格者 2 名、前期日程合格者 33 名、後期日程合格者 7 名（学部共通小論文）であった。4 受験区分（音楽受験、美術受験、身体表現、学科受験）のもとでの一般選抜（前期日程）は平成 23 年度から始まり、平成 28 年度入試までの 6 年間の志願者倍率の推移は、「音楽受験」が（3.67 → 3.25 → 2.58 → 2.33 → 3.08 → 2.80）、「美術受験」が（3.50 → 2.13 → 2.88 → 3.00 → 3.75 → 4.40）、「身体表現受験」が（3.50 → 4.00 → 3.50 → 3.00 → 5.00 → 4.00）、「学科受験」が（8.75 → 6.13 → 4.38 → 7.13 → 7.25 → 6.50）である。人間表現学科は平成 26 年度から 1 学科 1 コースに移行したが、コース変更の影響をさほど受けることもなく、平成 28 年度志願者は前年比やや減少しているが、受験動向の想定内と判断できる。現在、国際文化学部との統合による国際人間科学部構想が固まりつつあるが、新学部における入試方法（形式と内容）を現行の入試体制（前期日程の 4 受験区分、後期日程の学部共通小論文）を変更し、前期日程の 4 受験区分の内、実技系 3 受験（音楽、美術、身体表現）を AO 入試とすることとなった。現在、来年度実施に向けて AO ワーキングチームによる最終調整作業を行っている。また、平成 28 年度人間表現学科編入学試験は、1 コースのもとでの試験となったが、3 名の合格者を得た。

## (4) 教育

前述したように、平成 26 年度から、従来の 3 履修コース（3 年生以上）と 1 履修コース（1, 2 年生）が混在する状況となった。教務・学生関連諸事項に関しては、従来コースごとに管理もしくは検討されていた案件に関して、問題や情報を学科全体で共有し、コース間で整合性を図るなどして、円滑に 1 コース制運営できるよう全教員が意思統一を図れるようにしている。

### ・各種ガイダンスの実施

入学時ガイダンスをはじめとして、各学年の年初ガイダンス、履修コースガイダンス、ゼミ分けガイダンス等、年次進行の節目において各種ガイダンスを実施している。

本年度、1 コース制での初めてのゼミ配属が行われた。履修コースが「人間表現論コース」に一本化されたために、昨年度まで見られた「希望履修コースの大きな偏り」という問題はなくなった。しかし、教員の専門分野に「創造論」「文化論」「感性・心理系」の 3 領域があることに変わりはないため、3 年生からの研究室配属の段階で問題が顕在化することが予想されたが、希望調査の結果は領域よりも分野と研究内容の希望の偏りが顕在化し、希望者が多いゼミは 6 名、逆に少ないゼミは 0 名であった。この問題に対して、1 学科制の設立理念や教育・指導の在り方について連日議論した結果、今年度は学生の希望を尊重する方向で配属することとした。次年度の課題としては、学生の希望に過度の偏りが生じないよう 2 年生を対象としたガイダンスなど早い段階から指導助言を徹底する予定である。

### ・学科教育理念の実質化に向けて

表現学科における教育理念の一つは、音楽や美術・デザイン、身体表現といった個別の表現領域を横断するような視点を養うことを通じて、個別の領域に捉われない新たな表現の創出を担う人材の育成を目指すというものである。この目標の実現に向けて、発達科学部の第二バージョンの改組時において3履修コースを設定し、平成26年度からさらに1履修コースに統合して、展開される授業科目の位置づけを明確にした。年度当初に学科の課題として指摘したように、学生が（学科の教育理念とは裏腹に）個別の分野・領域に極端に偏った履修行動をとることのないよう、今後学生の動向を注意深く見守るとともに、学科理念にとって適切な教育課程の編成を構築する必要がある。

#### ・在籍学生の状況

在籍学生の動向（休学、履修状況、単位修得状況等）について、年度初めと年度末に学科構成員全員で情報を共有し、問題が予想される場合は、早期の対応を心がけた。

#### ・教育上の取組み

創作・パフォーマンス系教員においては、神戸大学高大連携授業「美術は科学である」を実施したのをはじめ、「デッサン・ゼミ」の開講／鉛筆による等身大の自画像デッサン／レクチャー・ワークショップ「日常を変えてみる」／鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト／学部卒業生・修士修了生による卒業（修了）演奏会など、ユニークな授業実践や学内外のさまざまな展覧会や演奏会、ワークショップ・イベントへの積極的な参加を組み込んでいる点に特徴がある。

他方、理論系教員においては、附属小学校の1年生を対象に「字を書く身体」の発達的变化を検討する実験／「薬指の響きの標本たち」／「武満徹と実験工房」／「共鳴する都市-ノイズ・サウンドアート・持続可能性」／「作曲家の語る創作の世界」など、外部講師（国内外）によるセミナーや特別講義への参加、フィールド調査研究、インタラクティブ・ティーチングの実践などの授業改善といった、発達科学部の教育の特色を象徴するような多様な取組みが見られる。

### (5) 研究

研究活動に関しては、人間表現専攻の研究に関する項を参照されたい。

### (6) 広報

表現学科はこれまでの3コースを統合して1コース（人間表現論コース）となった。これまで、その概要をオープンキャンパスや公式ウェブサイトを通じて対外的に情報発信するよう心がけてきたが、平成28年度も、表現学科と表現系のさらなる広報につとめたい。

### (7) 受賞

平成27年度（一部26年度末分を含む）の学生による受賞は、創作・パフォーマンス系ゼミ所属の学生による受賞が5件であった。（以下一覽）

- ・神戸大学学生表彰（こうべ市民美術展市長賞，KAJIMA 彫刻コンクール入選の功績による）
- ・第40回こうべ市民美術展 彫刻部門 市長賞
- ・KAJIMA 国際彫刻コンクール模型入賞
- ・第41回こうべ市民美術展（洋画部門）神戸新聞社賞
- ・少人数のための創作ダンスコンクール「アーティストック・ムーヴメント・イン・トヤマ2015」特別賞

（人間表現学科長 塚脇淳）



## 5.2.4. 人間環境学科

### (1) 運営

学科に関する意思決定は、例年どおり、人間環境学科・専攻運営会議において行った。本運営会議は、学科長と各コースの主任の計5名から構成される。今年度は、定例会議13回を開催し、予算配分、人事、入試、教育等に関わる重要案件を審議・決定した。

### (2) 予算

学科共通経費は用意していない。

### (3) 入試

特記事項なし。

### (4) 教育

4月7日、105名の新1年生を迎え、ガイダンスを行った。例年と同じ内容で、学科やコースの特色、カリキュラム、1年後のコース配属の基準等を説明した。学籍番号により学生を4グループに分け、各コースから選出された担当教員4名により履修相談やコース進路相談等を行う指導体制をとった。

また4月6日、新2年生に向けてコース配属のためのガイダンスを行った。今年度のコース別配属人数は、以下のとおり。自然環境論コース：30名、数理情報環境論コース：14名、生活環境論コース：25名、社会環境論コース：30名。

### (5) 広報

高校生に対する大学説明会（オープンキャンパス）が8月11日及び12日に実施された。各コースの説明会等を行った。

(人間環境学科長 平山洋介)

## 5.2.5. 発達支援論コース

### ヒューマン・コミュニティ創成研究センターの「プロジェクトと連動したコース」

本コースは、人間発達環境学研究科および発達科学部の実践性を特徴とするヒューマン・コミュニティ創成研究センター（以下、「HCセンター」と略）の研究プロジェクトと連動して運営されている。学生は、「子ども・家庭支援部門」「障害共生支援部門」「ボランティア社会・学習支援部門」の3部門の実践的研究に携わりながら、地域・行政・企業・NPOとの協働的研究の実際を学び、現代的研究の原理と方法を修得することとなる。

センターのサテライト施設である「のびやかスペースあーち」で地域社会と関わりながら実践的な専門性を高めた学生、岩手県大船渡市の震災復興支援プロジェクトに参加することで問題解決能力を高めた学生などがいた。また、センターを事務局として進めているESDの事業に関わることでグローバルな課題への多角的な観点やそれへの対応のあり方を学んだ学生もいた。

### 多様な専門性をもった学習共同体

3年次に学部のあるコースから進学可能な本コースは、学生集団自体が多様性・異質性を特徴とする。2015年度の進学者は14人で、2年次の所属は、子ども発達論2名、教育科学論1名、自然環境論3名、数理情報環境論4名、生活環境論2名、心理発達論1名、行動発達論1名、であった。4年生と合わせると、学部生は30名（旧所属コースは11を数える）になる。本コースは、基本的に学部生の大学院進学あるいは大学院生と共に学ぶスタイルを推奨しており、大学院在籍者を含めると49名の、実に「多様な専門性をもった学習共同体」である。

ちなみに、発達支援論コースと直接つながっている大学院（人間発達専攻学び系C）在籍者は、博士課程前期課程8名（M1：3名，M2：5名），同課程1年制履修コース5名，博士課程後期課程6名である。

#### 「教師と生徒の共同作業」としての学習プログラムづくり

本コースは、旧所属のカリキュラムに束縛されることなく、研究テーマに応じて自由に学習プログラムを上げることができるという特徴もある。学生の問題意識・関心と最新の学問的 이슈が交差しえるように、教員と学生が共同して学習プログラムを作成する。教員と学生の関係性をいかに対話的に再構築するかという課題が残るが、学生にとっては「自らの学習過程を自ら創造する」という体験を通して、学習支援の本質を理解することとなる。

このコースは、まだまだ新しいコースであるため、模索が続いているが、5年目を迎え、少しずつ成果も見えはじめた。卒業論文・修士論文・博士論文は、そのような学習と研究の集約である。卒論等に取り上げられた内容は、下記の通りである。なお、修論・博論については、発達支援論コースと直接的なつながりをもって学習コミュニティを構成する研究科人間発達専攻学び系Cから出されたものを掲げる。

##### 〈卒論〉

- 「夜間定時制高校において生徒が大学生と関わることの意味」
- 「コンテンツツーリズムを通じた地域文化の変容とファンコミュニティに関する研究」
- 「現代医療にみる「漂流患者」の苦しみの構造と和解のプロセス」
- 「スラムで生活する女子ヒンドゥー教徒の自己形成に関する一察」
- 「神戸華僑華人教育活動による共生関係構築とアイデンティティ形成」
- 「若者の政治的関心に関する研究」
- 「精神障害と発達障害をもつ人々への就労移行支援の在り方に関する一考察」
- 「国内インターンシップの普及背景」
- 「子どもを持つ母親の援助資源に対する利用状況とサポートの検討に関する研究」
- 「パンセクシュアルの定義」
- 「障害者集団におけるジェンダー問題」
- 「人生の転機としての就職活動の意義を考える」
- 「ラフな関わりの意義」
- 「地域における健康学習の可能性と課題」
- 「育児ネットワークが母親の well-being に及ぼす影響に関する実証的研究」

##### 〈修論〉

- 「現代社会におけるフォースエイジャーの価値」
- 「減災のまちづくりにおける実践共同体間に生起する学びの相互作用」
- 「中国における流動児童の放課後活動のあり方に関する研究」
- 「過疎地域におけるソーシャル・ビジネスの役割と課題」
- 「保育ソーシャルワークの実践と考察」
- 「一時保護所における行動診断のあり方に関する研究」
- 「被虐待児の行動障害の測定に関する研究」

##### 〈博論〉

- 「障害支援の関係論的研究」

#### 多様な社会領域での「ヒューマンキャピタル・ソーシャルキャピタル創成者」

2015年度学部卒業生（4年生）の進路は、大学院進学，地方公務員，ベンチャー企業の起業，社会福祉施設，総合商社勤務などで，博士課程（前期）修了者は，博士後期課程進学，大学教員，ソーシャルワーカー，化粧品会社勤務などとなっている。

発達科学部・人間発達環境学研究科の全体的な傾向同様、本コースの卒業生・修了生も、多様な社会領域に進出しているといえる。しかし、とりわけ、学部・領域横断的かつ実践主義的な本コースで学んだ彼らには、現実社会の輻輳した問題を解決に導くヒューマンキャピタル（人的資本）・ソーシャルキャピタル（社会関係資本）を、より豊かにしていく実践者として、各領域において活躍してもらうことを期待するものである。

（文責：津田英二）

### 5.3. 各専攻講座の教育

#### 5.3.1. 人間発達専攻

##### （1）運営

教員は、4つの系講座（こころ系、からだ系、表現系、学び系）に所属し、専攻の運営は、基本的に各系講座を中心に行われている。運営にあたっては、人間発達専攻運営会議を組織し、月1回の定例会議のほか、適宜臨時の会議を開いて、専攻の運営に関わる重要案件を検討している。運営会議は、専攻長と4つの系講座主任から構成され（5名）、人事、予算、入試、共通科目運営、共通備品運用等に関わる検討を行った。専攻内の人事については、各系講座で人事の方針を検討し、原案を作成した。運営会議では、その人事案について検討を行い、人事委員会に諮った。

##### （2）予算

予算は、専攻に配分されたものが各系講座に振り分けられる手続きで行った。共通経費は設定していない。大型プリンタ運用経費については、各系講座より予算の一部を共通経費として拠出した。なお、本大型プリンタの運用では、2015年度は表現系講座が担当であり、原則的に、利用者には無料で使用させたが、予算的には過不足はなかった。

##### （3）入試

前期課程入試については、こころ系、学び系の受験区分において、応募者が少なく2次募集となった。また全体的に、辞退も多く、その理由はいずれも他大学院、外国への進学である。次年度以降の前期課程入試について、広報活動等の強化が必要かもしれない。人間発達専攻全体の定員管理に関わって今後専攻全体で検証する必要がある。

一方、後期課程については、問題なく定員を充足することができた。

##### （4）教育

共通必修科目として、人間発達総合研究I/II、及び人間発達相関研究が設定されている。人間発達総合研究Iは、専攻内における多様な研究関心とテーマの広がり共有できる内容であり、受講生からの評価も高い。また、修士論文の構想発表の場である人間発達相関研究では、例年通り、ポスター発表がなされ、活発な議論が行われた。一方、博士論文の構想発表を兼ねる人間発達総合研究IIでは、2日間にわたり口頭発表によって、それぞれの博士論文構想並びに進捗状況が発表された。

大学院生への教育は修士論文・博士論文の作成を大きな目標として学び、研究を進めていくことが中心であり、指導はそれぞれの主指導教員や副指導教員がその役割を担っている。前期課程から学会発表（後期課程では国際学会での発表を奨励）や研究論文の学術誌への投稿を勧めている。

こころ系：博士課程前期課程科目である「人間発達研究（こころ系）」では、学会発表を行うことを念頭に、自らの研究内容を大型ポスターを用いて発表することにより、プレゼンテーション能力の向上だけでなく、院生の研究水準の向上にも貢献した。また、幅広い見識を得るために、適宜ゲストスピーカーを招聘している（心理療法特論演習 1月18日（月）2限 古賀恵里子氏（大阪経済大学）「治療共同体について」）。

からだ系：専攻共通科目の一つである人間発達研究（からだ系）（前期開講）の授業について、系講座教員がオムニバスで担当していたが、他の共通科目との一部内容重複が指摘され、系講座として検討を行った。

その結果、平成 28 年度からは開講期を後期に変更し、自然科学から人文・社会科学分野までの多岐にわたる学問分野をもとにした学際的観点から解析する方法や枠組みを習得し、課題解決のための柔軟な思考能力や洞察力を涵養することを目的に、各種発表会での発表や質疑応答、発表会やセミナーの実質的な運営と積極的参加によって、教員や他の院生とのディスカッションを通して学びを深めていくこととした。また、多数の大学院生が、系講座の教員が携わっている「アクティブ・エイジング・プロジェクト」、「鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト」や「マスターズ甲子園」などの活動に積極的にかかわり、運営を補助する役割を担っている。

表現系：表現系としては、教育面に関連して、前期課程指導体制の整備を平成 27 年度の重点目標として設定した。系としての教育上の取組みとして、これまで専攻共通科目の内容が重複しているとの指摘が多くなされていたことを踏まえて、表現系として検証・検討した結果、年度当初に設定した重点目標に関連して、「人間発達研究(表現系)」「前期課程 1 年後期開講」の授業方法・形式を次のように実施した。具体的には、「複数指導体制の実質化」「修士論文中間指導会」「人間発達相関研究のポスター発表」等との効果的連携を図ることをねらいとして、表現系教員 3 名によるオープンゼミ形式で授業を実施し、研究の在り方について分野を越えた率直な意見・厳しい指摘・指導を行なった。

学び系：学び系としては、特筆すべき教育研究活動としては、教育基礎研究道場を挙げることができる。この道場では、18 件の特別講義と、1 件の論文合評会が企画、実施され、院生の研究能力の向上に役立っている。また、高度教員養成プログラムも実施されている(詳細は、別に掲載)。さらに、講義内容の充実のために、ゲストスピーカー制度を活用し(例えば、村上正行(京都外語大学教授)、山下修一(千葉大学教授))、受講生が幅広い専門家による知見を得ることができるようにしている。

前期課程及び後期課程の院生の主要な実績は、以下のとおりである。

■受賞：

受賞者氏名：小原久未子(博士課程後期課程)

受賞名：Best Student Poster Award, The 12th International Congress of Physiological Anthropology 2015.10.27-30

受賞年月日：2015 年 10 月 30 日

受賞理由：「Anti-stress Effects of Short-term Fasting in Japanese Female Students」と題する研究内容と発表が優秀であると評価されたため。

受賞者氏名：稲葉慎太郎(博士課程後期課程)

受賞名：2015 Best Student Paper Award, The 4th Asian Forum for the Next Generation of the Social Sciences of Sport

受賞年月日：2016 年 2 月 17 日

受賞理由：“An exploratory study using text mining on the characteristics of the social capital formed by community sport club managers”と題する研究内容と発表が優秀であると評価されたため。

受賞者氏名：山本法子(博士課程前期課程)

受賞名：「第 41 回こうべ市民美術展(洋画部門)神戸新聞社賞」

受賞年月日：2016 年 1 月 17 日

受賞理由：山本法子作「無題」が応募総数 196 作品のうち、色彩表現、画面構成が優秀と判断され受賞した。

■著書

鶴木千加子(共著)『スポーツ学の射程 - 「身体」のリアリティへ』、黎明書房、2015 年 9 月

■論文：

小原久未子（博士3年）ほか, Cardiovascular response to short-term fasting in menstrual phases in young women: an observational study, BMC Women's Health, 15, 67, 2015.8

谷めぐみ・長ヶ原誠・長岡雅美・伊藤克広・玉井久実代・益富真子（2015）自治体における成人人口を対象とした運動・スポーツ推進事業と市民の実施頻度・継続期間・組織所属との関連性. 生涯スポーツ学研究, 第12巻, 第2号, pp.1-13.（2016年3月に発刊予定）.

持田和明, 高見和至, 島本公平（2015）チームスポーツ競技における集団凝集性および集団効力感に影響する個人要因の検討－構成員のライフスキルが集団に及ぼす影響－ スポーツ産業学研究, 25（1）, pp. 25-37 2015. 5

高松祥平・山口泰雄（2015）総合型地域スポーツクラブにおけるスポーツ指導者のコンピテンシー尺度作成の試み, 生涯スポーツ学研究, 12（1）:13-23.

稲葉慎太郎・山口泰雄・伊藤克広（2015）総合型地域スポーツクラブのクラブマネージャーが形成するソーシャル・キャピタルの特徴に関する研究:テキストマイニングを用いたNPO法人格の有無の比較より, 生涯スポーツ学研究, 12（1）:25-38

高松祥平・山口泰雄（2015）高校野球における監督のコンピテンシーに関する研究, 体育学研究, 60（2）:793-806.

高松祥平・山口泰雄・稲葉慎太郎（2016）自転車ロードレースにおける観戦動機が再観戦意図に及ぼす影響: ツール・ド・おきなわに着目して, イベント学研究, 印刷中

小西徹・前田正登（2015）サッカーの直接フリーキックにおける標的に向かって軌道を蹴り分ける技術に関する研究, コーチング学研究, 第29巻 第1号 pp. 87-99.

城田真裕・前田正登（2015）3000m障害物競走における走速度変化に関する障害物の影響:1歩毎の走速度変化からみた検討, 陸上競技研究 第103号 pp. 28-36

神山真一・山本智一・山口悦司・坂本美紀・村津啓太・稲垣成哲（2015）「複数の理由付けを利用するアーギュメント構成能力の育成を目指した教授方略のデザイン要素:小学校第6学年「植物の養分」の事例」『理科教育学研究』第56巻, 第1号, 3-16.

神山真一・山本智一・山口悦司・坂本美紀・村津啓太・稲垣成哲（2015）「反論を含むアーギュメント構成能力の育成を目指した教授方略のデザイン要素:小学校第6学年「水溶液の性質」の事例」『理科教育学研究』第56巻, 第3号, 309-324.

大黒仁裕・神山真一・山本智一・江草遼平・鳩野逸夫・楠房子・稲垣成哲（2015）「複式学級における反転授業を用いた理科の授業改善:PACA国際学校を事例として」『日本科学教育学会研究会研究報告』第30巻, 第3号, 89-94.

Yoshida, R., Tamaki, H., Sakai, T., Egusa, R., Saito, M., Kamiyama, S., Namatame, M., Sugimoto, M., Kusunoki, F., Yamaguchi, E., Inagaki, S., Takeda, Y., & Mizoguchi, H. (2015). BESIDE: Immersive System to Enhance Learning within a Museum. in Nelson Baloian, Yervant Zorian, Perouz Taslakian, Samvel Shoukouryan (eds.), Collaboration and Technology, 21st International Conference CRIWG2015 Proceedings, Lecture Notes in Computer Science (LNCS) 9334, 181-189. Yerevan, Armenia:Springer International Publishing Switzerland.

Daikoku, M., Kamiyama, S., Yamamoto, T., Egusa, R., Hatono, I., Kusunoki, F., & Inagaki, S. (2016). Improvement of science class using flipped classroom: A case study of EIPACA. In J. Lavonen, K. Juuti, J. Lampiselka, A. Uitto & K. Hahl (Eds.), E-Book Proceedings of the ESERA 2015 Conference: Science Education Research: Engaging Learners for a Sustainable Future. Helsinki, Finland: European Science Education Research Association.

Kamiyama, S., Yamamoto, T., Yamaguchi, E., Sakamoto, S., Muratsu, K., & Inagaki, S. (2016). Instructional strategies for teaching primary students to construct arguments with rebuttals. In J. Lavonen, K. Juuti,

J. Lampiselka, A. Uitto & K. Hahl (Eds.), E-Book Proceedings of the ESERA 2015 Conference: Science Education Research: Engaging Learners for a Sustainable Future. Helsinki, Finland: European Science Education Research Association.

■学会発表：

Ohara K, Kouda K, Fujita Y, Mase T, Miyawaki C, Momoi K, Okita Y, Nakamura H: The Relationship between Eating Behaviour and Bone Mineral Content in Japanese Children. The 4th Joint Meeting of European Calcified Tissue Society (ECTS) and the International Bone and Mineral Society (IBMS) 2015年4月25-28日 (Rotterdam, Netherland)

Ohara K, Okita Y, Kouda K, Mase T, Miyawaki C, Momoi K, Murayama R, Nakamura H: Anti-stress Effects of Short-term Fasting in Japanese Female Students. The 12th International Congress of Physiological Anthropology 2015年10月29日 (Chiba, Japan)

Momoi K, Ohara K, Okita Y, Kouda K, Mase T, Miyawaki C, Nakamura H: The Association between Cognitive Function and Eating Behaviour in University Students. The 12th International Congress of Physiological Anthropology 2015年10月29日 (Chiba, Japan)

小原久未子, 甲田勝康, 間瀬知紀, 藤田裕規, 宮脇千恵美, 桃井克将, 村山留美子, 中村晴信：小・中学生における食行動・食態度と体組成との関連について。第74回日本公衆衛生学会総会 2014年11月5日 (長崎ブリックホール, 長崎県長崎市)

小原久未子, 甲田勝康, 間瀬知紀, 藤田裕規, 宮脇千恵美, 桃井克将, 古谷真樹, 中村晴信：体組成と食行動との関連について：小・中学生における横断調査より。第62回日本学校保健学会学術大会 2015年11月29日 (岡山コンベンションセンター, 岡山県岡山市)

桃井克将, 小原久未子, 甲田勝康, 間瀬知紀, 宮脇千恵美, 中村晴信：大学生における認知機能と食行動の関連。第62回日本学校保健学会学術大会 2015年11月29日 (岡山コンベンションセンター, 岡山県岡山市)

深川育実 (2015) 幼児の漢字視写における筆順の発達的变化 - 漢字の "Grammar of Action" に関する検討 - 心理科学研究会近畿地区例会

深川育実 (2015) 学習障害児の書字困難における現状と課題 心理科学研究会全国大会秋集会

李莉 (2015) Draw-a-Person Test for Screening Autism in Japan and China。

Asia Pacific Regional International Meeting for Autism Research Shanghai 2015, (2015年11月, 上海) ポスター発表

妹尾輝枝 (2015) 「集団音楽療法における即興演奏の相互作用」日本音楽療法学会第15回大会 研究発表 (2015 9月13日)

木本麻希子 (2015) 「S. プロコフィエフの《ピアノ・ソナタ》におけるポリテクスー「5つのライン」のマニフェストー」, 『ロシア・東欧研究』, ロシア・東欧学会編, 口頭発表 (公開研究会・日本音楽学会)

肥山紗智子 (2015) 「1930年代初期のヒッチコック映画の音響表現に見るサイレント映画性と独自性」日本音楽学会 2015年度支部横断企画 公開研究会「日本の映画音楽・映画音響研究の現在」: 2015年9月6日 (日)

鶴木千加子 「バドミントンにおける国際統括の形成 —BAの役割とIBFの設立—」, スポーツ史学会第29回大会, 群馬大学 2015年12月

持田和明, 高見和至, 島本公平 スポーツ競技者用組織市民行動尺度の作成. 日本スポーツ心理学会第42回大会研究発表抄録集, pp. 22-23, 2015. 11

Matsumura, Y. (2015). "A Study on Facilitative Factors for Adopting Sport Activities of the Adults." The 2nd Healthy and Active Aging Conference, Guangdong Hotel, Shanghai, China. (2015年9月20日発表・上海)

Inaba, S., Yamaguchi, Y. and Ito, K. "An exploratory study using text mining on the characteristics of the

social capital formed by community sport club managers”, The 4th Asian Forum for the Next Generation of the Social Science of Sport, 2015

Takamatsu, S. & Yamaguchi, Y. “Managers’ competency of Kokoyakyu and athletes’ intrinsic motivation: A test of self-determination theory using structural equation modeling”, The 4th Asian Forum for the Next Generation of the Social Science of Sport, 2015

高松祥平・山口泰雄, 「監督のコンピテンシーは高校球児の内発的動機づけにどのように影響しているのか」, 日本体育学会第66回大会, 2015

Takamatsu, S. & Yamaguchi, Y. “Effect of managers’ competency of Kokoyakyu on athletes’ intrinsic motivation”, The 24th TAFISA World Congress, 2015

稲葉慎太郎・山口泰雄・伊藤克広, 「クラブマネージャーのソーシャル・キャピタルがクラブ運営評価に影響を及ぼすモデルの検証」, 日本生涯スポーツ学会第17回大会, 2015

高松祥平・山口泰雄, 「高校球児のプロフィールからみた監督のコンピテンシー受容に関する比較研究」, 日本生涯スポーツ学会第17回大会, 2015

Takamatsu, S. & Yamaguchi, Y. & Inaba S. “An exploratory study of spectator motivation for cycle road race focusing on intention to reattend”, The 5th Asian Forum for the Next Generation of the Social Science of Sport, 2016.

城田真裕・前田正登 走速度の変化からみた3000m障害物競走の競技特性について 2015年 兵庫体育・スポーツ科学学会第26回大会 抄録集 p. 17

片山侑治・篠原康男・前田正登 サッカー・フットサル競技選手における走方向の変更時の移動経路に関する研究 2015年 日本体育学会第66回大会 国士舘大学 予稿集

岡野達哉・前田正登 異なる走速度での疾走が接地に及ぼす影響 2015年10月 シンポジウム:スポーツ・アンド・ヒューマン・ダイナミクス2015 日本機械学会 講演論文集 A-12

小西徹・前田正登 ボールの軌道からみたバスケットボールフリースローの投射方策に関する研究 2015年11月 シンポジウム:スポーツ・アンド・ヒューマン・ダイナミクス2015 日本機械学会 講演論文集 C-18

小西徹・前田正登 サッカーの直接フリーキックを想定した的当て課題におけるキック動作とボール軌道に関する研究 2015年 第28回トレーニング科学学会大会 大会抄録集 p. 46

小野太寛・前田正登 異なる方向への変換動作を伴う連続サイドステップ運動の特徴 2015年11月, 第28回トレーニング科学学会大会 大会抄録集 p. 59

片山侑治・岡野達哉・小野太寛・前田正登 ステップ長およびステップ数の違いがサイドステップ運動時の方向変換動作に及ぼす影響 2015年11月 第28回トレーニング科学学会大会 学会大会抄録集 p. 60

城田真裕・前田正登 3000m 障害競走における障害物越えが走速度に及ぼす影響に関する研究 - 3000m 障害物競走と5000m 競走の比較から - 2015年11月 日本陸上競技学会第14回大会 第14回大会プログラム p. 39

岡野達哉・前田正登 長距離選手における異なる走速度が走動作に与える影響 - 接地動作に着目して - 2015年11月 日本陸上競技学会第14回大会 大会プログラム p. 39

小野太寛・前田正登 異なる方向への変換動作を伴う連続サイドステップ運動の特徴 2016年3月 日本コーチング学会第27回大会(兼)日本体育学会体育方法専門領域研究会第9回大会 大会プログラム・予稿集 p. 28

船曳優斗(2015)「小学校国語科メディア教育における映像を読む力についての考察 - 映像を通じた自然発生的な思考に焦点を当てて -」全国大学国語教育学会自由研究発表, 創価大学.

大黒仁裕・神山真一・山本智一・江草遼平・鳩野逸夫・楠房子・稲垣成哲(2015)「理科における反転授業用教材の課題:PACA国際学校を事例として」『日本理科教育学会第65回全国大会論文集』第13号, 525.

大黒仁裕・神山真一・山本智一・江草遼平・鳩野逸夫・楠房子・稲垣成哲(2015)「PACA国際学校にお

る反転授業を用いた理科の授業改善:「物の溶け方」単元の実践から」『日本科学教育学会年会論文集』第 39 号, 432 - 433. [審査なし]

神山真一・山本智一・山口悦司・坂本美紀・村津啓太・稲垣成哲 (2015) 「反論を含むアークギュメント構成能力の育成を目指した授業の評価: 小学校第 6 学年「水溶液の性質」の事例」『日本理科教育学会第 65 回全国大会論文集』第 13 号, 280. [審査なし]

神山真一・山本智一・山口悦司・坂本美紀・村津啓太・稲垣成哲 (2015) 「反論を含むアークギュメントの達成を阻害する要因の探索的検討: 反論理由付けに着目して」『日本科学教育学会年会論文集』第 39 号, 434-435. [審査なし]

Kamiyama, S., Yamamoto, T., Yamaguchi, E., Sakamoto, S., Muratsu, K., & Inagaki, S. (2015). Instructional strategies for teaching primary students to construct arguments with rebuttals. Poster presented at The 11th Conference of the European Science Education Research Association, Helsinki, Finland.

Daikoku, M., Kamiyama, S., Yamamoto, T., Egusa, R., Hatano, I., Kusunoki, F., & Inagaki, S. (2015). Improvement of science class using flipped classroom: A case study of EIPACA. Poster presented at The 11th Conference of the European Science Education Research Association, Helsinki, Finland.]

Egusa, R., Nakayama, T., Nakadai, T., Kusunoki, F., Namatame, M., Mizoguchi, H., & Inagaki, S. (2015). Puppet Show System for Children With Hearing Disability: Evaluation of Story Participation Function With Physical Movement. In proceedings of Global Learn 2015, Vol, 2015, No.1 (pp.482-487). Berlin, German: Association for the Advancement of Computing in Education (AACE).

Egusa, R., Nakadai, T., Nakayama, T., Kusunoki, F., Namatame, M., Mizoguchi, H., & Inagaki, S. (2015). A Full-Body Interaction Game for Children with Hearing Disabilities to Gain the Immersive Experience in a Puppet Show. SocialEdu 2015.

Egusa, R., Namatame, M., Kobayashi, M., Terano, T., Mizoguchi, H., Kusunoki, F., Nakase, I., Ogawa, Y., & Inagaki, S. (2015). Present Issues in Information Accessibility of Exhibitions in Japanese Science Museums. Poster session presented at European Science Education Research Association 2015 Conference, Helsinki, Finland.

馬場大樹・大山正博・新友一郎・吉永潤 (2015) 「「不確実性」の中で未来をひらく意思決定と合意形成能力の育成—外交交渉ゲーム “IndependenceDay” の実践に基づいて—」『第 64 回全国社会科教育学会発表要旨収録』 55.

Ohshima, M., Baba, H., and Yoshinaga, J. (2015) Communication Games for Activating Citizenship Education in Japan, Proceedings in the 46th Annual Conference of the International Simulation and Gaming Association, 928-943, Kyoto, Japan.

大山正博・馬場大樹・吉永潤 (2015) 「国際理解教育の課題を乗り越えるために—「複数の未来像」の獲得をめざすゲーミング・シミュレーション教材の必要性」『日本シミュレーション & ゲーミング学会全国大会論文報告集 2015 年秋号』 22-25.

馬場大樹・大山正博・吉永潤 (2015) 「社会科歴史学習において多面的政策評価能力を育成するディブリーフィング—外交交渉ゲーム “Independence Day” の実践に基づいて—」『日本シミュレーション & ゲーミング学会全国大会論文報告集 2015 年秋号』, 26-31.

太田知実・元島ゆき (2016) 「学校組織における初任教師の位置づけと葛藤に関する事例研究 —ある小学校教師の入職一年目におけるナラティブを手がかりに—」関西教育行政学会 2 月例会, 大阪研修センター.

岡部恭幸・広瀬優香子 (2016) 「幼少接続期の数理解識について—数の合成・分解とサビタイジングに着目して—」『数学教育学会春季年会発表論文集』 232-234.

佐伯源太郎 (2016) 「『一次関数』理解の困難性について」近畿数学教育学会発表, 奈良教育大学.



佐伯源太郎, 岡部恭幸 (2016) 「『一次関数』理解の困難性とその克服」『数学教育学会春季年会発表論文集』93-95.

#### ■院生の海外活動

西尾祐美子 College of Staten Island and the Graduate Center, CUNY に留学中。

惟任泰裕 Univeristy of Queensland (オーストラリア) 11 ヶ月留学

大黒仁裕 Ecole Internationale Provence-Alpes-Cote d'Azur 10 ヶ月インターン。

#### (5) 広報

大学院に関するオープンキャンパスに相当する「オープンラボ」が7月4日(土) 午後に開催された。参加者がオープンラボを経て受験に至る者がいることから、今後一層の企画充実と広報活動が求められる。なおオープンラボの対象と実施時期・広報活動、英語試験外部委託の広報活動など検討が必要であろう。

(人間発達専攻長 稲垣成哲)

### 5.3.2. 人間環境学専攻

#### (1) 運営

専攻に関する意思決定は、例年どおり、人間環境学科・専攻運営会議において行った。本運営会議は、学科長と各コースの主任の計5名から構成される。今年度は、定例会議13回を開催し、予算配分、人事、入試、教育等に関わる重要案件を審議・決定した。

今年度の人事として、准教授採用人事2件、連携講座客員教授・准教授採用各1名、博士課程(後期課程)担当人事2名に関する人事を進め、人事委員会での審議を経て、教授会において審議・承認された。

#### (2) 予算

特命助教人件費専攻負担分を考慮して予算を配分した。

#### (3) 入試

博士課程後期課程入試に関し、一昨年度第2期にはじめて実施した方式(受験生のプレゼンテーションに対し、主論文等審査委員と論文等審査委員が所見を述べ、各コースから1名ずつの口述試験委員が採点する)を引き続き採用し、定着させた。

#### (4) 教育

院生は修士論文・博士論文の作成を中心目標として勉学・研究を進めることから、彼らに対する指導はそれぞれの指導教員に負うところが多い。一方、とくに博士課程前期課程に関して、専攻共通教育のあり方をどのように考えるべきかが検討課題となっている。この点について、昨年度に開始した専攻共通科目「人間環境学相関研究」のあり方を見直し、来年度より新しい内容として再スタートさせることになった。

なお、教育の成果として、以下2件の院生の受賞があった。

受賞者：勝原光希(博士課程前期課程)

受賞内容：種生物学シンポジウム2015, 河野昭一ポスター賞

発表タイトル：「在来ツユクサ属2品種間における繁殖干渉の頻度依存性の検証」

共同受賞者：丑丸敦史

受賞者：豊内拓哉(博士課程前期課程)

受賞内容：国際会議でのポスター賞受賞(Pacificchem2015(2015年12月, ハワイ)のNew Frontiers in

Polymer Crystallization セッション主催のポスター賞)

発表タイトル：Crystallization and thermal behavior of poly( $\epsilon$ -caprolactone) and its copolymers studied by vibrational spectroscopy」

共同受賞者：Harumi Sato, Yukihiro Ozaki

(5) 広報

博士課程前期課程受験検討者に対し、7月4日に研究科説明会（オープンラボ）が実施された。専攻の概要について説明し、来場者に教員と個別に面談・相談する機会を提供した。

(人間環境学科長 平山洋介)

## 6. 進路

### 6.1. キャリア形成支援

#### 6.1.1. キャリアサポートセンター

キャリアサポートセンターは、学部の1年生から大学院生にいたるすべての学生を対象として、学生のキャリア形成を実践的にサポートすることを目的としている。狭義の就職活動の支援はもとより、生涯にわたるキャリア形成を視野に入れた支援活動を提供している。

就職活動中の学生を対象にしてはセミナー・説明会・ワークショップ等の集団的イベント及び個別的なカウンセリングを行い、より広範囲の学生を対象にしては、大学で学ぶことや働くことの意義を自分で考え、自分の人生をどう生きるかという課題と早い段階から真剣に向き合うように働きかけている。

どのような仕事に就くかを決め、自分の希望する職をどのようにして得るのかを考えることは学生にとって大きな転機である。この課題に向き合うとき、当面の目標を越えて、個人が生涯にわたって仕事や社会とどのように関わりつなげて生きていくかという長期的な視点に立つように訴えている。

当センターが企画・実施するイベントの多くは人間発達環境学研究科及び発達科学部の学生のみならず学部の1年生から大学院生にいたる神戸大学のすべての学生に対して開放されている。

現在当センターは、包括的なキャリア形成支援、就職活動支援全般の充実、大学院生へのキャリア支援の充実、留学生へのキャリア支援の充実、に重点的に取り組んでいる。以下に、これらの面における今年度の活動を報告する。また最後に、今年度実施した就職対策セミナーの一覧を載せる。

#### (1) 包括的なキャリア形成支援

当センターは、希望する職に就くために必要な知識と技能を伝達することを越えて、包括的に長期的な視野から各自の将来の設計に取り組んでもらうべく働きかけている。各自のキャリア設計における包括的・長期的視野の重要性は、全学生・全教職員が共有すべきことであると考えている。

具体的な活動としては、次の2つがある：

- ・授業内でのキャリアガイダンス
- ・教職員を対象とする講演会

いずれも当センターのキャリアディベロップメントアドバイザーが担当した。

授業の一環としてのキャリアガイダンスは、ここ数年継続して実施している。キャリア形成における長期的な視野の重要性をなるべく多くの学生になるだけ早い段階に認識してもらうことをめざし、広範囲の1年次生を対象とする概論的授業科目において行っている。

企業が学生に求める資質に関する企業と学生の意識のギャップ、経済産業省が提唱している「社会人基礎力」等、本格的な就職活動を開始する以前に心得ておくべきことを解説し、長期的な視野の涵養につながるように、いくつかのよく知られたキャリア理論（「転機の乗り越え」を軸とするナンシー・K・シュロスバーグの理論、人の一生を「役割の組合せ」という観点から理解しようとするドナルド・E・スーパの理論、及びジョン・D・クランボルツの「計画された偶発性」理論）を紹介した。

講師が一方的に話をするのではなく、自己分析を試みる、他学生と意見を交換する等の活動を出席学生に促すことにより、学生が能動的に参加してくれるよう配慮した。

教職員を対象とする講演会では、民間企業への就職を目指す学生が体験する選考の流れ及び当センターの提供する支援活動を説明し、教職員との理解の共有を深めた。昨年に引き続きFD（ファカルティ・ディベロップメント）活動の一環として開催した。

日本経済団体連合会が採用選考活動の開始時期に関する指針を改定したことに伴い、2016年3月卒業・修了予定者より、多くの企業による採用選考活動の開始時期が大幅に後ろ倒しされることになる。このことが学生の就職活動及び企業の採用選考活動に与えるであろうと予想される影響については詳しく解説した。

#### (2) 就職活動支援全般の充実

民間企業就職希望者、公務員志望者、及び教職志望者に分けて、既に定着しているタイプの実践的な支援

活動を精力的に実施した。

民間企業就職希望者に対しては、企業の動向に関するセミナー、エントリーシート対策講座、グループディスカッションワークショップ、インターンシップセミナー、卒業生・修了生との座談会、マナー講座、今年度は新たにグループ面接対策講座（4回実施延べ54名参加）等を開催した。公務員志望者に対しては、職種・試験制度等に関する全般的なガイダンス及び採用試験対策セミナーを開き、教職志望者に対しては、各地の教育委員会による説明会、個別の高等学校による説明会、私学教員についてのセミナー、採用試験対策セミナー、採用試験合格者との座談会等を企画した。またそれぞれの進路ごとに、就職活動を終えた学生と、これからスタートする学生との座談会を進路別に開催した。後輩へ自身の就職活動の経験を伝えると共に、就職活動を振り返り、再評価することで今後のキャリア形成へ繋げることを目的としている。また、今年度から就職活動時期の変更に応じて、内定獲得に苦勞する学生に対して、キャリアセンターと共催で個別説明会を開催した。個別面談のため参加人数はキャリアセンターと合わせて約20名（発達科学部は8名）と少ないが、学生にとってレスキュー的な相談会となり、次年度も継続開催していく。2013年にスタートした業界研究セミナーも年々参加企業数が増え、今年度は13社の参加を得て開催した。参加者数も年々増加し、96名の参加があった。就職活動時期が流動的な近年、学生に益するセミナーとして定着している。これらに加えて、キャリア形成全般あるいは現在直面している具体的な就職活動について学生が抱える多様なニーズに応えるべく、キャリアカウンセラーによる個別のカウンセリングを恒常的に実施した。

いくつかの件についてさらに詳しく報告する。

#### ①全般的な内容のガイダンス

間もなく本格的な就職活動を開始する3年次生を対象とする全般的な内容のガイダンスを多数開催した。就職活動のスケジュール、インターンシップ、企業の探し方等この段階のすべての学生にぜひ心得ておいてほしい基礎知識を伝達することを意図した。当センターのキャリアディベロップメントアドバイザーあるいは外部からの講師が担当した。外部講師によるセミナーでは、就職戦線の動向、仕事研究の仕方等の面で貴重な内容が扱われた。

#### ②グループディスカッション研修

多くの企業が採用活動の一環として実施するグループディスカッションでは、複数の参加者が与えられたテーマについて自由に討議することが求められる。所属大学・学部・専攻も違えば考え方・性格なども異なる様々なバックグラウンドを持つ学生と初めて会って一緒に討議するのであるから、戸惑うのが普通である。前もって模擬体験をしておくことが望ましい。

当センターによるグループディスカッション研修は2011年度に実施し始めた。大阪府立大学との合同開催であった。それ以後も毎年実施している。

今年度は当センター独自の研修及び京都大学との合同研修、新たに私立大学である甲南大学との合同研修も合わせて13セッションを実施し、延べ325名の参加者を集めた。また、大手金融業に人事部長である神戸大学OBや、人事経験のある卒業生から、直接に学生へのアドバイスを得る機会を設け、卒業生と在學生を繋ぐキャリア支援とした。

就職活動にすぐに役立つ実践的な内容であり、参加者には非常に好評であった。参加者のコメントの内容から判断して、この研修に対する需要が高いことがわかる。昨年度以上の参加人数であり、今後も力を入れ発展させていきたい。

#### ③企業による採用選考活動の後ろ倒し

上の(1)において言及した経緯により2016年3月卒業・修了予定者より、多くの企業による採用選考活動の時期が大幅に後ろ倒しされることになる。このことを当該学生に周知することは今年度の大きな課題のひとつであった。①で報告した全般的な内容のガイダンスにおいてこの件を繰り返し取り上げ、学生への周知を図った。

#### (3) 大学院生へのキャリア支援の充実

##### ①大学院生による座談会

主として修了までまだ時間のある大学院生及び大学院進学を考えている学部学生を対象として、既に就職先から内定を確保した当研究科の大学院生との座談会を開いた。院生としての学術活動と就職活動をどう折り合いをつけるのか、就職活動において大学院生としての強みをどう伝えるのか、といったことをめぐって、既に体験した学生とこれから体験しようとする学生の間に対話の機会を提供した。

参加者の生の声によるきめの細かい質疑応答を可能にする座談会形式は、当センターが好んで採用するセミナーフォーマットである。

## ②理系教員選考会への協力

日本物理学会キャリア支援センター及び神戸大学キャリアセンターの主催による「私立中高 理系教員選考会」が、2015年1月25日神戸大学において開催された。理科・数学・情報の教員免許取得者・取得見込者を対象とする私立中高の採用面接会を軸とするイベントであった。当センターも実務面で協力した。

## (4) 留学生へのキャリア支援の充実

### ①全般的な内容のセミナー

留学生のための就活セミナーを実施した。日本における留学生の事情に詳しい講師を外部から招き、日本の企業における留学生の採用の実態、留学生採用の目的と期待等について解説してもらった。

留学生を対象とする全学レベルのガイダンスとしては、留学生センターによる大規模なセミナーがある。当センターの企画は、参加者との対話が可能な程度の規模のアットホームな雰囲気での開催を心がけ、全学のセミナーにない味を出すことをめざした。

### ②個別の企業の説明会

留学生に特化したものではないが、留学生の採用に特に意欲的な企業による採用説明会を開催した。

留学生に対して、一般的な内容のものにとどまらず、よりきめの細かいキャリアサポートを提供することも目指していることを反映したものである。

## (5) 就職対策セミナー

上に報告したイベント以外にも、就職活動を支援するためのセミナーを数多く企画し実施した。今年度実施したイベントの一覧を、教員採用対策セミナー、企業採用対策セミナー、公務員対策セミナー、OB・OGセミナー、その他のセミナーに分けて記す。

### ① 開催セミナー一覧

平成 27 年度分平成 27 年度 教員採用対策セミナー

第 1 回目	4 月 16 日 (木) 13:20-14:50 B103 教室	大阪市教員採用選考試験説明会 【講師】 大阪市教育委員会 参加者 3 名
第 2 回目	4 月 17 日 (金) 12:20-13:20 F256 教室	堺市教員採用説明会 【講師】 堺市教育委員会 参加者 13 名
第 3 回目	4 月 17 日 (金) 13:30-14:30 F256 教室	大阪府教員採用選考試験説明会 【講師】 大阪府教育委員会 参加者 31 名
第 4 回目	4 月 17 日 (金) 15:10-17:50 F256 教室	面接試験対策セミナー 【講師】 東京アカデミー講師 参加者 57 名
第 5 回目	4 月 23 日 (木) 13:20-14:20 B104 教室	豊能地区教員採用選考試験説明会 【講師】 豊能地区教職員人事協議会 参加者 3 名
第 6 回目	4 月 27 日 (月) 15:30-17:00 A325 教室	滋賀県教育委員会からの説明会 【講師】 滋賀県教育委員会 参加者 6 名

第7回目	5月8日(金) 13:20-14:50 B104教室	神戸市教員採用選考試験説明会 【講師】神戸市教育委員会 参加者 21名
第8回目	5月8日(金) 15:10-17:50 B104教室	教育時事対策セミナー 【講師】東京アカデミー講師 参加者 49名
第9回目	5月14日(木) 13:20-14:50 B103教室	教員志望者セミナー 【講師】中井博之氏(学校法人共栄学園理事長) 参加者 7名
第10回目	5月15日(金) 13:20-14:50 B104教室	兵庫県公立学校教員採用候補者選考試験説明会 【講師】兵庫県教育委員会事務局 参加者 31名
第11回目	5月22日(金) 13:20-14:50 B104教室	京都府教員採用選考試験説明会 【講師】京都府教育委員会 参加者 11名
第12回目	5月22日(金) 15:10-17:50 B104教室	論作文試験対策セミナー 【講師】東京アカデミー講師 参加者 28名
第13回目	6月26日(金) 13:20-14:50 B104教室	先輩からうかがう面接試験ポイント 【講師】佐谷章子先生(紫陽会副会長) 参加者 20名
第14回目	7月3日(金) 13:00-17:30 B104教室	先輩からうかがう面接試験ポイント 【講師】佐谷章子先生(紫陽会副会長) 参加者 23名
第15回目	7月10日(金) 13:20-14:50 B104教室	教員採用ガイダンス 【講師】光延栄治氏 参加者 16名
第16回目	8月19日(水) 9:00-17:00 F252教室	教員採用試験面接練習 【講師】佐谷章子先生(紫陽会副会長) 参加者 10名
第17回目	8月21日(金) 9:00-17:00 A325教室	教員採用試験面接練習 【講師】佐谷章子先生(紫陽会副会長) 参加者 6名
第18回目	9月4日(金) 9:00-17:00 B208教室	教員採用試験面接練習会 【講師】佐谷章子先生(紫陽会副会長) 参加者 3名
第19回目	10月23日(金) 13:20-14:50 B103教室	教員志望者セミナー 【講師】中井博之氏(学校法人共栄学園理事長) 参加者 25名
第20回目	11月19日(木) 10:40-12:10 B103教室	横浜市教育委員会からの説明会 【講師】横浜市教育委員会 参加者 5名
第21回目	12月4日(金) 13:20-14:50 A325教室	教育委員会からの説明会【大阪市】 【講師】大阪市教育委員会 参加者 8名

第 22 回目	12月4日(金) 15:00-16:30 A325 教室	教育委員会からの説明会【堺市】 【講師】堺市教育委員会 参加者 1名
第 23 回目	12月18日(金) 13:20-14:50 B108 教室	教員採用試験の傾向と対策 【講師】伊藤憲司氏(東京アカデミー) 参加者 34名
第 24 回目	2月4日(木) 12:20-13:10 B104 教室	合格者との座談会 【講師】発達科学部卒業生 参加者 22名
第 25 回目	2月5日(金) 13:20 - 14:50 B108 教室	面接対策ガイダンス 【講師】伊藤憲司氏(東京アカデミー) 参加者 36名

平成 27 年度 就職活動支援セミナー

第 1 回目	4月13日(月) 12:50-13:20 B203 教室	グループディスカッション実践セミナー 【講師】田中美恵(発達科学部キャリアサポートセンター) 参加者 9名
第 2 回目	4月13日(月) 13:30-14:50 B203 教室	グループディスカッション実践セミナー 【講師】田中美恵(発達科学部キャリアサポートセンター) 参加者 9名
第 3 回目	4月14日(火) 12:50-13:20 B203 教室	グループディスカッション実践セミナー 【講師】田中美恵(発達科学部キャリアサポートセンター) 参加者 9名
第 4 回目	4月14日(火) 13:30-14:50 B203 教室	グループディスカッション実践セミナー 【講師】田中美恵(発達科学部キャリアサポートセンター) 参加者 9名
第 5 回目	4月20日(月) 12:50-13:20 B203 教室	グループディスカッション実践セミナー 【講師】田中美恵(発達科学部キャリアサポートセンター) 参加者 9名
第 6 回目	4月20日(月) 13:30-14:50 B203 教室	グループディスカッション実践セミナー 【講師】田中美恵(発達科学部キャリアサポートセンター) 参加者 9名
第 7 回目	4月21日(火) 12:50-13:20 B201 教室	グループディスカッション実践セミナー 【講師】田中美恵(発達科学部キャリアサポートセンター) 参加者 16名
第 8 回目	4月21日(火) 13:30-14:50 B201 教室	グループディスカッション実践セミナー 【講師】田中美恵(発達科学部キャリアサポートセンター) 参加者 16名
第 9 回目	4月24日(金) 12:30 ~ 13:10 B104 教室	2017年卒就職活動スタートアップセミナー 【講師】香田祐介氏(株式会社マイナビ) 参加者 44名
第 10 回目	4月24日(金) 13:20 ~ 14:50 B104 教室	2017年卒就職活動スタートアップセミナー 【講師】香田祐介氏(株式会社マイナビ) 参加者 42名
第 11 回目	4月24日(金) 15:10-16:40 B104 教室	就活活動スタートガイダンス 【講師】林田雄太氏(株式会社リクルートキャリア) 参加者 21名

第 12 回目	5月29日(金) 13:20-14:50 B104 教室	就活活動スタートガイダンス 【講師】林田雄太氏(株式会社リクルートキャリア) 参加者 28名
第 13 回目	6月5日(金) 12:30-13:10 B104 教室	インターンシップマナー講座 【講師】山田有梨江氏(株式会社マイナビ) 参加者 28名
第 14 回目	6月5日(金) 13:20-14:50 B104 教室	インターンシップマナー講座 【講師】山田有梨江氏(株式会社マイナビ) 参加者 16名
第 15 回目	6月12日(金) 13:20-14:50 B104 教室	インターンシップ選考対策講座 【講師】香田祐介氏(株式会社マイナビ) 参加者 41名
第 16 回目	6月12日(金) 15:10-16:40 B104 教室	インターンシップ選考対策講座 【講師】香田祐介氏(株式会社マイナビ) 参加者 35名
第 17 回目	6月18日(木) 12:30-13:10 F256 教室	インターンシップE S対策 【講師】隆矢一朋氏(株式会社ダイヤモンド・ヒューマンリソース) 参加者 18名
第 18 回目	6月18日(木) 13:20-14:50 F256 教室	インターンシップE S対策 【講師】隆矢一朋氏(株式会社ダイヤモンド・ヒューマンリソース) 参加者 12名
第 19 回目	6月19日(金) 13:20-16:40 B104 教室	自己理解ガイダンス 【講師】林田雄太氏(株式会社リクルートキャリア) 参加者 9名
第 20 回目	7月3日(金) 13:20-16:40 B208 教室	企業理解ガイダンス 【講師】林田雄太氏(株式会社リクルートキャリア) 参加者 3名
第 21 回目	7月7日(火) 12:50-14:50 B201 教室	グループディスカッション実践セミナー 【講師】田中美恵(発達科学部キャリアサポートセンター) 参加者 12名
第 22 回目	7月17日(金) 12:50～13:20 B104 教室	グループディスカッション実践セミナー 【講師】田中美恵(発達科学部キャリアサポートセンター) ※大雨洪水警報発令により中止
第 23 回目	7月17日(金) 13:30～14:50 B104 教室	グループディスカッション実践セミナー 【講師】田中美恵(発達科学部キャリアサポートセンター) ※大雨洪水警報発令により中止
第 24 回目	7月21日(火) 17:00-18:30 B104 教室	留学生就職相談会 【講師】田中美恵(発達科学部キャリアサポートセンター) 参加者 16名
第 25 回目	7月28日(火) 17:00-19:00 B210 教室	留学生就職相談会 【講師】田中美恵(発達科学部キャリアサポートセンター) 参加者 6名
第 26 回目	8月27日(木) 13:00-14:30 A325 教室	自己PR・志望動機・面接 ブラッシュアップ講座 【講師】金崎康晴氏(株式会社リクルートキャリア) 参加者 6名



第 27 回目	9月1日(火) 11:00-16:30 大会議室	就活で悩むあなたのための個別相談会 【講師】株式会社ダイヤモンド・ヒューマンリソース大阪支社 参加者 8名
第 28 回目	10月9日(金) 12:30-16:40 B108教室	就活準備ガイダンス 【講師】香田祐介氏(株式会社マイナビ) 参加者 31名
第 29 回目	10月30日(金) 15:00-17:00 B104教室	実践型仕事研究講座 【講師】間瀬清吾氏(株式会社マイナビ) 参加者 69名
第 30 回目	11月4日(水) 13:00-14:30 D-ROOM	内定者の体験談シリーズ【民間企業】 【講師】田中美恵(発達科学部キャリアサポートセンター) 参加者 2名
第 31 回目	11月5日(木) 13:20-14:50 B104教室	書ける!選考を突破する!エントリーシート対策講座 【講師】香田祐介氏(株式会社マイナビ) 参加者 16名
第 32 回目	11月9日(月) 13:00-15:00 D-ROOM	内定者の体験談シリーズ【心理・福祉職】 【講師】田中美恵(発達科学部キャリアサポートセンター) 参加者 3名
第 33 回目	11月16日(月) 13:20-16:40 D-ROOM	内定者の体験談シリーズ【国家・地方公務員】 【講師】田中美恵(発達科学部キャリアサポートセンター) 参加者 12名
第 34 回目	11月19日(木) 13:20-14:50 B104教室	プレゼンテーション講座 【講師】林田雄太氏(株式会社リクルートキャリア) 参加者 4名
第 35 回目	11月20日(金) 17:00-18:30 D-ROOM	内定者の体験談シリーズ【大学院生】 【講師】田中美恵(発達科学部キャリアサポートセンター) 参加者 1名
第 36 回目	1月12日(火) 12:30-13:00 B104教室	グループディスカッション実践セミナー 基本編 【講師】田中美恵(発達科学部キャリアサポートセンター) 参加者 34名
第 37 回目	1月12日(火) 13:20-14:50 B104教室	グループディスカッション実践セミナー 実践編 【講師】田中美恵(発達科学部キャリアサポートセンター) 参加者 13名
第 38 回目	1月14日(水) 13:20-14:50 B203教室	本番まで残り1ヶ月!面接対策ガイダンス 面接のポイント 【講師】林田雄太氏(株式会社リクルートキャリア) 参加者 25名
第 39 回目	1月14日(水) 15:10-16:40 B203教室	本番まで残り1ヶ月!面接対策ガイダンス 面接トレーニング 【講師】林田雄太氏(株式会社リクルートキャリア) 参加者 6名
第 40 回目	1月17日(日) 13:30-15:30 梅田MBA教室	合同グループディスカッション 京都大学・神戸大学 1部 【講師】田中美恵(発達科学部キャリアサポートセンター) 参加者 神戸大学22名 京都大学28名
第 41 回目	1月17日(日) 16:00-18:00 梅田MBA教室	合同グループディスカッション 京都大学・神戸大学 2部 【講師】田中美恵(発達科学部キャリアサポートセンター) 参加者 神戸大学24名 京都大学5名 他大学7名

第 42 回目	1 月 19 日 (火) 12:30-13:00 B208 教室	グループ面接対策実践セミナー 基本編 【講師】 田中美恵 (発達科学部キャリアサポートセンター) 参加者 23 名
第 43 回目	1 月 19 日 (火) 13:20-14:50 B208 教室	グループ面接対策実践セミナー 実践編 【講師】 田中美恵 (発達科学部キャリアサポートセンター) 参加者 16 名
第 44 回目	1 月 21 日 (木) 12:30-13:00 B104 教室	グループディスカッション実践セミナー 基本編 【講師】 田中美恵 (発達科学部キャリアサポートセンター) 参加者 24 名
第 45 回目	1 月 21 日 (木) 13:20-14:50 B104 教室	グループディスカッション実践セミナー 実践編 【講師】 田中美恵 (発達科学部キャリアサポートセンター) 参加者 24 名
第 46 回目	2 月 10 日 (水) 13:20-17:20 発達科学部内	神大学内 業界研究セミナー in 発達科学部 【講師】 田中美恵 (発達科学部キャリアサポートセンター) 参加者 96 名
第 47 回目	2 月 17 日 (水) 13:20-14:50 A325 教室	ES・面接対策実践講座 エントリーシート実践 【講師】 隆矢一朋氏 (株式会社ダイヤモンド・ヒューマンリソース) 参加者 13 名
第 48 回目	2 月 17 日 (水) 15:10-16:40 A325 教室	ES・面接対策実践講座 面接対策実践 【講師】 隆矢一朋氏 (株式会社ダイヤモンド・ヒューマンリソース) 参加者 13 名
第 49 回目	2 月 19 日 (金) 12:30-13:10 B104 教室	就職活動準備総まとめ 就職活動の進め方編 【講師】 香田祐介氏 (株式会社マイナビ) 参加者 23 名
第 50 回目	2 月 19 日 (金) 13:20-14:50 B104 教室	就職活動準備総まとめ 選考対策編 【講師】 香田祐介氏 (株式会社マイナビ) 参加者 26 名
第 51 回目	2 月 24 日 (水) 13:30-15:30 梅田 MBA 教室	合同グループディスカッション 神戸大学・甲南大学 1 部 【講師】 田中美恵 (発達科学部キャリアサポートセンター) 参加者 23 名
第 52 回目	2 月 24 日 (水) 16:00-18:00 梅田 MBA 教室	合同グループディスカッション 神戸大学・甲南大学 2 部 【講師】 田中美恵 (発達科学部キャリアサポートセンター) 参加者 18 名
第 53 回目	2 月 29 日 (月) 13:30-15:00 B104 教室	神戸大学 OB 訪問会 (富士通) 【講師】 富士通株式会社 参加者 23 名
第 54 回目	3 月 10 日 (木) 13:00-14:30 B208 教室	グループ面接対策実践講座 1 回目 【講師】 田中美恵 (発達科学部キャリアサポートセンター) 参加者 9 名
第 55 回目	3 月 10 日 (木) 14:30-16:00 B208 教室	グループ面接対策実践講座 2 回目 【講師】 田中美恵 (発達科学部キャリアサポートセンター) 参加者 6 名
第 56 回目	3 月 14 日 (月) 14:00-15:30 B104 教室	神戸大学 OB 訪問会 (リコー) 【講師】 株式会社リコー 参加者 1 名

第 57 回目	3 月 21 日 (月) 13:30-15:30 梅田 MBA 教室	合同グループディスカッション 神戸大学・京都大学 1 部 【講師】 田中美恵 (発達科学部キャリアサポートセンター) 参加者 21 名
第 58 回目	3 月 21 日 (月) 16:00-18:00 梅田 MBA 教室	合同グループディスカッション 神戸大学・京都大学 2 部 【講師】 田中美恵 (発達科学部キャリアサポートセンター) 参加者 24 名

#### 平成 27 年度 公務員対策セミナー

第 1 回目	6 月 5 日 (金) 15:10-16:40 B104 教室	公務員試験対策ガイダンス 2015 【講師】 安藤利久氏 (東京アカデミー) 参加者 20 名
第 2 回目	6 月 11 日 (木) 15:10-16:40 B104 教室	心理・福祉系公務員 家庭調査官を目指そう 【講師】 忠峯輝政氏 (LEC 専任講師) 参加者 13 名
第 3 回目	6 月 18 日 (木) 15:10-16:40 F256 教室	これから始める面接対策 【講師】 坪倉直人氏 (LEC 専任講師) 参加者 12 名
第 4 回目	11 月 6 日 (金) 12:30-14:50 D-ROOM	国立大学職員として働くことを考える！ 【講師】 神戸大学職員・東京アカデミーアドバイザー 参加者 8 名
第 5 回目	11 月 24 日 (火) 15:10-16:40 B208 教室	心理・福祉系公務員, 家庭調査官を目指そう！ 【講師】 忠峯輝政氏 (LEC 専任講師・元家庭裁判所調査官) 参加者 4 名
第 6 回目	11 月 27 日 (金) 13:30-15:00 B201 教室	公務員試験ガイダンス 2015 秋 【講師】 東京アカデミー 受験アドバイザー 参加者 18 名
第 7 回目	12 月 3 日 (木) 15:10-16:40 B104 教室	60 分でわかる！公務員試験のすべて 【講師】 坪倉直人氏 (LEC 専任講師) 参加者 10 名

(キャリアサポートセンター運営委員会委員長 澤 宗則)

#### 6.1.2. 学振特別研究員申請支援

学生委員会の主催により、「学振特別研究員への応募のススメ」と題したセミナーを平成 27 年 4 月 8 日 (水) に開催した。

研究科長・岡田章宏教授の挨拶と激励の言葉に始まり、副研究科長・青木茂樹教授より特別研究員制度の概要についての説明、ついで稲垣成哲教授から審査委員経験を踏まえた申請書作成やヒアリングなどに関するアドバイスがなされた。その後、人間発達環境学研究科で採用されている特別研究員 2 名 (DC2) による経験談や留意点などの紹介がなされた。説明会には 20 名 (博士課程院生 14 名, 前期課程院生 5 名, 学部生 1 名) の学生が参加した。参加者のモチベーションは非常に高く、特に申請書の書き方に関して活発な質疑応答が行われた。なお、平成 27 年度特別研究員採用者は、新規で 5 名 (PD1 名, DC11 名, DC22 名) であった。

○「学振特別研究員への応募のススメ」

- ・日時：4 月 8 日 (水) 16 時 00 分～17 時 30 分
- ・場所：発達科学部 大会議室

16:00 - 16:01 開会の辞 (学生委員長 吉田圭吾 教授)

16：01 - 16：04 研究科長挨拶（研究科長 岡田章宏 教授）  
16：04 - 16：09 プログラムの説明と講師紹介（学生委員長 吉田圭吾 教授）  
16：10 - 16：25 特別研究員制度のあらましと本研究科の現状（副研究科長 青木茂樹 教授）  
16：26 - 16：41 審査・選考の実際－審査・経験者の立場から（稲垣成哲 教授）  
16：41 - 16：49 質疑応答  
16：50 - 17：05 申請の実際－応募者の立場から（1）（人間発達専攻学び系講座）  
17：06 - 17：21 申請の実際－応募者の立場から（2）（人間発達専攻学び系講座）  
17：21 - 17：30 質疑応答  
17：30 閉会の辞

## 6.2. 卒業・修了後の進路

平成 27 年度の発達科学部及び大学院人間発達環境学研究科修了生の進路は以下の通りである。なお、産業別就職者数、大学院進学者数などの詳細は『資料編』に記載した。

平成 27 年度 発達科学部学部生

(単位：人・%)

区 分	a 進学者	a/g 割合	就職者						f その他	f/g 割合	a+f g 計
			b 企業	c 公務員	d 教員	e その他	b+c+d +e 計	e/g 割合			
人間形成学科	26	25.74	32	8	16	3	59	58.42	16	15.84	101
人間行動学科	2	4.00	32	6	2	4	44	88.00	4	8.00	50
人間表現学科	13	28.89	22	0	1	1	24	53.33	8	17.78	45
人間環境学科	29	29.59	32	12	9	2	55	56.12	14	14.29	98
計	70	23.81	118	26	28	10	182	61.90	42	14.29	294

※その他の内訳 一時的な仕事に就いた者 14 (うち講師等 12) 就職活動継続 7 公務員受験 4  
進学・就職希望なし 1 教員採用受験 2 進学希望 5 フリー 2 不明 4 未定 3

平成 27 年度 人間発達環境学研究科博士課程後期課程

(単位：人・%)

区 分	a 進学者	a/g 割合	就職者						h その他	f/g 割合	a+f+h g 計
			b 企業	c 公務員	d 教員	e その他	b+c+d +e f 計	f/g 割合			
人間発達専攻		0.00			1		1	50.00	1	50.00	2
教育・学習専攻		0.00			1		1	50.00	1	50.00	2
人間行動専攻		0.00			3		3	75.00	1	25.00	4
人間表現専攻		0.00					0	0.00	1	100.00	1
人間環境学専攻		0.00					0	0.00	5	100.00	5
計	0	0.00	0	0	5	0	5	35.71	9	64.29	14

※その他の内訳：就職活動継続 5 非常勤講師 2 研究員 1 未定 1

平成 27 年度 人間発達環境学研究科博士課程前期課程

(単位：人・%)

区 分	a 進学者	a/g 割合	就職者						h その他	f/g 割合	a+f+h g 計
			b 企業	c 公務員	d 教員	e その他	b+c+d +e f 計	f/g 割合			
人間発達専攻	6	13.95	9	5	7	4	25	58.14	12	27.91	43
人間環境学専攻	2	5.00	24		7	1	32	80.00	6	15.00	40
人間表現専攻		0.00		1			1	100.00		0.00	1
計	8	9.52	33	6	14	5	58	69.05	18	21.43	84

※その他の内訳：就職活動継続 4 一時的な仕事に就いた者 5 (うち講師等 3) 公務員試験受験 1  
進学希望 2 主婦 1 科目等履修生 1 未定 2 帰国 2

(学生委員会委員長 吉田圭吾)

## 7. 研究

### 7.1. 今年度の特長

#### 7.1.1. 研究動向

##### (1) 本研究科教員の研究活動

本研究科における過去5年間の研究活動の実績は、下表のとおり、概ね順調に推移してきている。平成27年度の活動（KUIDをもとに調査）は、「論文」311、「著書等」75、「研究発表等」419となっており、昨年度の数字をやや下回ってはいるものの、総じて本研究科の研究活動は活性化しているといえる。

	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平均
論文	220	206	218	328	311	256.6
著書数	72	38	73	83	75	68.2
研究発表等	290	287	311	488	419	359

##### (2) 本研究科の共同研究

こうした個々の研究活動とは別に、研究科として推進する組織的共同研究もまた、これまで以上に活発な活動を展開している。詳細は後述に委ねるが、ここでは大まかな動きのみ紹介しておく。

#### 1. プロジェクト研究

平成24年度より3カ年にわたり科学研究費補助金（A）「多世代共生型コミュニティの創成に資するアクティブ・エイジング支援プログラムの開発」を受けて進められた「多世代共生型コミュニティの創成研究」は、今年度においても、鶴甲地区の住民を主に対象とした「アカデミックサロン」「連続講座」を引き続き開催しながら、「健康」「社会参加」「安全」に関わる諸課題を具体的に発見し、解決に向けた活動を広く展開している。その成果の一部は既に国内外の学会で報告されると同時に、いくつかの論考としても発表されている。また、本研究を基盤にした他部局との連携も模索され、システム情報学研究科との共同で申請した基盤研究（B）「都市部高齢化地域における住民ネットワーク形成過程の実験的検討」（平成27年度～平成29年度、研究代表者：増本康平准教授）が採択された。さらに、本研究科でのこの分野の研究基盤を強化するため、発達支援インスティテュートにアクティブエイジング研究センターを設置し（「1.3.3. 組織の改革」参照）、平成28年2月21日には、神戸大学百年記念館六甲ホールにて、同センターの設立を記念する国際シンポジウムを開催した（「1.3.1 国際シンポジウムの開催」参照）。

また、科学研究費補助金（A）「生活史法による臨床物語論の構築と公共化」を受けて進められる「ESDの基盤としてのライフヒストリーによる心理・教育支援」も、今年度が最終年にあたり、医学や教育にまたがる領域において顕在化する社会的諸問題の理解と解決にむけた心理社会支援プログラムを開発するため、開発国内外の研究者との共同研究を積極的に進めながら、その成果を広く発信した。2月27日・28日には、カナダ・ケベック大学からダニエル・デマレ（Danielle Desmarais）教授とパスカル・ガルバーニ（Pascal Galvani）教授を招き、本学において「第7回日仏ライフヒストリー研究国際シンポジウム－人生の決定的瞬間を描く！カイロス時間－」を開催した。

（独）新エネルギー・産業技術総合開発機構の戦略的次世代バイオマスエネルギー利用技術開発事業として採択された「藻類バイオ燃料事業に関する共同開発」は、高速増殖型ボトリオコッカス藻「榎本藻」からのオイル生産の実用化をとおしてバイオマスエネルギー利用技術にかかるベンチャー創成型産学共同プログラムを開発するものであるが、航空機向けバイオ燃料の量産に向けた社会的期待がますます高まっている。

高度教員養成プロジェクトは、知識基盤社会をリードする高度な能力を備えた教員の養成という現代的課題の解決に資するため、附属校園を活用したアクションリサーチ等実証的研究をとおして修士レベルでの高度教員養成プログラムを開発するもので、平成24年度文部科学省特別経費を受けて開始された。今年度も、

優れた研究者を招聘したセミナーを多数開催し研究内容を深化させると同時に、国内外の諸学会での報告を積極的に行いその成果の発信を行った。

## 2. 共同研究シーズの支援

本研究科では、研究科理念の実現と目標の達成に向け複数の教員が共同で実施する分野横断型学際研究を支援するため、「プロジェクト研究支援経費」「若手研究推進支援経費」「シンポジウム支援経費」という三つの支援経費を用意し、共同研究シーズの創出を促進している。本年度も、下記のとおり選定し、それぞれの共同研究の実施を支援した。

### ○「プロジェクト研究支援経費」

#### ① 研究課題：六甲山地における防災林機能を高めるエリアマネジメント

研究代表者：古川文美子

共同研究者：大野朋子，近江戸伸子，丑丸敦史，田畑智博，平山洋介

決定額：1000 千円

#### ② 研究課題：3.11 の被災地域住民とそのコミュニティにおけるリスク認知およびリスク対応行動解析の新たな手法開発に関する学際的研究

研究代表者：村山留美子

共同研究者：伊藤真之，津田英二，中川和道，森岡正芳

決定額：600 千円

#### ③ 研究課題：発達障害のある人に対する Dimensional Approach Model の検討

研究代表者：鳥居深雪

共同研究者：加藤佳子，吉田圭吾，木下孝司，伊藤篤，岡崎香奈

決定額：420 千円

### ○「若手研究推進支援経費」

#### ① 研究課題：地域高齢者を対象とした健康教室における住民ネットワーク形成の促進とネットワーク可視化による客観的評価

研究代表者：増本康平

共同研究者：木村哲也，古谷真樹

決定額：650 千円

#### ② 研究課題：初等教員養成教育におけるアクティブ・ラーニングの内容，方法，評価の調査

研究代表者：北野幸子

共同研究者：目黒強，川地亜弥子

決定額：1,000 千円

### ○「シンポジウム支援経費」

#### ① シンポジウム名：神戸大発エイジング研究の新たな将来像と可能性を探る

申請者：長ヶ原誠

決定額：700 千円

(人間発達環境学研究科長・発達科学部長 岡田章宏)

## 7.1.2. 学生の受賞

平成 27 年度における学部生の受賞は以下の通りである。

### 1) 受賞名：ポスター賞最優秀賞（生物多様性分野），第 63 回日本生態学会大会

受賞年月日：2016年3月23日

受賞理由：「環境 DNA の断片長による見た目の分解速度の違い」と題したポスター発表が特に優秀であると評価された。

2) 受賞名：第40回神戸市民美術展（彫刻部門）市長賞

受賞年月日：2015年2月12日

受賞理由：木と鉄を組み合わせた彫刻に、さらに着色を施し、生き生きとした独自の表現を作り上げた。

3) 受賞名：第14回KAJIMA彫刻コンクール模型入選

受賞年月日：2015年9月4日

受賞理由：プロも凌ぎを削る国際彫刻コンクールとして有名なコンペで200点近くの中から模型入選を果たした。

4) 受賞名：平成27年度神戸大学学生表彰

受賞理由：上記2点（神戸市民美術展市長賞、KAJIMA彫刻コンクール入選）の功績により、学生表彰規定により選ばれた。

5) 受賞名：島村楽器 アコースティックパラダイス2015関西ファイナル オーディエンス賞

受賞年月日：平成27年5月6日

受賞理由：自ら作詞作曲をした楽曲の演奏（ギター弾き語り）が、会場の観客に認められたため。

平成27年度における大学院生の受賞は以下の通りである。

1) 受賞名：「第41回こうべ市民美術展（洋画部門）神戸新聞社賞」

受賞年月日：2016年1月17日

受賞理由：山本法子作「無題」が応募総数196作品のうち、色彩表現、画面構成が優秀と判断され受賞した。

2) 受賞名：Best Student Poster Award, The 12th International Congress of Physiological Anthropology 2015.10.27-30

受賞年月日：2015年10月30日

受賞理由：「Anti-stress Effects of Short-term Fasting in Japanese Female Students」と題する研究内容と発表が優秀であると評価されたため。

3) 受賞名：Discussion Meeting on Polymer Crystallization ポスター賞

受賞年月日：2015年12月24日

受賞理由：2015年12月15日－20日 Pacifichem2015 の New Frontiers in Polymer Crystallization セッションにおいて「Crystallization and Thermal Behavior of Polly ( $\epsilon$ -caprolactone) and its Copolymers Studied by Vibrational Spectroscopy」と題したポスターが優秀だと評価されたため。

4) 受賞名：少人数のための創作ダンスコンクール「アーティスティック・ムーヴメント・イン・トヤマ 2015」特別賞

受賞年月日：2015年9月13日

受賞理由：ダンス作品『座セル女』が、振付・表現力・技術の面で優秀であると評価されたため。

5) 受賞名：ポスター賞最優秀賞（保全分野）、第63回日本生態学会大会

受賞年月日：2016年3月23日

受賞理由：「環境 DNA 分析手法を用いたオオサンショウウオ（*Andrias japonicus*）の広域調査」と題したポスター発表が特に優秀であると評価された。

（学生委員会委員長 吉田圭吾）

## 7.2. 学術 WEEKS

大学院 GP「正課外活動の充実による大学院教育の充実化」および研究科国際交流活動促進の一環として



2008年に始められた学術 WEEKS も 2015 年で 8 年目を迎えた。本年度は 10 の企画が学内外の会場において意欲的に取り組まれた。各企画では教員、院生、および学部生が立案、準備、運営を自主的に行い、日ごろの研究教育成果を公に披露したり、逆に外部の専門家を交えて更なる深化をはかるよい機会となった。

ほぼすべての企画の終了した 2 月 18 日に全企画運営者による報告交流会を開催した。日ごろは特定専門分野に特化して研究を行う院生がそれぞれの成果に接して、自らの研究活動を相対化し、さらに異分野との協同や融合の可能性に対する気づきを持つ機会となった。多領域の研究分野を抱える人間発達環境学研究科の特長を生かした活動だと言える。

個別の企画内容に関しては以下を参照していただきたい。

(学術 WEEKS2015 ワーキンググループ主査 太田和宏)

## 7.2.1. 学術 WEEKS の各事業・セミナー

### (1) 企画名：神戸ビエンナーレ 2015 / 兵庫県立美術館と神戸大学発達科学部の相互協力協定事業『Site Specific Dance Performance #5 動物の謝肉祭』

日程・会場：2015 年 10 月 25 日（日）15:00～16:00 兵庫県立美術館・屋外大階段

企画者：関典子（人間発達専攻）

概要：「神戸ビエンナーレ / 兵庫県立美術館と神戸大学発達科学部の相互協力協定事業」第 5 弾（2009『GATE』, 2011『KIRA』, 2013『春の祭典』, 2015『#4』）。今回は、サン＝サーンス作曲『動物の謝肉祭』に挑み、「場の固有性」をテーマに、安藤忠雄建築を活かし、異化するパフォーマンスを上演した。総合演出・監修・振付を関が務め、振付・出演は本学学生 15 名（院生・学部生）。スタッフとして本学学生 17 名（院生・学部生）、プロ 3 名（音響・映像撮影）、美術館スタッフ 3 名が関わった。

約 3 ヶ月間のリハーサルの後、公演当日は秋晴れの下、大階段を埋め尽くす約 400 名の観客に見守られ、盛況のうちに終了した。過去の開催をご覧いただいた方、初見の方など様々であったが、終演直後から「次回が楽しみ」「是非とも継続を期待する」などの声を多数いただき、美術館とも「アートを通じた社会貢献・地域活性化を目指し、今後も協定・連携事業を推進していきましょう」との意思確認を行った。

(人間発達専攻 関典子)

### (2) 企画名：香港と日本の保育～実践を見て語り合う会～

大学院生、学部生が研究の企画や運営、発表等に参画し、学術交流を図ることを意図し、香港行政関係者と幼稚園教諭と本学大学院生と学部生が、日本の保育実践についてフィールドワークを行った。その後、日本の保育についての講義を英語で聴き、両国の保育について議論した。他国から見た日本の保育実践、他国の保育実践について、行政、現場双方の面から対話する機会となった。

日時：2015 年 10 月 26 日、27 日

参加者：香港教育省および幼稚園長計 44 名、本学学生 10 名

目的：香港の幼児教育についての知識を深めるとともに、自国の幼児教育の実態を再認識する。

国内外の保育に目を向ける機会の提供。

将来幼児教育に関わる学生・院生の興味・関心の拡大と意識向上。

英語を使ったコミュニケーション力の向上。

内容：施設見学フィールドワーク

香港行政関係者と幼稚園教諭、幼児教育に関心のある学生・院生共同で以下の施設を訪問した。なお、訪問先は、①神戸大学附属幼稚園（26 日）、②神戸市立神戸幼稚園（26 日）、③神戸大学大学院人間発達研究科サテライト施設「あーち」（27 日）である。

日本の保育制度についての英語による講和

日本の保育制度、保育者養成制度、実践について、また、子ども子育て新システムについて、PPT を

活用しながら講話を行った（登壇者：北野幸子）。

香港と日本の保育に関するディスカッション

フィールドワークでの学びをもとに、比較的な観点から、日本と香港それぞれの国の保育制度、保育者養成制度、そして保育実践についてディスカッションを行った。

成果：香港と日本の保育制度、養成度、特に実習教育の在り方などについて、具体的なディスカッションを通じて、類似点と相違点を学んだ。本学学部生と院生は、ディスカッションを通して両国の保育実践について話し合う中で、国際的に幼児教育を考える姿勢が身についた。

さらには、他国の幼児教育の実態に触れることで、自国の保育についての理解や考えを深める機会となった。

なお、同学術 WEEKS の模様は、以下のように、本学 HP 等に掲載されている。

[http://www.kobe-u.ac.jp/info/public-relations/student-volunteer/2015\\_11\\_04\\_01.html](http://www.kobe-u.ac.jp/info/public-relations/student-volunteer/2015_11_04_01.html)

発達科学部・人間発達環境学研究科独自の取り組み「学術 WEEKS」  
—海外の教育機関と神戸大学生との交流—

2015年11月04日

発達科学部・人間発達環境学研究科が毎年行っている「学術 WEEKS」。国内外の学術交流活動を通して、大学院生・学部生が視野を広げ、研究会の企画・運営・発表などの技能習得に資することを目的として行われています。

今回取材したのは「香港と日本の保育～実践を見て語り合う会～」という人間発達環境学研究科・人間発達専攻の北野研究室（乳幼児教育保育学研究室）企画のプログラム。香港教育省や幼児教育関係者44人が来日し、北野研究室の皆さんや大学院生とともに、日本の幼児教育の現場（神戸大学附属幼稚園、神戸市立神戸幼稚園）を視察した後、日本の教育についてのプレゼンテーション、互いの教育についてディスカッションするというプログラムでした。

（後掲付録1）

北野研究室では、一昨年にタイ、昨年にシンガポールの乳幼児教育・保育の関係者が本学を訪問。学生との交流を通して、国際的な乳幼児教育・保育について学ばれました。工夫されている点について、北野幸子准教授は「神戸大学の乳幼児教育・保育学研究室は、この分野において日本で最も伝統と実績があるところの一つ。ここでしか提供できないような内容を企画し、例年、海外の教育機関の関係者などが訪問しています。海外留学せずとも、この機会を活かして本学学生が国際交流を持つ、そういった財産が本学にはあります。神戸大学には、旧七帝大にはない幼稚園と小学校の教員養成課程があり、国際的にも国内的にも、学生のレベルも最も高いと思っています。だからこそ、企画・準備など、教員側がすべて準備せず、学生が主体となって専門特化した国際交流を進めていけるように心がけています」と話しました。

学生からは「もっと英語を勉強しなければと思いました」「企画・運営など、慣れないことだったので疲れましたが、香港の方の熱意は刺激になりました」といった声がありました。

○取材を担当した学生のコメント：

人間発達環境学研究科 増田潤

「発達科学部で学術 Weeks が行われていたことは知っていましたが、自分の専攻では全く関わってこなかったもので、取材をしていて新鮮。海外の方と交流することの大切さを確認するだけでなく、自分たちの研究を改めて整理する機会にもなるのかなと感じました。とにかく香港の方のエネルギーというか、パワーが伝わってきました。これからも機会があればのぞいてみたいと思います」

カメラ：人間発達環境学研究科博士課程前期課程1年 伊藤 奈月  
(北野幸子)

(3) 企画名：演劇と心理学ースタニスラフスキー・システムによる心身の開発

日時・会場：2015年10月31日(土) B104教室

外部講師：堀江新二 (TCL (シアター・コミュニケーション・ラボラトリー) 所長, 大阪大学名誉教授)；

八木延佳 (TCL ドラマティーチャー, 関西学院大学非常勤講師)；田島充士 (東京外国語大学准教授)

参加者：35名 (内訳：実践研究者10名 大学院生15名 学部生5名 他研究科院生2名 他大学院生3名)

目的と内容：このシンポジウムは、スタニスラフスキーが開発した俳優教育システムの基本的な考え方を知り、心理学と演劇との交差領域を探求することを目的として企画した。

スタニスラフスキーは俳優を育てる独自の教育システムを開発し集大成した。このシステムが日本に紹介されたのは1950年代に遡るが、さまざまな曲解があり、理論と実践の持つ射程について、未知の領域が残っている。『俳優の仕事』全3部の翻訳を初めて完成させた堀江新二氏らのグループは、本邦で初めてこのシステムにもとづいた演劇学校を設立し、俳優を育てている。身体的行動と筋肉の解放を通して、役の感情と

無意識を発見していく方法は単に演劇表現の実践理論ではなく、人が人と十分に交流し、生きるための方法と理論である。ここに心理学、教育学、行動科学との交差領域が拓かれる。またヴィゴツキー心理学形成にスタニスラフスキーの理論がどのような影響を与えたか、解明されるべき課題が多い。

このシンポジウムでは、スタニスラフスキー・システムの基本的なワークを実際に行いながら、演劇と心理学の交差領域を探求した。演劇ワークショップを含むシンポジウムを通じて、本研究科の心理学、教育学領域と表現系領域に橋渡しを行う実質的な議論の場を展開し、人間発達専攻の目的に連動した学際的な教育研究を触発するものとなった。また、未開拓の領域を協働的に作っていく参加型のシンポジウムは、院生学生への教育的な効果も大いにあった。

なおこの催しは、平成 27 年度科学研究費補助金 基盤研究 (A)「生活史法を基盤とした臨床物語論の構築と公共化」(代表:森岡正芳)の助成を受けた。

(森岡正芳)

#### (4) 高校生・私の科学研究発表会 2015

日程: 2015 年 11 月 15 日 (日)

企画者: 蛭名邦禎, 伊藤真之 (人間環境学専攻), 田中成典 (人間環境学科)

概要: 兵庫県および周辺地域で科学課題研究に取り組む高校生に対して、サイエンスショップと兵庫県生物学会との共催により、研究発表・交流会を開催した。この取り組みは、高等学校における研究・探求活動の発展を支援するとともに、サイエンスショップの理念である市民の科学に関わる活動の広がりにつなげることを目的としている。

高校生による口頭発表 8 件とポスター発表 18 件があり、口頭発表は午前と午後の 2 部に分けて行われ、その間にポスター発表と交流会が行われた。兵庫県から 9 校のほか、大阪府から 2 校の参加があった。発表内容は、生物、地学、物理、化学、環境、防災など多領域にわたり、発表に対して高校生同士の活発な質疑応答や、高校・大学の教員、大学生などから質問や助言がなされ、上記の目的に添った成果を収めた。

なお、サイエンスショップより、生物分野以外の領域の優れた発表として、加古川東高校 地学部 (真砂土班) の「花崗岩の風化が及ぼす土砂災害への影響」に優秀賞が授与された (生物分野については兵庫県生物学会が表彰した)。

参加人数は 123 名であった (内訳: 高校生 80 名, 高校教員 14 名, 大学生 11 名, 大学教職員 5 名, その他の参加者 13 名)。

(人間環境学専攻 伊藤真之)

#### (5) 音楽を通して異文化を知る

本企画の狙いは普段あまり知られることがないイランの音楽および文化について親しむ機会にすると同時に、特に後半のシンポジウムで イラン・インド・アメリカなど海外経験豊富な出演者に「遠い異文化に直接接触れること」というテーマで、「実際に出向いて、歩いて、自らの五感で感じる異文化」が、どのように体験されるものなのかを語ってもらうことであった。招聘した国内外の研究者は次のとおりである。

・北川修一 (タール奏者) ・林原慶子 (セタール奏者) ・清水ジョセフ怜雄 (れお) (フリー打楽器奏者)  
上記 3 名は日本人としてイラン音楽を専門に学んだ演奏家であり、いずれも海外経験も多く有している。企画に関わった院生は、人間発達専攻表現系の妹尾輝枝, 山村磨喜子, 学部生の高嶺羽であり、2015 年 11 月 16 日午後 6 時半より C 棟 101 教室において実施した。

まず前半は、報告者である表現学科教員の谷正人も加わる形でイランの楽器紹介や音楽の実演を行った。そして第 2 部はゲストの 3 名から各人の音楽経験、特に当初わからなかった音楽がどのようなことをきっかけにわかるようになっていったのか、自分自身の変化がどのように促されたのかについてパワーポイントを使ったスライドによって講演を行ってもらった。北川氏はイランの少数民族との交流から得た音楽理解、林

原氏はイランの古典詩の世界がいかに音楽と密接に関連しているか、清水氏は、アメリカ社会の中でのイラン系移民の音楽活動についてそれぞれ発表・報告を行った。そこでのキーポイントは報告者の理解では

- ・ただ単にわかるという事ではなく、「不」理解体験をも含めた異文化体験
- ・単なる海外体験ではなく「遠い異文化」に音楽というものを通していかに「直接」触れるのか

ということであったように思う。

最期に本イベントの成果についてであるが、当日は大阪大学の外国語学部の教員のゼミも参加しておりC 101のキャパを超える人数で急遽椅子も追加配置するほどであった。また本イベントの目論見はインターネット上にある情報を得ることだけで満足するのではなく、現場に出て実際に触れるということの豊かな学びのありようを、海外経験豊富な出演者たちに語ってもらうことで学生たちの視線を広く海外に向けさせることにあったわけだが、直接楽器を見せることや音楽の実演は学生たちの興味を多く惹いたようで、終了後も各出演者たちと最終バスの時間ぎりぎりまで交流する様子が見て取れた。

(人間発達専攻 谷正人)

## (6) 音楽教育シンポジウム

### 企画概要

内容：音楽教育シンポジウム-教育の場における音楽の喜びとは-

生徒たちが日々喜びを体験しているはずの学校の音楽の時間にもかかわらず、音楽の授業時間は、学習指導要領の改訂の度に減ってきている。さらに、他の芸術系教科との統合も考えられており、「音楽」という教科の存在意義が問われている。

本シンポジウムでは、教育現場の第一線で活躍している教師や教育委員会指導主事を迎え、なぜ学校において音楽の授業に喜びが生まれるのか、またなぜ必要なのか、現場での経験もふまえながら議論を深め、教員志望の学生や地域の父兄と共に音楽の意義について考える。

成果：小、中、高校の教育現場で活躍する現職教員が、教員志望の学生による問題提起にこたえ、教師になろうとした動機や授業実践について発表。そこから、教育に従事する喜びや悲しみも含めた問題点が浮き彫りとなり、シンポジウム参加者全員が問題意識を共有することで、音楽教育について世代を超えて本音で語り合える場を設けることが出来た。

(後掲付録2)

参加人数：約40人

☆学術 Weeks 2015 (タイムスリップコンサート) の報告は以下のとおりです。

### 企画概要

内容：タイムスリップコンサート～運命のもたらすものとは～

多くの人が、何の疑問も抱かずインターネットで手軽に音楽を視聴するだけでわかった気になり、音楽を真に理解する意味を見失っている現代。

19世紀ヨーロッパにおいては演奏録音など存在せず、心身の能力を総動員して自らの手で音楽を創造せざるを得なかった。しかしそうであるからこそ、その時代は現代には見られない、豊饒な生命力あふれる表現が、音楽のあらゆる分野で繰り広げられていた。このような時代の、音楽に向き合う姿勢を現代にのみがえらせ、もう一度原点に帰って見つめ直そうとするのが、このコンサートの趣旨。

演奏する楽曲の背景と音楽について人間の生と死を絡めて話し、神戸大学教育学部卒業生との演奏や神戸大学発達科学部4年ゼミ生の演奏を通して、音楽本来の楽しみや音楽が示唆する真の幸福を地域や家庭で共有する、新たな希望の源を探求する。

成果：終演後に回収出来たアンケート用紙は45枚。来場者の多くが次回開催を希望しており、中には年6回開催してほしいとの声もあった。

アンケートの自由記述欄には、「ユニークで人生観をおりませた曲の説明と美しい音色のピアノで楽しいひとときを過ごすことが出来た。」「曲の解説を聞いて良く理解でき、今まで聞き流してきた曲がとても親しく感じられ、クラシックが好きになってきた。」「よくぞ今日聴きに來れたものだとこの出会いに感謝」「フルコースを味わったような充足感」等の感想が寄せられ、来場者に音楽の喜びを伝えることが出来たと同時に、今後への期待の大きさも実感できた。

(後掲付録3)

参加人数：約60人

(人間発達専攻 坂東肇)

#### (7) 発達障害者が大学で学ぶということ～多様性を生み出す現場の葛藤から考える～

日程：2015年12月23日(水)

企画者：学生企画，指導教員：津田英二(人間発達専攻)

概要：障害のある人たちが大学で学ぶ機会にアクセスすることが、大学教育全体にポジティブな影響を与える可能性を探った。そもそも大学を含む障害学生支援の現場においては、これまで可視化されにくかった諸課題が生起しており、その課題を探ることで、様々な人間の多様性を豊かにする大学教育のあり方を考えていきたいという発想から、本セミナーは企画された。

登壇者は、日韓の障害学生支援の比較を神戸大学大学院人間発達環境学研究科の大学院生である金丸彰寿氏、張主善氏が行い、日韓の事例紹介をそれぞれ、富山大学学生支援センターの桶谷文哲氏、韓国ナザレ大学自立統合研究所の金鐘敏氏が行った。また、大阪教育大学総務企画課の上村明氏、韓国ナザレ大学学生のジョン・ドダム氏、パク・セウォン氏が、障害当事者の視点から発言した。

また、日韓の学生を対象に、大学で学ぶことの意義をテーマとした英語でのワークショップを行い、交流を深めた。

当日の参加者は60名程で、うち20名は、韓国ナザレ大学の学生や教職員及びソウル市立知的障害人福祉館職員ら韓国からの訪問者であった。

(人間発達専攻 津田英二)

#### (8) 「共生教育」を考える—スウェーデンから学ぶ

人間発達環境学において、多様な人間相互の「共生」やそれを促す「共生教育」の具体化は重要な課題である。スウェーデンは、義務教育段階において、1960年代から「共生」を教育内容に据えた教科横断型カリキュラムを先駆けて実現している。戸野塚厚子教授(宮城学院女子大学)は、「スウェーデンの義務教育における「共生」(Samlevnad)のカリキュラムに関する研究」で2012年に博士学位を取得するとともに、2014年には著書にまとめている。スウェーデンにおける「共生教育」研究の第一人者をお招きして、「共生」並びに「共生教育」について理解を深めた。

日時：2016年1月29日(日曜日)13:30～17:30

場所：神戸大学発達科学部A棟2階「中会議室」

演題：スウェーデンの義務教育における「共生」のカリキュラム——“Samlevnad”の理念と展開

参加者数：15名(参加者の年代は20～60歳代。職種は研究者、教員、福祉職員、学生・院生など)

(人間発達専攻 渡部昭男)

#### (9) 近江学園開設(1946年)70周年「糸賀一雄」再考～さらにじっくりと深めよう～

近江学園開設70周年を迎える年に、その創設者である糸賀一雄の思想と実践についてじっくりと深化させることを趣旨とした。2014年度、糸賀一雄生誕百年にちなんで糸賀の「発達保障」思想と実践について

のシンポジウムを開催した。その第2弾である。糸賀の人物史、思想史を研究する二人の研究者を招聘して糸賀の思想と実践について講演してもらうとともに、特別報告として1968年鳥取での糸賀の講演「ミット・レーベン」の録音を紹介してもらった。

日 時：2016年2月20日（土曜日）12:30～17:00

場 所：神戸大学発達科学部 A 棟 2 階「大会議室」

講演①：糸賀一雄の研究—人と思想をめぐって 蜂谷俊隆氏（美作大学）

特別報告：『ミット・レーベン』～故郷・鳥取での最期の講義 國本真吾氏（鳥取短期大学）

講演②：愛と共感の教育—ある知的障害者施設の実践 富永健太郎氏（日本社会事業大学）

参加者数：18名（参加者の年代は20～60歳代。職種は研究者、福祉職員、学生・院生など）

（人間発達専攻 渡部昭男）

### 7.3. プロジェクト研究

#### 7.3.1 アクティブエイジング・プロジェクト（多世代共生型コミュニティの創成研究）

平成27年度は、1回のタウンミーティング、6回のアカデミックサロン、及び4回の連続講座を実施した。

##### 1) 第5回タウンミーティング「防災避難訓練」

平成27年10月12日（月・祝）、防災避難訓練を実施した。この防災避難訓練は、神戸市から発達科学部体育館が地震・風水害等による災害が発生した場合の避難所として指定されたことに伴い、地域の防災意識を高める目的で行われた。12時半過ぎに鶴甲地区の青色パトロールが広報を開始し、約100名の住民が発達体育館に集合、避難場所となっている体育館の場所を確認した

防災避難訓練に続き、大会議室にて神戸大学都市安全研究センター長の北後明彦先生から「鶴甲での避難所開設・運営の課題」というテーマの講演があり、その後、地域の防災に関して活発な質疑応答と意見交換会が行われた。参加者からは「避難所としての発達科学部の体育館には何が用意されているのか」、「いざ避難することになったら何を携えていけばいいのか」といった質問や、「避難所開設については地域住民と大学との協同も大切だと思う」といった意見が出された。

##### 2) アカデミックサロン

アカデミックサロンのテーマは、住民アンケート調査及びプロジェクトの住民サポーターからの要望等を踏まえ設定している。平成27年度実施のアカデミックサロンを以下の表に記す。各回とも20名～100名の住民が参加した。

平成27年度アカデミックサロン

	開催日	テーマ
第17回	平成27年6月28日	神戸大学大学院生企画 みんなでやろう！新しいあそび！
第18回	平成27年7月19日	講習会&みんなでラジオ体操
第19回	平成27年7月22・23日	熱中症を考える
第20回	平成27年9月28日	みんなで楽しもう！大学でひと味ちがうお月見会
第21回	平成27年12月13日	ニュートリノ振動について
第22回	平成28年2月27日	音でたどる山田耕筰 - 知られざるその人生 -

##### 3) 連続講座

平成27年度は4つのテーマの連続講座を開催した。

1. 連続講座 「園芸教室」：①平成27年5月23日 ②平成27年6月20日

③平成27年7月4日

2. 連続講座 「秋の園芸教室」：①平成27年9月19日 ②平成27年10月24日

③平成27年11月14日 ④平成27年12月5日

3. 連続講座 「めざせ、いつまでも現役 たのしい！！かんたん！健康教室」  
 : ①平成 27 年 11 月 15 日 ②平成 27 年 11 月 22 日 ③平成 27 年 11 月 29 日
4. 連続講座 「睡眠教室 3 月 18 日は春の睡眠の日、こころと眠りの深い関係」  
 : ①平成 28 年 3 月 9 日, 平成 28 年 3 月 16 日, 平成 28 年 3 月 23 日

4 年目を迎える本プロジェクトは、鶴甲地区の多くの住民に周知されてきた。また、住民約 10 名が、プロジェクト発足以来、プロジェクトのサポーターとして活動を行っている。サポーターは企画段階での役割だけでなく、鶴甲地区全戸に対してアカデミックサロン等に係るチラシを配布したり、住民への声掛けを行ったり、本プロジェクトの運営の一端も担っていることを特記したい。

昨年度の取り組みから、地域住民参加型のプログラム（音楽会や園芸教室、お月見会、体操教室など）を豊富に用意することによって、子どもから高齢者まで幅広い年代の地域住民が楽しく活動に参加できることが明らかとなった。また、アカデミックサロン等の取り組みは世代を越えた多様な交流を生み出すことに成功しており、互いに支え合う関係の土壌作りに貢献している可能性がうかがえた。

なお、本プロジェクトは、「平成 24-26 年度科学研究費補助金基盤研究 (A)」の一環で行われた研究プロジェクトである。この間、タウンミーティング、アカデミックサロン等に参加した住民は延 1500 人以上となる。これまで、3 回の住民アンケートにもご協力いただいたこともあり、3 年にわたる本プロジェクトの研究活動報告として、「いきいきと安心して暮らせる明日を、共に」というキャッチフレーズを記したリーフレット「鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト」を鶴甲地区の全戸に配布し、住民の皆さんへ研究成果を報告したことを付記する。

(副研究科長 岡田修一)

### 7.3.2. ESD の基盤としてのライフヒストリーによる心理・教育支援

27 年度このプロジェクトでは、第 7 回目 仏ライフヒストリー研究国際シンポジウムを企画し、実施した。実施内容は以下のとおりである。

語ることを方法とするライフヒストリー（ライフストーリー）に、心理学、教育学、社会学、人類学等さまざまな方面からの関心が集まっている。今回は、カナダ・ケベック大学モントリオール校より、ダニエル・デマレ (Danielle Desmarais) 教授とパスカル・ガルヴァーニ (Pascal Galvani) 教授を招いて、実践 = 研究方法としてのライフヒストリーについて議論をおこなった。今回のテーマは時間・記憶・語りである。

#### 【日程】

日時：2016 年 2 月 27 日 (土) - 2 月 28 日 (日)

場所：神戸大学発達科学部

会場：大会議室

日程：2 月 27 日 (土)

13:30 趣旨説明 末本誠 森岡正芳

13:45 基調報告 1 ダニエル・デマレ教授『伝記的な展開による、どのような時間性？—超現代の成人教育』(フランス語通訳有)

15:15 休憩

15:30 発題 1 「人生を想起すること—内観療法」真栄城輝明

16:30 引き続き 討議

17:50 終了

2 月 28 日 (日)

10:00 基調報告 2 パスカル・ガルヴァーニ教授『ライフストーリーと自己教育—年代記的時間とカイ



ロスの時間のあいだ』（英語通訳有）  
11：30 休憩  
11：45 発題2「内的生活史と語り」 野村晴夫  
12：45 昼食  
13：45 総括討議  
15：00 まとめ 末本誠・森岡正芳  
15：15 終了

### 【概要】

今回のシンポジウムでは、ガストン・ピノーが創始した自己教育（auto-formation）の実践のその後の展開が具体的詳細にわたって提示された。デマレより、小集団による自伝構成の実践について、グループの枠組み、作業のステップの紹介があった。「人は現在を生きるために、過去と未来を必要とする」（Marc Auge）。自己が自らの歴史の当事者主体になっていくこと、自己が再構成される。このプロセスが浮かび上がる。これをデマレは「時間の再結合」と呼んだ。

デマレは、個人そして自己主体（アイデンティティ）の危機という現代人の深刻な課題から自らの実践をふりかえる。時間再結合がどのように行われるのか、そこに介在する「伴走者」としての他者の役割が議論された。

日本側からは真栄城輝明 佛教大学教授より、「人生を想起するということ－内観療法」の講演があり、内観の創始者吉本伊信より受け継がれた内観道場での場面が、詳細に紹介された。人の苦悩がどうして生まれるのか。たとえば恨みという感情が、その人の人生を支配する。内観は面接が主ではない。語らなくてよい。自分を「調べる」そのあなたを尊重する。語りの実践に関わる文化歴史の違いに関わる興味深い議論が展開された。内観された身近な肉親の姿を思い起こし、語ること。なぜそしてどのように人は、自分の過去を語るのかについて、「語ることで出来事を歴史化していく行為」を総合的に議論した。

28日のパスカル・ガルヴァーニ講演「ライフヒストリーと自己教育－年代記的時間とカイロス時間」において、時間の再結合という課題がより深く議論された。グループの参加者は頻繁に、意味のある決定的な瞬間の細部を引き合いに出すということが発見された。この瞬間をガルヴァーニは「カイロスの瞬間」と呼ぶ。強烈で重要な瞬間が果たす自己教育過程の中での役割について、“行為の明示化”（explicitation）と呼ばれる現象学的手法を用いて分析を行っている。続いて“自己教育のカイロス”を探求するワークショップグループ”の実際について議論した。

その後、大阪大学 野村晴夫准教授による「内的生活史と語り」という話題提供は、心理臨床場面の出来事の語りにパターンに注目し、精緻な分析を行った研究発表が行われた。総括討議では、内的生活史と記憶、個人の家族史の記憶、過去についての世代継承的集合記憶についての議論が交わされた。語りの今プレゼントメント、文化的背景から出来事の意味の語り、想起とライフヒストリーの課題など、これまでの「臨床ナラティブアプローチ」とテーマ、内容、問題意識と交差する領域をさらに開発していきたい。

本シンポジウムは、平成27年度科学研究費補助金 基盤研究（A）「生活史法による臨床物語論の構築と公共化」による助成を受けて行われた。

（人間発達専攻 森岡正芳）

### 7.3.3. 都市部高齢化地域における住民ネットワーク形成過程の実験的検討

高齢者の孤立死（年間推計1万5000人；厚生労働省2009）や認知症徘徊による行方不明高齢者の増加（約1万人；警察庁、2013）、高齢独居・高齢夫婦のみ世帯（930万世帯；厚生労働省；2014）への緊急時や災害時の対応、といった高齢化による社会的問題も顕在化している。このような問題を解決し、高齢者が安心して生活する環境を整えるには、個々人の心身の健康だけでなく、個人の生活の場であるコミュニティにおけ

る住民同士の支え合い・助け合いが不可欠である。そのため、現在、多くの自治体で支え合い・助け合いの基盤となる地域住民のつながりの形成を目的とした取り組みが行われている。一方で、そのような取り組みの大きな課題として次の2点がある。

課題1) 住民交流を促すことを全面に出した取り組みでは、交流に関心のある住民の参加は期待できても、関心のない住民の参加は期待できない。

課題2) 住民交流を客観的に測定可能な指標がないため、取り組みの効果を実証することが困難である。

本プロジェクトはこの二つの課題の解決を目的としている。本年度は、鶴甲地区の高齢者を対象とし、課題1を解決するために、住民交流や地域参加への関心を惹起することを目的としたリーフレットを全戸配布した。また、課題2を解決するために、60歳以上の高齢者を対象とした健康教室を開催し、ウェアラブルセンサによる参加者間交流の定量化、及びネットワーク分析による交流の可視化をおこない、参加者交流のキーパーソンや孤立者の同定に成功した。またこれと並行して、新たなネットワーク解析手法の検討、開発をおこなった。

(人間発達専攻 増本康平)

### 7.3.4. 研究科支援共同研究

#### (1) 六甲山地における防災林機能を高めるエリアマネジメント

##### ◆プロジェクト内容

六甲山地は、急峻な地形に脆弱な地質であるが、山腹緑化や砂防工事によって居住可能範囲を拡大させてきた。しかし、地球温暖化に伴う気候変動によって従来以上にゲリラ豪雨や台風の災害リスクが高まっている。土木工学技術によって自然の脅威を抑え込む防災だけではなく、自然が持つ防災林機能を高めることで減災を図ることも重要である。本プロジェクト研究では、六甲山地で約半分を占める私有林の管理放棄の問題に注目し、森林整備による林分の種多様性や階層構造の維持が、防災林機能へどのような影響を与えているのかを定量的に提示することを目標とする。さらに、防災・減災の担い手としての森林ボランティアに注目し、環境保全と防災を融合したエリアマネジメントを学際的アプローチから構築することで六甲山地と地域社会の新たな共生の在り方を模索したい。

##### ◆平成27年度の活動内容

兵庫県林業会議や六甲砂防事務所などから六甲山における斜面崩壊箇所的位置情報や森林簿情報を収集し、所有形態、植生及び地形と斜面崩壊箇所との関係性を分析している。また年間2回のミーティングにおいて、プロジェクトメンバー内で情報共有・課題抽出を行った。その話し合いの結果やアドバイスをもとにして平成28年度科研費の挑戦的萌芽研究に同上のタイトル課題で応募した。本年度は、実際のフィールド調査まで至ることができなかったが、来年度は再度山の植生保存エリアと地域の有志で私有林の森林整備を実施している北区神付集落エリアを中心に植生調査・インタビュー調査を進めていく予定である。

(研究代表者 古川文美子)

#### (2) 3.11の被災地域住民とそのコミュニティにおけるリスク認知およびリスク対応行動解析の新たな手法開発に関する学際的研究

日本で2011年3月に発生した東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所事故(以降3.11と記載)は、発電所近隣の住民、放射性物質の飛散を受けた地域の市民のみならず、食品や廃棄物の流通等を介し全国の市民にリスクへの対応を迫った未曾有の事故であり、この事故への対応は現在も続いている。市民はそれぞれが被った客観的・主観的なリスクに対応し、日常生活の中で多様な形でこれらに対する判断を行っているところであり、特に被災地域在住者については、実際に放射線リスク等に対する身の周りの様々な判断を日常的に行いながら生活をせざるを得ない状況が続いている。しかし、当該の被災地域のコミュニティが持つ特性等が被災地住民のリスク判断やリスク対応行動に複雑に影響している現状が観察される一方で、それらの現状が従来のリスク学研究で多く用いられている量的な分析手法では検知できないために、その詳細につい

ては未だ十分な検証がなされず学術的報告も少ない。そこで、本研究課題では 3.11 後の被災地における生活上の様々なリスク対応について学際的見地から検討し、今後のリスクコミュニケーションに資するデータ分析手法の検討を行うことを目的とした。これまでに、福島県内の被災地域を対象とした調査を実施した他、先行研究で蓄積されてきた質的データについて検討し、従来のリスク学的見地に、放射線に関する科学的知識の検証と科学コミュニケーションの観点、心理学や教育学の実践研究から質的な評価軸を加えることで、被災地住民とそのコミュニティがもつ質的な特性と 3.11 事故がもたらしたリスク自体の特性との関連を明らかにし、その複合的な体験の具体像に関する解析を行っている。

(研究代表者 村山留美子)

### (3) 発達障害のある人に対する Dimensional Approach Model の検討

#### 1. 目的

2013 年に出版された DSM - 5 において、従来のカテゴリー的方式に代わり、ディメンション（多次元的）概念が提唱された。その人の中での多様な特徴を取り入れることによって感受性が高く、発達障害のような境界が明確でなく、状態像が多様なものの評価に適していると考えられる。ディメンション（多次元的）概念は、環境因子・個人因子との関係で「障害」ととらえる ICF の考え方とも整合性が高いと考える。

本研究では、このような背景のもと、発達障害のある人個人に対するディメンション的理解、発達障害のある人を取り巻く環境までを階層的にとらえたディメンション的支援を総合した Dimensional Approach Model の構築を試みた。

#### 2. 研究内容

発達障害のある人への直接的な支援、環境等を通じた間接的な支援まで階層的に捉えるために、4つのコンポーネントによるディメンショナルな支援モデルを構築した。

4つのコンポーネントとは、①発達障害のある子どもに対する支援モデル、②高等学校における移行支援モデルの検討、③大学における臨床心理的アプローチの検討、④共生社会形成に向けた環境モデル構築、である。

「個」の Dimension へのアプローチとして、「表現力を育てる音楽療法」（岡崎）、「特別支援学校における Vineland- II の利用」（鳥居研究室 長期研究生 宮前佳世教諭）、「Sense of Coherence (SOC) の立場からヘルスプロモーションについて—学習科学の観点から—」（加藤）、の研究を行った。また、発達障害のある大学生へのカウンセリングを通じて、知見を蓄積した（吉田）。

「環境」の Dimension へのアプローチとして、共生社会形成に向けた環境モデル構築をめざし、「地域拠点における療育の実践」（伊藤）、「通常高等学校におけるスティグマ改善の実践」（鳥居）の研究に取り組んだ。

#### 3. 研究の成果

2015 年 11 月 2 日には、「自閉症対象の音楽療法～即興アプローチを中心に～」をテーマに、ニューヨーク大学附属ノードフ・ロビンズ音楽療法センター長 Alan Turry 博士による講演会を行った。2015 年 11 月 27 日には、シンポジウム「発達障害のある人に対する Dimensional Approach Model」を開催し、研究成果を発表した。本研究の成果を IMFAR (International Meeting for Autism Research) 上海大会で発表した。さらに、本研究を元に、「音楽療法の効果測定」「SOC を高める支援」「スティグマ改善プログラム」、「療育の予後調査」など、発達のタテ（個）とヨコ（個と環境）への次元的な研究へと発展させていく予定である。

(研究代表者 鳥居深雪)

### (4) 地域高齢者を対象とした健康教室による住民ネットワーク形成の促進とネットワーク可視化による客観的評価

これまで住民交流の評価はアンケート調査やインタビューといった主観的な評定によって行われてきた。

そこで本研究では、ウェアラブルセンサによって自動的・定量的に交流データを収集し、ネットワーク分析によって、交流の頻度、範囲、変化を把握することを目的とした。実験の結果、健康教室参加時の交流をデータ化・分析することで、健康教室の回を重ねるごとにみられる交流の増加や、交流の核となるキーパーソンの同定が可能となった。また、交流の程度と性格特性に関連があること、交流が多いほど、住民交流や地域活動への関心が高まることを示すことができた。本研究の成果については、4件の学会発表をおこない、国際誌にも投稿中である。また、本研究を発展させた研究計画は、学長裁量異分野融合若手アイデアコンテストに採択された。

(研究代表者 増本康平)

#### (5) 初等教員養成教育におけるアクティブ・ラーニングの内容、方法、評価の調査

昨今大学教育におけるグローバル人材の育成、その方法としての問題解決能力の育成が目指され、アクティブ・ラーニングの導入が進められている。特に、初等教員(幼稚園・小学校教員)の養成においては、幼児や児童に21世紀型学力を形成するため、幼稚園・小学校現場において、アクティブ・ラーニングを導入することが可能な、教員養成教育の工夫を行うことが期待されている。

本プロジェクトでは、国内外の幼稚園・小学校教育現場におけるアクティブ・ラーニングの実態について、先駆的なものを対象に調査し、その内容、方法、および評価の在り方について検討した。

国内の学校教育現場の調査は、国立K幼稚園、A市、K市、N市の指定校研究と関連した現職研修の現場で、ワークショップや、グループ・ワーク、公開保育とその事後検討会、アクション・リサーチに関わり、現状を把握した。小学校現場や図書館を活用した教育の現場においても情報収集を行った。加えて、幼稚園における遠足の前後の園での実践、遠足当日のデータの分析などを行った。幼児教育の現場では生活や遊びを通じた、時系列的流れがあり、子どもの興味関心を起点とした自明性と必然性とがある育ちと学びが展開していた。そもそも幼児教育の実践は経験主義カリキュラムであるが、一方、教員養成教育の実際には、観察や実習、指導法の授業における模擬保育等の実施が不十分であることが分かった。本研究を通じて、正課外学習や社会教育の現場を活用した実践の有効性についての知見も得た。この点については、平成29年度よりスタートする新学部においてインターンシップや実習、指導法の授業における模擬保育の実施などが反映されることとなった。

本プロジェクトでは、国内に加えて、海外のアクティブ・ラーニングについての実践調査も行った。対象は中国山東省シハク市張店区の祥瑞園小学校とスペイン・カタルーニャ州グラノリエス市のペラアントン校(幼稚園と小学校が一体化した初等学校)である。またグラノリエス市役所において市長と教育委員会関係者との面談を行い、情報収集を行った。

中国の視察調査では授業の観察から、自由にのびのびと表現でき、そうしてできた作品について率直に批評し合うことのできるような関係を、学習者の間に築かれている様子が明らかになった。メディア活用力はもちろんのこと、学習者が自由に思考し表現し交流できるための言語の力が日常的に養われていた。書いたものの構成が優れているだけでなく、意見や感想の交流の際の言語表現がしっかりしており、アクティブ・ラーニングの深化が図られていた。

スペインの調査からは、アクティブ・ラーニングの実施が、社会経済的に困難な状況におかれている子どもや家庭の支援について効果があることが伺われた。同校の幼児・児童の保護者は、経済的に中・低所得者が大半を占め、また、幼児・児童の42%を外国籍の児童が占めている。市長のリーダーシップもあり、音楽プロジェクトの実施を保護者との連携を大いに図りながら実施されていた。同校のPTA参加率は周辺校と比較して高い。同校のアクティブ・ラーニングである音楽プロジェクト教育によって、地域とのコミュニケーションが構築されており、子どもたちは日々企画される様々な活動や市役所が提供する活動の場など街の行事に参加し、能動性や自己効力感を高めている。具体的成果としては特に、学校全体の基礎学力の向上(カタルーニャ語、スペイン語、英語、算数等)と保護者の積極的な参加において顕著であった。

以上の国内外の幼稚園および小学校におけるアクティブ・ラーニングの調査から得られた知見は、新しい

学部の子ども教育学科の初等教員養成教育に大いに活用できると考える。

(研究代表者 北野幸子)

### 7.3.5. 国際シンポジウム

#### (1) 神戸大発エイジング研究の新たな将来像と可能性を探る

超高齢社会の進行に伴う諸課題の解決に資する先端的研究を創発し、本研究分野の活性化と研究成果の社会還元を目的として、神戸大学大学院人間発達環境学研究科・発達支援インスティテュートに2015年12月1日にスタートした「アクティブエイジング研究センター (KAARb)」の設立記念として国際シンポジウムを開催した。当日は、民間企業を含めた30社から約200名の参加者のもと、WHO神戸センター所長・Alex Ross氏基調講演、ソウル大学応用老年学・退職研究センター所長・Gyounghae Han氏、および東京大学高齢社会総合研究機構教授・秋山弘子氏の両特別講演に加え、パネルディスカッションや関係分野のポスターセッションのプログラムを通じ、当センターの可能性と課題に関する活発な議論と共に、本分野における産官民学関係者に対するプラットフォーム構築に向けて記念すべきキックオフ・シンポジウムとなった。

<プログラム>

<開催日程> 2016年2月21日(日)

<開催場所> 神戸大学百年記念館

<当日プログラム>

設立記念シンポジウムに寄せて：

神戸大学理事・副学長：小川 真人 (研究・産学連携担当)

開会挨拶：神戸大学大学院 人間発達環境学研究科長：岡田 章宏

(神戸大学大学院 人間発達環境学研究科附属発達支援インスティテュート長)

アクティブエイジング研究センター構想 (センター長)：近藤 徳彦

(神戸大学大学院 人間発達環境学研究科教授)

基調講演：「アクティブエイジングの歴史と進化」

Alex Ross 氏 (WHO 神戸センター所長)

アクティブエイジング研究スクエア・ポスターセッション I

特別講演 1

「アクティブエイジング社会のために大学は何ができるのか？」

Gyounghae Han 氏 (ソウル大学 応用老年学・退職研究センター所長)

特別講演 2：「長寿社会に生きる」

秋山 弘子 氏 (東京大学高齢社会総合研究機構特任教授)

パネルディスカッション：「アクティブエイジング研究ハブ拠点に向けて」

司会：岡田 修一 (神戸大学大学院人間発達環境学副研究科長・アクティブエイジング研究センタープロジェクトリーダー)

パネリスト：

小島 洋一 (神戸市住宅都市局計画部公共交通課課長)

丹松 由美子 (株式会社ワコール人間科学研究所研究員)

増本 康平 (アクティブエイジング研究センタープロジェクトリーダー)

片桐 恵子 (アクティブエイジング研究センター副センター長)

長ヶ原 誠 (アクティブエイジング研究センター副センター長)

アクティブエイジング研究スクエア・ポスターセッション II

レセプション (瀧川学術交流記念会館)

(研究代表者 長ヶ原 誠)

## (2) アジアの包括的で持続可能な発展についてのワークショップ

2015年12月16日から17日にかけて“Workshop on Inclusive Sustainable Development in Asia

～ Economy, Society, Human Development and Environment ～”を行った。アジアの発展途上国、先進国から幅広い研究者を招いて、持続可能な発展をキーワードにした講演と討議が展開された。本ワークショップは5つのセッションから構成された。

人間発達環境学研究科長の岡田章宏氏より開会の辞が送られたのち、第1セッションは「環境と持続可能な発展」についてで、エネルギー経済学が専門のシンガポールの Nanyang Technological University の Youngho Chang 氏による講演“Energy Resources and Sustainability: Economic Approaches and Applications”と本学より田畑智博氏による講演“Renewable energy and environment: A life cycle approach”を軸に、会場との活発なやり取りを含めて、環境・エネルギー問題を持続可能な発展の観点から議論された。

第2セッションは、「生態系と持続可能な発展」についてで、農業生態学が専門でカンボジアの Prek leap National College of Agriculture 学長、Vathana Thun 氏による講演“Climate Change and Sustainable Development”と、Cambodia Development and Resource Institute の Keosothea Nou 氏による“Insect and Biodiversity”ならびに、本学の丑丸敦史氏による“Biodiversity conservation in cities”の3つの講演を軸に、アジアの都市の急速な巨大化に伴う生態系影響について、地球温暖化などのグローバル環境問題だけでなく、ローカルな生態系における生物多様性の問まで、活発な討議が交わされた。

第3セッションは、「人口と持続可能な発展」についてで、タイのチュラロンコン大学より Worawet Suwanrada 氏による“Aging Population and Sustainable Development in Developing Countries: The Case of Thailand”と、京都大学より山口臨太郎氏による“Population and Sustainability”の2つの講演を軸に、人口増加あるいは人口減少の問題についてだけでなく、人口変動と環境資源の関わりを含めて議論が行われ、1日目を総括する内容となった。

2日目に開催された第4セッションは、「持続可能な発展のための教育 (ESD)」であり、Mekong Institute of Cambodia の Sovannarith So 氏による講義“Education and Poverty Reduction”，本学より Runsinarith Phim 氏による講演“Education and Social Development: The Case of Cambodia”およびシンガポール Nanyang Technological University の Michelle Merrill 氏による講演“Sustainability in Higher Education”を軸に、発展途上国ならびに先進国における ESD の課題と最新の情報が交換された。特に本研究科においても ESD は力を入れている取り組みでもあり、フロアからも盛んな質疑応答が展開された。

第5セッションは「持続可能な発展にむけた制度と協力」であり、京都大学の森晶寿氏による“Global Financing for Sustainable Development”と、本学より佐藤真行氏による“Public Finance and Inclusive Wealth”の2つの講演を軸に進められた。両日を通じて得られた、持続可能な発展に関する諸研究の到達点と課題がまとめられて、全5セッション12講演からなる集中的なワークショップが終了した。

最後に、国際協力研究科長の四本健二より閉会の辞が送られ、本ワークショップが非常に充実した内容であったこと、しかしながらアジアの持続可能な発展はこれからの課題であり、これが始まりである旨の激励をいただいた。16日は約90人、17日は約70人の参加者が集まり、盛況のうちに閉ざされた。

(シンポジウム企画責任 佐藤真行)

### 7.3.6. 高度教員養成プログラム

#### (1) 目的

本プログラムの目的は、附属校園等を活用したアクションリサーチによる実証的研究を通して、修士課程レベルにおける高度な教員養成を目指すことであった。

#### (2) 実施体制と参加者

実施体制は、人間発達環境学研究科・発達科学部、附属学校部による共同体制であり、参加者は、本年度

13名であった。

### (3) プログラムの内容

本プログラムは、全5回のセミナーと最終報告会、参加院生各自が連携校とともに独自に取り組むアクションリサーチ研究から構成されていた。

### (4) 修了認定

上記プログラムに参加した、学生12名に修了認定証を授与した。

### (5) 研究発表等業績

学会発表

船曳優斗（2015）「小学校国語科メディア教育における映像を読む力についての考察 — 映像を通じた自然発生的な思考に焦点を当てて—」全国大学国語教育学会自由研究発表、創価大学。〔審査なし〕

大黒仁裕・神山真一・山本智一・江草遼平・鳩野逸夫・楠房子・稲垣成哲（2015）「理科における反転授業用教材の課題：PACA 国際学校を事例として」『日本理科教育学会第65回全国大会論文集』第13号、525。〔審査なし〕

大黒仁裕・神山真一・山本智一・江草遼平・鳩野逸夫・楠房子・稲垣成哲（2015）「PACA 国際学校における反転授業を用いた理科の授業改善：「物の溶け方」単元の実践から」『日本科学教育学会年会論文集』第39号、432 - 433。〔審査なし〕

神山真一・山本智一・山口悦司・坂本美紀・村津啓太・稲垣成哲（2015）「反論を含むアーギュメント構成能力の育成を目指した授業の評価：小学校第6学年「水溶液の性質」の事例」『日本理科教育学会第65回全国大会論文集』第13号、280。〔審査なし〕

神山真一・山本智一・山口悦司・坂本美紀・村津啓太・稲垣成哲（2015）「反論を含むアーギュメントの達成を阻害する要因の探索的検討：反論理由付けに着目して」『日本科学教育学会年会論文集』第39号、434 - 435。〔審査なし〕

Kamiyama, S., Yamamoto, T., Yamaguchi, E., Sakamoto, S., Muratsu, K., & Inagaki, S. (2015). Instructional strategies for teaching primary students to construct arguments with rebuttals. Poster presented at The 11th Conference of the European Science Education Research Association, Helsinki, Finland. [審査付き]

Daikoku, M., Kamiyama, S., Yamamoto, T., Egusa, R., Hatano, I., Kusunoki, F., & Inagaki, S. (2015). Improvement of science class using flipped classroom: A case study of EIPACA. Poster presented at The 11th Conference of the European Science Education Research Association, Helsinki, Finland. [審査付き]

馬場大樹・大山正博・新友一郎・吉永潤（2015）「「不確実性」の中で未来をひらく意思決定と合意形成能力の育成—外交交渉ゲーム「IndependenceDay」の実践に基づいて—」『第64回全国社会科教育学会発表要旨収録』55。〔審査なし〕

OHYAMA,M., BABA, H. and YOSHINAGA,J. (2015) Communication Games for Activating Citizenship Education in Japan, Proceedings in the 46thAnnual Conference of the International Simulation and

Gaming Association, 928-943, Kyoto, Japan.

大山正博・馬場大樹・吉永潤 (2015) 「国際理解教育の課題を乗り越えるために―「複数の未来像」の獲得をめざすゲーミング・シミュレーション教材の必要性」『日本シミュレーション & ゲーミング学会全国大会論文報告集 2015 年秋号』 22-25. [審査付き]

馬場大樹・大山正博・吉永潤 (2015) 「社会科歴史学習において多面的政策評価能力を育成するディブリーフィング―外交交渉ゲーム “Independence Day” の実践に基づいて―」『日本シミュレーション & ゲーミング学会全国大会論文報告集 2015 年秋号』, 26-31. [審査付き]

太田知実・元島ゆき (2016) 「学校組織における初任教師の位置づけと葛藤に関する事例研究 ―ある小学校教師の入職一年目におけるナラティブを手がかりに―」関西教育行政学会 2 月例会, 大阪研修センター. [審査なし]

岡部恭幸・広瀬優香子 (2016) 「幼少接続期の数理認識について―数の合成・分解とサビタイジングに着目して―」『数学教育学会春季年会発表論文集』 232-234. [審査なし]

佐伯源太郎 (2016) 「『一次関数』理解の困難性について」近畿数学教育学会発表, 奈良教育大学. [審査なし]

佐伯源太郎, 岡部恭幸 (2016) 「『一次関数』理解の困難性とその克服」『数学教育学会春季年会発表論文集』 93-95. [審査なし]

#### 学術論文

神山真一・山本智一・山口悦司・坂本美紀・村津啓太・稲垣成哲 (2015) 「複数の理由付けを利用するアーギュメント構成能力の育成を目指した教授方略のデザイン要素: 小学校第 6 学年「植物の養分」の事例」『理科教育学研究』 第 56 卷, 第 1 号, 3-16. [審査付き]

神山真一・山本智一・山口悦司・坂本美紀・村津啓太・稲垣成哲 (2015) 「反論を含むアーギュメント構成能力の育成を目指した教授方略のデザイン要素: 小学校第 6 学年「水溶液の性質」の事例」『理科教育学研究』 第 56 卷, 第 3 号, 309-324. [審査付き]

坂本美紀・山口悦司・村山功・中新沙紀子・山本智一・村津啓太・神山真一・稲垣成哲 (印刷中) 「科学的な問いの生成を支援する理科授業: 原理・法則に基づく問いの理解に着目して」『教育心理学研究』. [審査付き]

大黒仁裕・神山真一・山本智一・江草遼平・鳩野逸夫・楠房子・稲垣成哲 (2015) 「複式学級における反転授業を用いた理科の授業改善: PACA 国際学校を事例として」『日本科学教育学会研究会研究報告』 第 30 卷, 第 3 号, 89-94. [審査なし]

Yoshida, R., Tamaki, H., Sakai, T., Egusa, R., Saito, M., Kamiyama, S., Namatame, M., Sugimoto, M., Kusunoki, F., Yamaguchi, E., Inagaki, S., Takeda, Y., & Mizoguchi, H. (2015). BESIDE: Immersive System to Enhance Learning within a Museum. in Nelson Baloian, Yervant Zorian, Perouz Taslakan, Samvel Shoukouryan (eds.), Collaboration and Technology, 21st International Conference CRIWG2015 Proceedings, Lecture Notes in Computer Science (LNCS) 9334, 181-189. Yerevan, Armenia:Springer



International Publishing Switzerland. [審査付き]

Daikoku, M., Kamiyama, S., Yamamoto, T., Egusa, R., Hatono, I., Kusunoki, F., & Inagaki, S. (2016). Improvement of science class using flipped classroom: A case study of EIPACA. In J. Lavonen, K. Juuti, J. Lampiselkä, A. Uitto & K. Hahl (Eds.), E-Book Proceedings of the ESERA 2015 Conference: Science Education Research: Engaging Learners for a Sustainable Future. Helsinki, Finland: European Science Education Research Association. [審査付き]

Kamiyama, S., Yamamoto, T., Yamaguchi, E., Sakamoto, S., Muratsu, K., & Inagaki, S. (2016). Instructional strategies for teaching primary students to construct arguments with rebuttals. In J. Lavonen, K. Juuti, J. Lampiselkä, A. Uitto & K. Hahl (Eds.), E-Book Proceedings of the ESERA 2015 Conference: Science Education Research: Engaging Learners for a Sustainable Future. Helsinki, Finland: European Science Education Research Association. [審査付き]

受賞

特になし。

国際的な活動

上記国際会議発表に関わる海外での研究活動があった。

(6) 海外活動

特になし。

(7) 広報

本プログラムの概要は、HP に可能な限り掲載している。

<https://www.h.kobe-u.ac.jp/ja/node/3295>

(高度教員養成プログラム世話人・稲垣成哲)

## 7.4. 研究推進

### 7.4.1. 研究推進委員会

本委員会では、研究科における共同研究の方向性の検討、研究シーズの発見と育成、外部資金の獲得に向けた組織的対応等について議論を行う。

本年度の活動としては、「プロジェクト研究支援経費」「若手研究推進支援経費」「シンポジウム支援経費」への申請について厳格な審査を行った（その結果については、「7.1.1. 研究動向」参照）。なお、これらの支援経費については、目的を明確にするため名称を変更するとともに、「研究推進支援経費」の対象者を「若手」（4月1日現在45歳以下の者）に限定した。

また、本年度の特筆すべき活動としては、研究・産学連携担当理事の依頼（「1.2.4. 科研費の獲得促進」参照）を受け、研究推進委員会に「科研費獲得促進タスクフォース」を置き、科研費獲得のための具体的対応を行ったことがあげられる。構成は専攻長及び学科長とし、責任者は稲垣成哲教授にお願いした。活動としては、(1) 若手研究種目採択率の向上に向けて、学科単位での指導体制の構築、若手ワークショップの開催（8月24日）、(2) 大型種目の獲得に向けて、URAによる本研究科への指導、大型種目の新制チーム編成の促進、(3) 一人あたりの申請率アップに向けて、科研費申請に係るFDの開催（9月11日）、未申請者のピックアップと申請指導、申請状況のチェック、過去3年間の基盤研究（A）及び（B）の申請書の閲覧、を行った。

(研究推進委員会委員長 岡田章宏)

## 7.4.2. 研究倫理審査委員会

本年度は48件の新規申請があり、31件が承認、16件が条件付き承認、1件が変更の勧告であった。

これまでの新規申請が20件台であり、本年度の新規申請は約2倍増となった。平成27年4月1日から「疫学研究に関する倫理指針」及び「臨床研究に関する倫理指針」に代わり、新たに「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」が施行された。それに伴い、本審査委員会の審査も、新指針に沿うように努めた。今後も、手続きおよび審査については、新倫理指針を踏まえた対応が必要である。

(研究倫理審査委員会委員長 中村晴信)

## 7.4.3. 紀要編集委員会

平成27年度紀要編集委員会は、3回の会議を開催し、「神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要」第9巻第1号、第2号の編集・刊行を行った。2015年9月30日に刊行した第9巻第1号は、研究論文編（査読あり）、研究報告編（査読なし）を掲載した。2016年3月30日に刊行した第9巻第2号は、研究論文編（査読あり）、研究報告編（査読なし）を掲載した。また、今期の委員会では、規程の改正に取り組み、第11条に（学術研究に係る行動規範等の遵守）の条項を追加し、研究倫理等の向上を図った。

(研究紀要編集委員会委員長 津田英二)

## 7.5. 各専攻の研究

### 7.5.1 人間発達専攻

本専攻では、多様な研究領域の教員がそれぞれのテーマで多彩な研究プロジェクトに従事している。

本専攻研究者：鳥居深雪

共同研究者：岡田智（北海道大学）、小林玄（立教女学院短期大学）、辻義人（小樽商科大学）

研究課題：発達障害のある子どもの日本版 WISC-IV の妥当性と臨床適用に関する研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表：岡田智）

研究概要：発達障害のある子どもに対して、日本語版 WISC-IV の妥当性とその臨床的な適用性について検討する。

本専攻研究者：鳥居深雪

共同研究者：米田英嗣（京都大学）ほか

研究題目：自閉症スペクトラム障害をもつ青年および児童に対する日常生活スキル支援の研究

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究（代表：米田英嗣）

研究概要：自閉症スペクトラム障害をもつ児童や青年に対して、必要とされる日常生活スキル支援について検討する。

本専攻研究者：鳥居深雪

共同研究者：梅田真理（国立特別支援教育総合研究所）ほか

研究題目：障害のある子どもの危機管理能力を育てる防災教育のあり方－発達障害を中心に－

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表：梅田真理）

研究概要：障害のある子ども、特に発達障害の子どもを中心に、その危機管理能力を育てる防災教育のあり方について検討する。

本専攻研究者：赤木和重

研究課題：自閉症児同士における「教えあい」を軸とした教育方法の開発と評価

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表：赤木和重）

研究概要：自閉症スペクトラムの子ども同士が教えあう相互教示教育に関する方法に注目して、いくつかの先駆的な教育実践を分析し、理論化することを目指す。

本専攻研究者：赤木和重

共同研究者：山田康彦（三重大学）、森脇健夫（三重大学）、根津知佳子（三重大学）ほか

研究課題：教員養成型 PBL 教育における対話型事例シナリオの作成と評価方法の開発

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表：山田康彦）

研究概要：現在、大学教育のなかで注目されている PBL 教育において、授業者・受講者・教材それぞれが対話的な構造をもつシナリオを作成するとともに、その評価方法を開発する。

本専攻研究者：赤木和重

共同研究者：三木裕和（鳥取大学）、川地亜弥子（神戸大学）、越野和之（奈良教育大学）ほか

研究課題：自閉症児の授業づくりにおける教育目標・教育評価に関する研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表：三木裕和）

研究概要：障害児教育における教育目標および教育評価に関する実証的研究を通して、現在のわが国における障害児教育における測定主義的教育目標・教育評価観の構造を明らかにする。

本専攻研究者：加藤佳子

共同研究者：小島亜未（滋賀県立大学）、佐藤眞一（千葉県衛生研究所）、西敦子（山口大学）、濱壽朋子（九州女子大学）、永野和美（神戸大学附属中等教育学校）

研究課題：健康を創出する生きいき食教育プログラム評価指標の開発

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表：加藤佳子）

研究概要：生活習慣や健康と密接な関連のある健康生成要因を強化・支援することに焦点をあてた食教育プログラムの標準化をめざし、食教育プログラム評価指標を開発することである。

本専攻研究者：加藤佳子

共同研究者：Elfriede Greimel（Graz Medical University）、Roswith Roth（Graz University）、Ursula Athentaedt（Graz University）et al.

研究課題：健康生成要因に関する文化比較研究

研究資金：構成員の個人研究費

研究概要：オーストリアと日本を対象として、健康生成理論に基づき健康生成要因に関する文化比較研究を行っている。

本専攻研究者：坂本美紀、稲垣成哲、山口悦司

共同研究者：西垣順子（大阪市立大学）、益川弘如（静岡大学）

研究課題：トランス・サイエンス問題の解決能力を育成する知識共創型アーギュメンテーション教育

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（一般）（代表：坂本美紀）

研究概要：トランス・サイエンス（科学技術と社会的意思決定政策が交わる領域）で生じる問題について、リスクやベネフィットの科学的証拠を重み付けして意思決定を行わせる問題解決学習の中で、論証構造を意識したライティングとトーキングのアーギュメンテーションを指導する教育プログラムの開発を目指す。

本専攻研究者：中村晴信

共同研究者：甲田勝康（近畿大学）、藤田裕規（近畿大学）、間瀬知紀（京都聖母女学院短期大学）

研究課題：成長期における脂質代謝が骨量獲得および骨代謝に及ぼす影響：小中学生の縦断調査から

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（代表：中村晴信）

研究概要：脂質代謝が骨量獲得や骨代謝に及ぼす影響について、小中学生を対象にした縦断調査によって解明する。

本専攻研究者：中村晴信

共同研究者：甲田勝康（近畿大学）、伊木雅之（近畿大学）、藤田裕規（近畿大学）

研究課題：体脂肪分布の多様性の形成と代謝循環機能：日本人小児一般集団の大規模追跡研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（代表：甲田勝康）

研究概要：体幹や四肢における体脂肪分布の多様性が形成される過程と代謝循環機能との関係について、日本人小児を対象に大規模追跡研究を行う。

本専攻研究者：中村晴信

共同研究者：沖田善光（静岡大学）、杉浦敏文（静岡大学）

研究課題：GABA 摂取の相互相関解析による神経生理機構の解明

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表：沖田善光）

研究概要：相互相関解析を用いて GABA の中枢神経活動と自律神経活動の相互の神経生理メカニズムを解明する。

本専攻研究者：中村晴信

共同研究者：間瀬知紀（京都聖母女学院短期大学）

研究課題：成長期における獲得筋量と骨量・脂肪量および生活習慣との関連性

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表：間瀬知紀）

研究概要：成長期において獲得する筋量・骨量・脂肪量と生活習慣との関連性について検討する。

本専攻研究者：中村晴信

共同研究者：藤田裕規（近畿大学）、甲田勝康（近畿大学）、伊木雅之（近畿大学）

研究課題：味覚の認知能力と体組成：地域小児集団の研究

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究（代表：藤田裕規）

研究概要：幼児を主とした地域小児集団を対象に、味覚の認知能力と体組成との関係について検討する。

本専攻研究者：中村晴信

共同研究者：江原靖人（神戸大学）、加藤修雄（大阪大学）ほか

研究課題：あらゆるインフルエンザウイルスを捕捉・検出する糖鎖修飾三量体核酸の開発

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表：江原靖人）

研究概要：あらゆるインフルエンザウイルスを捕捉・検出することを目的として糖鎖修飾三量体核酸を合成し、環境中のウイルスの除去・高感度検出を行なう。

本専攻研究者：林創

研究課題：場に応じた柔軟な欺き行動と道徳判断による社会性の発達

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表：林創）

研究概要：幼児期から児童期の子どもを対象に、うそと道徳性の発達の両面に実証的な視点から着目することで、これらが人間の社会性の発達に重要な意味をもつことを明らかにする。

本専攻研究者：林創

共同研究者：楠見 孝（京都大学）、道田泰司（琉球大学）、平山るみ（大阪音楽大学短期大学部）ほか

研究課題：21 世紀市民のための高次リテラシーと批判的思考力のアセスメントと育成

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（A）（代表：楠見 孝）

研究概要：情報の信頼性を判断し活用するために、批判的思考力と態度を育成する教育の方法を検討し、批判的思考が日常的にもいかに重要であるかを明らかにする。

本専攻研究者：古谷真樹

研究課題：小・中学生の睡眠・心身健康を確保するためのストレスコーピング有用性の実証的研究

研究資金：科学研究費補助金・若手研究（B）（代表：古谷真樹）

研究概要：ストレスコーピングを応用し、小・中学生の規則的な生活リズムと良質な睡眠の確保、心身の健康を維持・増進するための健康教育プログラムを考案し、その効果を実証する。

本専攻研究者：村山留美子

共同研究者：内山巖雄（(財)ルイ・パストゥール医学研究センター）、藤長愛一郎（大阪産業大学）、岸川洋紀（武庫川女子大学）

研究課題：原発事故後の市民の環境リスクへの対応行動と認知の構造、その変動に関する研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（代表：村山留美子）

研究概要：福島第一原子力発電所事故後の市民のリスク対応行動とそれに関わる各種認知の構造、またその変動について検討する。

本専攻研究者：森岡正芳

共同研究者：紙野雪香・野村直樹・佐藤達哉・山本智子・村久保雅孝・松本佳久子・真栄城輝明・野村晴夫・山口智子・田代順・廣瀬幸市・森茂起・丸橋裕・末本誠

研究課題：生活史法を基盤とした臨床物語論の構築と公共化

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（A）（代表：森岡正芳）

研究概要：生活史をナラティブ・アプローチの観点から基礎づけ、心理教育的方法として洗練させる。そして心理臨床、医療看護、障害者の自立支援、コミュニティ教育・成人教育などの心理社会的支援に活用し、臨床ナラティブ・アプローチの公共的な展開を目指す。

本専攻研究者：森岡正芳

共同研究者：紙野雪香・福田敦子・大野由美子

研究課題：ナラティブ・アプローチによる看護師のキャリア形成支援実践者育成プログラムの開発

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表：紙野雪香）

研究概要：ナラティブ・アプローチによる看護師のキャリア形成支援実践者育成の具体的な内容と指針を明らかにし、看護師のキャリア形成支援者を育成するためのプログラムを開発する。育成プログラムの成果と限界を明らかにする。

本専攻研究者：佐藤幸治

共同研究者：目崎登（筑波大学）、家光素行（立命館大学）、相澤勝治（専修大学）

研究課題：運動や食事による性ステロイドホルモンの増加が動脈硬化改善効果に貢献する機序の解明

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（代表：目崎 登）

研究概要：現在までに、加齢によって低下した性ステロイドホルモンは有酸素運動により増加し、生活習慣病、特に肥満症、2型糖尿病改善に関与していることを明らかにしてきたが、動脈硬化改善するかは明らか

となっていない。運動および、性ステロイドホルモン合成促進する栄養成分を用いて、動脈硬化への影響を検討することを目的としている。

本専攻研究者：木村哲也，河辺章子

共同研究者：神崎素樹（京都大学），瀧千波（立命館大学），塩澤成弘（立命館大学）

研究課題：水による体性感覚への刺激が立位バランス調節機能に与える効果

研究資金：石本記念デサントスポーツ科学振興財団研究助成金（代表：木村哲也）

研究概要：近年、水中歩行などの水中運動は、関節への負担が少ない点で高齢者の運動には適しているとされ、我が国においても水中運動が盛んである。本研究は、実験的に体性感覚器を水中に暴露した際の、立位バランスに対する効果とその神経生理学的メカニズムを分析し、水中運動の立位バランス調節機能に対する神経生理学的効果を明らかにすることを目的とする。

本専攻研究者：木村哲也，河辺章子

共同研究者：神崎素樹（京都大学），瀧千波（立命館大学），塩澤成弘（立命館大学）

研究課題：微細な関節角度変動を伴う下腿三頭筋活動の制御特性

研究資金：上原記念生命科学財団研究奨励金（代表：木村哲也）

研究概要：ヒトの二足立位姿勢は、力学的に不安定な姿勢であることから、制御によりバランスを保つ必要がある。しかしながら、この立位バランスの神経制御則には不明な点が多い。本研究は、立位バランス調節システム固有の下腿三頭筋制御則に対する、足関節の微細角度変動による筋・腱の微細な長さ変動並びに弾性的振動の関与を、検証することを目的とする。

本専攻研究者：片桐恵子

共同研究者：Becky Loo（University of Hong Kong），Winnie Ram（University of Hong Kong）Rathi Mahendran（National University of Singapore）

研究課題：Promoting Active Transportation for the Elderly: A Comparative study of the Three Asian Cities

研究資金：NUS-Global Asia Institute NIHA Research Grant（代表：Becky Loo）

研究概要：高齢者ができるだけ住み慣れた地域に住み続けるためには、居住地域の街の歩きやすさが重要であると考えられる。本研究で高齢者の住む近隣地域の歩きやすさと高齢者の歩行行動と健康の関連について東京、香港、シンガポールの3つの都市で比較することを目的としている。

本専攻研究者：片桐恵子

共同研究者：Gyounghae Han（Seoul National University）

研究課題：都市居住高齢者の日常活動と健康：日本と韓国の国際比較研究 Everyday activities and the health of the urban elderly: Comparison between Japan and Korea

研究資金：日本学術振興会二国間交流事業協同研究（代表：片桐恵子）

研究概要：後期高齢者がどのような日常生活を送っているのか、活動量はどの程度なのか、についてはあまり研究がおこなわれていない。本研究は都市に住む高齢者の日常活動を把握し、どのくらいの活動量なのかを、ダイアリー調査と活動量計の併用により把握し、日本（神戸市）と韓国（ソウル市）で比較することを目的としている。

本専攻研究者：片桐恵子

共同研究者：久保田裕之（日本大学）

研究課題：高齢者の安心と若者の未来を支える異世代間交流プログラムの開発

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究（代表：片桐恵子）

研究概要：日本では高齢者夫婦のみ世帯，高齢単身世帯が増加している。別居子は近くに住んでいるとは限らず，さらに，日本は別居子との接触頻度が他国より少ない。高齢者が安心して居住してきた地域に住み続けるために，高齢者の住居に若者を住ませるホームシェアという仕組みはその解決策の一つであり，そのための方略を検討することを目的としている。

本専攻研究者：片桐恵子

共同研究者：権藤恭之（大阪大学），石崎達郎（東京都健康長寿医療センター研究所），新井康通（慶應義塾大学），池邊一典（大阪大学），神出計（大阪大学）

研究課題：超高齢社会に向けたサクセスフルエイジングモデルの再構築

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）特設分野研究（代表：権藤恭之）

研究概要：サクセスフルエイジング（SA）は高齢者の生活目標を示す一つの指針であるが，従来のSAモデルは健康や機能維持に重きをおくため，機能低下が避けられない後期高齢者には実現しがたいものである。本研究では従来のモデルに代わり，機能低下が始まった高齢者にとって適応可能な新たなモデルの構築を目指している。

本専攻研究者：増本康平

共同研究者：塩崎麻里子（近畿大学），太子のぞみ（大阪大学）

研究課題：高齢期の意思決定バイアスの解明と自律に向けた生涯学習プログラムの開発

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表：増本康平）

研究概要：高齢者の意思決定バイアスの特徴を明らかにし，高齢者に適した意思決定の支援方法を明確にする。最終的には，高齢期の自律を目標とした「選び方を選ぶ」生涯学習プログラムを開発する。

本専攻研究者：谷正人

共同研究者：田中多佳子（京都教育大学），二宮文子（青山学院大学），北田信（大阪大学）

研究課題：インド音楽とペルシア音楽の交流—ヒンドゥスターニー音楽の形成過程に関する研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表：田中多佳子）

研究概要 インド音楽とペルシア音楽の関係性について，歴史的側面と実践的側面から解明することを目的としている。谷正人の担当は両文化に共に存在するサントゥールという楽器の類似性と差異性を楽器構造や奏法の面から明らかにすることである。

本専攻研究者：谷正人

共同研究者：徳丸吉彦，増野亜子

研究課題：『民族音楽学 12 の視点』

研究概要：論文執筆 2016年3月「第3章 聴こえるものと見えるもの」36-46ページ，徳丸吉彦 監修／増野亜子 編『民族音楽学 12 の視点』音楽之友社。本来目に見えない音を視覚化すること—楽譜に書いたりそれを読んだりすること—が如何に音楽認識を巡る様々な事象と深く関わりあっているのかを民族音楽学の研究成果とイラン音楽の事例をもとに論じたもの。

本専攻研究者：谷正人

共同研究者：水野信男（兵庫教育大学）ほか

研究課題：「中東・北アフリカ地域における音文化の越境と変容に関する民族音楽学的研究」

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（代表：水野信男）

研究概要：論文「サントゥール演奏の新しい身体性—『楽器盤面の地政学』へ向けて」校正中。成果として

『中東の音楽』（スタイルノート）内に所収予定。

本専攻研究者：岡崎香奈

共同研究者：鳥居深雪

研究資金：研究科支援共同プロジェクト研究（代表：鳥居深雪）

研究概要：「自閉症のある子どもへの音楽療法の実践」シンポジウムにおいて、発達障害のある人に対する Dimensional Approach Model の検討 について、研究発表を行った。

本専攻研究者：岡崎香奈

共同研究者：東北音楽療法推進プロジェクト智田邦徳理事長

研究資金：2015 年度岩手県福祉基金（代表：智田邦徳）

研究概要：プロジェクトの一環として、岩手県宮古市沿岸部の仮設住宅にて、音楽療法の臨床研究を行った。現在も継続中。2016 年 6 月 10 - 14 日 The 4<sup>th</sup> Conference of International Association for Music and Medicine, China：第 4 回国際医療音楽大会（中国北京）にて本研究に関する発表予定（招待講演）。

本専攻研究者：梅宮弘光

共同研究者：矢代眞己（日本大学）、野沢正光（野沢正光設計工房）、大川三雄（日本大学）、堀越哲美（愛知産業大学）、川嶋勝（鹿島出版会）

研究課題：山越邦彦の事跡とそのモダニズム建築思想に関する研究

研究資金：山越悠子基金（代表：梅宮弘光）

研究概要：戦前期日本の先鋭的モダニズム建築家・山越邦彦の遺品資料の調査研究とアーカイブ化を通じて、日本におけるモダニズム建築思想の戦前・戦中・戦後の展開過程を明らかにする。

本専攻研究者：梅宮弘光

研究課題：川喜田煉七郎におけるモダニズム思想の展開過程

研究資金：構成員の個人研究費

研究概要：昭和初期における建築計画面案の制作からデザイン教育の実践を経て建築施設の能率研究に至る川喜田煉七郎の事跡をモダニズム思想の展開過程として日本近代建築史に位置づけることを目指す。

本専攻研究者：平芳裕子

研究課題：メディア表象に見る「アメリカン・ファッション」の生成過程研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表：平芳裕子）

研究概要：アメリカの雑誌メディアに見られる言説とイメージの批判的考察を通じて、近代におけるファッションと女性性の関係構築の歴史を解明する。

本専攻研究者：田畑暁生

研究課題：条件不利地域の地域情報化政策

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表：田畑暁生）

研究概要：全国のプロードバンド化はほぼ進んだが、依然として 地域情報化の進行には地域格差が存在する。本研究は、地域情報化について遅れがちな、中山間地域を代表とする条件不利地域の地域情報化政策の現状と課題を、現地取材を中心として明らかにする。

本専攻研究者：野中哲士

研究課題：能動的センシングシステムとしての探索的身体運動の組織化過程の解明



研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表：野中哲士）

研究概要：能動的に動くことでまわりを「知る」活動（アクティブタッチ，視覚的探索）のダイナミクスとその状況依存性について，具体的な日常技能や熟練技能の検討を通して明らかにすることを旨とする。

本専攻研究者：野中哲士

共同研究者：Blandine Bril（École des Hautes Études en Sciences Sociales）

研究課題：こどもが字を書けるようになるまで：身体技法と文化

研究資金：個人研究費および École des Hautes Études en Sciences Sociales 学外研究者招聘費

研究概要：からだの運動に「文化」が映りこんでいく身体技法の発達のプロセスについて，6歳児の書字技能の変遷を追って検討した。

本専攻研究者：野中哲士

共同研究者：Eugene C. Goldfield（Harvard University）

研究課題：乳幼児の食事技能の発達場面における母子間の行為協調の検討

研究資金：科学研究費補助金・国際共同研究加速基金（代表：野中哲士）

研究概要：乳児が母親に「食べさせてもらう」状態から，自分で道具を使って食べることができるようになる変化のプロセスにおいて，母親がどのような状況を周囲に生み出すことで乳児の自発的な探索を促しているのかを明らかにするとともに，福祉機器のデザインのヒントを得ることを旨とする。

本専攻研究者：小高直樹

共同研究者：鈴木広隆（神戸大学），Poul Henning KIRKEGAARD（Aarhus University），Werner OSTERHAUS（Aarhus University）

研究課題：PCCP シェルと円柱の間に存在する安定なシェル構造の解析

研究資金：ユニオン造形文化財団研究助成等（代表：鈴木広隆）

研究概要：非平面4辺形により構成される凹凸テクスチャーをランプシェードデザインへ光工学的に応用するために，非平面4辺形の形状特性に関する微分幾何学的解析を行うとともに当該曲面の近似解を得ることを目的とする。

本専攻研究者：小高直樹

共同研究者：岡村淳美，鈴木広隆（神戸大学），Poul Henning KIRKEGAARD（Aarhus University），Werner OSTERHAUS（Aarhus University）

研究課題：PCCP シェル構造を持つペーパーランプシェードから発せられる光イメージに関する日欧比較研究

研究資金：ユニオン造形文化財団研究助成等（代表：鈴木広隆）

研究概要：非平面4辺形により構成される凹凸テクスチャーをもつランプシェードから発せられる光イメージに対する日本人とデンマーク人の感性評価の差異を明らかにすることを目的とする。

本専攻研究者：塚脇淳

共同研究者：ユーリー・トカチェンコ，バレンティナ・ズサビスカヤ（シンポジウム運営委員会）

研究課題：ペンザ国際彫刻シンポジウム（ロシア）

研究資金：彫刻公園システィ・プルディ（民間企業）

研究概要：ロシアペンザ国際彫刻シンポジウムに招待され，世界各国から集まった彫刻家と交流するとともに，一か月にわたって大型野外彫刻を制作し，彫刻公園に永久設置した。

本専攻研究者：岸本吉弘

研究課題：芸術活動（絵画表現）を通じた地域貢献－下町芸術祭の実例を通じて－

研究資金：朝日新聞文化財団，神戸文化支援基金，学術 WEEKS

研究概要：地域課題の解決へ向けて新たな視点から取り組み，地域のもつ潜在力を高め，地方都市におけるコミュニティの新たなあり方を実践的に探る。既存の地域コミュニティと連携し，創造性豊かな地域社会の形成の為の方途を研究する。

本専攻研究者：大田美佐子

共同研究者：高岡智子（静岡大学）

研究課題：グローバルな視点におけるミュージカルとその社会的アイデンティティ研究

研究資金：個人研究費（外部資金申請中）

研究概要：ブロードウェイ・ミュージカルの受容について，社会の要請と芸術文化の環境の差異による文化それぞれの独自の展開に着目して調査，分析，比較研究を進めている。

本専攻研究者：大田美佐子，田村文生

共同研究者：Bayrisch Japanischer Dreigesang (Ruth Geiersberger (Vo), Martina Koppelstetter (Vo), 大田麻佐子 (Vo, Pf))

研究課題：プロジェクト「訳・する・置き・かえる・おき・かわる」

研究資金：ミュンヘン市文化省助成事業

研究概要：ミュンヘンを拠点に活動する詩と音楽のパフォーマンスグループ Bayrisch Japanischer Dreigesang が，ミュンヘン市の文化省の助成を受けて9月24日から10月8日まで来日。「訳・する・置き・かえる・おき・かわる」という名のプロジェクトで，ドイツでも評価が高い小川洋子さんの作品「薬指の標本」を「翻訳」する行為を介して，ドイツと日本語の異なる言葉，その響き，感覚の違いを歌，音楽として表現する試みを行った。

本専攻研究者：大田美佐子

研究協力者：ジュリアーナ・ガリアーノ氏（トリノ在住），トレバー・ハイゲン氏（エクセター大学研究員），山口恭子（デュッセルドルフ在住作曲家）

研究課題：教育プログラムとしての「対話的音楽文化史の射程」について

研究資金：個人研究費

研究概要：平成27年度は，音楽文化の問題をグローバルな視点から捉えていく「対話的音楽文化史」の分野の射程を検討するために，内外からゲスト講演者を招いて以下のような三つの機会を持った。ルチアーナ・ガリアーノ先生による「武満徹」のゲスト講演，ハイゲン氏による「共鳴する都市-ノイズ・サウンドアート・持続可能性」の講演，山口恭子「作曲家の語る創作の世界」をテーマに，様々な機会に委嘱された作品及び講演。

本専攻研究者：関典子

共同研究者：鈴木晶（法政大学），海野敏（東洋大学），市瀬陽子（聖徳大学），渡沼玲史（早稲田大学）

研究課題：「バレエ文化史研究の基盤整備」

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（一般）（代表：鈴木晶）

研究概要：文化史学・表象文化論・哲学的身体論・精神分析的身体論・パフォーマンス論などの学際的な研究を通して，研究基盤を整備し，学術的バレエ研究の確立を目指す。

本専攻研究者：関典子

研究課題：「薄井憲二バレエ・コレクションを通じたバレエ文化の社会的普及」

研究概要：兵庫県立芸術文化センター所蔵「薄井憲二バレエ・コレクション」キュレーターとして、目録の監修・出版，企画展および常設展の監修・運営・リーフレット出版を行い，バレエ文化の社会的普及に寄与した。

本専攻研究者：関典子

研究課題：「コンテンポラリーダンスの創作および研究」

研究概要：コンテンポラリーダンスの創作・発表・招待講演・寄稿・ワークショップ企画などを通して，表現者としての現場に立った考察・研究を実施し，芸術文化振興・地域社会貢献・国際交流・次世代の研究者および表現者育成に寄与した。

本専攻研究者：田村文生

研究課題：トルキッシュ行進曲

研究資金：45万円（ティエダ出版 2016/02）

研究概要：「他者性」の文化的確認としての「異国趣味」，及び「キッキュ」における「自我」と「他者」との行き来に関する音楽作品としての論考。音楽的「引用」が時間の進行に従って明らかにされるスタイルを採用しつつ、「キーリズム」を設定し，それを楽曲全体に通底させることによって，一貫性を得た。

本専攻研究者：田村文生

研究課題：R. シュトラウス 歌劇「エレクトラ」より エレクトラの勝利の踊り

研究資金：45万円（ブレーン株式会社 2016/01）

研究概要：原曲における歌唱旋律を削除することにより管弦楽部が前景化され，交響詩的な音楽に変貌させることとなった。作品内部の旋律的運動は一層明瞭となり，埋もれていた示指導動機が聴取可能となり，従来とは異なったストーリー性が確保された。

本専攻研究者：田村文生

研究課題：マーラー交響曲第5番 第5楽章

研究資金：20万円（ブレーン株式会社 2015/04）

研究概要：原曲のロンド形式を再構成し，曲全体の一貫性を確保する方法としてソナタ形式的性格を強化しつつ，調を構造を設定した。また，旋律の転用部分については，テンポ・曲想・オーケストレーションについても適用（引用）した結果，一曲における多様な音楽表現が可能となった。

本専攻研究者：田村文生

研究課題：編曲の真価とは？—その「しんか論」と「たいか論」北海道教育大学スーパーウインズ公演リーフレット（全11頁）

研究概要：J.S. バッハの音楽再現の美的価値観や環境の相違に伴う諸問題や，積極的誤解としての創造行為について，オペラ作品から言語を割愛することで生じる新しい作品存在論について，また，歌曲群と交響曲群における「先行者」と「後続者」の関連を読み取り，彼の創作姿勢の特異性について論考した。（分担：pp.1-3, 5-7, 10-14）

本専攻研究者：稲垣成哲

共同研究者：大島純（静岡大学），中山迅（宮崎大学）他4名

研究課題：学習科学を応用した21世紀型スキルを促進する教師教育プログラムの開発（代表・大島純）

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（A）（一般）（代表：大島純）

研究概要：学習科学の知見を応用して 21 世紀型スキルを促進するための教師教育プログラムを開発する研究である。

本専攻研究者：稲垣成哲

研究課題：アクティブシニアによる ICT を活用した社会貢献及び学習共同体の形成モデル

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究（代表：竹中真希子）

研究概要：シニア世代における ICT スキル学習を媒介としたコミュニティ形成の研究である。

本専攻研究者：稲垣成哲

研究課題：モバイル AR アニメーションに基づくストーリーテリングシステムとその実践的評価

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（一般）（代表：杉本雅則）

研究概要：AR アニメーションによってストーリーテリングにおけるキャラクターの振る舞いを表現するシステム開発研究である。

本専攻研究者：稲垣成哲

共同研究者：楠房子（多摩美術大学）、溝口 博（東京理科大学）他 1 名

研究課題：聴覚障害者の鑑賞支援のためのセンシング技術を用いたモバイルシアターのデザイン

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（一般）（代表：楠房子）

研究概要：聴覚障害者に人形劇の楽しく鑑賞体験を提供するシステム開発と評価の研究である。

本専攻研究者：稲垣成哲

共同研究者：楠房子（多摩美術大学）他 2 名

研究課題：人物計測技術により没入感演出と注意推定，評価定量化とを図る博物館学習支援システム

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（一般）（代表：溝口博）

研究概要：センサを用いて人とシステムが自然に対話できるシステムを構築し，博物館学習の展示学習支援に応用する研究である。

本専攻研究者：稲垣成哲

共同研究者：生田目美紀（筑波技術大学）、楠房子（多摩美術大学）、小川義和（国立科学博物館）他 6 名

研究課題：科学系博物館の展示支援と学習プログラムにおける情報アクセシビリティの調査研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（海外学術調査）（代表：生田目美紀）

研究概要：科学系博物館の情報アクセシビリティの現状について，海外の主要な科学系博物館を調査する研究である。

本専攻研究者：川地亜弥子・赤木和重

共同研究者：越野和之（奈良教育大学）、山根俊樹（鳥取大学）、寺川志奈子（鳥取大学）、國本信吾（鳥取短期大学）

研究課題：自閉症児の授業づくりにおける教育目標・教育評価に関する研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表：三木裕和）

研究概要：自閉症児の行動変容だけではなく表現・情意面の成長発達という点

からの教育目標設定，並びに具体的な授業づくりと，その評価のための基礎理論研究と実践研究を行っている。

本専攻研究者：山口悦司，坂本美紀，稲垣成哲

共同研究者：大島純（静岡大学）他5名

研究課題：子どもの知識構築を促進するラーニング・プログレッションズを応用した理科教師教育

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（一般）（代表：山口悦司）

研究概要：科学教育の研究者と学習科学の研究者が学際的に共同し，子どもの知識が科学知識へと発達するために本質的な役割を果たす「生産的な誤り」の発達段階を解明するラーニング・プログレッションズを応用して，理科の教師教育プログラムを開発した。

本専攻研究者：稲垣成哲，山口悦司

共同研究者：舟生日出男（創価大学）他6名

研究課題：知識構築型アーギュメンテーションの指導と評価を可能にする教師教育プログラムの開発

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（一般）（代表：稲垣成哲）

研究概要：科学教育の研究者と教育学・学習科学の研究者の学際的共同研究として，知識構築型アーギュメンテーションの指導と評価を可能にする教師教育プログラムを開発した。

本専攻研究者：坂本美紀，山口悦司

共同研究者：伊藤真之（人間環境学専攻）

研究課題：科学技術ガバナンスの主体となるための市民リテラシーに関する大学教育プログラム

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究（代表：坂本美紀）

研究概要：科学教育，学習科学，サイエンス・コミュニケーションの学際的共同研究として，科学技術ガバナンスの主体となるための市民リテラシーに関する大学教育プログラムを開発した。

本専攻研究者：稲垣成哲，山口悦司，北野幸子，目黒強

共同研究者：小川義和（国立科学博物館）他6名

研究課題：科学的素養醸成のコミュニケーション・メディアとしての科学絵本教育モデルの開発

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（A）（一般）（代表：野上智行）

研究概要：科学教育の研究者と幼児教育，認知心理学，児童文学，デザイン学，科学コミュニケーションの研究者が学際的に共同し，科学的素養醸成のコミュニケーション・メディアとしての科学絵本教育モデルの開発をした。

本専攻研究者：稲垣成哲，山口悦司，北野幸子

共同研究者：楠房子（多摩美術大学）他3名

研究課題：保育士・幼稚園教諭の科学教育力強化を支援する科学絵本活用ハンドブックの開発と評価

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究（代表：野上智行）

研究概要：科学教育の研究者と幼児教育・デザイン学の研究者が学際的に共同し，保育士・幼稚園教諭の科学教育力強化を支援する科学絵本活用ハンドブックの開発と評価を行った。

本専攻研究者：山口悦司

共同研究者：田代直幸（常葉大学）他4名

研究課題：持続的な学びを支える学習科学ポータルサイトの開発と評価

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（A）（一般）（代表：白水始）

研究概要：科学教育の研究者と学習科学の研究者が共同し，持続的な学びを支える学習科学ポータルサイトの開発と評価を行った。

本専攻研究者：山下晃一

研究課題：現代アメリカ地方教育行政における「急進性」の生成基盤と作用に関する調査研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表：山下晃一）

研究概要：本研究では、近年の米国の地方教育行政において、特に学力向上や教員処遇等をめぐって、関係者の反発や理論的根拠の弱さ等にもかかわらず、所期の目的貫徹のために関連諸施策が強力に展開される様子を「急進性」という概念によって把握し、その根拠、展開過程、教育活動への作用、米国教育行政学・教育政治学への今日の影響を解明することによって、わが国の教育行政学への理論的含意を読み解くことを目的とする。

本専攻研究者：山下晃一

共同研究者：佐藤晴雄（日本大学）、小林正幸（東京学芸大学）、他 15 名

研究課題：対保護者トラブルの予防と解決のための研修プログラムの構築と効果に関する学際的研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（A）（代表：小野田正利）

研究概要：幼稚園・保育園から大学に至るまで、児童・生徒・学生の保護者・親権者からの要望・要求が急増し、時にその対応に苦慮することは日常茶飯事である。これらを広く「保護者対応問題」ととらえて、受け手の学校の教職員が対応能力や意識を高めていくことは、単にその場しのぎの解決を超えて、さらに進んだ「保護者との良好な関係づくり」につながる。本研究はその研修プログラムの開発を目指すものである。

本専攻研究者：山下晃一

共同研究者：渡部昭男（神戸大学）、大桃敏行（東京大学）、他 11 名

研究課題：地方教育行政組織改革と「共同統治」に関する理論と実践の総合的研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（代表：坪井由美）

研究概要：本研究では、世界の教育ガバナンス改革の実践に学び、地方教育行政組織と学校との学習の関係の構築により、両者をともに教育改革主体として位置づけ、学校地域における保護者・住民と教職員による共同統治の理論を深め、わが国の今次の地方教育行政組織改革立法を検証する。そして、基礎自治体にて教育政治文化風土調査法を開発するなかで、巡回相談による新しい質の教育（福祉）指導行政を創出する理論と実践を総合的に探究する。

本専攻研究者：山下晃一

共同研究者：安藤知子（上越教育大学）、加藤崇英（茨城大学）、他

研究課題：新たな学校ガバナンスにおける「教育の専門性」の再定位

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究（代表：浜田博文）

研究概要：本研究は、近年の日本の教育改革論議と学校ガバナンス改革において「教育の専門性」が劣位に置かれていることの問題性に着目し、新たに構築されるべき学校ガバナンスにおけるその再定位のあり方を、日米比較の視点をもって理論的・実証的に追究することを目的とする。

本専攻研究者：吉永潤

研究課題：社会科教育において競争的合意形成能力の育成をめざす交渉ゲームの開発と評価

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表：吉永潤）

研究概要：社会科教育において社会的対立と合意形成の両局面を重視し体験させる交渉ゲームを開発し、その教育効果を評価する。

本専攻研究者：渡部 昭男

研究課題：後期中等・高等教育における「無償教育の漸進的導入」の原理と具体策に係る総合的研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（一般）（代表：渡部 昭男）

研究概要：日本政府が2012年9月に留保撤回し拘束されることとなった国際人権A規約第13条2(b)(c)に規定された「無償教育の漸進的導入」原理に着目し、後期中等・高等教育における「無償教育の漸進的導入」具体策を総合的研究に検討する。

本専攻研究者：渡邊隆信

共同研究者：宮本健市郎（関西学院大学）、山崎洋子（武庫川女子大学）、山名淳（京都大学）

研究課題：新教育運動期における都市計画と学校の学び環境の公共性に関する比較社会史的研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表：宮本健市郎）

研究概要：19世紀末から20世紀前半の大都市およびその周辺で展開した学校改革（新教育運動）を取り上げ、大都市の学校がどのような形で子どもの遊びのための環境を用意しようとしたのかを解明する。

本専攻研究者：伊藤篤

共同研究者：伊藤篤、南憲治（京都橘大学）、竹元恵子（四条畷学園大学）、他2名

研究課題：父親の養育性と役割取得を促す発達教育プログラムの開発

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表：寺見陽子）

研究概要：父親の育児意識および育児参加の意識を探り、父親の養育性と役割アイデンティティの形成を促す教育プログラムを開発することを目的とした研究である。研究は大きく3つの段階を想定して実施される。第一は父親の育児意識・育児参加の様相を明確化する。第二は、育児意識・参加意識の背景とその要因構造を明らかにし、養育性形成のプログラム作成に向けた視点を同定することである。第三は、当該プログラムの作成とその効果を検証することである。

本専攻研究者：津田英二、伊藤篤、松岡広路

共同研究者：伊藤篤、松岡広路、赤木和重、太田和宏、横須賀俊司（県立広島大学）、田中真理（九州大学）

研究課題：社会関係資本とキーコンピテンシーによる困難事例自己解決コミュニティ開発の方法

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（一般）（代表：津田英二）

研究概要：社会がいかにこの「困難事例」と向き合うかという課題へのアプローチを契機として、社会関係資本とキーコンピテンシーをキーワードとしながら、コミュニティが多様な課題を自律的に解決するための働きかけの方法を開発することを目的とする。

本専攻研究者：渡邊隆信

研究課題：ドイツ自由学校共同体の研究

研究資金：科学研究費補助金・研究成果公開促進費（代表：渡邊隆信）

研究概要：20世紀初頭ドイツの教育改革家パウル・ゲヘーブが、自ら設立したオーデンヴァルト校において「自由学校共同体」という理念をどのように構想し実践したのかを、未刊行一次史料の分析を通して実態的に解明した。

本専攻研究者：木下孝司

研究課題：文化伝達からみた幼児の仲間集団の発達：実験的アプローチの試み

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究（代表：木下孝司）

研究概要：幼児は、仲間の振る舞いを見てあるいは相互に教えあつて文化（知識、技術、規範）を学び伝える。本研究は、幼児の集団内における文化伝達のプロセスを調べるための実験的方法を開発し、文化伝達の指標化を試みている。

本専攻研究者：川地亜弥子

共同研究者：前田晶子（鹿児島大学），河原尚武（近畿大学），永田和寛（京都大学博士課程後期課程）

研究課題：戦後地域生活綴方・作文教育サークルにおける作品批評論の展開

研究資金：教育目標・評価学会共同研究（代表：川地亜弥子）

研究概要：全国組織「日本作文の会」とは相対的な独自性をもつ近畿圏を中心に，戦後の地域における生活綴方・作文教育サークルの理論的・実践的動向について，作品批評論に焦点をあてて明らかにしている。

本専攻研究者：川地亜弥子

共同研究者：服部敬子（京都府立大学）

研究課題：学童期における自己認識の発達

研究概要：学童期における自己認識について明らかにするために，自己に関する自由記述作文調査を実施した。附属校および公立校に協力を得た（小学校1～6年の各学年で実施，対象児童総数約600名）。

本専攻研究者：山口悦司

共同研究者・所属機関：Hayat Hokayem（Texas Christian University, U.S.A.），Hui Jin（Educational Testing Service, U.S.A.）

研究課題：小学生を対象としたラーニング・プログレッションズに関する国際比較研究

研究概要：小学生を対象とした食物連鎖に関するラーニング・プログレッションズに関する国際比較研究である。

本学研究専攻者：清野未恵子，（源利文）

共同研究者：高田晋史（神戸大学・島根大学），丹羽英之（京都学園大学），長井拓馬（本学研究科大学院博士前期課程）

研究課題：地域密着型生物多様性保全システムの構築—環境DNAを用いた生物相モニタリング調査

研究資金：公益財団法人中谷医工計測技術振興財団（代表：清野未恵子）

研究概要：兵庫県篠山市では，生物多様性に配慮した農業，また地域づくりに取り組みつつあるが，生物の分布や生物多様性がどのように維持されているのかをモニタリングする仕組みが整っていない。そこで，環境DNAを用いた最先端の科学技術を用いて，篠山市に生息している生き物の調査とそのマネジメントシステムを，市民と高校と大学と行政とで連携して構築する。

## 7.5.2. 人間環境学専攻

本専攻では，多分野の教員が自身のテーマを発展させ，多彩なプロジェクトに従事していることから，研究展開のあり方が多様である。そのなかから，本専攻のメンバーが主宰または参加している共同研究を以下に紹介する。なお，以下は，系統だった紹介ではなく，事例紹介で，記述は順不同である。

本専攻研究者：伊藤真之，蛭名邦禎，源利文，中山晶絵

研究代表者：加納圭（滋賀大学／京都大学）

共同研究者：高梨克也（京都大学），吉澤剛（大阪大学），菅万希子（帝塚山大学）ほか

研究課題：STIに向けた政策プロセスへの関心層別関与フレーム設計（注：STIは，科学技術イノベーション（Science and Technology Innovation））

研究資金：国立研究開発法人科学技術振興機構「科学技術イノベーション政策のための科学」研究開発プログラム

研究概要：科学技術イノベーション政策過程に「関心層」のみでなく「潜在的関心層」等も含めた多様な国民の参画を促すために，国民のセグメンテーションやプロファイリングを行い，セグメント固有のニーズ発



掘などを目指す。

本専攻研究者：丑丸敦史

研究代表者：丑丸敦史

共同研究者：田中健太（筑波大学），内田圭（東京大学）ほか

研究課題：スキー場における半自然草地性植物の多様性

研究資金：本学予算（個人研究費）

研究概要：菅平高原内のスキー場において植生調査を行い，多様な希少な草原性植物がスキー場において生育していることを記述し，その維持機構を解明する。

本専攻研究者：蛭名邦禎，伊藤真之

研究代表者：谷口真人（総合地球環境学研究所）

共同研究者：谷口真人，ハイン・マレー，大西有子（総合地球環境学研究所）ほか

研究課題：「日本が取り組むべき国際的優先テーマの抽出及び研究開発のデザインに関する調査研究」

研究資金：国立研究開発法人科学技術振興機構 社会技術研究開発センター（JST/RISTEX）「フューチャー・アース構想の推進事業」（総合地球環境学研究所への委託研究予算）

研究概要：グローバルな持続可能社会の構築を目指す国際的な地球環境研究プログラム「フューチャー・アース」において，自然科学，人文・社会科学の研究者に加え，社会各層のステークホルダーとの協働を通して，日本が取り組むべき国際的優先テーマの抽出を行う。

本専攻研究者：江原靖人

研究代表者：江原靖人

共同研究者：中村晴信（神戸大学），加藤修雄（大阪大学）ほか

研究課題：あらゆるインフルエンザウイルスを捕捉・検出する糖鎖修飾三量体核酸の開発

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C）（代表：江原靖人）

研究概要：あらゆるインフルエンザウイルスの捕捉を目的として糖鎖修飾三量体核酸を合成し，環境中のウイルスの除去を行なう。

本専攻研究者：江原靖人

研究代表者：江原靖人

共同研究者：開発邦宏（大阪大学）

研究課題：インフルエンザウイルスを検出するシアリルラクトース修飾3量体核酸の合成

研究資金：物質・デバイス領域共同研究拠点課題（代表：江原靖人）

研究概要：あらゆるインフルエンザウイルスを検出するシステムの開発を目的とし，シアリルラクトース修飾核酸を合成し，ウイルス検出の評価を行う。

本専攻研究者：佐藤春実

研究代表者：佐藤春実

共同研究者：尾崎幸洋（関西学院大学），山本茂樹（大阪大学），保科宏道（理化学研究所）

研究課題：テラヘルツイメージング分光による高分子材料の劣化の可視化と深さ方向分析

研究資金：JST 産学共創基礎基盤研究プログラム：技術テーマ「テラヘルツ波新時代を切り拓く革新的基盤技術の創出」（代表：佐藤春実）

研究概要：テラヘルツ（THz）イメージング測定により，非破壊・非接触で高分子材料の構造・物性を可視化し，ひずみや欠陥がどのような分子構造に由来するのかを明らかにする。

本専攻研究者：佐藤春実

研究代表者：尾崎幸洋

共同研究者：尾崎幸洋（関西学院大学），森澤勇介（近畿大学）

研究課題：多角入射 ATR 紫外分光法によるグラフェンナノコンポジットの表面電子状態の研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤（A）（代表：尾崎幸洋）

研究概要：多角入射 ATR 型紫外分光法を用いて，グラフェン・酸化グラフェン・カーボンナノチューブなどのナノカーボン材料と，これらとポリマーとのナノコンポジット材料の電子状態変化を表面から深さ 100nm までを 10nm の分解能で測定し，カーボンナノ材料とそのナノコンポジット材料評価法を確立する。

本専攻研究者：高見泰興

研究代表者：曾田貞滋（京都大学）

共同研究者：池田紘士（弘前大学）

研究課題：飛翔多型をもつ甲虫類の全球的分散と種多様化

研究資金：科学研究費補助金・基盤（A）（代表：曾田貞滋）

研究概要：飛翔能力が退化した種を含む甲虫群が，地球上でどのように分布拡大，多様化したのかを解明するために，ゲノム配列に基づいた系統解析を行う。

本専攻研究者：高見泰興

研究代表者：清水晃（首都大学東京）

共同研究者：吉村仁（静岡大学）

研究課題：クモバチにおける原始社会性の起源：メス間の社会行動の特性とその進化的意義

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C）（代表：清水晃）

研究概要：社会性の進化的起源を探るため，共巢性を持つクモバチの一種の個体間相互作用と血縁度を解析する。

本専攻研究者：源利文

研究代表者：近藤倫生（龍谷大学）

共同研究者：源利文，益田玲爾（京都大学），宮正樹（千葉県立中央博物館）ほか

研究課題：環境 DNA 分析に基づく魚類群集の定量モニタリングと生態系評価手法の開発

研究資金：JST 戦略的創造研究推進事業（CREST）（代表：近藤倫生）

研究概要：環境 DNA 分析を海域の魚類群衆のモニタリングに適用し，生物多様性や生態系の評価手法として用いることのできる手法を開発する。

本専攻研究者：源利文

研究代表者：土居秀幸（兵庫県立大学）

共同研究者：源利文，山中裕樹（龍谷大学），高原輝彦（島根大学）ほか

研究課題：環境 DNA 技術を用いた生物分布モニタリング手法の確立

研究資金：環境研究総合推進費（代表：土居秀幸）

研究概要：環境 DNA 分析によって陸水域の魚類や両生類をモニタリングする手法を開発する。

本専攻研究者：井上真理

研究代表者：井上真理

共同研究者：筒井久美子，八木宏幸（村田機械株式会社）

研究課題：編み布 / 織布の官能検査に及ぼす物理的特性（糸・布）に関する研究

研究資金：共同研究（代表：井上真理）

研究概要：編み布 / 織布の官能検査と物理的特性との相関の強い特性値，紡績糸と編み布 / 織布の物理的特性との相関の強い特性値の抽出を行い，紡績糸の物理的特性値から編み布 / 織布の官能検査結果を予測する解析技術を確立することで，必要とされる最終用途の繊維製品の糸からの設計にかかわる基礎的資料を得る。

本専攻研究者：井上真理

研究代表者：井上真理

共同研究者：縄間潤一（パナソニック株式会社）

研究課題：タオル及びおしゃれ着風合いの定量化等に関する研究

研究資金：共同研究（代表：井上真理）

研究概要：タオル，およびおしゃれ着（婦人用ニットセーター）の風合いを物理特性から定量化する方法を検討し，確立することで，洗濯による風合い変化の特徴を捉える。

本専攻研究者：近江戸伸子

研究代表者：小野寺康夫（北海道大学）

共同研究者：小野寺康夫（北海道大学）

研究課題：ホウレンソウ性決定遺伝子座の構造決定および進化過程の解明

研究資金：科学研究費補助金・基盤（B）（代表：小野寺康夫）

研究概要：Spinacia 属の系統学的に異なる種から同型と異型の性染色体をそれぞれ同定し，性染色体の異型化に関わる進化機構について解明する。

本専攻研究者：近江戸伸子

研究代表者：近江戸伸子

共同研究者：辻本壽（鳥取大学）・留森寿士（鳥取大学）

研究課題：ジャトロファの開花遺伝子導入ならびに染色体に関する研究

研究資金：鳥取大学乾燥地研究センター共同研究（代表：近江戸伸子）

研究概要：バイオディーゼル産出のためのジャトロファについて，環境ストレス抵抗性の向上ならびにさまざまな特性を改良するために遺伝子組換え作出や遺伝的特性の解明を行う。

本専攻研究者：大野朋子

研究代表者：大野朋子

共同研究者：山口裕文（東京農業大学），福井亘（京都府立大学）

研究課題：照葉樹林下の庭園における観賞果実への鳥類等の干渉に関する研究

研究資金：新技術開発財団 植物研究助成（代表：大野朋子）

研究概要：鳥類の採食行動と果実色との関係を定量的に把握することにより，園芸・外来植物の逃げ出し，野生化について論考する。

研究代表者：大野朋子

共同研究者：山口裕文（東京農業大学），保田健太郎（秋田県立大学），大形徹（大阪府立大学），魯元学（中国科学院昆明植物研究所）

研究課題：東南アジアの少数民族における祭祀植物の利用と地域景観形成に関する研究

研究資金：科学研究費補助金・若手（B）（代表：大野朋子）

研究概要：少数民族の生活で使用されている祭祀にかかわる植物とその維持機構を明らかにすることで，地域固有の植生景観の成り立ちについて論考する。

本専攻研究者：佐藤真行

研究代表者：佐藤真行

共同研究者：丑丸敦史（神戸大学）、片桐恵子（神戸大学）

研究課題：生活の質を考慮した生態系サービスの評価手法に関する学際研究

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究（代表：佐藤真行）

研究概要：都市生態系サービスに対し、自然科学的データ収集、ならびにその社会科学的評価のための経済学・心理学的方法の開発と実践。

本専攻研究者：佐藤真行

研究代表者：佐藤真行

共同研究者：栗山浩一（京都大学）、馬奈木俊介（九州大学）、藤井秀道（長崎大学）、林岳（農林水産政策研究所）、蒲谷景（地球環境戦略研究機関）

研究課題：生活の質を考慮した生態系サービスの評価手法に関する学際研究

研究資金：環境省受託研究・環境経済の政策研究（代表：佐藤真行）

研究概要：COP 愛知目標の達成に資する日本版生態勘定の開発。

本専攻研究者：白杉直子

研究代表者：大村直人（神戸大学）

共同研究者：本多佐知子（神戸山手短期大学）

研究課題：人間の暗黙知とカオス混合理論を組み合わせた革新的攪拌装置の開発

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究（代表：大村直人）

研究概要：熟練した調理師による攪拌・混合動作における暗黙知を抽出するために、プロと調理を学び始めた学生との動作を比較・解析し、カオス混合理論を用いて混合メカニズムを数理科学的に明らかにすることで、従来なかった攪拌装置の開発に繋げることを目的とする。

本専攻研究者：田畑智博、佐藤真行

研究代表者：田畑智博

共同研究者：大西暁生（東京都市大学）、佐伯 孝（富山県立大学）、川本清美（北海道教育大学）

研究課題：震災に伴う人工資本・自然資本ストックの損失と対策の評価

研究資金：環境省・環境研究総合推進費補助金

研究概要：南海トラフ巨大地震によって失われる人工・自然資本ストックの量を明らかにするとともに、これに伴って発生する災害廃棄物の処理・リサイクル対策を提案する。

本専攻研究者：田畑智博

研究代表者：藤井 実（国立環境研究所）

共同研究者：藤田 壮（国立環境研究所）、田崎智宏（国立環境研究所）、稲葉陸太（国立環境研究所）、後藤尚弘（豊橋技術科学大学）

研究課題：都市廃棄物からの最も費用対効果の高い資源・エネルギー回収に関する研究

研究資金：環境省・環境研究総合推進費補助金

研究概要：都市の人口やエネルギー需要の将来変化を考慮して、廃棄物のサーマルリサイクルを軸としたエネルギー供給システムの設計方法を提案する。

本専攻研究者：平山洋介

研究代表者：平山洋介

共同研究者：佐藤岩夫（東京大学），越山健治（関西大学），糟谷佐紀（神戸学院大学）ほか

研究課題：東日本大震災からの住宅復興に関する被災者実態変化の追跡調査研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤（B）（代表：平山洋介）

研究概要：住宅関連の被災者実態・意向の変化を継続的なアンケート調査で追跡することによって、住宅復興政策のあり方を実証的に検討する。

本専攻研究者：平山洋介

研究代表者：平山洋介

共同研究者：川田菜穂子（大分大学）ほか

研究課題：ポスト・クライシスの住宅供給システムに関する国際比較分析

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究（代表：平山洋介）

研究概要：国際緊急危機に続く住宅システムの変容を、とくに住宅供給とモーゲージ市場の制度改変に焦点を合わせ、国際比較分析を行う。

本専攻研究者：山崎健，岡田章宏，浅野慎一，澤宗則

研究代表者：山崎健

共同研究者：岡田章宏，浅野慎一，澤宗則ほか

研究課題：東アジアにおける越境的社会圏の展開と課題

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C）（代表：山崎健）

研究概要：東アジアにおける越境的社会圏の実態，及びそこで生じつつある諸課題とその実践的解決の方途を，総合人文社会科学・地域研究の方法で解明する

（人間環境学科長 平山洋介）

## 8. 産官学共同・地域連携による教育・研究活動

### 8.1. 産官学共同プロジェクト

#### (1) ベンチャー創成型産官学共同研究プロジェクト

神戸大学発ベンチャー企業「ジーン・アンド・ジーンテクノロジー (G&GT)」株式会社を中心に開発された高速増殖型オイル生産藻「ボトリオコッカス・ブラウニー (Botryococcus braunii)」を使って、再生可能エネルギーの開発を行って来た。この改良型ボトリオコッカス藻は2009年に野生の石油系オイル生産藻「ボトリオコッカス・ブラウニー (Botryococcus braunii)」から育種開発に成功した新品種の藻(通称“榎本藻”)で乾燥藻重量の50～60%ものオイルを生産する能力を維持しながら世界最高の増殖速度を持つ品種である。

2012年度より、この高速増殖型のボトリオコッカス藻“榎本藻”を使って、IHI・ネオモルガン研究所(現ちとせ研究所)・神戸大学の三者で、藻からオイル生産の実用化を目指して、NEDOの資金援助の下、産学連携で実用化へ向けた研究開発を行っている。この藻が光合成によって生産する石油系オイルは、ジェット燃料、ガソリン、軽油などのエネルギー資源として利用できるだけでなく、プラスチックや化学繊維の原料も供給でき、石油と異なり新たなCO2排出をしないカーボン・ニュートラルな地球環境に優しい、かつ食料生産とも競合しない“次世代のエネルギー生産システム”である。2013-14年度は上記3社で設立したINeoG合同会社を中心に、IHI横浜工場内に150㎡(ヘーベ)の野外培養システムを建設し、NEDO支援の下さまざまな野外培養試験を実施し、事業化へ向けた研究開発を行ってきた。

2015年度は、NEDOからの資金援助を受けて、遺伝子組換え法の開発に加え、さらに野外での1500㎡(ヘーベ)の巨大培養システムでの試験設備を鹿児島市七ツ島のIHI施設敷地に完成させ、2015年度4月より本格的な野外プラント培養試験を開始させた。

次年度(2016年度)は、引き続きNEDOの資金援助を受けて、東南アジアなど海外での365日生産を実現するプラント建設の予備的試験を開始する予定である。

(人間環境学専攻 榎本平)

### 8.2. 地域連携プロジェクト

#### (1) 「神戸マラソン2015」

神戸マラソンの基本構想を審議する「フルマラソン検討委員会」(2009)の委員長を務めてから、「第1回神戸マラソン2011」から「第5回神戸マラソン2015」と継続して、兵庫県と神戸市が主催する都市型市民マラソン大会の運営をサポートしてきた。今年度は、神戸マラソン2015実行委員会委員を務め、大会参加者のイベント評価に関するランナー調査、及びボランティア調査のコーディネート等を行った。

ランナー調査においては、発達科学部人間行動学科生涯スポーツゼミを中心に、1回生から4回生、院生及びOB・OGの合計18名が、フルマラソンとクォーターマラソンのフィニッシュ地点において、ランナーに対する質問紙調査を実施した。回収した1,530票のデータ分析により、大会満足度や大会参加の決定要因、大会の魅力、大会参加支出等を調べ、性別、種目別、ランナータイプ別、および居住地別に比較した。

大会の満足度について、満足群の割合は、「スタッフの対応」(98.9%)、「大会の運営全体」(98.3%)、「大会全体の満足度」(98.3%)、「沿道の応援(演奏を含む)」(98.3%)となっていた。「大会の広報(ホームページを含む)」、「大会の時期」、「トイレ」、「沿道の応援(演奏を含む)」、「参加賞」に関して満足群の増加がみられた。「大会全体の満足度」、「コース」については満足群の割合がやや減少したが、ほとんどの項目において前回大会よりも今回の満足群が増加していた。

大会参加における支出について、「交通費」が平均7,217円、「宿泊費」が平均15,843円、「飲食費」が平均4,281円、「おみやげ代」が平均4,638円、「その他(観光費など)の費用」が平均7,360円となり、総費用の平均は16,810円であった。これらのデータを基にした「ひょうご経済研究所」の分析により、神戸マラソン2015の経済効果が算出された。調査報告書と要約版は、実行委員会等において配布され、次年度の大会におけるPDCAサイクルのエビデンスとして活用されている。

また、「神戸マラソン在り方検討委員会委員長」を務め、第10回大会(2020年)に向けての在り方を検討した。具体的には、基本理念を策定し、第10回大会までの達成目標、及び具体的方策の取りまとめを行い、神戸マラソン実行委員会で審議し承認された。

(人間発達専攻 山口泰雄)

## (2) マスターズ甲子園プロジェクト

「マスターズ甲子園」は、全国の高校野球OB/OGが、性別、世代、甲子園出場・非出場、元プロ・アマチュア等のキャリアの壁を越えて出身校別に同窓会チームを結成し、全員共通の憧れであり野球の原点でもあった「甲子園球場」で白球を追いかける夢の舞台を目指そうとするものである。全国200万人と推計される元高校球児による各地域でのOB/OG野球クラブの活性化、生涯スポーツとしての野球文化の発展、熟年(マスターズ)世代と共に高校球児を含めたユース世代にも応援メッセージを発信しながら、活力と夢に満ちた個人・地域・社会・未来への創造と発展に寄与していくことを開催目的とし、神戸大学発達科学部の教員、職員、学生が中心となって産官学民の連携体制により2004年から第1回大会を始動した。大会事務局と主催団体である全国高校野球OBクラブ連合の事務局を神戸大学発達科学部内のスポーツプロモーション研究室に併設し、神戸大学による後援のもと、大学による社会貢献活動とアクションリサーチを展開すると共に、スポーツ振興や生涯教育、老年学等のテーマに興味を持つ大学生が、成人・中高年のスポーツ活動支援や生きがい創造支援への直接的関与を可能にしていくための、学内外における学習機会として機能していくことを目指している。今年の事務局運営は、大会開催日(11月7日・8日)が正式決定する3月下旬から始動し、その後、平均して週1回の大会運営委員会を開催し、2月から9月までの期間で開催された各都道府県における地方予選大会支援と並行しながら、甲子園本大会に向けてのプログラム立案、出場者受付、PR・広報事業、財源の確保、ボランティアマネジメント等の準備作業を進め、大会前日の総会運営、大会当日運営、大会終了後の事後処理を行った。マスターズ甲子園2015(第12回大会)には、16都道府県の地方予選大会から代表16チーム(計752名)が出場し、また、甲子園キャッチボール(元高校野球関係者、親子、夫婦、過去のボランティア参加者によるペアによる自由参加プログラム)に648名が参加した。神戸大学学生・院生を中心とした全国の学生ボランティア、成人・中高年ボランティア、近畿圏の高校生を含めた計830名のボランティアがスポーツプロモーションの一環として大会運営を支え、本学部からは、教員2名、大学院生3名、学部生48名、本学部卒業生47名が参加した。現在、大会事務局が運営する全国高校野球OBクラブ連合には37都道府県、約2万人が登録し、各地方組織と本大会を支える各種民間団体や行政組織との連携事業として本プロジェクトを進めていく。

(人間行動専攻 長ヶ原誠)

## (3) 兵庫県三木市との連携事業

兵庫県三木市と神戸大学とが協定を結んでの連携事業が進んでいる。その一環として、三木市の掲げる「次世代育成プロジェクト事業」には主に本研究科が参加して、2012年度から「確かな学力向上プロジェクト」がスタートした。2015年度は、「三木市学力向上推進委員会」の開催(2012年度～)、神戸大学スタッフの研修講師派遣(2013年度～)、などが行われた。8中学校の校区を順次指定しての「三木市学力向上サポート事業」(2014年度～)に関しては、2014年度指定で2年目を迎えた1中学校2小学校が研究発表会を開催した。2015年度指定で1年目の1中学校2小学校に関しては、神戸大学側も参与する形で授業研究会等が持たれている。引き続き、共同の取り組みが展開される予定である。

(人間発達専攻・学び系 渡部昭男・山下晃一・川地亜弥子)

## (4) 篠山地域おこし協力隊

兵庫県篠山市では、H26年度から神戸大学と連携して、総務省直轄の事業である「地域おこし協力隊」が導入された。「地域おこし協力隊」とは、都市住民が当該地域に移住し、様々な地域活動に従事しながら定

住を目指す取組みである。現在、篠山市では神戸大学の学生を中心に3名の隊員が活動しており、そのうち2名が発達科学部・人間発達環境学研究科の学生となっている。

学部4回生の1名は、活動地区の大芋（おくも）地区で水路を活用したマイクロ水力発電に取り組んでおり、今年度は、市野々集落や大芋小学校で水車づくりのワークショップを開催し、すでに12台の小型水車が完成した。今年度は、近畿地区の工業高校などが参加したマイクロ水力発電アイデアコンテストを開催し、多世代が地域づくりに参画する動きを推進した。卒業研究では、活動地域を対象とした研究テーマ「地域における健康学習の可能性と課題－兵庫県篠山市を事例に－」を執筆し、次年度は地域福祉の実践活動を展開する予定である。

研究科院生の1名は、希少植物の生息地を守りつつ生物多様性を維持する取組みの普及・啓発を行っており、今年度は、活動地区の草山地区や居住している福住地区を中心に、希少植物の生息調査や実験を行った。また、福住地区では長年耕作放棄されてきた棚田を再生し、畦畔などの生き物に配慮した農法で稲作と黒大豆の栽培を行った。今年度は、希少植物に配慮した草刈りの手法の提案や畦畔植物の学習会などを開催した。それらの研究・実践活動を通じて、修士論文として「放棄地における里草地再生：伝統的管理の再導入実験」を執筆した。今後は、これらの研究成果を活かした地域づくり・農業実践を進める予定である。

（人間発達専攻・学び系 清野未恵子）

#### (6) 兵庫障害児放課後ネットワーク

障害のある子どもたちが豊かに育つために、学校や家庭だけではなく、「第三の世界」としての放課後の活動場所を保障することは長らく課題であった。兵庫障害児放課後ネットワークは、10年前、先進的な取り組みを始めていた学童保育などの関係者とともに結成され、実践を進めるための情報交換などを行ってきた。ここ数年、法整備もあって、放課後等デイサービスの事業所数は急増し、本ネットワークに対して、研修や情報交換の期待は高まっている。今年度は、2015年4月19日に第11回総会（神戸市勤労会館）を開催し、98名の関係者が参加して、実践報告と講演会（木下孝司「実践で悩んだ時に立ち返りたい発達の視点—子どもの理解の基本を考える」）を行った。また、2015年12月13日には「放課後活動にかかわる人のための学習会」を開催し、講演会（丸山啓史・京都教育大学准教授「放課後活動のための子ども理解—その視点」）を行った後、2つの分科会に分かれて実践報告と交流を行った。35事業所80名の関係者が参加して、障害のある子どもの放課後保障の取り組みについて、日々の実践に有益な意見交換ができた。今後も、発達研究の成果を地域での発達保障ネットワークづくりに生かしていきたい。

（人間発達専攻 木下孝司）

#### (7) 「千種川流域の環境保全活動」

神戸大学サイエンスショップは、平成25年度より兵庫県の千種川水系佐用川流域の市民グループ「佐用川のオオサンショウウオを守る会」の環境保全、啓発活動等への協力を行ってきた。本年度は新たな取組として、サイエンスショップがコーディネートを行い、千種川流域圏で活動するグループ「千種川圏域清流づくり委員会」による環境モニタリングの取組「千種川一斉水温調査」（8月）への総合地球環境学研究所、および神戸大学人間発達環境学研究科の研究者の参画・協力を開始した。この調査は、同委員会が14年間にわたり継続してきた河川において生物種の生息の重要な要件の一つとなる夏季の水温等の市民による多地点同時調査であるが、専門家との新たな協働により、同位体分析等より多く項目の分析を行う形に発展している。また、本年度は佐用町内の民間企業の敷地（佐用中学校跡地）内にあるビオトープにおける環境DNA分析調査も開始した。当該のビオトープは数十年前に旧佐用中学校の在校生らが手作りしたもので、同地域の環境保全活動のシンボリック的存在になりうるものである。両調査とも、現在分析結果の取りまとめが行われており、今後、地域へのフィードバックの機会を設ける予定である。

（人間環境学専攻 源利文）



### 8.3. 高大連携

神戸大学では高校と連携しながら、高校生が早くから大学の雰囲気を経験し、将来の目的を意識した大学選びが出来るよう、高校生を対象に授業見学・公開授業・出張講義などを実施している。大学の機能強化に伴う学部改組を控えていることもあり、学部紹介も組み込むことを意識して実施した。

高大連携事業についての重要性がさらに高まっていること、連携の対象が高等学校のみにとどまらないことに鑑み、発達支援インスティテュート内に教育連携推進室を設置し、学校教育・社会教育における連携事業への協力に取り組むこととした。

#### 平成 27 年度 高大連携に関わる事業について

(※印のあるものは兵庫県教育委員会との高大接続推進事業に基づくもの)

実施日	依頼元	担当教員	実施内容
平成27年4月18日(土)	兵庫県立篠山鳳鳴高等学校・兵庫県立篠山産業高等学校丹南校	源 利文	篠山市内の河川の調査と住民向け説明会の開催 (公益財団法人中谷医工計測技術振興財団の助成を受けておこなっています。)
平成27年5月26日(火)	兵庫県立御影高等学校	澤 宗則	調査研究に関する解説と助言
平成27年6月6日(土)	兵庫県立姫路西高等学校	矢野 澄雄	高校生の保護者を対象とした大学説明, 研究紹介, キャンパス見学
平成27年6月12日(金)	神戸市立六甲アイランド高等学校	鳥居 深雪	高等学校における出張講義
平成27年7月4日(土)	雲雀丘学園高等学校	船寄 俊雄	高等学校における出張講義
平成27年7月6日(月)	和歌山県立海南高等学校	伊藤 真之	高等学校における出張講義
平成27年7月22日(水)	武庫川学院&兵庫咲テク事業	伊藤真之, 源利文, 青木茂樹	S S H 校生の実習受入
平成27年7月30日(木)	兵庫県立龍野高等学校	蛭名邦禎, 伊藤真之, 源利文	S S H 校生の受入
平成27年8月3(月), 4日(火)	兵庫県立豊岡高等学校	源 利文	S S H 校生の受入
平成27年8月18日(火), 19日(水)	兵庫県立豊岡高等学校	伊藤 真之	S S H 校生の受入
平成27年8月21日(金)	西宮市立西宮東高等学校	源 利文	実習受入
平成27年9月29日(火), 10月13日(火), 11月17日(火), 平成28年2月16日(火)	兵庫県立兵庫高等学校	伊藤 真之	大学院学生ティーチングアシスタントによる研究指導のコーディネート 研究発表指導助言
平成27年10月22日(木)	沖縄県教育委員会	佐藤 春実	沖縄県の高中生受入(模擬授業, 大学生との交流, 構内見学)
平成27年10月24日(土)	兵庫県立篠山鳳鳴高等学校・兵庫県立篠山産業高等学校丹南校	清野 未恵子	篠山市内の河川の調査と住民向け説明会の開催 (公益財団法人中谷医工計測技術振興財団の助成を受けておこなっています。)

平成27年10月30日(金)	※兵庫県立星陵高等学校	岡田 章宏, 源 利文	学部紹介, 研究内容紹介, 大学生との交流
平成27年11月5日(木)	沖縄県教育委員会	源 利文	沖縄県の高校生受入(模擬授業, 大学生との交流, 構内見学)
平成27年11月11日(水)	※兵庫県立加古川西高等学校	岡田 章宏, 岡崎 香奈, 鈴木 幹雄, 川地 亜弥子	学部紹介 模擬授業, キャンパスツアー 授業見学「子どもの表現教育」 授業見学「教育科学論研究法 (ゼミ形式)」
平成27年11月12日(木)	※兵庫県立芦屋高等学校	津田 英二	アゴラ, あーちでの取り組み, 大船渡支援の概要紹介, 意見交換など
平成27年11月16日(月)	兵庫県立兵庫高等学校	岡田 章宏, 源 利文	学部紹介, キャンパストライアル(模擬授業)
平成27年11月19日(木)	神戸海星女子学院高等学校	古谷 真樹	高等学校における出張講義
平成27年11月30日(月)	※兵庫県立星陵高等学校	江原 靖人	高等学校における出張講義
平成27年12月17日(木)	※兵庫県立北須磨高等学校	塚脇 淳	学科説明, 特別授業「美術は科学だ」, 授業見学「表現と発想のプロセス」
平成27年12月18日(金)	※兵庫県立兵庫高等学校	岡部 恭幸	高等学校における出張講義
平成27年12月19日(土)	兵庫県立篠山鳳鳴高等学校・兵庫県立篠山産業高等学校丹南校	清野 未恵子	篠山市内の河川の調査と住民向け説明会の開催 (公益財団法人中谷医工計測技術振興財団の助成を受けておこなっています。)
平成28年1月16日(土)	兵庫県立篠山鳳鳴高等学校・兵庫県立篠山産業高等学校丹南校	清野 未恵子	篠山市内の河川の調査と住民向け説明会の開催 (公益財団法人中谷医工計測技術振興財団の助成を受けておこなっています。)
平成28年1月31日(日)	サイエンスフェア in 兵庫	蛭名 邦禎, 青木 茂樹	顧問, 研究紹介のブース出展
平成28年2月6日(土)	岐阜県立岐阜高等学校	源 利文	自然科学部実習受け入れ
平成28年2月11日(木・祝)	神戸大学附属中等教育学校	目黒強, 吉永潤, 高橋讓嗣, 岡部恭幸, 伊藤真之, 佐藤春実, 高田義弘, 朴木佳緒留	授業研究会における指導助言
平成28年2月20日(土)	兵庫県立篠山鳳鳴高等学校・兵庫県立篠山産業高等学校丹南校	清野 未恵子	篠山市内の河川の調査と住民向け説明会の開催 (公益財団法人中谷医工計測技術振興財団の助成を受けておこなっています。)

平成28年2月22日(月)	兵庫県立星陵高等学校	伊藤 真之	高等学校における出張講義, 研究発表指導助言
平成28年3月2日(水)	神戸大学附属中等教育 学校	岡田 章宏	学部紹介 高大接続研究に関する説明
平成28年3月13日(日)	神戸大学 発達科学部・ 人間発達環境学研究 科・サイエンスショッ プ	岡田章宏, 蛭名邦禎, 伊藤真之, 青木茂樹	第3回 未来社会を担う人材育成 のための多角連携フォーラム ～課題発見と問題解決につながる 観察力を育む～
平成28年3月17日(木)	兵庫県立西脇北高等学 校	伊藤真之, 佐藤春実, 源利文, 青木茂樹	研究室見学受入
平成28年3月19日(金)	兵庫県立篠山鳳鳴高等 学校・兵庫県立篠山産 業高等学校丹南校	源 利文, 清野 未 恵子	篠山市内の河川の調査と住民向け 説明会の開催 公益財団法人中谷医工計測技術振 興財団の助成を受けておこなって います。
平成28年3月20日(土)	女子中高生のための関 西科学塾	近江戸伸子・佐藤春 実・源利文	実験講習の受入(発達科学部・理 学部・農学部で10コース)

(副研究科長 青木茂樹)

## 9. 社会的活動・震災復興支援

### 9.1 メンタルケア関係

#### (1) 心のケア事業

神戸大学平成 27 年度震災復興支援・災害科学研究推進活動サポート経費として採択された「東日本大震災の心理的影響と支援のあり方に関する継続的研究」の一部資金を活用して、福島県中通り地区などで以下の事業を行った。

#### 1) 教員に対するセミナー／個別相談

①福島県立福島南高等学校／中央高等学校個別相談（4月13日）：養護教諭と最近の生徒の様子、問題などについて、報告を受け、指導上のアドバイスをを行った。

②福島県立福島南高等学校教育相談部教員研修会（5月28日）：生徒理解のための心理検査の使用についてレクチャーを行い、具体的な事例をもとに検討を行った。

#### 2) 生徒に対する出前授業

①福島県立福島南高等学校保健講話（5月28日）：1, 2年生に対して「自分の中の自分を探す」をテーマに、エゴグラム実習を行い、自分の対人関係の特徴を理解するとともに、本当の自分は何をしようとしているかについて、震災後の福島で生きていく高校生に生き方について講じた。

#### 3) 被災地住民に対するミニレクチャー

①神戸大学震災復興支援プラットフォーム主催「未来への復興まちづくり」に関する集会（宮古市8月1日、釜石市8月2日）：岩手県宮古市、釜石市において津波被災住民に対して「街の復興と心の復興」に関するミニレクチャーを行い、質疑応答に応じた。

#### (2) 心のケアに関わるシンポジウムなどの参加

これまでの事業や調査で得られた成果をもとに、またそれらに関連した以下のシンポジウムなどに参加し、情報発信を行った。

①岩手大学地域防災フォーラム（8月3日）：被災数年後より生じてくる生活復興、再建ストレスについて報告を行った。

②日本心理臨床学会第34会秋季大会（9月19日）：NPO法人ビーンズふくしまの「東日本大震災による仮設住宅居住親子への支援－原発事故が避難者にもたらす心理状態と対人関係の特殊性－」の報告について、これまでの福島支援の経験をもとに進行及び集約を行った。

（人間発達専攻 齊藤誠一）

### 9.2. 災害地への支援活動

#### 東日本大震災復興支援 岩手県大船渡市赤崎町

平成 23 年 3 月 11 日に津波によって大きな被害を受けた大船渡市への復興支援は、今年度で 5 年になる。阪神淡路大震災後の復興のプロセスを鑑みると、復興の速度は遅く、いまだ、防災集団移転、災害公営住宅移転ができていないところも多い。また、生活復興の観点でも、住環境や防潮堤建設に力点が置かれてきたため、第三次産業の復活は遅く、商店街不在、社会福祉・医療などの社会サービスの低下といった状況は、いまだ改善できていない。

とりわけ、中心街のほとんどを津波で失った同市赤崎町は、そのいずれにおいても、もっとも大船渡で遅れている地域とあって、まちがいない。同地区にある三つの仮設住宅に入居している人はいまだ多い。公営住宅への移転は、来年、防集への移転はさらに 2 年以上先のことになりそうである（防集移転については、2 年後と計画されている。同市復興計画参照）。小学校・中学校の造成工事は始まったが、新しい生活道路兼避難道として建設される予定の新県道は、いまだにルート等の問題を抱え、停滞している。

こうした八方塞がりにも思えるまちの現状を打破し、町民のまちづくりの意欲を喪失させないために、本学の支援で運営されている「赤崎復興隊」（中赤崎復興委員会・赤崎地区公民館主催事業）は、今年度も精

力的に活動した。赤崎復興隊は、平成24年10月に赤崎町民の有志と、本学の学生・教職員によって構成される「まちづくり推進共同体」である。本学学生たちは、平成24年11月以後、月に一度、赤崎地区公民館（平成24年5月1日に、本研究科と連携協定と締結）で5人～20人が、現地に赴き、ボランティアとして活動をしてきた。

本年度も、跡地を活用した赤崎復興市の企画・運営、「ケヤキガーデン」と呼ぶ花壇ゾーンの管理、現地の中学生・高校生による「赤崎復興隊ユース」の活動支援を中心に、月に一度、現地の復興隊メンバーとともに活動した。それに加え、地域の行事である神社の祭事（7月）、地区運動会（10月）にもボランティアとして参加し、開催のお手伝いをした。現地の人たちからは「おらがまちの若衆」と呼ばれている。

また、学生たちは、毎月、赤崎地区公民館（平成24年5月1日、本研究科とのあいだで連携協定締結）で開催される「復興隊のつどい」にメンバーとして参加し、復興に即した具体的な事業の立案に貢献している。

さらに、平成23年7月からほぼ5年間続いている「11 えん募金」も、いまだ継続している。毎月、「11日」に、3・11と1・17のご縁を紡ぐことを目的に、六甲道駅前朝・昼・夜の3回にわたり、募金活動をおこなっている。月によってばらつきがあるが、本学学生のみならず、神戸市民の参画を得ながら、10名内外の学生が、思いを込めて活動している。この活動は、多くの神戸市民から、直接励ましの声をいただくとともに、赤崎の人たちからも感謝の言葉をいただいている。今年度、2回にわたり、計15万円を現地に届けることができた。

学生の活動同様、教職員の支援活動も活発である。ヒューマン・コミュニティ創成研究センターの松岡広路、朴木佳緒留、社会環境論コースの井口克郎准教授は、月に一度は現地を訪問し、「赤崎復興隊のつどい」のファシリテーターを務めている。また、大船渡市復興局との活動調整や、外部団体の活動を組み入れるコーディネーターとしての役割も果たしている。まちづくりと公民館活動の活性化を連動させる方策を提示してきた。また、跡地の土地利用計画のための学習活動の組織化や、女性のエンパワメントの方策についても、アドバイザーとして提案している。

赤崎町のまちづくりが順調に進むには、まだまだ時間が必要である。そして、外部からの資本（人的・物的・アイデア・社会関係）なしには、その持続的な発展は、到底、考えられるものではない。如何に、被災地と外部地域の関係を切り結ぶのか、という新しい被災地支援の問いに答えることのできるアクションリサーチを、今後も続けている決意である。

（人間発達専攻 松岡広路）

## 10. 附属施設

### 10.1. 発達支援インスティテュート

#### 10.1.1. 発達支援インスティテュート運営委員会

今年度も本委員会を毎月1回のペースで開催し、研究科としての研究基盤の強化を図ると同時に、毎回各室の活動報告を定例化し相互の連携を強めた。特に、平成26年度「学内共同利用施設等の施設に係る自己点検・評価」において、改善の指摘を受けた社会貢献室につき、研究科として機能強化の観点から、同室を廃止し、教育連携推進室（室長：稲垣成哲教授）を設置するとともに、研究活動のさらなる発展を目指してアクティブエイジング研究センター（センター長：近藤徳彦教授）を新設した（詳細は、「1.3.3. 組織の改革」参照）。

なお、本委員会の検討事項は以下のとおり。

第1回（4月10日）	・学内共同利用施設等の組織に係る評価結果に基づく改善計画について
第2回（5月14日）	・学内共同利用施設等の組織に係る評価結果に基づく改善計画（案）について ・「アクティブエイジング研究センター」構想について
第3回（6月12日）	・学内共同利用施設等の組織に係る評価結果に基づく改善計画（案）について ・その他：新学部の高大接続入試について
第4回（7月13日）	・学内共同利用施設等の組織に係る評価結果に基づく改善計画（案）について
第5回（9月1日）	・「人間発達環境学研究科附属発達支援インスティテュートの改組について」（案）について ・神戸大学附属中等教育学校を活用した高大接続研究について
第6回（10月7日）	・「人間発達環境学研究科附属発達支援インスティテュートの改組について」（案）について ・神戸大学附属中等教育学校を活用した高大接続研究について
第7回（11月5日）	・「人間発達環境学研究科附属発達支援インスティテュートの改組について」（案）について ・神戸大学附属中等教育学校を活用した高大接続研究について
第8回（12月3日）	・新体制について ・発達支援インスティテュート将来構想について
第9回（1月7日）	・学内共同利用施設等の改善状況報告書（12月25日提出）について ・アクティブエイジング研究センター設立記念シンポジウムについて
第10回（2月4日）	・発達支援インスティテュートの看板について ・発達支援インスティテュート報告会について
第11回（3月8日）	・発達支援インスティテュート報告会について

（発達支援インスティテュート長 岡田章宏）

#### 10.1.2. 心理教育相談室

心理教育相談室は、市民を対象とし、地域に開かれた相談室である。臨床心理学や心理療法に関する知見を生かして、地域の人々の心の健康に貢献することを目的としている。同時に、当相談室は、本研究科人間発達専攻臨床心理学コースが臨床心理士養成第I種指定校としての認可を維持するために必要な実習機関であり、コース所属の学生たちの臨床訓練の場として機能する目的を有している。平成12年度に、総合人間科学研究科の附属施設として設立され、平成17年度からは発達支援インスティテュートの一部門に位置づけられた。心理教育上のさまざまな問題について、臨床心理学の立場から専門的な援助を提供する活動を行っている。年間を通じて開室し（年末年始、お盆の大学の一斉休業期間を除く）、カウンセリング、プレイセラピーなどの心理療法を中心に、必要に応じて心理テストを提供するなどの心理臨床実践を行っている。相談は有料である。相談内容は、幼児期・児童期に家庭や学校でみられる発達教育上の問題、青年期のアイ

デンティティ形成に絡む課題、成人期のメンタルヘルス、熟年期の家族関係や生き方に関する事など、多岐にわたっている。毎年30件弱の新規相談受付がある。

新規の相談申込みは、基本的に電話受付によって行われている。この受付業務も、臨床心理学コースの授業「臨床心理基礎実習」の一環となっており、修士課程1年(M1)の学生たちが相談室スタッフの一員として交代で臨んでいる。受付時間は、月曜日の午後1時～2時45分、火曜日～金曜日の午後1時～6時(いずれも祝日は除く)である(年末年始の1週間、お盆前後の2週間ほどは閉室)。

本年度の相談室スタッフは、教員5名(臨床心理学コース担当、臨床心理士)、博士後期課程心理発達論講座院生2名、前期課程臨床心理学コース院生22名(M1:12名、M2:10名)、そのほか研究員2名である。

平成22年度より、『神戸大学大学院発達支援インスティテュート心理教育相談室紀要』が年1回創刊され、院生たちが心理臨床の実践研究をまとめる場となっている。なお、本年度の『心理教育相談室紀要』第6号には、平成17年度以降の10年間の相談室活動の実績をまとめた報告論文「心理教育相談室の相談支援活動と社会貢献—10年間の活動を振り返って—」を掲載した。また、心理教育相談室の開室15周年を記念する広報用の冊子『心理教育相談室の歩み』を発行した。平成27年度心理教育相談室の相談実施件数等は「自己評価報告書資料編」に記載されている。年間相談件数は、平成22年度以降おおむね1000件程度で推移しており、地域住民の心の健康に貢献する心理相談機関として、ならびに、臨床心理士養成に関わる実習機関として適切な程度の活動実績を保持している。

(心理教育相談室長 相澤直樹)

### 10.1.3. ヒューマン・コミュニティ創成研究センター

#### (1) 子ども・家庭支援部門

2015年度は、以下の各事業を実施した。

##### ◆ドロップイン事業「ふらっと」(2005年度より継続)

「あーち」の基盤サービスの一つである。子育てひろばの提供と利用者間の交流促進、相談援助、情報提供を実施している。親子の見守りや子育て相談にあたっては、灘区保健福祉部、灘区公立保育所、神戸市地域子育て支援センター灘などの協力を得ている。

##### ◆アウトリーチ事業「ベリネイタル・アウトリーチ・サービス」(2006年度より継続)

早期からの拠点(ひろば)利用を促す「あーち」のもう一つの基盤サービス。地域の産婦人科と連携し、その医師・助産師が「あーち」を紹介し、親子の利用を促す。

##### ◆コネクション事業「ビギナーズ交流会」(2012年度より継続)

「あーち」の利用開始後間もない(主に月齢6か月未満児をもつ)親同士をつなぎ、その交流を促すコネクション・プログラムを実施。利用者が「孤立・依存」から脱し、自己をエンパワメントさせていく機会を与える取組である。

##### ◆ペアレンティング事業「0歳児のパパママセミナー」(2006年度より継続)

初めて赤ちゃんを育てる家庭への予防的な親教育および仲間づくりプログラム(5月～より12月・月1回第2土曜日・計7回)である。募集にあたって灘区保健福祉部の協力を得た。

##### ◆ペアレンティング事業「家族で話そう!子育て」(2014年度より継続)

1歳～3歳未満の子どもを育てる家族(父母や祖父母)を対象とした家族内および家族間の対話を中核としたプログラム。ファシリテータが提示する話題を巡る話し合いを通して、それ以後の育児の方向性について合意とコミットメントすることを目的とする。6月13日・10月10日に実施した。

##### ◆次世代育成事業「中・高生の赤ちゃんふれあい体験学習」(2006年度より継続)

地域の中学生・高校生(西宮市の公立高校の生徒も含む)と、上記「0歳児のパパママセミナー」に参加する親と子(赤ちゃん)とのふれあい体験学習(5月～12月・月1回第2土曜日・計7回)を実施した。地域の中学生・高校生の参加については、灘区内のNPO法人S-spaceが運営するユースステーション灘の協力を得た。

◆専門職支援事業「保育士のためのステップアップ・セミナー」(2006年度より継続)

「あーち」と連携関係にある地域の保育士の資質向上を目的としたセミナー。11月27日・12月18日に実施した。「発達につまずきのある子どもの理解・対応」および「子どもへの不適切な養育をおこなう親への対応」に焦点をあてた2回シリーズのセミナー(会場は灘区役所)を提供した。神戸市灘区保健福祉部、神戸松蔭女子学院大学教員、NPO法人チャイルドリソースセンターの協力を得た。

(担当 伊藤篤)

(2) 障害共生支援部門

1. 「のびやかスペースあーち」において、障がい児を中心とした居場所づくりプログラムを、毎週金曜日の午後に継続実施した。属性や立場が異なる多様な人たちが相互に関心をもちコミュニケーションを活性化するために開いているプログラムである。プログラム内容は、地域住民や学生が、子どもたちとの親密な関わりに基づいて計画・実施する。普段は、音楽プログラムや造形プログラム、季節ごとのイベント、料理プログラムなど、多彩なプログラムを行う。またこのプログラムにおいて、利用者や学生を主体とした参加型調査研究を行った。また、隔週火曜日の午前中に、障がいのある子どもを育てる保護者を対象とした学習プログラムが自律的に実施されるようになった。金曜日のプログラムなどとの相乗効果もあって、保護者のコミュニティが形成された。
2. 「のびやかスペースあーち」において、利用者の多様性及び利用者間のコミュニケーションを活性化するため、「らくがきおばさんがやってくる」「アートセラピー」「あーち博物館」「音楽の広場」といった表現系プログラム支援を継続して行った。今年度は、博物館実習の枠組みによる教育活動ともリンクした「あーち博物館」として、社会福祉法人たんぼぼ、版画家脇谷紘氏との連携による企画展「トロッコ」、大田美佐子ゼミ、NPO法人神戸と子どもネットワークとの連携による平和展「平和をうたう」を実施した。
3. 「のびやかスペースあーち」10周年を記念して実施した10周年記念ウィーク事業の企画・運営を行った。また10周年を節目とした量的調査を実施するとともに、利用者、スタッフ、プログラムリーダーらにインタビュー調査を行った。
4. カフェ「アゴラ」において障がい者キャリア教育支援を継続実施した。雇用のチャンスに恵まれない知的障がい者を実習生として募集し、カフェ「アゴラ」を中心に社会的活動を提供するプログラムであり、2名の実習生に対する支援を継続的に行った。障害者雇用の継続にも取り組み、学生が障がい者就労の場を間近に関わることのできる状況を継続させた。今年度もNPO法人コミュニティサポートセンター神戸との連携により、実習生1名を住吉駅駐輪場整備の仕事に従事させた。
5. インクルーシブな地域社会創成をめざす学童保育つむぎ、社会福祉法人たんぼぼの運営協力・連携協力や助言などを行った。
6. 知的障害者が自律的に記事を書き編集する新聞づくり支援を通して、知的障害者のセルフアドボカシー支援を継続的に実施した。
7. 日韓の障害学生支援に取り組む研究者らを招聘し、学術ウィークス・日韓交流セミナー「発達障害者が大学で学ぶということ」を実施した。
8. 韓国ナザレ大学、ソウル市立知的障碍人福祉館と、障がい者の高等教育支援をテーマとした研究交流を行い、スタディツアーを企画・運営した。また、前回スタディツアーの成果をまとめた共同論文が、研究科紀要論文として発行された。加えて、社団法人韓国社会福祉政策研究院研究員として委嘱を受け、発達障害人材開発センター開所の協力を行った。

(担当 津田英二)

(3) ボランティア社会・学習支援部門

1. 「震災復興支援プロジェクト」の企画・実施支援

2011年3月11日に発災した北東日本大震災で大きな被害を受けた岩手県大船渡市赤崎町(死者47名、



被害家屋約 900 戸／全 1429 戸) の支援は 5 年目となり、被災地の生活はさらに過酷な状況になりつつある。緊急時支援・復旧支援から、生活支援・まちづくり支援に活動の内容が移行するなかで、遠方のボランティアの役割はなにか？ 真の復興に行きつくために今できることは何か？ これらを、学生ボランティアとだけでなく、被災住民と共に考え、少しずつ企画や事業を実行してきた。

昨年同様、神戸大学基金、震災復興・防災科学推進室、人間発達環境学研究所、都市安全研究センターの支援を受けながら、あるいは、「11 えん募金」を通しての神戸市民からの支援を受けて、ほぼ毎月、全 20 回にわたり現地で活動した。2013 年度参加学生ボランティア数はのべ約 60 名で、本プロジェクトのメンバーとして被災地で活動した。中赤崎復興委員会の活動を実質化するために、「赤崎復興隊のつどい」支援とソーシャルビジネスを通してまちの活性化を図る「赤崎復興市プロジェクト」の活動支援に全力を尽くした。復興の現実はいまだ厳しいが、まちの消滅を防ぐための方法を、主に ESD・社会教育の観点から探っている。

#### ◇「赤崎復興市」の活動支援

年 4 回 (6 月, 7 月, 9 月, 11 月), 津波の跡地を活用して開催された赤崎町の復興市の企画・運営を、学生ボランティアの協力を得て支えてきた。このなかで、学生企画「たこ焼きプロジェクト」を通して、赤崎の中高生が復興活動に参加するきっかけを生むことができたり、仮設住宅の人たちが物を作りうる喜びを感じたり、町外に出てしまった元赤崎町民の人の再会の場をつくることができた。

#### ◇「赤崎の声宅配便」の発行

毎月「月一訪問隊」として本部門担当教員と数名の学生ボランティアが被災地を訪問し、仮設住宅訪問や赤崎復興隊のつどいに参加してきた。ようやく被災者の自然な声を聴くことのできる関係を作るに至っている。教員・学生と被災者とのあいだの信頼関係が生まれ、被災時の様子や今の生活状況について傾聴できるようになった。学生たちがそうした被災者の自然な声を新聞調にまとめ、次の訪問時に自ら仮設住宅を訪問し配布したり、赤崎町の回覧板を利用したりして赤崎町の人たちにお知らせしている。これが『赤崎の声宅配便』である。メンバーの意識化だけではなく、仮設住宅の人たちがずいぶんと楽しみにしてくださっている。

#### ◇『神戸大学大船渡支援プロジェクト活動報告書』の発行

学生ボランティア経験者の協力を得て、この 5 年間の活動のまとめとして「神戸大学大船渡支援プロジェクト報告書」を発刊した。学生主導で編集を行い、これまで活動を支援してくださった方々への感謝の気持ちを込め、また、今後の災害時における学生ボランティアの活動の参考に資することを目的とするものである。以上のように、「災害復旧ボランティア」から「生活支援ボランティア」に、そして、「復興のまちづくり支援ボランティア」へと活動の質を変えるとともに、活動の普遍化を意図する研究活動も徐々に鮮明になってきた。

## 2. ESD ボランティア育成プログラム推進プロジェクトの実施

「ESD ボランティア育成プログラム推進ネット (ほらばん) 支援プロジェクト」も本年で 10 年を経過した。今年も、2015 年 6 月, 7 月, 8 月, 10 月, 12 月, 3 月の 6 回、岡山県の長島にある「国立ハンセン病療養所 邑久光明園」において「住民との交流」「将来計画関連事業」「集いの広場開墾事業」などを中身とする「ワークキャンプ」を実施した。登録メンバーだけではなく、岡山県の中学生、高校生、大学生の参加も得て、各回の参加者はいずれも 30 名を超え、活動は定着している。

また、昨年同様、12 月には、ESD サブコース「ESD 論」のオプション・フィールドワーク先として、学生たちを受け入れた。

## 3. ESD 推進関係の事業

#### ◇ESD 推進ネットひょうご神戸 (国連大学認証組織: RCE 兵庫神戸) の活性化支援

ESD 推進ネットひょうご神戸の再組織化・再活性化をめざした世話人準備会をほぼ毎月実施した。また、ネットワーク総会議 (9 月), 運営委員会 (2015 年 5 月, 9 月, 12 月, 2016 年 1 月, 2 月) の開催支援をし、

新しいESDの形態を地域社会に構築する支援を行った。

具体的な事業としては、ESD グローカルスタディツアープログラムを、30を超える参加団体・参加者の協力を得て実施するための準備を行っている。とりわけ、ESD スタディツアープログラムの推進ツールとして、ITを活用した「ESD ツアーポータル作成サイト」を開発した。これを利活用した新しいESD サービスラーニングの運用を試みるに至っている。

また、ESD カフェを年4回実施し、ユース・青年・成人の多世代交流、環境・福祉・人権などの多領域スタッフ交流を図る学習プログラムを企画・実施した。

(担当 松岡広路)

#### 10.1.4 のびやかスペースあーち

##### 「のびやかスペース あーち」全体の取組について

研究科サテライト施設「のびやかスペース あーち（以下、「あーち」とする）」は、2005年9月より神戸市と連携の下、灘区役所旧庁舎（現：灘消防署2階）において運営を開始した。以来、2015（平成27）年度末現在で10年半が経過した。本施設は開設当初より「子育て支援を契機とした共生のまちづくり」の拠点となることを目指して、様々な取組（プログラム等の提供）と実践的研究を展開してきた。地域のプラットフォームとして、多様な人々や団体・組織などが「あーち」で出会うことにより、互いの立場や境遇の理解を深める場、互いに暮らしやすい地域をつくっていくために「あーち」ではどのような活動が展開しうるのかを考え・共有する場を提供してきた。また、地域ボランティアに支えられた多様なプログラムのほとんどが、開設当初から継続して提供されていることから、これまで、非常に多くの乳幼児・児童・青年そして大人が「あーち」の存在を必要としていたことが分かる。そして、このことは「あーち」が大学の役割のひとつ、社会貢献を着実に果たしていることの証左でもあろう。

今年度は、開設して満10年という大きな節目を迎え、9月を中心に設立10周年イベントをおこなった。また、開設5年が経過した際に実施した、利用者・関係者を対象とした「あーち5周年調査」を踏襲し、「あーち10周年調査」も実施した。この調査に関しては後述する。さらに、これまでの10年間を通した「地域における子育て支援」の先駆的な取り組みが評価され、神戸市からの推薦により、兵庫県から「平成27年度ひょうご子育て応援賞」を受賞した（2016年3月30日）。これは、団体で受ける賞としては、神戸市からの「市民福祉奨励賞（児童福祉）・平成21年度」、神戸大学からの「学長表彰・平成22年度」に続き3度目である。

2013年度に、発達障害児の親支援プログラム「ドーナッツ（4月～7月）」、その発展編の「ピーナッツ（9月～2月）」が新規に開催され継続してきたが、さらに今年度から「ドーナッツ」から派生した「家族教室」が新たなプログラムとして始動した。また、以前は常設プログラムであった（現在は廃止）発達障害児のための療育プログラム「ほっと」の同窓会編である「パパママほっと」は、子どもたちの成長・発達とともに生ずる新たな発達にかかわる課題について、当事者同士で話し合い解決策を見出していくピアサポートプログラムとして継続している。このプログラムには、「ほっと」のプログラムリーダーが、保護者からの後押しを受けて、スーパーバイザーの立場で関わっている。発達障害のある子どもと親を支える取組が地域ではまだまだ不十分と言われている現在、「あーち」でのこうした取組は、当事者たちにとって大きな支えになっていると言えよう。

また、2005年の開設以来、子育て相談対応（2007年度より地域子育て支援拠点事業の4事業のひとつでもある）もおこなってきた。相談内容は、子どもの発育・発達（身体機能・行動・言葉・情緒・認知面等）、子どもの生活に関する事、離乳食・幼児食に関する事、親自身では育児不安、地域の子育て支援資源に関するものが多い。2007年より長らく、発達相談に対応をしていた相談員（療育専門家）が渡米することになり、これまで相談を持ちかけた多くの利用者に大変惜しまれながら4月末に退職をした。そして、新たな相談員として、6月より灘区地域活動支援コーディネーターが、7月より助産師（保育士資格も保有）が、新たに「ふらっと」で相談員として積極的に活動している。

「あーち」の年間利用者数の詳細は後述するが、2016年3月末日現在で、32,250人（延べ）であり、過去最多を記録した。開館日数の243日で割ると一日平均130人余りが利用していることになる。一日の利用者数が平均して100名／日を超えるという実績は2007年度より9年間続いていることや、灘区で子どもを産んだ家庭のうちの約3分の1が「おやこ会員」として登録していることから、「あーち」が地域に根ざした施設として周知され、さらなる存続と発展を期待されていると言えよう。

本年度のプログラム開催状況を集計（3月末日現在）すると、教員・一般ボランティアが主催するプログラムの実施回数（延べ数）は409回、大学の正規教育プログラムの実施回数（延べ数）は21回である。例年どおり、資格関連科目である博物館実習も開催された。また、2008年度より毎年継続してESDサブコースの授業に協力し、学部生が実践活動をおこなう場を提供した。このように、本年度も、「あーち」は学生の教育・実践を支援する機能を果たした。また、学部生・院生が卒業研究・修士研究の場として「あーち」を活用することも多く、発達支援論コース在籍生に限っても、これまで、卒業論文7編・修士論文10編・博士論文3編が提出されている（2006～2015年度）。

大学に設置されている「のびやかスペース あーち 運営委員会」とは別に、日常的に「あーち」のプログラム等にかかわっているメンバーが参加する「あーち 連絡協議会」が、例年どおり、5月・7月・9月・11月・1月・3月に開催された。この会では、「あーち」の利用者、プログラムリーダーとそのスタッフ、「ふらっと」相談員、一般のボランティア、学生、教職員が一同に会して、「あーち」の現状・プログラムの近況・新しいプログラム等に関する報告や検討がおこなわれている。また、学生などによる研究の場として「あーち」が活用されるので、この協議会は、学生からの研究依頼・計画を承認・検討する場にもなっている。

プログラム予定表、学生や利用者による絵本の紹介、利用者が担当する取材記事・コラム等を掲載する月刊広報誌を編集するために、毎月1回「あーち 通信編集会議」が開催されている。開設以来、「あーち 通信」は一度も発刊を欠いておらず、「あーち」のホームページ上で順次公開されている。また6月号からは、先述した発達相談員が米国から毎月便りを寄稿してくれることになった。日本と米国の自然・文化・風習の違いなど、新たな発見や戸惑いなどを題材に時折ユーモアを交えて寄稿してくれ、毎回の便りを楽しみにしている利用者も多くなってきた。この「あーち 通信」は、これまで同様、利用者に配布されているだけでなく、灘区役所や灘社会福祉協議会および各児童館、さらに連携先の産婦人科クリニックにも配布・設置している。本年度末で「あーち 通信」は126号になった。

## 「あーち」10周年に関する活動

◎「10周年イベント」6月に実行委員会を立ち上げ、イベント内容、開催日時を検討、その後2回の実行員会を経て、イベントの準備と周知をおこなった。実行委員会スタッフは、教員2名、教育研究佐員1名、あーちスタッフ（事務補佐員）4名、ボランティア5名で構成された。

9月1日～5日を「10周年ウィーク」として位置づけ、特別プログラムを実施した。プログラムには灘警察署や灘消防署の協力も得ることができた。また、教員や学生スタッフ、地域ボランティアによる多様なプログラムも実施、多くの利用者の好評を得ることができた。

## ◎「10周年調査」

◆質問紙調査（第2回目の利用者への悉皆調査）

◆インタビュー調査

- ・対象者：院生・学生（既卒生含む）、プログラムリーダー、ボランティア、質問紙で了解を得られた利用者、あーちスタッフ（事務補佐員4名）
- ・実施者：教員2名、教育研究補佐員2名、院生・学生

## 「あーち」運営の主たる部門の活動について

「あーち」の日常的な運営は、ヒューマン・コミュニティ創成研究センターの「子ども家庭支援部門」と「障害共生支援部門」が担っている。今年度における2つの部門の実践内容を以下に整理する。

### <子ども・家庭支援部門>

従来から実施してきた「ドロップイン・サービス（ふらっと）」「ペアレンティング・セミナー」「赤ちゃんふれあい体験学習」などを引き続き実施した。また、「赤ちゃんふれあい体験学習」に関しては、県内の高校生に加え、2012年度からは、六甲道児童館のユースステーションを通じて、灘区内の公立中学校・高等学校から有志の生徒を迎え、赤ちゃんやその保護者とふれあう機会を設けている。地域における連携活動として、以前から近隣の産婦人科クリニックでも「あーち」の広報をおこなっている。そのため、乳児期とその親による早期からの「あーち」利用は安定的に継続している。また、このクリニックに通院しているハイリスク家庭を「あーち」の相談員につなぐなどの協働関係も継続している。

2006年度より、地域子育て応援プラザ灘および灘区公立保育所とは、以下のような形で連携・協働体制を継続している：①保育士による「おひさまひろば あーち」での見守り・相談・親子遊び ②地域子育て応援プラザ灘の保育士による乳幼児健診時における「あーち」の広報 ③当部門による灘区内の公立・私立保育所の保育士向けの子育て支援に関する研修会（2回シリーズ 2015年度は11月・12月に実施）の提供 ④当部門による地域子育て応援プラザ灘および公立・私立保育所の主催事業に関する広報。

「ふらっと」の相談体制では、発達相談員の雇用を引き続きおこない、発達相談のさらなる充実を図った。発達のアンバランス・遅れに関する相談が、毎回（相談員が勤務する毎週土曜日）非常に多く、地域住民の発達相談のニーズの高さを明らかにしている。この他に、従前から、保育士・助産師・NPOからのボランティアが相談対応を担当、昨年度からは、灘区の歯科医師会との連携相談事業として、隔月に1回、歯科医師による相談日を設けている。

2013年度より開始した「ビギナーズ交流会」は、「あーち」を初めて利用する、もしくは利用して日が浅い母親を対象としたコネクション・プログラム（利用者どうしを結びつける機会の提供）であるが、これは、2010年度に実施した「あーち」利用者対象の悉皆調査の分析結果を受けて構想・実施（月1回）している取組である。交流会の対象者は生後6か月未満の子を持つ母親であり、今年度も、毎回8～12組前後の親子が参加するプログラムとして根付いてきている。また、このプログラムは、博士課程後期課程の院生の実践研究の一環になっており、母親のエンパワメントがどのように導かれるかをインタビュー調査や質問紙調査を通して明らかにされた成果は、昨年度の学会誌に掲載された。

本年度から新設した「家族対話プログラム（家族で話そう！子育て）」は、ペアレンティング・セミナー（親としてのあり方を学ぶ機会）」のひとつである。1歳～3歳の子どもを持つ家族（夫婦や祖父母など育児に携わるメンバー）を対象とし、ファシリテーターによる育児に関連する話題提供の後、そのテーマについて家族間や家族内で話し合うことを通して、自分たちの育児の方向性を確認し合ったり、各自の育児に関する役割にコミットしたりする機会となるプログラムを目指している。昨年度・今年度と継続実施したが、参加者数の促進が今後の大きな課題である。

### <障害共生支援部門>

障害共生支援部門では、「のびやかスペース あーち」が、利用者の多様性の確保と相互コミュニケーションを促進することを主旨とする試みを行っている。「らくがきおばさんがやってくる」「アートセラピー」「音楽の広場」など、そうした試みの一環としてプログラムの実施を専門的な力量をもつ個人や団体に依頼した。

基幹プログラムとして「あーち」設立初期から毎週金曜日に実施している「居場所づくりプログラム」を継続させた。さまざまな障害のある子どもを中心として、障害のある成人、その他の地域住民や学生が多元的な社会関係を形成することで、相互のエンパワメントをめざすプログラムである。

プログラム内容は、子どもとの関わりの中から地域住民や学生らが計画・実施する。通常は子どもの関心に沿った遊びを展開しているが、音楽プログラム、造形プログラム、料理プログラムなど、季節ごとのイベントも行った。その他にも、外部団体との相互連携も発展しており、今年度も恒例の実習農園での芋掘り、社会福祉法人かがやき神戸のクラウンパフォーマンス、市民団体がコーディネイト役で実施した子ども劇との相乗りなど、多彩にプログラム展開をした。

インフォーマルな関係の中から、社会的問題に主体的に関わっていく関係を形成することも隠れた目的と

しており、持ち込まれる諸問題（多くは障害に関する問題）をめぐる活動も付随した。プログラムから派生した個別の問題に踏み込んで関わることも多くある。教育・研究・実践を三位一体としたインクルーシブな場づくりをめざす実践的研究のフィールドとなっており、今年度は障害児の保護者と学生とが相互理解を深める懇談会を定期的に実施した。また、今年度は特に障害のある高校生の参加が多く、彼らのニーズに合わせて夕方から夜間にかけての居場所づくりにも取り組んだ。

子どもの発達に不安をもつ親を対象とした「ドーナッツ」「ピーナッツ」というプログラムも実施している。「ドーナッツ」はリラックスして自己開示することのできる関係づくりをめざすプログラム、「ピーナッツ」は子どもとの関わりを省察する学習プログラムである。「居場所づくりプログラム」「ぽっとらっく」など、「あーち」の他のプログラムとも連携し、元気を取り戻していく保護者たちの姿を見ることができ、保護者どうしで仲間をつくり積極的にプログラムの運営に取り組むなどの姿をみることもできた。

また、表現活動に基づく相互承認の機会づくりにも継続して取り組んだ。その一環として、本年度も博物館学芸員課程との連携で博物館展示を行った。2015年9月26日～10月1日は、「あーち」博物館「ヤドカリとザリガニ」を開催（社会福祉法人たんぽぽ、版画家脇谷紘氏との連携）であった。

## プログラム概要・その他

以下に、①プログラム概要、②見学・視察数、③月別年間利用者数（表1）、④プログラム数とそれに対応するボランティア数（表2）、⑤連携・協力関係にある組織・団体（表3）、を示す。

### ①プログラムの概要

#### 子どもとその保護者を主な対象にしたプログラム

<●は継続的・定期的なプログラム／○は単発的・短期的なプログラムを示す>

- ふらっと：地域子育て支援拠点事業（ドロップイン・サービス）として週5日開設
- おひさまひろば あーち：神戸市地域子育て支援センター灘の保育士・灘区公立保育所の保育士がドロップイン・サービスの利用者に対し、見守り・相談と親子遊び（ショートプログラム）を提供
- ベビーマッサージ：「あーち」利用者である母親がリーダーとなっておこなう交流プログラム
- あーち ビギナーズ交流会：「あーち」を初めて利用する、または利用して日が浅い母親対象の仲間づくりプログラム（子どもの月齢6か月未満対象）
- ほのぼの音ランド：音楽療法士によるリズム遊びプログラム
- おはなしの国：ボランティアによるストーリー・テリングと絵本の読みきかせ
- 紙芝居：退職教員による味わいのある紙芝居
- めだか親子クラブ：退職教員が中心となった手作りおもちゃのプログラム
- らくがきおばさんがやってきた：地域の画家が展開する自由なアート空間
- アートセラピー：草木などの自然のものなどを用いてアートを展開するワークショップ
- 人形劇：神戸・阪神間の人形劇グループや高校生による公演
- 人形劇団 むー：「あーち」支援者や利用者が立ち上げた人形劇団

#### 発達障害のある子どもとその親を対象にしたプログラム

- ドーナッツ：発達障害児をもつ親支援プログラム
- ピーナッツ：ドーナッツの発展編
- ぽっとらっく：発達障害児を持つ親の学習会と発達障害児の遊び場

#### おとなを主な対象としたプログラム

- 筆をもとう：地域の書家による書の初歩を気軽に学ぶプログラム
- 0歳児のパパママセミナー：子育て中の親を対象とした学習・交流プログラム
- 中・高校生の赤ちゃんのふれあい体験学習：中・高校生が0歳児とその保護者が毎月1回交流する
- 家族対話プログラム（家族で話そう！子育て）：幼児がいる家庭のためのペアレンティング・セミナー

○保育士のための子育て支援研修会（2回シリーズ）

#### その他

- 居場所づくり：障害のある人たちを中心としたみんなが集うプログラム
- 音楽の広場：本研究科の院生や教員・ボランティアが主催する、誰でも楽しめる自由な音楽プログラム
- みんなで歌おう！：地域の作業所スタッフや実習生によるゴスペル

#### 博物館実習

○博物館実習：「ヤドカリとザリガニ」：2015年9～10月開催

- あーち 通信編集会議：利用者や学生を交えて「あーち」通信をつくる場
- あーち 連絡協議会：プログラムリーダー、利用者、教職員等による「あーち」運営に関する会議

#### ②「あーち」への見学・視察数

大学のサテライト施設として、社会的責任や地域貢献をはたし、アクション・リサーチの成果を社会に対してモデル提示したり発信したりする手段として、見学者やメディア取材の受け入れをおこなっている。以下は、2015年4月以降、2016年3月末日までの「見学者数」「視察者数」を機関・組織別に整理したものである。

#### <見学（総数139名）>

神戸市長 1名 神戸市子ども家庭局こども企画育成部 8名 神戸市こども家庭局こども青少年課 7名  
神戸市まちづくり推進部 3名 灘区長 1名 灘区保健福祉部こども家庭課 1名 灘区まちづくり課 1名  
灘区社会福祉協議会 2名 神戸市立中央図書館総務課 1名 灘区婦人会 3名  
神戸松蔭女子学院大学人間科学部子ども発達科学科 17名 神戸学院大学現代社会学 4名 同志社大学文学部 1名  
神戸市看護大学 1名 神戸海星女子学院大学教員 1名 神戸海星女子学院学生 3名 兵庫教育大学教員 3名  
国立大学教育系大学 5名 兵庫教育大学大学院院生 2名 神戸大学経済学部 1名 神戸大学アイセックプログラム 7名  
神戸大学大学院院生 6名 県立西宮甲山高等学校 教員2名 同生徒 30名 神戸市立友生支援学校 5名  
ソロプチミスト六甲 5名 NPO法人にじのかけ橋 2名 社会貢献塾 5名 安井さくら保育園 1名 生活クラブ都市生活 4名  
NPO法人S-space 1名 介護者支援の会みちくさ 1名 ろっこう医療生活協同組合 1名 ノースヒル 1名 ベビーマッサージ講師 2名

#### <視察・ヒアリング等（総数68名）>

北京外国語大学 1名 香港教育局高級教育主任 44名  
宝塚市立山本山手子ども館 7名 宝塚市立ひばり子ども館 6名 宝塚市立中山台子ども館 6名  
宝塚第6ブロック子ども館協議会（理事）4名

#### <取材・撮影>

神戸新聞社

#### ③2015年度「あーち」利用者数とその内訳（2016年3月末日現在）

「あーち」の年間利用者数は32,250人（延べ数）である。開館日数の243日で割ると、一日平均130人余りが利用している

2015年度利用者数（2015年4月～2016年3月）

年間開館日数 243日

年間利用者数 子ども 16,506人 おとな 15,744人 合計 32,250人

表1 月別利用者数

2015年度		ふらっと		あーと		こらぼ		利用者数の合計		
月	開館日数	子ども	おとな	子ども	おとな	子ども	おとな	子ども	おとな	合計
4月	21	929	847	11	20	105	110	1045	977	2022
5月	20	995	905	18	25	109	138	1122	1068	2190
6月	21	1167	1114	17	22	135	199	1319	1335	2654
7月	22	1381	1233	17	20	171	171	1569	1424	2993
8月	16	1010	800	4	7	61	59	1075	866	1941
9月	20	1462	1295	38	38	197	270	1697	1603	3300
10月	23	1313	1191	35	33	136	186	1484	1410	2894
11月	19	1162	1057	44	31	136	194	1342	1282	2624
12月	19	1045	962	22	27	153	236	1220	1225	2445
1月	20	1299	1196	28	38	127	138	1454	1372	2826
2月	19	1260	1227	17	21	107	160	1384	1408	2792
3月	23	1636	1546	19	33	140	195	1795	1774	3569
合計	243	14659	13373	270	315	1577	2056	16506	15744	32250

④ 2015年度「あーち」プログラム数およびボランティア数

表2は、2015年度に「あーち」で提供されたプログラム数およびそれにかかわったボランティア（リーダー、スタッフ、一般、学生・院生）の数である。

表2 プログラム数およびボランティア数（延べ数）

2015	月	開館日数	プログラム数			ボランティア数			プログラム見学者
			一般のプログラム	大学の授業 & 正規教育プログラム (実習)	プログラム総数	プログラム数一日平均	プログラムリーダー & スタッフ数	一般	
4	21	27	1	28	1.33	88	6	38	9
5	20	30	2	32	1.60	104	8	71	7
6	21	38	2	40	1.90	126	8	51	6
7	22	35	2	37	1.68	110	13	46	8
8	16	16	1	17	1.06	41	15	13	10
9	20	43	3	46	2.30	122	49	57	9
10	23	37	3	40	1.74	88	47	53	22
11	19	35	2	37	1.95	106	41	53	20
12	19	35	2	37	1.95	98	50	74	22
1	20	31	1	32	1.60	99	23	36	9
2	19	36	1	37	1.95	105	28	52	4
3	23	46	1	47	2.04	109	77	39	59
合計	243	409	21	430	1.77	1196	365	583	185

\* 基盤プログラムである「ふらっと」は毎日開催しているが、プログラム数に入れていない

\* 「あーち」通信編集会議・連絡協議会・他の会議などは入れていない

\* 比較的ボランティア参加の多いプログラム（順不同）

：ぽっとらっく・居場所づくり・アートセラピー・らくがきおばさん・人形劇・パパママセミナー

⑤ 2015年度 連携・協力関係にある組織・団体など

以下の表3は、2015年度の運営にあたって連携・協力を得た組織や団体名を整理したものである。

表3 連携・協力関係にある組織・団体など

団体名	連携協力の内容
神戸市市民参画推進局 神戸市灘区保健福祉部こども家庭支援課こども保健係 神戸市灘区まちづくり推進部 灘警察署 灘消防署 神戸市地域子育て支援センター灘 (通称：子育て応援プラザ灘)	運営協力 0歳児のパパママセミナー&中・高校生の赤ちゃんふれあい体験学習 なた桜まつり/地域コーディネーター 安全のおはなし(10周年ウィーク) 消防訓練 小児救急のおはなし(10周年ウィーク) ふらっと相談員/おひさまひろば あーち
灘区公立保育所(7か所) 灘区地域コーディネーター(元幼稚園教諭) 灘区社会福祉協議会 灘区内児童館(10か所) 六甲道児童館 六甲道児童館ユースセンター 灘区民ホール	ふらっと相談員/おひさまひろば あーち ふらっと相談員 ボランティアコーディネート 情報交換 情報交換 中学・高校生の赤ちゃんふれあい体験学習 情報交換
社会福祉法人たんぽぽ 社会福祉法人たんぽぽ 学童保育つむぎ カフェ「アゴラ」 社会福祉法人かがやき神戸 神戸ユニバーサルツーリズムセンター	博物館実習 みんなで歌おう! 居場所づくり 居場所づくり 居場所づくり 居場所づくり
NPO 法人神戸子どもと教育ネットワーク チャレンジひがしなだ クエスト総合研究所 NPO 法人マザーズサポーター協会	めだか親子クラブ 筆をもとう アートセラピー おしゃべりほっとタイム
亀田マタニティ・レディース・クリニック 灘区歯科医師会 兵庫県歯科衛生士会 神戸東支部 ママ・リッシュ トマト	アウトリーチ・サービス ふらっと相談員/パパママセミナー おくちをあ〜ん 0歳児のパパママセミナー 家族で話そう!子育て
兵庫県立西宮高等学校 神戸市看護大学(灘区保健福祉部から依頼) 園田学園女子大学 神戸海星女子学院大学 神戸大学医学部保健学科地域連携センター	高校生の赤ちゃんふれあい体験学習/人形劇 地域母子保健実習の場として提供 育成連携支援実習の場として提供 ボランティア(授業)の場として提供 ぽっとらっく

他に個人による協力も多数あり

(のびやかスペース あーち運営委員会委員長 勅使河原 君江)



### 10.1.5. サイエンスショップ

サイエンスショップは、(a) 地域社会における広義の科学教育を含む市民の科学に関わる諸活動への支援、および (b) 神戸大学学生の主体的研究活動等への支援を行うことを目的とする。上記 (a) については、科学者等の専門家と市民の対話と協働を通じて、環境問題など科学に関わる地域課題への市民の取組や、社会における科学技術の進展とそれに関する政策形成過程などへの市民の参画を促す仕組づくりと実践を目指している。

平成 27 年度は、研究科専任教員（室長、副室長、及びその他の室員 5 名の計 7 名（特命助教 1 名を含む））と、教育研究補佐員 1 名（非常勤職員）、事務補佐員 1 名（非常勤職員）、学外研究員 2 名の体制で運営された。以下に平成 27 年度の主な取組を記す。

#### (1) Future Earth 研究課題の抽出に関する研究への参加・協力

総合地球環境学研究所 Future Earth 推進室との共同研究として、グローバルな持続可能社会の構築を目指す地球環境研究の国際プログラム Future Earth において、日本で優先的に取組むべき研究課題・テーマ群の抽出の手法開発と実施に参画した。このプロジェクトは、独立行政法人科学技術振興機構 社会技術研究開発センターの「フューチャー・アース構想の推進事業」の一環として実施される調査研究（課題名：「フューチャー・アース：日本が取り組むべき国際的優先テーマの抽出及び研究開発のデザインに関する調査研究」、研究代表者：谷口真人教授（総合地球環境学研究所））として進められている。Future Earth では、自然科学、人文学・社会科学等 幅広い領域の研究者に加えて、社会各層のステーク・ホルダーとの協働に基づく、研究の co-design, co-production, co-delivery が重要な理念として掲げられており、次項にふれる PESTI も含めて、サイエンスショップが蓄積してきた科学コミュニケーションなどの実践に基づく知見等を活かして、市民、行政などへのインタビューや、広範な専門家を集めたワークショップ（平成 28 年 1 月）のグループディスカッション・ファシリテータとしての協力等を行った。

#### (2) 科学技術政策への幅広い国民の関与を促すための研究開発プロジェクト

滋賀大学、京都大学等の研究者との共同研究として、独立行政法人科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業（社会技術研究開発）「科学技術イノベーション政策のための科学」研究開発プロジェクト「STI（科学技術イノベーション）に向けた政策プロセスへの関心層別関与フレーム設計」（略称 PESTI, 研究代表者：加納 圭 准教授（滋賀大学／京都大学）、平成 24 - 27 年度）を進めた。サイエンスショップは、研究者 4 名が参加し、主として科学技術に対する関心の高さが異なる市民の階層別の科学技術政策プロセスへの参加を促す場づくりに関する研究・開発を担当した。最終年度にあたる平成 27 年度の主な取組としては下記があげられる。

- (a) 平成 26 年度に実施した、次世代スーパーコンピュータ（ポスト「京」）で重点的に取組むべき社会的・科学的課題に関する「対話型パブリックコメント」の結果を参加者にフィードバックし、振り返る会をサイエンスカフェとして実施した（平成 27 年 5 月、神戸大学統合研究拠点）。
- (b) PESTI プロジェクトの成果を紹介するとともに、科学技術を含む政策形成過程への市民参画の現状やその促進に向けた取組などについて議論することを目的としたシンポジウム「科学技術政策形成プロセスへの市民の参画を広げる」を開催した（平成 27 年 11 月、グランフロント大阪ナレッジキャピタル）。

#### (3) 地域社会における市民の科学活動支援

サイエンスショップのこれまでの取組を通じて、姫路市を中心とした播磨地域（「サイエンスカフェはりま」）、伊丹市（「サイエンスカフェ伊丹」）、南あわじ市など兵庫県内の各地域で、サイエンスカフェをはじめとした科学に関わる活動を主体的に進める市民グループが立ち上がって着実な活動を展開し、サイエンスショップがこれを継続的に支援している。平成 27 年度神戸大学地域連携事業の一環（課題名：「人間の発達

の実現をめざす市民活動への支援事業」, 事業主体: 発達支援インスティテュート) として学内支援も受けて取組を進めた。

以下に本年度の主な取組等をまとめる。なお, サイエンスカフェの開催リストについては年次報告書資料編に掲載する。

(a) 千種川流域における環境モニタリング活動への協力・支援

サイエンスショップは, 平成 25 年度以降, 兵庫県西部に位置する佐用川流域の市民グループ「佐用川のオオサンショウウオを守る会」の環境保全, 啓発活動への協力を行ってきた。平成 27 年度は新たな取組として, サイエンスショップがコーディネートを行い, 佐用川を含む千種川流域圏で活動するグループ「千種川圏域清流づくり委員会」による環境モニタリング「千種川一斉水温調査」への, 総合地球環境学研究所および神戸大学人間発達環境学研究科の研究者の参画・協力を開始した。この調査は, 同委員会が 14 年間にわたり継続してきた, 河川において生物種の生息の重要な要件の一つとなる夏季の水温等の市民による多地点同時調査であるが, 専門家との新たな協働により, 同位体分析等, より多くの項目の測定・分析を行う形に展開された。現在, 分析結果の取りまとめが行われており, 平成 28 年度には地域へのフィードバックの機会を設ける予定である。

(b) Hyogo Science E-cafe (英語によるサイエンスカフェ)

兵庫県において外国語指導助手 (ALT) を務める人々を中心として発足した, 科学教育と国際理解の推進を目的とするグループ Hyogo Science Coalition との共同で, 英語によるサイエンスカフェの企画・開催を開始し, 神戸市において 6 回を実施した。

(c) サイエンスカフェ伊丹

伊丹市を中心にサイエンスカフェの開催に取り組む市民グループ「サイエンスカフェ伊丹」によるサイエンスカフェ等の開催 (11 回) を支援した。

(d) サイエンスカフェはりま

「サイエンスカフェはりま」は, 姫路市を中心とした播磨地域において, サイエンスカフェ等を開催する市民グループで, 平成 25 年度以降, 企業の社会貢献活動の一環としての助成を得て, サイエンスカフェやサイエンスツアーの実施など, 活発に活動を展開している。サイエンスショップは広報や運営事務の一部を通じて活動を支援した (サイエンスカフェ 4 回, サイエンスツアー 1 回)。

(e) サイエンスカフェ \*SODA

淡路島でコミュニティ活動やその担い手の育成等に取り組む NPO 法人 ソーシャルデザインセンター淡路によるサイエンスカフェの企画・開催 (2 回) に協力した。

この他, 公益財団法人ひょうご科学技術協会及び大学コンソーシアムひょうご神戸が主催する「サイエンスカフェひょうご」の企画・運営を担い, 姫路市, 神戸市, 南あわじ市, 西宮市で計 4 回を開催した。このうち, 西宮市でのイベントは, 同市の大型商業施設内のコミュニティ活動のためのスペースを活用して今後新たにサイエンスカフェの継続的開催に取り組もうとするグループへの支援の目的も含めて企画・実施された。また, 兵庫県立三田祥雲館高等学校天文部がその活動を市民に紹介する目的で三田市において企画・開催したサイエンスカフェに協力した。

平成 19 年以降実施している, 市民が科学者とともに IPCC (Intergovernmental Panel on Climate Change: 気候変動に関する政府間パネル) の報告書を読み解く会「市民のための, IPCC レポートを根掘り葉掘り読む会」を 17 回開催した。なお, この取組は, 日本経済新聞電子版 (平成 28 年 2 月 22 日付け) において紹介された。

また, サイエンスショップ室員を務める教員の「環境 DNA」の研究開発とそれを利用した生態系調査の取組等が, NHK のニュース (平成 27 年 5 月) で紹介された。

#### (4) 学部・大学院教育

学部授業科目「ESD 演習 I・II」の南あわじ市におけるフィールドワークに協力した。

大学院博士課程前期課程の授業科目「サイエンスコミュニケーション演習」においては、履修者である大学院生が演習の一環としてサイエンスショップによる科学コミュニケーション活動に参加したほか、学内でキャンパスカフェを企画・開催した（場所：アゴラ，テーマ：「科学とは何か？」）。

この他、学部学生を中心とした正課外の実践活動として、地域の小学校等で天体観望会の開催に取り組む「天文ボランティアグループ アストロノミア」も、学科の壁を越えて学生が参加し、地域の児童と保護者などを対象として2回の観望会（場所：鶴甲小学校 および 神戸大学鶴甲第2キャンパス）を開催した。また、昼休みを利用して、学生グループが教員の支援を受けながら、国際的科学誌 Nature 及び Science の記事などを読む取組「Nature & Science をガリガリかじる会」を授業期間中週1回程度の頻度で継続的に開催した。

このように、サイエンスショップは、大学・大学院におけるアクティブ・ラーニングの場やそれを促す仕組みとしても機能している。

また、平成27年度に神戸大学が全学の取組として文部科学省「大学教育再生加速プログラム(AP)」に申請、採択された「神戸グローバルチャレンジプログラム」について、サイエンスショップ関係教員がアジアの研究フィールドや研究上のつながりを活かす形で、発達科学部が提供するコース「アジア・フィールドワークコース」の企画を行った。同コースの授業は、サイエンスショップ関係教員3名が担当して平成28年度から開始される。平成28年度は、全学から学生を募り（定員10名）、インドネシアでのフィールドワークを中心とした内容で実施する。

#### (5) 地域科学教育への支援と科学技術系人材育成の取組

平成27年11月には、兵庫県生物学会と共同で「高校生私の科学研究発表会2015」を開催した。このイベントは部局の「学術WEEKS 2015」の企画としても位置付けられ、高校生80名、高校教員14名、大学関係者16名を含む123名の参加者があり、活発な発表、交流が行われた。優れた研究に対して、サイエンスショップより優秀賞を授与した。

平成28年3月には、「第3回 未来社会を担う人材育成のための多角連携フォーラム ～課題発見と問題解決につながる観察力を育む～」を、発達科学部・人間発達環境学研究科とサイエンスショップの主催、総合地球環境学研究所の共催で実施した（神戸大学瀧川記念学術交流会館）。北海道大学高等教育推進機構の鈴木誠氏、総合地球環境学研究所の熊澤輝一氏、京都工芸繊維大学教育研究基盤機構の内村浩氏の他、学内から連携創造本部の祇園景子氏、人間発達環境学研究科大学院生による講演が行われ、高校、大学、教育産業界などからの多様な関係者が参加し交流・意見交換を行った。

平成28年1月には、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）事業成果の地域への普及と兵庫県下の理数教育の発展を目的として活動する兵庫「咲いてく（Science & Technology）」事業推進委員会主催の「第8回 サイエンスフェア in 兵庫」(神戸国際展示場)において、サイエンスショップ紹介のポスターを出展した。

また、同委員会により新たな取組として平成28年3月神戸大学統合研究拠点において開催された、高校生による英語での課題研究発表会「サイエンスカンファレンス in 兵庫」の立ち上げに協力した。

兵庫県立兵庫高等学校の課題探求型授業への人間発達環境学研究科大学院生の協力（平成27年9月から平成28年2月）のコーディネートを行った。同高等学校からは、大学院生による高校生への指導の教育効果が高く評価されている。

鶴甲小学校PTAの要請を受けて、同小学校の児童と保護者を対象とし平成19年度以降毎年開催している「理科実験教室」を平成27年7月に実施した。また、サイエンスショップ研究員の新井敏夫氏により、成人を対象とした「つるかぶと科学教室」(2回)が企画・実施された。

この他、人間発達環境学研究科が「鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト」の取組「アカデミックサロン」の一環として主催した月の観望・講演会「みんなで楽しもう！大学でひと味違うお月見会」(平成27年9月)に協力した。

表 神戸大学サイエンスショップ 平成 27 年度の主な取組

市民科学活動支援
<ul style="list-style-type: none"> <li>・千種川流域における環境モニタリング活動への協力・支援</li> <li>・サイエンスカフェの開催・開催支援（サイエンスカフェ神戸（1回）および Hyogo Science E-cafe（6回）開催、サイエンスカフェひょうごほか 県下各地のサイエンスカフェ開催等支援（総計 25 件））</li> <li>・市民と研究者が協力して気候変動に関する IPCC レポートを精読する会「市民のための、IPCC レポートを根掘り葉掘り読む会」の定期開催（17 回）</li> <li>・つるかぶと科学教室開催（2 回：学外研究員による企画）ほか</li> </ul>
地域の科学教育支援
<ul style="list-style-type: none"> <li>・神戸市立鶴甲小学校 PTA からの依頼を受けた児童と保護者を対象とした理科実験教室の開催</li> <li>・兵庫県立兵庫高等学校における課題探求型授業「創造基礎」への協力（大学院生による研究・実習等指導）ほか</li> </ul>
大学教育・学生の活動
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ESD 演習 I, II（学部）、サイエンスコミュニケーション演習（大学院）等の授業支援</li> <li>・天文ボランティアグループ「アストロノミア」による天体観望会の開催（神戸市立鶴甲小学校、鶴甲第 1 キャンパス）</li> <li>・神戸グローバルチャレンジプログラム 発達科学部「アジア・フィールドワークコース」企画</li> </ul>
研究会等の主催・共催
<ul style="list-style-type: none"> <li>・「高校生・私の科学研究発表会 2015 / 兵庫県生物学会 2015 研究発表会」開催（主催：兵庫県生物学会、神戸大学サイエンスショップ）</li> <li>・第 3 回 未来社会を担う人材育成のための多角連携フォーラム ～課題発見と問題解決につながる観察力を育む～</li> </ul>
イベント等開催協力
<ul style="list-style-type: none"> <li>・サイエンスカフェひょうご（主催：大学コンソーシアムひょうご神戸社会連携委員会、（公財）ひょうご科学技術協会）姫路市、神戸市、南あわじ市、西宮市で開催・開催支援</li> <li>・サイエンスカフェはりま（主催：サイエンスカフェはりま）姫路市他</li> <li>・サイエンスカフェ伊丹（主催：サイエンスカフェ伊丹）伊丹市</li> <li>・サイエンスカフェ*SODA（主催：ソーシャルデザインセンター淡路）南あわじ市</li> <li>・第 1 回「サイエンスカンファレンス in 兵庫」開催への協力</li> </ul>
研究・開発等
<ul style="list-style-type: none"> <li>・「STI（科学技術イノベーション）に向けた政策プロセスへの関心層別関与フレーム設計」プロジェクト（滋賀大学、京都大学等との共同研究）</li> <li>・Future Earth 研究課題の抽出に関する研究への参加・協力（総合地球環境学研究所との共同研究）他</li> </ul>

（サイエンスショップ室長 蛭名邦禎、副室長 伊藤真之）

## 10.1.6 アクティブエイジング研究センター

### 1. 設立理由

人口の高齢化は人類が成し遂げた成果であるとともに、最大の社会的課題の一つでもある。日本においては、後期高齢者の増加に伴う要介護者・要支援者・軽度認知障害を持つ人の増加、都市化・核家族化に伴う高齢単身世帯の増加などに伴い、介護・医療費の高騰が大きな問題となっている。これらの課題解決のため、政府を含め多くの公共機関が健康寿命伸延に関わる施策を模索しているが、十分な方向性を示すことができていない。このような中、世界保健機関（WHO）が 1999 年に掲げた「アクティブエイジング（活力ある高

齢化)」は、この課題解決に向けた指針として注目される。これは、高齢者を虚弱で非生産的な社会的弱者とみる従来の固定観念を打破し、高齢期をより活動的、積極的、可能性のあるライフステージとして捉えながら、加齢を個人の生涯にわたる発達と成熟の過程と認識する意識変革を目指し、その実現に向けて社会的アクションを活性化していくことを目標とするものである。この WHO の指針は日本での高齢化における諸課題の解決策の決め手になると考えられる。しかし、それに応えるための学術的支援や研究的知見の情報は限られており、アクティブエイジングを主題とする学術領域の活性化が求められている。本研究科では、これまで人間の発達とそれを取り巻く環境の発達に対する学術的成果と多くの社会貢献をもたらしてきた。それをリードした発達支援インスティテュートは、この伝統を継承・発展させ、さらに一層深化させていくため、高齢化の課題の解決を目指すアクティブエイジング研究センター（以下、「本研究センター」という。）を 2015 年 12 月 1 日に設置した。

## 2. 活動内容

### (1) 運営委員会

2015 年 12 月 1 日に施行された神戸大学大学院人間発達環境学研究科附属発達支援インスティテュート・アクティブエイジング研究センター規程に基づき、運営委員会を設置し、本センターの業務をスタートさせた。

#### 1) 委員

近藤徳彦（センター長）、長ヶ原誠（副センター長）、片桐恵子（副センター長）、岡田修一、増本康平、佐々木倫子、平山洋介、井上真理、田畑智博、齊藤誠一、木村哲也、古谷真樹、岡崎香奈

#### 2) 議題・検討内容

2016 年 2 月 1 日（月）12:30～13:00 と 3 月 14 日（月）15:00～16:00 に運営委員会を開催し、副委員長の選出、学外・学内委員の任命、企業との共同研究、ロゴの使用方針、2016 年度の予算（メールにて審議）などの検討を行った。

#### 3) HP

以下の HP を立ち上げ、情報発信を行った。

<http://www.h.kobe-u.ac.jp/ja/node/3705>

### (2) 設立シンポジウム

以下の日程で設立シンポジウムを実施した。30 社以上の企業も含め、約 200 名の参加者を得て、大変、盛大なシンポジウムを開催することができた。高齢社会の課題への関心、アクティブエイジング研究への期待が伺われた。

日時：2016 年 2 月 21 日（日）

場所：神戸大学百年記念館

内容：10:30 開会アナウンス

10:35 設立記念シンポジウムに寄せて：神戸大学理事・副学長：小川 真人（研究・産学連携担当）

10:45 開会挨拶：神戸大学大学院人間発達環境学研究科長：岡田 章宏（神戸大学大学院人間発達環境学研究科附属発達支援インスティテュート長）

10:55 アクティブエイジング研究センター構想（センター長）：近藤 徳彦（神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授）

11:15 基調講演

「アクティブエイジングの歴史と進化」：Alex Ross 氏 WHO 神戸センター長

12:15 昼食

- 13:00 アクティブエイジング研究スクエア・ポスターセッション I  
 13:30 特別講演 1  
 「アクティブエイジング社会のために大学は何ができるのか?」: Gyoungdae Han 氏 ソウル大学 応用老年学・退職研究センター所長  
 14:30 特別講演 2  
 「長寿社会に生きる」: 秋山弘子氏 東京大学高齢社会総合研究機構特任教授  
 15:30 「アクティブエイジング研究ハブ拠点に向けて」  
 岡田修一 (コーディネータ, 本研究科副研究科長), 長ヶ原誠 (副センター長), 増本康平 (本センター運営委員), 片桐佳子 (副センター長), 小島洋一氏 (神戸市住宅都市局計画部公共交通課課長), 丹松由美子氏 (株式会社ワコール人間科学研究所研究員)  
 17:00 アクティブエイジング研究スクエア・ポスターセッション II  
 18:00 レセプション (瀧川記念学術交流会館)

### (3) プロジェクトの立ち上げ

#### 1) プロジェクト名: 鶴甲いきいきまちづくり - アクティブエイジングを目指して

メンバー: 岡田修一, 近藤徳彦, 長ヶ原誠, 片桐恵子, 増本康平, 学外研究者

期間: 2010 年度 ~ 2020 年度

内容: オールドニュータウンである鶴甲地区を対象に, 多世代が心身ともに健やかで将来の希望に満ちた, 安全に暮らせるまちづくりを支援するものである。アカデミック・サロン (大学内で行うイベント) を鶴甲地区の住民の学びと活動の場の基礎とし, 大学をコミュニティの中心に位置付け, このサロンを通して, 住民同士のネットワークを形成するとともに, サロンの継続に必要なファシリテーターを養成し, 住民が企画・運営するコミュニティ活動を支援する。

#### 2) プロジェクト名: 住民ネットワーク形成の客観的検証方法の確立

メンバー: 増本康平, 岡田修一, 近藤徳彦, 長ヶ原誠, 片桐恵子, 木村哲也, 古谷真樹, 研究科共同研究者 4 名,

期間: 2015 年度 ~ 2017 年度

内容: ウェアラブルセンサデバイスによって対面コミュニケーション行動データを自動収集し, ネットワーク解析を行うことで住民交流の現状や変化, キーパーソンを把握し, 支え合い・助け合いの基盤となる住民ネットワークの活性化につなげる。

#### 3) プロジェクト名: 男女の違いや個人差を考慮した健康増進支援プロジェクト

メンバー: 近藤徳彦, 岡田修一, 中村晴信, 古谷真樹, 井上真理, 齊藤誠一, 木村哲也, 佐藤幸治

期間: 2015 年度 ~ 2019 年度

内容: 健康行動 (食・睡眠・運動) を支援するため, これらに関する環境を工夫することにより健康を支援する方法を提案する。その際, これまで十分な情報が得られていない男女の違いや個人差からアプローチする。

#### 4) プロジェクト名: 高齢者の身体システム機能維持・向上への学際的プロジェクト

メンバー: 木村哲也, 佐藤幸治, 学外研究者

期間: 2015 年度 ~ 2017 年度

内容: 高齢者の身体システム機能の維持・向上に対して, 基礎研究及びその成果に基づいた社会実装を, 応用生理学, 運動生理・生化学, バイオメカニクス, 生体工学の各観点を統合して学際的に実施する。現在取り組み中の具体的課題は, 立位バランス神経制御則の解明や高齢者の筋機能の向上である。

5) プロジェクト名：都市住居高齢者の日常活動の国際比較

メンバー：片桐恵子，福沢愛，海外研究者1名

期間：2015年度～2017年度

内容：都市に居住する高齢者がどのような日常活動を行っているのか，その活動量はどの程度か，活動がどのように気分や健康に関連しているか，などの実態の解明とそれらの関連を，日本（神戸）と韓国（ソウル）との国際比較から検討する。

6) プロジェクト名：超高齢化社会を見据えた持続可能なごみ処理施策の提案

メンバー：田畑智博，片桐恵子

期間：2015年度～2016年度

内容：高齢者世帯の増加が将来の自治体のごみ処理施策に及ぼす環境的・経済的影響を，シミュレーション分析により明らかにする。ごみ分別等の住民負担の限界と対策の検討を通じて，超高齢化社会に相応しい持続可能な自治体のごみ処理施策を提案する。

7) プロジェクト名：関西ワールドマスターズゲームズ2021レガシー創造支援研究

メンバー：長ヶ原誠，岡田修一，近藤徳彦，片桐恵子，増本康平，学外研究者3名

期間：2015年度～2022年度

内容：2021年に関西広域で開催が決定した生涯スポーツの国際大会がもたらすレガシー（遺産）創造に向けた振興事業アクションリサーチの展開と効果検証のモニタリング評価を実施し，成人・中高年者を対象とした参加型のスポーツメガイイベント開催が個人と地域の活性化に及ぼす影響過程を検証する。

8) プロジェクト名：高齢期の意思決定バイアスの解明と自律に向けた生涯学習プログラムの開発

メンバー：増本康平，学外研究者2名

期間：2015年度～2017年度

内容：高齢者の意思決定バイアスの特徴を明らかにし，高齢者に適した意思決定の支援方法を明確にする。最終的には，高齢期の自律を目標とした「選び方を選ぶ」生涯学習プログラムを開発する。

9) プロジェクト名：マスターズ甲子園によるアクティブエイジング活性化の検証

メンバー：長ヶ原誠，学外研究者3名

期間：2015年度～2017年度

内容：高校野球部OBクラブの拡大を目指して始動したマスターズ甲子園の各地方予選・全国大会の開催が及ぼすアクティブエイジングに関わる諸効果を検証し，スポーツ同窓会結成支援による活動的な加齢文化の推進に着目した生涯スポーツプロモーション事業の可能性と課題を提示する。

10) プロジェクト名：サードエイジ・プロジェクト

メンバー：片桐恵子，学外研究者2名

期間：2015年度～2019年度

内容：これまでの高齢者とは異なる新しいシニア層である団塊世代以降の人のライフスタイルや志向を把握し，定年後の社会参加や就労について検討し，新たなシニアの社会的な役割を提案する。

11. プロジェクト名：異世代間交流のプロジェクト

メンバー：片桐恵子，学外研究者1名，海外研究者1名

期間：2015年度～2019年度

内容：家族や地域の絆の減衰が指摘されている中で，異世代間交流の実態と課題を検討する。異世代間交流

を活発化するような age friendly university のあり方について、アイルランドとの国際比較を実施しながら探索する。

(センター長 近藤徳彦)

## 10.2 実習観察園の運営利用状況

平成 27 年度の前期の実習観察園の概要および活動内容は以下の通りである。11 月 13 日に和歌山大学で第 49 回近畿教育系大学農場等協議会が開催され、実習観察園委員として近江戸伸子、大野朋子がそれに参加した。

### ○実習観察園施設および概略図

実習観察園の概略は図 1 の通りで、前年と変わりはない。灰色で示した部分は、自然環境論コースの教員が研究のために設置したビニルハウスである。



図 1 施設・作付概要

### ○作付面積および作付植物

作付面積および作付作物はそれぞれ表 1 および表 2 に示した通りである。主として学部生の実習に使用している。

表 1 作付面積 (㎡)

種別	面積	備考
畑地	352	教材・実習用
果樹園	255	教材・実習用
水田	70	実習・研究用
バラ園	35	園内美化・実習用
花壇	25	園内美化・実習用
計	735	

表 2 作付植物

種類	植物
野菜	コマツナ、ホウレンソウ、キャベツ、キュウリ
	カボチャ、スイカ、トマト、オクラ、ピーマン
マメ・穀類	イチゴ、ナス、ダイコン、カブ、タマネギ、ニンジン
	ダイズ、ラッカセイ、ソラマメ、インゲンマメ
果樹	ジャガイモ、サツマイモ、トウモロコシ、イネ
	なつみかん、ハッサク、温州みかん、スタチ
果樹	ユズ、キンカン、カキ(富有、サエフシ)、ブドウ
	(ピオーネ、デラウエア)、スモモ
花卉	ナシ(長十郎、菊水)、イチジク
	ペゴニア、マリーゴールド、ペチュニア、サルビア
花卉	キンセンカ、バーベナ、トレニア、デモルフォセカ
	マツバボタン、スベリヒユ、ヒマワリ、アサガオ
	ハボタン、チューリップ、ナデシコ、バラ



春夏期 北

ソバ	ソバ	ソバ	ソバ	ソバ	ソバ	ソバ	ソバ	ナス	ピーマン・キュウリ	トマト	パブリカ	サツマイモ	サツマイモ	サツマイモ	スイカ・カボチャ	
----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----------	-----	------	-------	-------	-------	----------	--

生活環境緑化特論演習	植物環境学実験実習	植物環境学実験実習	植物環境学実験実習	幼児環境指導法	幼児環境指導法	幼児環境指導法	幼児環境指導法	ピーマン・ナス	トマト・	ピーマン・キュウリ	トマト・キュウリ	パブリカ	サツマイモ	サツマイモ	サツマイモ	スイカ・カボチャ
------------	-----------	-----------	-----------	---------	---------	---------	---------	---------	------	-----------	----------	------	-------	-------	-------	----------

秋冬期 北

ソラマメ	タマネギ	ハクサイ	キャベツ	イチゴ	イチゴ	イチゴ	イチゴ	イチゴ
------	------	------	------	-----	-----	-----	-----	-----

自然環境論コース  
実験用ビニール  
ハウス

																	ダイコン	ジャガイモ
								園芸 教室	園芸 教室	園芸 教室								

図2 27年度畑地作付配置図

### ○教育（実習）活動

本年度も表3に示した授業で、学生・大学院生が活用している。

「植物環境学実験実習」での利用の内容は、植物栽培に関すること、すなわち、畝立て、土作り、草花や野菜の種まき、育苗、鉢上げ、定植、誘引、かき、収穫、挿し芽繁殖、花壇・緑化設計と制作などである。これらの他に、プランターや鉢植え栽培による校内美化の指導も行っている。果樹類については、開花の観察、摘花、摘果、無核化处理などの説明に利用している。

「幼児環境指導法」において、履修者が実践的に“植物と子供の遊び”というテーマで、幼稚園児の指導をおこなうことを想定し、七夕飾り、ササのおもちゃ作成、草もちの作製をおこなった（図3）。タケ、ササの来歴、違い、利用法について、講義をおこなった。能動的に学修するアクティブ・ラーニングとして、五感を活用した実習をおこなった。

表3 授業としての学生利用数

授業名					
	2011	2012	2013	2014	2015
生活環境緑化論1	57	59	57	45	44
生活環境緑化論2	37	35	40	9	39
生活環境緑化論演習	2	5	11	8	11
幼児環境指導法	25	24	25	42	20
植物環境学実験実習	20	26	22	16	16
生活環境緑化特論演習	4	6	2	1	-
植物環境学特論I	13	2	21	12	2
計	158	157	178	88	88



図3 七夕飾り

○人間発達環境学研究科および発達科学部の院生および学生が修士論文および卒業論文作成のため、本園を活用している。

### ツユクサ・ケツユクサの栽培実験

発達科学部4回生の「卒業研究」（担当教員：丑丸敦史）として、人間発達環境学研究科の施設である実習観察園に設置した温室内で栽培したツユクサおよびケツユクサを対象に、「雄性両全同株における両性花・雄花生産と資源制約の季節性」の研究を行い、実生の植え付け（4月下旬）から結実期（10月中旬）まで温室内での開花観察および果実除去実験を行った。研究補助として、人間発達環境学研究科院生および発達科学部生数名の協力があつた。

利用者：卒業研究を行った学生1名、協力研究科院生1名、協力学部学生約2名

## ○他機関の利用

### 田植え体験・稲刈り体験

神戸市灘区の鶴甲幼稚園の園児約 70 名と教諭が、人間発達環境学研究科の施設である実習観察園で田植えを実践し、実際に体を動かして五感を活用した体験を行った。発達科学部の授業科目「幼児環境指導法」(担当教員：近江戸伸子教授，大野朋子准教授)において、履修者約 20 名が実践的に幼稚園児の指導を行った。

田植え：2015 年 6 月 2 日

参加者：鶴甲幼稚園 5 歳児約 70 名，同園教諭等，発達科学部学生約 20 名

稲刈り：2015 年 10 月 15 日

参加者：鶴甲幼稚園 5 歳児約 72 名，同園教諭等，発達科学部学生 12 名

### 「のびやかスペースあーち」との連携・芋掘り体験プログラム

「のびやかスペースあーち」の基幹プログラムのひとつである「居場所づくり」のイベントとして、農園を利用した芋掘り体験を行った。特に土と触れ合う機会の少ない障害児が、土の感触や収穫の喜びを経験する貴重な機会となった。日常生活にはない開放的な空間の中で、生き返る気分だったという障害児や保護者もいて、終始和やかな雰囲気であった。サポートした地域住民や学生にとっても、楽しみながら子どもたちと喜びを分かち合う機会となり、さまざまな属性の隔たりを超えた共有体験となった。

日時：2015 年 10 月 16 日

参加者：「のびやかスペースあーち」利用者（子どもと保護者）14 名，ボランティア（地域住民，学生）18 名

### 交流ルーム「カフェ・アゴラ」における知的障害のある実習生の実習活動への協力

交流ルーム「カフェ・アゴラ」では、知的障害のある青年・成人に対して多様な社会経験を提供する活動を行っているが、その実習活動の一環に農園での作業を組み込んだ。今年度は 1 名の女性が、原則として毎週月・金に、花壇の除草，農具の洗浄等に取り組んだ。

### 鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト 園芸教室の開催

高齢化が進行している地域コミュニティにおいて、多世代が心身ともに健やかで希望に満ちた、安全な暮らしができるまちづくりは急務であり、住民が主体的に、多世代の交流を促進し、その中で課題を見つけ、学び、活動していく生涯学習の実践の場づくりが大事である。地域社会のこのような現状に対し、本研究科がもつ人的・物的・空間的リソースを活用して、どのような支援が可能か検討する「鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト」を立ち上げた。実習観察園を活用した園芸教室はその一環の活動である。

春、秋ともに 20 歳代から 80 歳代までの多世代が参加し、参加者（25, 30 名）が 3-4 名のグループに分かれ、それぞれのグループ毎に野菜や花の栽培を楽しんだ。

春の園芸教室 5 月 23 日（土），6 月 20 日（土），7 月 4 日（土）

秋の園芸教室 9 月 19 日（土），10 月 24 日（土），11 月 14 日（土），12 月 5 日（土）

#### 図4 春の園芸教室

今後も地域や学校等の要請等も積極的に受け入れ、授業ならびに研究で、利活用を図る予定である。